THE CENTRAL REVIEW

中央公論

八月號

大正十年七月三十日印刷納本
大正十年八月一日發行（毎月一回一日發行）

第三十六年　第九號　第三百九十九號



コレハ實に立派な目藥だ!!

醫藥學の進歩に伴ひ、深遠なる學理と、數多の實驗から、絶對の偉効ありと信認せられたる直治水は、今や智識階級から盛んに實用せらるゝ、新時代の貴重なる眼科新藥である、

理想的の
眼病良藥

直治水

主効
◇トラホーム ◇やに目 ◇雪目
◇はやり目 ◇うみ目 ◇ち目
◇かすみ目 ◇めくさ ◇星目

藥價 新式点眼器付 二十錢 三十錢 五十錢

●全國各藥店に取次販賣せり

本舗 大阪 東京 丹平商會藥房

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

理學博士 遠藤吉三郎氏著

最新刊

日本民族のために

（菊版大冊五一四頁細活字印刷クロース本箱入、定價金五圓五拾錢送料貳拾參錢）

飄逸の文章を以て磊塊の氣を吐き、科學者の權威たると共に文名を以て一世に鳴りたる吉三郎博士の遺著たり、該博の學識と非凡の識見とは政治、文學、科學より社交、娛樂等社會各方面に渉る、生物生活法、相互扶助論、理想的國家等堂々の經綸を吐き忽ち轉じて筑紫の不知火を論じて微細を極め、海藻漁業を說いて專門的知識を發揮し、再轉して「魚釣哲學」「圍碁哲學」の如き諧謔を極むるあり、大小の文章總て百有餘篇、故博士の經綸と抱負は悉く收めて本書に存し其風貌と機智は潑溂として至る所に髣髴す、蓋し明窓淨机の一大寶典たるべし。

三上於菟吉氏譯 ●最新刊●

ゾラ性的文藝傑作集第二卷 苦き歡樂

（四六判羽二重表裝金箔押細活字印刷定價貳圓八拾錢送料十七錢）

空想の事業に耽りて而も絶えず死の恐怖に戦く變態青年に巨萬の財産を費消されて悔いざる美しき一少女は貪婪飽くなき老婦に苛まれながら尚且つ之を忍び内心に秘む激しき嫉妬狂の爆發を制しつゝ遂に熱烈なる自己の戀を他の女に讓りて血涙に咽びながら病者に同情して其家に止まり遂にすだら若き青春の美貌をも犠牲に供して一生を終る献身的の愛を描きたる傑作ラ・ジョア・ヴィヴル全譯也。

第壹卷

三上於菟吉氏譯

怖ろしき夢魔

嫉妬狂が列車中の殺人より事件は展開し婦人の肉體を見れば忽ち其血汐を見んとする變態性慾狂の青年を描て幾多の大波瀾を極む

價貳圓七拾錢送料金拾十錢

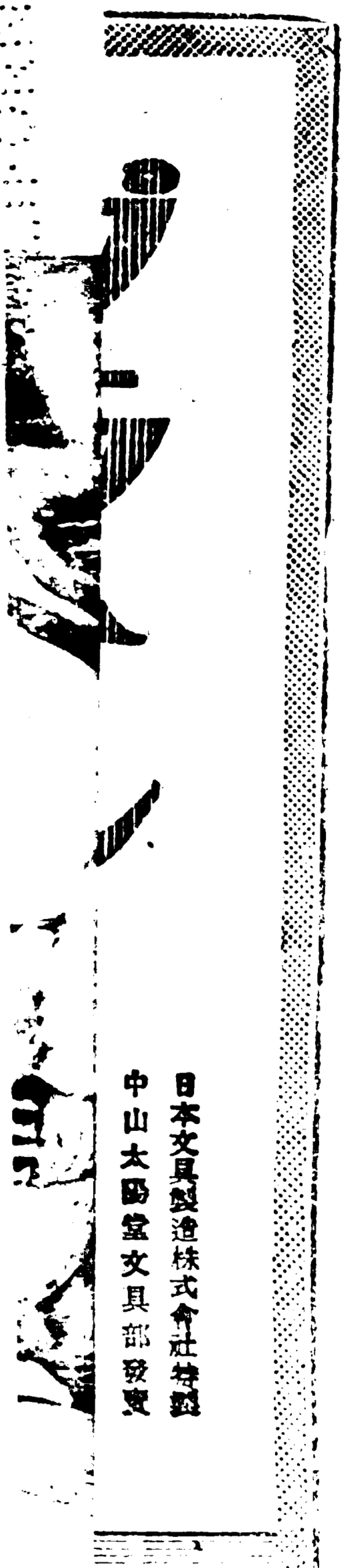
東京市麴町區飯田町壹の貳 株式會社 天佑社 （振替東京一〇一二八番 電話九段長一一七三番）

BABY'S TOILETTE MISS. MARY CASSATT.



▼說苑

「避暑し得ざるもの、爲めに」



BABY'S TOILETTE　MISS. MARY CASSATT.



プラトンインキ
萬年筆用
事務室用
學生用
スタンプ用
もうプラトンの天下です！
百千萬圓の大取引も經國濟世の大文字も十中八九はプラトンインキを假りて表現せらるゝ時代となりました



BABY'S TOILETTE   MISS. MARY CASSATT.



世界に誇るべき發明

專賣特許

白晝フヰルム現像器

暗室を要せず
日中何處でも
現像出來る



ベストフヰルム共用
名刺 壹組 六圓五十錢
（説明書進呈）

東京本町二丁目

小西本店

支店 大阪長堀橋筋

大勢の推移と策士の魂膽

先き頃或る獨逸の雜誌で米國の事を書いた一文の中次の樣な記事を讀んだ。ウヰルソンは講和條約を提げて佛京巴里より歸るや、之を小面憎しと見た共和黨の策士の面々は如何にもして彼の鼻柱をへし折らんと苦慮し、遂に彼の最も誇りとせる國際聯盟にケチを附けた。中にも最も手痛き攻擊の鋒先を規約第十條に向けた。第十條は國際紛議の結局の解決の爲めにする各國の出兵義務を定めたものである。聯盟各國は理事會の指示に從ひ相當の兵隊を出すべしと云ふのである。之を共和黨は不都合だと非難したのだ。尤も共和黨の非難は、出兵を絕對に不可なりとするのではない。此點に於て共和黨の主張は、全然歐洲の事に關係す可らずとする夫のモンロー主義とは其意味を同うせざるものである。必要あれば出兵はする。併し必要の有無は自分で決め度い。一から十まで理事會の制を仰ぐことを肯とせないのである。と云つて又必しも理事會を信用しないと云ふ譯でもない。只自主自決の獨立の立場を留保したいと云ふのである。而して彼はまた之を只米國の爲にのみ要求するのではない。何處の國でも萬事自發的に決心するのでなければ本當の力は出て來ないと云ふのである。差當つて彼は之を米國の爲に主張したので世人之を概稱して米國第一主義と云ふたが、之を偏狹な意義に解するは恐らく共和黨の眞意を傳うる所以では無からう。何れにしても、米國は正に自主の國たらざる可らずとして、聯盟規約第十條は殆んど全體の承認せざる所となつて了つた。修正要求の聲は民主黨の中にもある。共和黨中の烈しいのになると、之を一つの理由として現聯盟の存在をすら否認せんとするものもある。併しこんな事情を永々と述ぶるのは予輩の主たる目的ではない。又事實右の話は信用するに足るか否かも保證は出來ない。只共和黨の策士の敵將を苦むるが爲に工風し出した事が、意外にも民心に深く根ざして今や國民的確信となつたと云ふ話に讀者の一顧を促さんと欲するのである。

策士は色々の事を工夫する。けれども世の中は決して彼の企圖の通りに動くと限らない。若し策士の工夫と大勢の推移との間に何等かの連絡ありしとすれば、前者は僅に後者に進動の機會を與へたるに過ぎない。大勢は常に策士の頭腦と獨立して存在する。只之を動かす刺擊物を待つのみである。大勢の推移を全然策士の工夫に還元するは誤なるのみならず、更に策士の頭腦を分析解明するに依りて大勢の將來を豫想すべしとするが如きは、以ての外の誤謬である。斯の見解は今度の軍備縮少會議乃至太平洋會議の觀察に就而も念頭に置かれんことを希望する。斯かる會合の提唱が最近世界の大勢の上に如何なる地位を占むべきやは、今更之を說くの必要はあるまい。之が現實の提唱者の如何なる魂膽に出でたりやは夫れ程重要なる問題であらうか。若し夫れ之等の假想的魂膽を前提として會議の前途を僻視し、依て以て之に對する態度を微妙に定めしめんとするが如きは、抑も時勢を知らざるの甚しきものである。

策士は如何なる世にもある。又潛勢力を促して現實に動かしむるに彼の活動は時として必要だ。けれども世の中の大勢は結局に於て彼の小策のために當然の軌道を外るゝものではない。大勢は策士の刺擊に促されて動く。而かも常に意外の邊に進動するものたることを忘れてはならぬ。

中央公論



第卅六年第九號
八月號
第三百九拾九號

不良少年の教育病理學的研究

文學博士 醫學博士 富士川游

緒言

普通に謂ふところの不良少年は、反社會的行爲をなすところの少男及び少女を總括するもので、畢竟その行爲の不良なるを以ての故に斯く名づけられたるのであるから、その兒童の身體及び精神を檢査すれば、同じく不良少年といはれて居る中にも、幾多の種類があつて、單にその行爲のみを見れば互に同じやうであつても、その兒童の本態を檢査すれ

ば全く種類の相違したものが多い。この事實は輓近の教育病理學によりて科學的に證明せられたところであるが、しかしながら、目下の狀態にては、教育病理學の知識は專門の教育家の間にもいまだ十分に普及されて居ないのであるから、まして世間の人々の多數がこの種の知識に乏しく、ただ兒童の行爲の不良なる點のみに著目して、それが果して如何なる身體及び精神の作用に基づくものであるかといふことに注意せず、徒らにその不良の行爲に對して、或は懲戒を加へ、或は刑罰を課し、或は所謂感化教育を施さむとするやうな錯誤に陷るのは無理からぬ次第である。

全體兒童は兒童に特殊なる身體及び精神をもつて居るもので、概して言へば、兒童は發育期に在るところの人類である。それ故に、世間の人々が考へて居るが如くに、ただ成人の小さいものであるといふ譯には行かぬ。兒童の身體及び精神が成人の身體及び精神に比して、種々の點に於て、相違して居るといふことは輓近の兒童科學の發展によりて已に確實に認識せられて居るのである。しかも此の如き兒童科學の知識にも缺けて居るものが世の中には甚だ尠なくないから、兒童と認めてただ單に小さき成人、卽ち一人前に達せざるものとしてこれを取扱つて居る場合が多い。これ實に兒童を觀ることとの根本的錯誤であるが、所謂不良少年に對する場合にありても亦同じくこの錯誤を免るることを得ずして、ただその行爲の不良なるといふ點に就てのみ心配して、嫩芽に刈らずんば斧鉞を用ゐるの虞ありといふ筆法で、所謂不良少年に對して懲戒若しくは刑罰の趣向をもつて居るといふ有樣である。而して、その不良行爲の基本たるべき身體及び精神の如何といふことには些も顧慮せず、從てその不良行爲が由りて起るところの眞正の原因を詳にすることが無いから、懲戒若しくは刑罰の方法は悉く肯綮に中らず、却てそれがために不良行爲を増加せしめ、不良少年を退治しようと思ふて却てこれを養成するといふ實際の有樣を呈するのである。現に目下問題になつて居るところの少年法を見ても、この法律を立案したる人々が所謂不良少年を觀ることが、同じくこの根本的錯誤に陷つて居るといふことが明かに

認めるれるのであるから、所謂不良少年の本態に關するところの教育病理學的知識を普及するといふことは緊要の事項であると思はれる。余はこの意味よりして、こゝに所謂不良少年の教育病理學的研究の大要を叙述しようと思ふ。

所謂不良少年の本態

最も通俗的なる意味よりして言へば、所謂不良少年とは少男及び、少女にして竊盜、詐僞、浮浪、放火、傷害、殺人等の犯罪を爲し又は犯罪を爲すの虞あるものを總括するのである。それ故に所謂不良少年と名づけらるゝものゝ中には

一。少年犯罪者(Die jugendlichen Verbrecher)

二。遺棄又は無監護(Verwahrlosung)の狀態にある兒童(Die verwahrloste Kinder)

三。浮浪兒童(Vagabondage)

と名づけらるるものを主として、その他、種々の反社會的性質を帶びたる兒童を含有して居ることは明かである。固よりその行爲の上より見ればそれを不良少年と名づくるも差支ないが、しかしながらその兒童の性質よりして言へば強ち不良の少年ではなく、善良の性質を有しながら內部の缺陷と、外部の缺陷とによりて、その行爲が反社會的になるのであるから、これを不良少年と稱するは適切でない。或は單に異常兒童(Anomale Kinder)と名づくるか、或は反社會的兒童(Antisoziale Kinder)と稱すべきものである。しかしながら、その名稱は兎も角も、教育病理學上よりし所謂不良少年の本態を研究するときは、第一にその多數のものにあり、身體及び精神が尋常の狀態で無いといふことが認められる。メンケメルレル氏が伯林にて調査せるところに據ると、所謂不良少年の三四%は先天性精神薄弱にして、一二%は癲癇、三・五%は「ヒステリー」、一一・五%は偏執病で、尋常の精神狀態であつたものは僅かに四一・五%であ

つた。クラーメル氏がハンノーヴエルにての調査に據ると、六一%は病的のもの、四九%は精神低格のもの、一一%は輕度の精神低格のもの、僅かに一%のみが殆ど尋常の精神狀態のものであつた。リゾール氏がウエストフアーレンにて調査せるところに據ると六九・六%は精神の異常なるものであつた。クレーフイツシェ氏がアルトチュツセルクールにて調査せる所に據ると五五%は精神低格のものであつた。シュニツツレル氏がボンメルにての調査の成績に據ると、六二・五八%は、精神異常のものにしてその中の二分一は癡愚、四分三は魯鈍又は輕度の癡愚であつた。グルーレ氏がフレーヒンゲン強制教育院につき調査せるところに據ると、身神健全のもの一四%、身體及び精神が稍尋常ならざるもの四一%、精神低格のもの二六%、精神病的のもの二九%であつた。我邦にありて醫學博士三宅鑛一氏が醫學士池田隆德氏と共に熊谷保護學校及び埼玉學園に就て檢査せるところに據ると、智力普通と思はるゝもの一一・五%、智力先づ普通なるも氣質異常ありて變質者と思はるるもの二〇・四五%、智力の劣れるもの六四・七九%、病者と思はるるもの二・二%であつた。此の如き諸家の調査の成績に據るも、余が自家の實驗に徵するも、所謂不良少年の多數のものが精神異常のもので、僅かにその少數のものが尋常の精神狀態を有して居るのみであるといふことは爭ふべからざる事實である。しからば、この精神異常は如何なるものであるかといふに、大略これを、精神低格と精神薄弱との二類となすことが出來る。それ故に先づその精神異常の各種につきて敍述することが必要である。

精神低格

精神低格(Psychopathische Minderwertigkeit)と名づくるのは、精神の價格が尋常よりも低下であるといふ意味で、固より疾病といふまでゞはないが、しかしながら尋常の定型から離れて居る、つまり精神病と健康精神との中間の

狀態にあるものを指していふのである。精神低格は別にこれを變質者(Degenerierte)とも名づけ精神不調和者(Desiquilibrierte)ともいひ、精神病性體質(Psychopathische Konstitution)とも稱し、その他、種々の稱呼が用ひられて居るが、精神低格といつた方が最も適當であるやうに思はれる。

その精神低格は精神病、精神低格、癲癇、「ヒステリー」等の兩親よりして遺傳するものである。若し父か母か、又はその兩方に酒毒、黴毒、結核等の疾病があつて、それがために生殖細胞が侵されたる場合にも精神低格が現はれる。胎兒が母體の中にあるとき器械的或は化學的の障碍を受けてその腦髓の發達が妨げられたる場合にも亦精神低格は現はれる。この種の障碍の因となるものに貧困又は奢侈の生活、婚姻の不適當などを始めとして幾多の事項がある。既に產生したる後にありても兒童の腦髓は容易に刺戟を受け、それがために爾後の發育が妨げらるるが故に、精神低格を發呈すべき場合は尠なくない。たとへば腦膜炎、腦水腫、腦震盪等の輕度の場合にありて著甚の變化を起すことなくして精神低格を現はすことがある。

精神低格によりて現はるるところの證狀は固より多般で、一々ここにこれを擧ぐるの餘裕はないが、その中に就て所謂不良少年の研究の上に必要なるものは(一)道德の範圍に於ける缺陷(二)感情生活の異常及び發揚性の亢進(三)意思の障碍である。道德の範圍に於ける缺陷は精神低格のものに多く現はるるもので英國の學者はこれに悖德病(Moral insanity)の稱呼を附し一個の疾病として擧げたこともあるが、固より一個獨立の疾病ではなく、精神低格の證狀の一種である。實際悖德性の行爲は尋常の精神狀態のものにありても敎育の不良のために行はれるものもあるが、しかしながらそれが病的の腦髓の作用に基づくものがある。精神低格に現はるるところの道德性缺陷は全くこの病的の腦髓の作用に基づくもので、全く感情生活の缺陷と異常に基因するものである。それ故に、この種の兒童に對しては環境の感作殊

に教育を用ひて尋常の感情反應を起さしむるやうに訓練することをしなければ倫理的、美的及び論理的の高等感情を養成することが出來ぬから、その兒童は常に不良の行爲をなし、生後第一年の頃から已に剛情で、頑固で、憤怒し易く、母親又は乳母を見ても喜ぶやうなことがなく、始からして消極的の感情の調子をもつて居る。それからして殘虐、破壞、執念、猜忌、虚言などの不良性格が現はれ、不從順にして教訓することも六ケ敷、貪慾、快樂に耽ることを好み、人の物を盜む。しかもその物を盜むといふことは獨り貪慾のためのみでなく、時には兄弟姉妹をして怒らしめむとして、惡意に一物を盜むことがある。後悔の心を起すことなく、感謝の念を起すこともなく、同情といふ心もなく、家族を愛するの情もなく、學校にあつては粗暴の擧動によりて同窓のものを壓制し、教師を權威者として認むることがない。興味といふことに乏しく、懶惰にして、學校に行くことを嫌忌するために虚言をするのが常である。此の如く教訓することが六敷しいために、又その不良性が增加するために、それに對して懲罰が施されても、何等の效果が無いか、若しくはそれがために却て不良性が增加する。自身に懲罰を受くべきほどの行爲をしたといふことを感ずるの能力がないために懲罰に對して甚しく憤怒し、それに對して頑固に抵抗し、或は母親か教師を叩き、或は懲罰を免れんがために逃避する。一旦逃避することがあると、それから後は懲罰の實施せられむことを期待し、市街を彷徨して、速かに少年犯罪者の團體の中に加はるやうになるのである。

道德性缺陷

此の如き道德性缺陷を有する兒童が、漸次に生長して、獨立の作業をなすの機會が多くなるに從ひて、反社會的衝動はます〱多般の方面にその姿を現はすのである。作業を好まず、規律的の生活をなすことを窮屈に感じ、常にその感

覺の刺戟に應じて快樂を貪ぼることをのみ勉め、速かに飲酒家となり、しかも始よりして飲酒に堪へざるのが常である。此の如き精神低格の症狀に伴なひて不機嫌、發揚性、不滿足等が現はるるがために精神不安となり、何等かの變化を求むることが切なるために漫遊を好み、浮浪し、又擧動が輕佻となるのが例である。他の種類の精神低格に異なりて羞恥の感情が全く缺如し、感情の缺陷に相當して血管運動神經の反射機能が缺陷して居るために顔面潮紅を呈することなく、疼痛の感覺も減却し、針を皮膚に刺しても疼痛を覺えざることが多い。性慾は他の感覺的機能と同じく早期に現はれ、七八歳の兒童にありて既に手淫を始め、それから間もなく他の同性又は異性の兒童に對して猥褻の行爲をなすに至るのである。又この種の女性のものは思春期に至らざる前に賣春婦の群に入るの例が澤山にある。この種の道德性缺陷を有する精神低格の少數のものは智力普通であるが、しかしながらその多數のものにありては智力の發達が尋常に比して著しく遲滯して居ることが認められる。

此の如き道德性缺陷を有するものの大多數は早晩犯罪行爲をなすものであるが、その犯罪の種類は性格の特性と外界の感作とによりて、互に相異して、發揚性のものは盜賊、殺人者、姦淫者等となり、遲鈍性のものは、放浪者となる。多慾にして快樂を貪ぼり且つ作業を嫌忌するものは竊盜、詐僞者となるのが常である。いづれにしても遲かれ早かれ獄監に入り、監獄に入るのであるが、その中の大多數のものはここに修養の功を積みて遂に犯罪の大家と成り了るのである。刑罰はこの種の精神低格のものにありては何等恐怖の情を起す因子となるものでないから、これに刑罰を加ふることによりて改悛せしめようなどとすることは全く無益の業である。どうしてもその反社會的衝動を抑制するために刑相當の方法を講じてそれによりてその害惡を社會に及ぼさぬやうにすることが肝要である。この意味よりして今日の法及び刑罰執行につきては十分の革新を加へねばならぬのである。

感情及び感動の異常

精神低格の第二類は感情及び感動が、分量的及び性質的に尋常より離れて居るといふことを特徴とする。この種のものにありては道德的感情の缺陷はなくして、外界の感作に對する反應が異常で、從て意思の作用が異常を呈して居る。この種の兒童にありては精神の疲勞が著しく、それによりて不快の感情が常に著しく現はれ、それに打ち勝つことが健康のものに於けるよりも困難である。學校にありては注意の作用が速かに衰へるために學課の成績は不良で、しば〳〵懲戒を受けるのが例である。しかるにこの種の兒童は知覺銳敏のことが多くして懲戒を不當なりと感じ、それによりて緘默し、課業を嫌忌するに至るのである。何れの處でも自身は理解せられず、又不當に取扱はれるといふことを考へて、想像によりて美しき世界に至らむことをつとめ、同時に發揚性が亢進し、忠告せられたる場合には感動が劇發し、幾もなくして劇しき後悔の念が起る。氣分の變動著しくして、不機嫌、靜寂、不愉快に暮すのが常である。しかしながら此の如き狀勢に長くあることは到底堪へられぬことで、遲かれ早かれ、外界との鬪爭を止めて、自己の固有の活動に移るのであるが、それは暴烈、落膽の傾向、氣分の變換、傾向の變換、萬事不安定等によりてその意思と行爲とが支配せらるるのであるから、その判斷は深く考慮することなしに感動的にせられるのである。それ故に、たとへば一寸不愉快の感情が起つたために別に何等の根據なくしてその職業を變更するやうなことがある。感情生活の調和を缺如して居ることは著明であるが、意思作用が不安定であるといふことも亦著明で、從つて一時的の氣分の變化、感動、思ひ附き、暗示のためにその意思が左右せられて、甚だ些少の原因よりして重大の行爲を引き起すことがある。麻醉毒の作用に對しては殊に銳敏で、それを常習的に攝取する所の傾向がある。この種の精神低格のものには疲勞感情と不愉快感情とがあるた

めに麻醉毒の攝取が愉快に感ぜられるのである。

これ等の精神低格のものが、犯罪行爲をする場合はその職業を轉じ又はその職業を失なふ等の故障によりて困厄に遭遇せるときである。而してその犯罪行爲として最も普通なるは浮浪と竊盜とであるが、時には發揚性の亢進せるによりて感動性犯罪をなすこともある。精神作用の調和を缺如して居る中にも想像力が亢進し批判及び論理的感情が微弱であるがために所謂想像性虚言(Pseudologia phantastica)が現はれ、それがために犯罪行爲をすることが多い。この場合にありては、想像力の亢進に兼て自己感情が著く増加し、記憶力は著く減退し、現實と想像とを混同し、それがために有りもせぬことを有つたやうに誤まりてその言ふところが虚僞に陷るのである。

意思の障碍

精神低格にありて意思作用の上に現はるるところの異常は強迫行爲、衝動行爲及び意思薄弱の三種であるが、強迫行爲は強迫觀念の一部分として變質性素質の上に現はるるものである。この強迫行爲は單獨にそれのみ現はるることもあるが、外的の原因、たとへば劇甚の感動、憂愁及び外傷等によりて發現することもある。衝動行爲は尋常に異なりて單一の動機によりて行爲をなすもので、竊盜、放火等の犯罪行爲が、この病的衝動に基づく場合も尠なくない。竊盜病(Kleptomanie)と名づけられて、病的竊盜衝動のために起るところの竊盜があるといふ説はこれまで行はれて居つたが、しかしながら輓近學者の說では此の如き事實は實際にこれを認むることは稀であるといふことである。尋常なる人類の竊盜性傾向と竊盜病的衝動との間の限界を立つることは甚だ困難で、竊盜性傾向は先天性に何れの人類にもあることで、哺乳兒が光輝ある物體に目をつけてこれを攫むのは正に竊盜性傾向を示すものである。稍長じての後は、兒童は氣につ

たすべてのものを我が物にしようと欲するのであるが、教育の力によりて始めてこの衝動を抑制し得るに至り、又自己の所有と他人の所有とを區別するの力が現はれ、他人の物を取れば罰せられるといふことを經驗して遂に利他的の感情を得るに至るのである。しかるに、此の如き所有の觀念が明かにありて、他人の物を取れば罰せられるといふことをも知りたるものが、竊盜性衝動の著しく亢進せるによりて竊盜の行爲をなすものが所謂竊盜病である。精神低格の女性にありては月經來潮又は姙娠の間に定期的に、この竊盜性衝動が亢進することがある。竊盜性衝動行爲が倒錯性性慾のために起ることは尠なくない。それは「フェッチシスムス」(Fetischismus)と名づけられて、相手の衣服、身體部分等によりて性慾の滿足を得るところの倒錯性のものであるが、性慾を刺戟するところの物品を盜み、又一たび用ひたるものは再びその用をなさざるが故に、性慾の發動する度毎に、しばしば盜を反復するのである。たとへば反覆して女子の湯卷を盜むが如き、この倒錯性性慾のために起るところの竊盜の一例である。すべて病的衝動によるところの竊盜にありて特殊とするところは、竊盜の前には不愉快感情強くして精神發揚するも、竊盜の後には愉快感情起りて疼痛性緊張狀態の消散することである。

火を見て喜ぶこと及び火災を見て面白いといふ病的衝動のために精神低格のものが所謂放火病(Pyromanie)の症狀を呈することが多い、殊に思春期のものに多く見るところの放火癖はこの病的衝動に因することがあるが、しかしながら單純にこの衝動のみで放火するものは稀有で、多くはそれに利己的の動機が加はつて居るのである。

精神低格の多數の場合に意思の薄弱が認められる。それ故にこの種の精神低格のものに意志不安定者(Haltlosen)の別名が附けられて居る。この場合にありて感動及び感動性衝動を抑制するの能力が缺如して居るために、自から不良の事と知りながらもこれを爲すのが常で、意思の獨立せぬこと及び安定せぬことが著しく目に立つのである。道德上にも

缺陷があり、感情及び感動に、障碍があるにしても、それはその人の日常の生活の上には左ほど障碍を起すには至らず、たゞその意思の力の微弱であるがために、一方にありて善惡共に暗示を受け、他方にありては此にても困難を覺ふる事實に堪ふることが出來ぬといふ點に於て、その人の日常生活は大に障碍せられ、又それによつてしば〳〵犯罪行爲をなすことが多いのである。

病的の浮浪癖

衝動行爲を以て、一個の疾病として特別に擧ぐることの出來ぬといふことは既に前に述べた通であるが、窃盗にしても、放火にしても、又は殺人にしても、自殺にしても、種々の精神異常と疾病状態とによりて生成せられるものであるから、單にこれを病的衝動行爲とのみすることは出來ぬ。精神低格の意思障碍の中には浮浪癖(Poriomanie)と名づけられるものが、しば〳〵現はれるが、その原因は意思の力の減却せることゝ、神經系統の能力の微弱なるとによりて、知覺作用が異常となり、神經の發揚性が亢進し、且つ衰弱性となり、感動を抑制し、氣分を調整するの能力が無くなるがためである。此種の兒童は先づ遊戯の慾を失ない、放心性となり、精神は快活にして、顏貌は緊張すれども、靜寂として物事をなすに懶く、食慾は不良にして心臟部又は胃部に不安を訴へ又は前額部に壓重の感を覺ふることが多い。それから緊張の度はます〳〵強くなりて、氣分惡しく、遂にそれに堪え兼ねて、抑制することの出來ぬ運動慾が起り、それがために衝動的に外出し、又は浮浪するに至るのである。已に外出し、浮浪するときは氣分は爽快となり、内部よりの壓迫は忽ちにして除かれるのである。

ここに擧げたる浮浪癖は意識の状態が尋常であるが、意識の朦朧状態を伴なひて起るところの浮浪癖に、癲癇性の浮

浪癖と「ヒステリー」性浮浪癖との二類がある。癲癇性の浮浪癖は何等の著しき動機なくして學校から外出し、家庭から外出することが特徴で、その精神狀態を檢査すれば癲癇に特有なる變化が認められる。「ヒステリー」性浮浪癖にありても亦、意識の溷濁がありて、それが想像力の亢進と、苦悶性の氣分とのために內部より壓迫せられて兒童はその家を出でて、街上を浮浪するに至るのである。

此の如き浮浪癖はすべて先天性の精神缺陷に因由するもので、すなはち精神低格に屬するものであるが、これに反して、精神薄弱のものにありて、その先天性の智力薄弱と、環境の如何と、又社會的一時的の原因のために、浮浪癖に陷るものがある。これは固より精神低格に因由するところの浮浪癖とは區別すべきものである。又、精神の健康なるものにして、懲罰を免れむとして、或はその身體の弱きがために命令せられたる作業に堪え得ざる等の場合に、その苦痛から免れむとして外出して街上を浮浪するものもある。

精神低格の種類

精神低格のものにありては、その性格が尋常の兒童又は他の病的性格のものに比較して特異なること、上段に略述せし通であるが、その感情生活が表面的で、輕佻的で、意思の動搖の甚しきものは精神不安定者(Die Haltlosen)と名づけられ、想像力の極度に現はれて居るものは病的欺騙者(Pathologische Schwindler)と稱せられ、倫理的及び利他感情の缺陷せるものは先天性犯罪者(Die geborenen Verbrecher)と稱せられ、自己意識の極度に現はれて人格的感覺が著しく亢進したるものは病的訴訟者(Die krankhaften Querulanten)と名づけられ、感動亢進して著しく發揚性となれるものは病的感動者(Die pathologischen Affektmenschen)と名づけられる。その他にも體質的沈鬱、體質的爽快、

「ヒステリー」性人格、神經質、變質的想像者、變質的偏屈者等種々の種類のものが、擧げられて居るが、すべて此等は精神低格の各種の場合にありて、その症狀の顯著なるものを區別して、これに特別の稱呼を附したまでのもので、別に特殊の種類に屬するものではなく、如何にも精神低格の發現は多種多樣であるといふことを示すものである。しかしながら、此の如く多種多樣なる精神低格の各種のものに通じて、常に現はるるところの症狀がありて、その全體が、精神病學上の意味にていふところの變質者(Die Entartete)に屬するものであるといふことが認められる。すなはちこれ等の精神低格のものには第一に形態的及び機能的の缺陷(變質徴候)がある。第二に精神低格の各種の精神異常はその人をして廣義の外界に對して不調和ならしめる、又その目的に適合しないやうにし、その個人に對しては不良の結果を與へる。簡單に言へば、その個人が外界に適應することが不十分である。精神低格のものが動もすれば反社會的行爲をなすことあるは畢竟、これに基づくものである。精神低格のすべての場合にありて、外界の刺戟に對する反應が或は强きに過ぎ、或は弱きに失し、外界の要求に相應せぬために、個人の特性を保持するための必要條件として外界に適應することが出來ぬ。それ故に、その人は外界に對して關係のないものになるか、目的に適合せぬものになるか、或は直接に傷害を與へるものになる。殊に自己意識の强く現はれる場合、感動反應の劇甚なる場合、不良なる氣分の持重せる場合、不快感情の優越せる場合、精神作用の平衡を失ひたる場合等にありては精神低格は外界に對して不良の感作を及ぼすものである。此の如く、精神低格のものが、外界に適應することの出來ぬはそのいづれの種類にあつても同じこととで、畢竟、内部的の原因、即ち變質的の素質に基づくものである。

精神薄弱(Angeborene geistesschwäche)と稱するものは腦髓の發育が障碍せらるゝによりて起るところの精神の缺陷で、主に智力の作用が侵さるゝものである。この精神薄弱の原因として擧ぐべきものは遺傳(生殖細胞の異常)、兩親の黴毒、酒毒等によりて生殖細胞の侵さるゝこと、子宮内又は產後に起るところの器械的發育障碍(たとへば腦膜炎、腦水腫、佝僂病、重性榮養障碍、遺傳黴毒、甲狀腺病等)、及び娩產時併に幼時に於ける腦髓の外傷等である。これをその程度に從ひて白痴、癡愚及び魯鈍の三種とする。

白痴(Idiotie)といふのは精神薄弱の最重性のもので、大略七歲位の兒童の精神以下にあるものをこれに屬さしめるのである。言語の發達は極めて不完全で、ただ具體的の物品の名目を知るに止まるものが多い。言語の理解も乏しく、記憶の力も弱く、聯合作用も十分でない。感情生活は原始的のもので、飢餓を不快に感じ、滿腹を愉快に感ずるのみである。性慾の感覺を存することは多く、それに反して疼痛の感覺は常に障碍せられて居る。智力的感情は全く缺如し、笑ふこともなく、泣くこともない。これ概念と感情の貧弱なるがためである。意思の作用は食物を取るときにのみ現はれ、その他の場合は、自働的運動たるに過ぎぬ、しかもその運動は平等に行はるゝを特徴とする。此の如き白痴のものが憤怒するか、性慾のために動かさるゝか、する場合には犯罪行爲をすることがある、そうしてその犯罪行爲は動物的亂暴を示すを例とする。

白痴に比して精神薄弱の程度の輕いものを癡愚(Imbecille)と名づける。癡愚にありては、記憶力があるから觀念の數も多く、それを一定度にまで分類し、概念をつくることが出來る。しかしながら健康者の如くに普汎觀念を細かにつくることが出來ぬために細かに事物を區別するの力がない。言葉の數も少なく、定義も十分でなく、判斷の獨立には出來ず、注意作用も障碍せられて居る。遲鈍性のものにありては領會が緩慢となり、發揚性のものにありては放心及び粗

漫になる。感情生活は原發的にして、無感情から强度發揚までの間を現はして居る。智力的感情は缺如し、他の高等の抽象的概念も缺如する。それ故に、癡愚のものは利己的にして、衝動のままに不良の行爲をなし、利他的感情、正義心、同情、感謝、兩親を愛する心、義務感情等は全く缺如して居る。それに相當して獨立的の意思作用は感覺的要求の滿足を得る方に向けられ、その行爲は常に衝動的である。癡愚にして記憶力の善良なるものがあるが、この場合にはその精神的缺陷が隱蔽せられて癡愚たることを診斷することが甚だ困難である。癡愚の多數のものはその記憶力によりて、器械的に職業を模倣し、理解なくしてしかも忠實にこれを實行して居る。それ故に、癡愚の輕度のものを證明することは決して容易の業でない。この場合にはどうしても嚴密の智力檢査法を施さなくてはならぬ。學校及び日常生活にありて得たる知識の內容や分量を檢査するときは、この種の精神薄弱のものは普通の兒童と同等又は同等以上のものと誤まられることが多い。

癡愚のものが、犯罪行爲をなすと否とは外界の狀勢如何によるもので、この種の精神薄弱のものは善惡に限らず、外界よりの感作に影響せらるるものであるから、若し外界の狀勢にして不良なるときは常に犯罪行爲をするものである。勿論、癡愚にして道德上の缺陷の著しきもの及びその倒錯性のものは環境は善くとも猶ほ犯罪行爲をするものである。

最輕度精神薄弱

魯鈍 (Debilität) と稱するは最輕度の精神薄弱であるが、この種のものは世間に甚だ多く、しかも終身その魯鈍たることが發見せられずして濟む場合が尠なくない。智力も普通に善良の狀態の下に生存するに足るだけは存在し、その教育に相應したる職業を執るだけには差支がない。しかるに、不良の環境にありて生存競爭の裡にあるときはその精神の

力は忽ちにして缺陥を示し、その外界の狀勢に應ずることが出來なくなるときに、こゝにすなはち犯罪行爲が現はれるやうになるのである。魯鈍のものの具體的概念は尋常の人のものに異なることなく、しば〳〵一側的に優越の材能を有して居ることがある。しかしながら注意して檢査すると、言語にも不明瞭の點があり、再生作用も十分でない。追想の作用の不十分なるがために想像の作用にてこれを補ふために虛僞の言をなすことが多い。獨立の判斷は限られたる場合にのみこれを能くし、強て判斷せしむるときはその力が段々と弱くなる。その口には倫理的、美的及び論理的感情を現はすべき言語を發すれども、しかもその感情を實現することは出來ない。それ故に眞理を愛する慾もなく、眞正の名譽心もなく、又同情心及び感謝心もない。その行爲は常に利己的感情によりて定められる。知識と模倣能力とによりて種々の行爲が熟習的に、狡猾的になされることが多い。

魯鈍のものの感情生活が發揚し、感動性が強劇となりて、その感覺的利己的の衝動を働かさしむる場合には、精神低格に於けると同じく、所謂悖德病（Moral insanity）と名づけらるべき犯罪行爲をなすに至るものである。この種の兒童は已に小學校時代にありて、教訓し難き兒童として父母及び教師の目に著き、又その亂暴、惡心、及び狡猾等によりて、その異常なることが認められる。固より魯鈍のものにして、道德上の缺陷を有して居るものはその數は尠なくして、大多數のものは犯罪行爲をなすことなくして一生を終るのである。魯鈍のものは周圍のものの行爲方法及びその動機を正確に認識することの能力がないために偏執性の觀念を現はすこと多く、これによりて家庭の爭鬪を起すことが多い。この場合にありてその家族のものが、多大の忍耐力をもつて、懇切に訓諭するときは遂にその偏執性の觀念を消すことが出來るのであるから、精神病者の妄想とは全く相違のものであるといふことは勿論である。

魯鈍にありては、此の如く、智力の缺陷に並びて行爲の上にも一定の特殊の點がありて、多くは自身の接近の事に

けられ、直接に利益あることを撰び、遠大の計をなすやうなことは無い。犯罪行爲も亦原始的のもので、複雜な入り組みたるものは無く、一寸見て直ぐに智力の缺陷が認められるやうた種類のものが多く、叉衝動行爲の程度を離れないのが普通である。

變質徴候

精神低格と、精神薄弱とは、此の如くにして、共に精神の缺陷として、所謂不良少年の原因の主要なる部分を占めて居るものであるが、その先天性のものにありては、身體の各部にありて、尋常の定型より離れたる點が認められる。これを變質徴候（Degenerationszeichen）と名づける。その主要なるものを列擧すれば

頭蓋の大さ及び形狀の異常（大顱、小顱、鞍顱、不顱、尖顱）。後頭の遍平。前額の突出。頭蓋左右半側の不對稱。

顏面の大なること。下顎の突出。硬口蓋の狹小にして險阻なること。兎唇。狼咽。懸雍垂の分裂。

瞳孔の色澤左右不同。色素缺如。虹彩缺損。瞳孔形狀異常。瞳孔位置異常。近視。色素性網膜炎（鳥目）

耳殼小（小耳）。耳殼大。ダルウイン氏結節。モーレル氏型耳。ウイルデルムート氏型耳。「マカクス」型耳。「ツエルコピテクス」型耳。猫耳。重聽。聾啞。

齒牙の異常。齒列不整。合齒不正。

巨大體格。侏儒。龜背。指趾の過剩。手及び足の畸形（扁平足。内翻足）。指癒著。蹼膜形成。小指の萎縮。

母斑。毛髮發生。男子にして髭なきもの。女子にして髭あるもの。乳房過剩。眉毛發生過度。

陰莖小。睾丸潛伏。尿管破裂。小兒子宮。膣及び子宮の重複。子宮閉鎖。半陰陽。

大略、此の如き異常が認められる。しかしながらこの變質徴候は健康の身體にありても、一二のものを認むることがあり、又精神低格のものにもこれを認めぬとがあるから、それによりて精神低格を判斷することは出來ぬと論ずる學者（ゾンメル氏等）がある。固より此等の變質徴候の一二のものは健康のものにも存在することがある。しかしながらその多數のものが同時に存在する場合にありて、それが尋常の定型より離れたる徴候であるとするに差支ないことであらう。全體我々人類の身體は外界に適應して常に變化しつつあるもので、たとへば耳の筋の萎縮せるが如き、齒牙の數の減却して智齒の發生せざるが如き、尻尾の外に現はれざるが如き、足が支持の用をなして握るところの用を爲さざるために足趾の作用の不十分なるが如き、數へ來れば、身體の各部に於ける變化は實に著しきものであるが、すべて此等の變化は、身體が外界に適應するためのもので、言はば進化發展である。しかるに、變質徴候と名づけられて居るところのものは、身體が黴毒、酒毒、結核、精神病、神經病等に罹るために起るもので、言はば墮落を意味するものである。それ故に、身體の外部に此の如き墮落の徴候がある場合に、その精神の上にも同樣の墮落があることを推定することが出來る筈である。

遺棄の狀態

精神低格と、精神薄弱とは所謂不良少年の內部的原因の主要なるものである。しかしながらこの內部的原因のみで所謂不良少年となるのでなく、所謂不良少年となるにはその外に外部的原因が加はらなければならぬのである。遺棄又は無監護の狀態（Verwahrlosung）といふのは、すなはちこの外部的原因の重要なるもので、兩親又はその代理者が兒童の監護をなさずしてこれを放棄するの狀態を指すのである。元來、兒童は一個の生物體であるから發育の法則に從ふて

自然に生長するものであるが、その生長の間に外界から受るところの社會的事項のために、その發育の上に、著甚の變化を呈するものである。それ故に、兒童の教育の上に、環境が重大の意義を有することは言ふまでもないことであるが、所謂不良少年の列に入るべき素質を有するところの異常兒童にありて環境の感作は更に重要であるといはねばならぬ。遺棄又は無監護の狀態は兩親がその兒童を教育するの意思に缺如するといふことに基づくものが多いので、上等の社會にあつては教育の任務は漸次に兩親の手より振落され、教育の大事は雇傭のものに委託せられ、しかもそれが教育家として相當の資格のないものである場合が多い。又教育を我物とすることは言語の作用によるのみでなく、第一に兩親の模範に倣ふのであるが、その家庭の生活が不取締にして、酒を飲み、妾を蓄へるといふやうな狀態では、その兒童は全く無監護の狀態の下にあるものといはねばならぬ。多くの家庭にありては父も母もその職業のために外出して家庭に居らぬために教育に必要なる時間の缺乏を告ぐるのである。若し家庭に居るにしてもそれが内職に忙はしければ、家庭に居らぬと同じく、兒童をば無監護の狀態に置かねばならぬ。私生兒にありて家庭的保護が缺けて居る場合は甚だ少なくない。

レーヴエンベルグ氏は秘密共同教育家として下婢、學友、不適の小說（殊に新聞紙の小說）等を擧げて居るが、近時殊に世間に行はるるところの犯罪小說、不適の演劇、活動寫眞等は所謂不良少年の直接の原因をなすほどにその感作は著しいものである。又多數の都市に於ける住居の不良狀態は疑もなく兒童の道德感情を消失せしむるの憂がある。一室内に多人數が雜居するといふことは、衛生上の弊害を別にして、道德的の不良行爲を惹起するの原因となり、殊に性慾を早期に發現せしむるの危險がある。市街の感作も亦不良にして、監督なくして漫に市街に出入するときは所謂不良少年の列に入ることの機會が多い。浮浪群の少年が團體をなして市街を横行する場合にはその結果は甚だ危險である。こ

れ無監護の狀態の下にある少年が相互に不良の感作を受けてそれを增長せしむるがためである。殊に兩親がその職業のために諸所を流浪して一定の住所を有せざる場合には學校にも入らず、入るも規則正しからず、それがために順序ある教育を受くることゝなく、常に無監護の狀態にあるのが例である。學校は家庭に反して佳良の感作を兒童の上に及ぼすものであるが、しかもそれが家庭の不良の感化を連續して受け、監督せらるゝことなく、他の不良少年と交際するなどによりて折角の學校の感化もその效果を消失するものである。

所謂不良少年の處置

所謂不良少年の本態につきて、上段にその大要を略述したところによつて考へると、所謂不良少年を取扱ふに方りては第一にその不良行爲に對してのみ處置すればよいといふやうな常識的のことよりも、その不良行爲をなすところの兒童そのものに對して相當の處置を施すといふことが必要であるといふことが明かに認められる。同じく浮浪であつても、それには性質の相違したものがあり、同じく竊盜であつても、その兒童によりてその、性質の相異せるものがあるから、その行爲が浮浪であり、竊盜であるからといつて、これを爲すところの兒童の身體及び精神に差異がある以上、それに對する處置がそれに相當して差別的であるべきことは勿論であるのみでなく、若し然らずして單にその行爲をのみ見て、それに對して處置したところで、十分の效果を得るとの出來ぬことは當然である。これ今日まで、所謂不良少年に對する處置の多數のものが滿足の效果を得たかつた理由の一とつである。それ故に、所謂不良少年を處置するにつきての第一の要件は所謂不良少年の本態を科學的に明瞭に認識することである。第二の要件とするところは、所謂不良少年の本態より考へて、それを處置する方法の肝要なるものは保護教育（Fürsorgeerziehung）によりてこれを教養すると

いふことである。これを西洋に於ける所謂不良少年處置の歴史に徵するに、始めはこれに對して刑罰を加へ、それによりて反社會的及び犯罪的性質を改良せむことをつとめて、これを監獄又は懲治監等に收容したのであるが、多數の場合にありては、その結果が豫期に反して、此の如き處置のために名譽感情の衰弱と、倫理的變質とを致すの弊害が認められるのみで、その不良の性質は些も改善せらるゝことが無いといふことを經驗した。それ故に此の如き刑事政策的の方法を廢して、これを輓近の社會政策的方法に移し、監獄の代りに教育を以てして、所謂強制教育(Zwangserziehung)を始めたのである。これ實に所謂不良少年を取扱つた上の經驗に基つきて、所謂不良少年の不良行爲に對して制裁又は處分といふやうな刑事政策的の處置を施すことの却て有害無益であるといふことを知悉したためである。しかしながら強制教育といふ以上、猶ほこの思想の根柢には教育的處分又は教育的刑罰といふやうな意味を存して居るが故に、所謂不良少年の處置としては十分でない點がある。それ故に更に一歩を進めて保護教育（Fürsorgeerziehung）が實施せられることになつたのである。殊に近時兒童の身體及び精神に關する科學的研究が進歩して、所謂不良少年の本態が明瞭になつたために、保護教育によるにあらざれば所謂不良少年を適當に處置することが出來ぬといふことが認められた。

國語國字問題に關する一考察

——國語整理と漢字制限の可能性——

福永恭助

一、目覺めつゝある國民

◇近頃新聞や雜誌に國語と國字との問題に關する議論や記事を見受ける事が、大戰前に較べてメッキリ殖えて來た樣に思はれる。これは云ふ迄も無く、世界大戰事に依つて五大國の一となつた我國の各人の頭に世界の日本であると謂ふ考が知らず知らずの間に植ゑ付けられた爲め何かにつけて物事を歐米諸國に比較して見る事が行はれ、又一方國力の充實と謂ふ事が眞面目に研究される樣になり、其結果、我國が國字と國語の方面で外國に較べて實に容易ならぬ損をして居ると謂ふ事に氣が付いて來たからに違ひない。

◇實に漢字は惡魔の文字である。千何百年の間、日本人と云ふ日本人が、直接間接漢字の爲めに多大の精力を消耗して居つた事を想へば——漢字が日本の文化に與へた効能を全然無視する譯では無いが——誠に無念の至りである。併し遲蒔乍ら今日國民がそれに氣が付き始めたのは日本にとつてどんなに幸福な事か解らない、日本の國民が文字と言葉の問題に目を醒まして立派にそれを解決した時に、國運は更に一段の隆盛を來し、文化の光は世界に輝くに至るであらう。此意味に於いて此問題に對する世論は昨今最も健全なる方向を採りつゝある。

◇政府は又最近臨時國語調査會の官制を發布して、森林太郎博士を會長とし、朝野の學者名士三十五名から成る處の調査機關を設けて此問題を取調べると謂ふ。誠に結構な催しであつて、國民が多年齊しく望んで居つたものが實現された譯である。願はくば委員となられた方々は、舊き慣習に囚れず又空想に趨らず、よく國民の實行し得る案を作られて國民を文字と言葉との苦惱から救つて戴き度い。

◇調査會の仕事はそれの官制第一條に示された處に依れば「普

通に使用する國語に關する事項を調査するものであるが、文部當局の談に據れば、調査は單に國語だけに止まらず國字の方面にも手を著けると謂ふ事であるから、これは國語國字調査會とも謂ふ可きものである。名前の事は扨置き、聞く處に據れば臨時國語調査會の調査事項は次の三種に岐れて居ると謂ふ。

（イ）、字音及假名遣の整理統一

（ロ）、漢字制限の範圍

（ハ）、口語體に關する調査

◇此の三種の內で第一の字音及假名遣の事に就いては今暫く論じ無い。たゞ（ロ）項の漢字制限問題と（ハ）項の口語體に關する調査（卽廣義の國語整理）の二大事業に就き私の見る處を述べて一部の委員及多くの讀者諸君の參考に供し度いと思ふ。

二、漢字制限論

◇今日兒童が尋常小學校六年間に習ふ漢字の數は實に二千六百餘字（日本式ローマ字は僅か十九字である！）に及んで居て之を覺える兒童の苦心の並大抵で無い事は世に兒を持つ親の誰しも經驗された處であらう。それが只の二千六百字であつても驚くのに、更に驚く可き事は、漢字と謂ふものには一字一字に就き音だとか訓だとか謂つて幾通りも讀み方があるのだから堪ら無い。例へば「行」なら「行」と謂ふ一字だけに就いて幾通りの讀み方があるか。

◇音としては「旅行」、「行者」、「行燈」の三色、又訓としては「行く」、「行ふ」、「船を行る」などと云ふ讀方がある外に、人の名前などになると「楠正行」だとか「木幡行」（海軍大尉にある）と讀んで見たり、又土地の名前では、相模の藤澤と厚木との中間に「行谷」（同じ讀み方は上總海岸の「行川」と謂ふ村）と云ふ所があり、更に夫婦喧嘩の後に出るのに「三行半」などと云ふのがあつて凡そ十種にも及んで居る。尤も之は著しい例であるが、平均一字に就いて三通りや四通りの讀方があるのは事實であるから、今私は、兒童は二千六百字の漢字を覺えねばならぬと云うたけれども、實はそれの三倍にも四倍にも相當する事になつて仕舞ふではないか。

◇私は今此處で長たらしく漢字の弊害や缺點を數へ擧げて居る暇が無いから此話はこれで打切りとするが、兎に角兒童は之が爲めに小學時代の可成の部分を單に文字を覺えると云ふ事に費して仕舞つて、正味のある學問をする暇に乏しい結果、例へば獨逸の兒童が六の智識を得る間に我國の兒童は一の智識しか得られない（讀本の內容に就いて保科孝一氏の調査に據る。保科氏は今回國語調査會の委員兼幹事を務められる方である）と謂ふ

哀れな有様である。これでは日本の國力を發展させることも五大國としての步調を揃へる事も到底覺束無い。又此の樣な有樣では世間の人が小學校を目して文字を敎へる所であると考へたり、敎育とは話り讀き書きの事に外ならないと考へる人が起るのも無理は無い。

◇ローマ字國字論や假名論は色々の細かい理屈もあるが、要するに右に述べた敎育上の弊害を根本的に救濟しやうと云ふのが主眼であつて、之等は孰れも漢字の樣な形象文字と違つて日本人が口で言ひ耳で聞く通りの音を寫す處の音文字であるから漢字の場合の樣に敎育上不都合な事が絶對的に無い。

◇併し世の中には急劇な變化を好まない保守穩健な人も少く無い。假令ローマ字や假名が理論上良くても今直ぐにそれに取り換へる事は不可能な事でもあるから、先づ差し當りの問題として日常に使ふ漢字の數を減らして其弊害を緩和しやうと謂ふ妥協說も成り立つ理である。これ即謂ふ所の漢字制限論であつて仲々賢い想ひ着きである。國語調査會も亦これをやらうと謂ふのらしい。だが併し全體漢字制限などと云ふ事が實際に行はれ得るであらうか?

◇今假りに、二千六百字の漢字を敎へる事は國民敎育上宜しく無いと云つてそれを五百字なら五百字に制限したと考へて御覽なさい。そして使用を許された五百字の中には「猫」と云ふ字があつて「狐」と云ふ字は使用禁止の部類に屬して居つたとしたならば、「猫」は此の樣に漢字で書く事を許すが、「狐」は假名で「きつね」と書かねばならぬと云ふ樣な事が實際に守られ得るであらうか? 政府が鐵血政策でも採つて漢字制限に背く者を嚴罰に處すると謂ふ樣な手段も勿論考へられないでも無いが其の樣な秦の始皇帝式の遣り方は今日此問題に應用される可き性質のものでは無い。さうさと云つて成る可く式にして置くと、「猫」を漢字で書いて「狐」を假名で書くと云ふ事は後者が文章の中で名詞らしい纒つた感じが起ら無いから――漢字書きの「猫」に比較して――そんな事が實行されるとは思はれ無い、それならと云うて「狐」も漢字で書く事を許すと、今度は「狼」の樣な奴が『俺はどうして呉れる?』などと言ひ出して、遂に五百字の制限が五〇一字は殖え五百〇二字となり、從つて「猿」も「猪」も「猫」も「杓子」も各々四民平等を叫び出して結局元の二千六百字に逆戻りが落ちではあるまいか!

◇加ふるに近頃我國の傾向は他方においては寧ろ漢字制限と背馳しつゝあるかの如き觀がある。「人力車」を縮めて「俥」と書き「船首」、「船尾」、「右舷」、「左舷」の代りに「艏」、「艉」、「⿰舟右」、「⿰舟左」と云ふ樣な活字まで造られ、殊に東都の某新聞紙の如きは

懸賞で「自轉車」や「自働車」に代る可き新漢字(?)の考察を奬勵して居る程の有樣である。誠に以て怪しからぬ話ではあるが、「ヒト」よりも「人」の方が便利であるから「人」と謂ふ文字を生む處の漢字の仕組みが元來それなのであるから其の漢字を捨てて仕舞はない限りこれは避ける事の出來無い現象である。又人智の進步發達に從ひ思想も複雜になり道具も機械も殖ゑる一方であるから、それを言ひ表はす處の新らしい言葉の產れるのも自然な事であり、從って其言葉を寫す處の新らしい漢字(?)の考察が續々出來るのは形象文字國の附き物であると云うて宜しい。

◆更に此問題を逆の方面から觀察して見るのに、「狐」を假名で「きつね」と書き得るものならば「猫」も亦假名で「ねこ」と書き得る筈であるから、五百字の制限は尙切り縮めて四百九十九字にする事も出來やうし、又「犬」も「いぬ」と書き得る理屈だからと云つて四百九十八字に減らす事も出來る。斯くて此議論を推しつめて行くと結局假名國字論に迄漕ぎ付けなければ論理徹底しない。

◆右は漢字制限論の不合理なことの根本の理屈を判り易く說き明かしたものであるが、さりとて勿論漢字がいくらでも無限に必要だと云ふ理でも無し、今日でも其數は或程度に折り合つて居るから其狀態を指して漢字制限だと云うて云はれぬ事は無い。例へば康熙字典には五萬七千二百十六も漢字があると云ふのに、現今我國の新聞雜誌に使はれて居る漢字數が大體六千字を超えない處に落ち着いて居るのを見ても明かである。

◆併し其六千字をもつて制限された狀態だと云ふ事は制限には毛頭相違無いが、吾々の所謂漢字制限とは丸で意味が違つて、其樣な澤山の數では敎育上から見た漢字の弊を救濟する處の驗ぎでは無い。

◆勿論今の新聞雜誌が使つて居ると云ふ五六千の漢字に少しも整理制限の餘地が無いと云ふのでは無い。「則」、「乃」、「輙」、「卽」等もどれか一字だけに定めて仕舞ひ、又「聽く」、「聞く」も「聞く」だけにするとか、或は私が此の書き物で度々使つて居る「據る」と「依る」も一方に定める(尤も「依る」を採る事にして「據る」を字引から除いて仕舞ふと「根據地」、「據點」などと云ふ言葉を書く時に困ると謂うて軍隊の方から苦情が起らうし、さればとて「據る」だけにすると「依田」だとか「野依」などと謂ふ人から文句が出る計りで無く「依賴狀」などと云ふ言葉を書くのにも不都合だなどといふ事になつて、實際問題としては此處で述べる樣に事は手輕に運びさうにもないが、それは先づ大目に見て置く)とか「謂」、「云」、「言」も一つにする(これも實行困難

な點では猿、依に似て居るが）とかいふ事にして國民一般特に新聞や雜誌や官報や訓令などを書く人が正直に此約束を守ることにすれば――國際聯盟規約を守る樣な意氣込みで――多少其數を減らす事が出來るとも思はれるが、それの結果漢字の大なる弊害を救濟し得る程度に迄なり得るとはどうしても考へられ無い。

◇呉々も注意すべき事は、小學校尋常科の生徒の習ふ二千六百字だけが既に一大苦痛なのである。而も二千六百字では日常の用が足り無い。義務教育を了つただけでは官報が讀めない。役場の掲示が讀め無いのだ。小學校を出た人で八百屋の小僧となつても通帳が滿足に書き得ないのである。

◇國語調査會の調査の結果が果して四千字制限說になるか三千字說になるか或は五百字說になるか今から豫測する事は出來無いが、要するに制限漢字數が小となればなる程社會の要求と背馳して來るし、又大となればなる程制限の效果が得られないと云ふ事になつて結局此問題は昔から度々繰り返して居つた事を再び繰り返すだけが落ちではあるまいか？

今でも漢字改良に先鞭を着けて居る報知新聞は明治二十六年頃であつたか新聞に使ふ漢字を二千字に制限した事があつたが遂に不成功に了つて今日に及んで居る。

◇尙最後に一言すべき事は、漢字制限は詰り或程度の假名國字論を採用した事になるから文章の中に漢字の數が減れば減る程其文章は一目見て文意を知ると云ふ性質を失つて來て大層讀みづらくなると云ふ缺點を伴ふに相違無い。假名で書いた文章の讀みづらい事に就いては、私は曾て東京日日及大阪每日紙上で野上博士の假名論に對して稍々詳しく申し述べて置いた事があるから今再び此處で繰り返す事は避けるが。

◇要するに漢字制限などと云ふ事が出來たとしても、それは世人の期待するそうな效果を擧げる程度に字數を制限するのでは無いから其效果は高か知れたものである。

三、口語體に關すること

◇先般來文部省が先驅となつて大臣の訓令でも何でも凡て口語體即言文一致體でやつてのけて居られるが、其趣旨には吾々大贊成である。談話の時許される口語が文章には不適當だとか失禮に當るとか、ヤレ漢語漢文口調で無いと莊重で無いとか云ふ說は凡て日本を輕んじ外國にカブレて居る手合の世迷言――支那人の日常語までも莊重だとか云つて有難がつて居乍ら而も本來のよい日本語を俗語だなどと輕蔑する支那カブレが時々あるのは、「猫」を「キヤツト」だとか「シヤー」だとか云つて得意がつ

て居る馬鹿靑年と好一對だ——であつて毫も顧る必要は無い。文部省はよろしく適當なる宣傳を行ひ逐次之を他省管の文章に迄及ぼして、法律文も裁判の判決文も軍隊の命令及報告文も凡て口語文に變る樣に努力せられたい。

◇唯此處で大に注意すべき事は、世の中には單に文章の結びを『……である』とか『……であるんである』の樣に早稻田侯紛ひに、或は『……であります』や『……御座います』式に變へるのを口語文だと心得て居る人が少く無い事である。此點で先達文部省で編纂して賣り出された「口語文用例集」や、內務省が民力涵養宣傳ビラに使つて居る標語などは落第點に近い。

◇先づ「口語文用例集」に就いて批評して見ると、それの文例に出て居る次の樣な言葉や言ひ廻し方は一向口語らしく無い。これは私個人の案であるが下の樣に改めた方がよからうと思はれる。

病氣の爲缺勤します	病氣の爲休みます
伯父が死去しました	伯父が亡くなりました
一切の事件	一切の事柄（或は出來事）
敎員を志望して居る	敎員を望んで居る
推擧致します	御勸め致します
近視豫防に關する件	ちかめ豫防に就いて
御措置なさる樣	取計らはれる樣
通牒します	御知らせします
領收證	受取（證）
調査する	取調べる
御光來下されば	御出で下されば
大要	あらまし
生徒募入	生徒募集
御報知申上げます	御知らせ致します
御懇情に預りまして	御世話になりまして
御暇乞に參上する	御暇乞に上る
準備に迫はれて	支度に迫はれて
米國經由……	米國を經て……
汗顏の至りに存じます	御恥かしい次第で御座います
高名伺洩	御名前の伺洩
恐縮に堪へません	恐れ入ります
御遠逝遊ばされ	御亡くなりになられ
至極堅實な人物	至つて物堅い人物
權利が消失する	權利が無くなる（を失ふ）
御眷顧を蒙り	御ひいきを蒙り
乘車券の檢札を致させ	切符を改めさせ

尙此外郵船だとか書中で御挨拶申し上げるとか嶄新優麗の諸品と御目にかゝるとか謂ふ口語文の手本が出て居るのなども日本に於ける文章の總元締である文部省の模範文としては五十點以上の作文の點數は差し上げられ無い。

◇併しこれは流行は文部省であるから多少頭を使つてあるが、內務省の民力涵養宣傳標語（隨分難かしい言葉だ）の方になると「明朗」だとか「陶冶」だとか「輕進妄作」だとか謂ふ恐ろしく七面倒臭い言葉が使つてある。

◇口語文體として必要な條件は、話の言ひ廻し方に注意して漢文や外國文の直譯體らしく無い樣にすることと、語の撰び方を適當にして書いたものを見なければ意味が判らないと云ふ樣な言葉や多くの日本人に通じ無いやうな語の無いやうにする事とである。いくら語尾に『である』を附けても『ます』を附けてもこの二つが旨く出來て居ないのは、それは文章體の直譯に過ぎ無い。

言ひ廻し方の事は他日の問題として、私はこれから主に語の撰び方に就いて述べて見る。語の撰び方はとりも直さず國語整理である。

◇國語即日本語と云ふものは言ふ迄も無く日本人に通ずる言葉でなければならないし且日本の文章は廣く日本人を相手とすべきものであるから、國語整理に於て第一に考へる可き事は止むを得ない場合の外は成るべく外國語を使は無いと云ふ方針を採る事である。勿論特別な人などが特別な人を相手として書く文章には外國語を採り入れても深く咎め立てをする必要はないが、そうでなくて今日の日本の樣にむやみに英語や獨逸語や佛蘭西語を使ふのはよく無い。

◇歐洲大戰の結果我國に物價騰貴の聲が八釜敷なつた揚句東京に住む中產階級の俸給生活者が寄り合つて作つた組合に「月給取の組合」と云ふのがある。組合の主旨は別として、此會の固有名詞は右に述べた樣な日本語では無くS. M. U. (Salarymen-union)てと謂ふ英語だそうである。私は何の必要があつて日本人から成り立つて居る組合が英語の名前などを持ち出さねばならぬのであるか殆んど理解する事が出來無い。日本人が日本語を捨てると云ふ事は日本人であると云ふ事を捨てる樣なものだ。呉々も斷つて置くが、我國は英國の殖民地でも米國の殖民地でも無い。これは獨立國の體面から云つても頗る不體裁な話である。

◇英語問題は其邊で切り上げるとして、さて私の謂ふ「外國語」と云ふのは何も英語や佛蘭西語計りを指すので無い。彼の漢語と云ふ奴も嚴しく云へば「漢の語」であるから日本語でありやうが無い。尤も日本人に對する馴染から云ふと英語などとは比較にならない程古いし且中には充分日本化されたよい漢語もあるから一概に漢の語だと云つて排斥する譯には行か無いが、この場合にも亦國民が必要以上に漢語を濫用して、よい本來の日

本語がチャントある場合でもそれを斥けて漢語の方を使ふと云ふ悪い癖さへあるのは見逃す譯には行か無い。

◇私は今年の春房總地方を旅行した事があるが、勝浦から兩國行の汽車に乘つて千葉の邊まで來ると車掌が列車の中をふれ廻つて歩く次の樣な定まり文句を耳にした。

『……稻毛、幕張は通過で御座います』

車掌のこのふれ廻りを聞いて言葉の意味が判つたものは列車内に餘り無かつたらしいが大聲を出してふれ廻つて歩く車掌の眞の目的が御客に判らせるにあるとすればこれは當然次の樣に改める可きである。

『……稻毛、幕張には停まりません』

◇次ぎは漢語對日本語の比較としては適切で無いが、汽車の話の序に述べて置く。この汽車がやがて千葉驛を發車すると例の車掌先生又もやつて來て曰く

「恐れ入りますが、乘車券の拜見を願ひます」

これは尤も勝浦、兩國間の列車に限つた事では無く、乘客は屢々この樣に薩摩守扱ひを受けるのであるが、聞く處に據ると實際亦ロハ乘りも少くないゲナ。併し今はその事を論ずるのでは無い。「乘車券」と云ふ言葉を世間一般に使ひ慣れて居る「切符」に改めたらどんなものか。

◇「乘車」と云ふ言葉で思ひ出したが、ツイこないだの時事新報(六月二十七日夕刊)の『大不平小不平』と云ふ欄に面白い問答が出て居つた。問題は東京驛前にある電車停留場の名前の事であるが、田舍生と云ふ人が

『今使つて居る「乘車口」及「降車口」と云ふ二つの名前は文字で見れば判然と區別が付くが、車掌に言はして見ると實に紛らはしいのみならず低音の場合などはどつちだか判らぬ事があるから、これは極めて簡明に東京驛出口、東京驛入口と呼ばせた方が判り易くて便利では無いか』

と謂ひ出したのに對して東京電車課の答が振つて居る。

『その名稱は現在の通りにて差支無きものと認めます、遺憾乍ら投書の御趣旨に添ひ兼ねます』

◇難かしい漢語はこれ迄軍隊の專賣特許の樣になつて居つたが近頃は其軍隊でも「獨立家屋」が「一軒家」「十字路」が「四つ辻」「三叉路」が「みつまた」「森林」が「森」とか「林」とかに變つた世の中である。電車課ももう少し考へて貰はねば困る。

◇今日「口語」と云ふ言葉からして一向口語らしく無い。これは宜しくローマ字仲間の云うて居る通り「話し言葉」(Hanasi-kotoba)に改める可きである。尙氣の付いたのを少し擧げれば

扉の開閉	扉のあけたて
步調	足並
模型	雛形
流行に遲れる	はやりに遲れる
消化する	こなれる
發賣する	賣り出す
日出	日の出
日沒	日の入り
識別が出來ない	見分けがつかない
照準	狙ひ
慣例	仕來り
暗夜	やみよ
根據	據り處
骨條	ほね
燈火	あかり
裝置	仕掛

是等は孰れも皆立派な日本語であつて高貴の方の前で使つても差支無い言葉であるし且誰にもよく判る本來の日本語なのに人々はそれを捨てて上に書いてある漢語の方を使ひたがるのはどう考へても感心出來ぬ事である。

◇以上は主に日本語の體面問題からなる可く漢語の濫用――何でもかでも漢語は全廢して大和言葉を使へと云ふ意味ではない、濫用がいけないと云ふのだ――を廢めねばならぬ事を說き明かしたのである。これは前にも鳥渡述べた通り、日本人の事大思想から起る處の惡い現象で何んでも漢語を使つたり英語を使つたりすればエラそうに見えると思ふ日本人の自主的精神に乏しい事をよく表して居る。

吾々が言葉に就いてはどこ迄も日本語を守り立てて行く大方針をとり乍ら文字の方になると急に世界的のローマ字を採用する事を主張するのは矛盾ではないかと疑はれる方もあらうが、それに就ては昨年十月號ローマ字世界に出た「守り立て行かうよ、日本語」と云ふ論文を讀まれ度い。

◇體面問題はそれ位に止めて、次に私は實用上の見地から國語整理の必要を述べ立てて見る。それは卽漢語には同音異義の語が多くて、話しや演說や電報や電話で意味が通じ無い場合が頗る多いと云ふ事である。

◇勿論讀み方が同じで意味の違ふ語のあるのは強ち漢語には限ら無い。本來の日本語にも多少あり、英語にも佛蘭西語にもある。それだから各國共多少駄ジヤレと云ふものが流行するのだ。併し本來の日本語は勿論の事、英語も佛蘭西語でも其程度は漢語とは較べ物にならない程少くて、漢語の樣に數多いのはどうしても整理改良を要する。

◇何故漢語に同音異義の言葉が多いかと云へば、前にも述べた通り漢字の數は康熙字典にあるのだけでも五萬何千と云ふ多

數であるのに、それの音の數が四百位しか無いからである。卽「カン」とか「トウ」とか云ふ一つの音に對して之を表はす文字の數が平均百二十五以上もある事になるから、同音異義の語の澤山出來るのは漢字を使ふ日本の特徵であると云つて宜しい。

◇本來の日本語にある處の讀み方が同じで意味の違ふ言葉は一般に話や文章の前後の關係で大抵區別が出來るし尙又言葉の揚げ下げが違つて居るからそれで區別のつく場合が多い。例へば

Hára (原), Hará (腹),
Kaki (柿), Káki (牡蠣),
Hári (針), Harí (梁),
Haná (花), Hána (初), Hana (鼻),
Hasí (箸), Hási (端), Hasi (橋),

の樣に。

◇處が漢語の方ではこの樣た揚げ下げの區別も無く、又話の前後の關係でも判ら無いと云ふ樣な言葉が少く無い。例へばよく引合に出される公爵と侯爵、科學と化學、待遇と冷遇、效率(Efficiency)と工率(Power)、市立と私立、快漢と怪漢、無智と無恥、亡狀と慘狀、文化と文華、騎砲と機砲、合唱の合掌、破毀すると破棄する、碩學と薄學、意見と異見、實見すると實驗する、寄港すると歸港する、寒心と感心、レンズの光度とレンズの硬度、鑛業と工業、御好意と御厚意、落伍と落後、全部と前部、屬吏と俗吏の樣に數へ立てれば殆んど際限が無い。

◇『俺の親父は華族でコウシャクだ』と云つても、『私は目下クワガクを研究して居る』と云はれても、『林伯爵は英國で大層レイグウを受けた』でも、『此體働機のコウリツは幾らか』と聞かれても、どちらの事を指して居るのでか薩張り見當が附か無い。日本人同志が話をした場合に理解が出來ないと云ふ樣な不都合な言葉は正當なる日本語で無いからどうしても整理せねばならぬ。そこでローマ字論者はグズグズしては居ない。直ちに改良を計つて次の樣に云ふて居る。

◇卽公爵はキンシャクと讀ませ、科學は理學に改め、又效率を效能率に呼び換へて居る。因に效率を能率と云ふ人が世間にあるが、これは同じ物理學の言葉に能率(Moment)と云ふのがあるからいけないと謂ふ田丸博士の御說である。尙其外の言葉の謂ひ換へを知り度い方は日本ローマ字會員になられるのが一番手つ取り早い。

◇右に擧げたもの程極端な例で無くても、人の演說や講義などを聞いて居る場合に、講演者の使ふ漢語がどの意味の言葉であるかに迷ふ場合が少く無くて、ウッカリそれを頭の中で考へたりして居ると忽ち演說は先きの方に進んで仕舞つて、遂に大切

な處を聽き落す事などは人々の度々經驗された處であらう。

◇昨今多の議會に仲小路前大臣が山本農商務大臣に向つて云はれた『公定價格を定める事が必要だ』と云ふ文句が『高低價格を定める……』と誤り傳へられたり、又夏の臨時議會で加藤海軍大臣が分科會で降旗元太郎氏の質問に對して答へられた繫留氣球が新聞には輕流氣球と書かれたり、もつとヒドイのになると、ツイ先達つて辭職された田中陸軍大臣が尼港問題の答辯をされた中に『臣節を全ふする』と述べられたのが翌日の官報には親切を全ふすると書いてあつたので、これが爲め次の日貴族院で阪本彰之助氏の質問となり、國家の重要な政務を議する時間の幾分かゞ詰らぬ問題に振り向けられた事などは漢語整理の必要を雄辯に物語つて居る。

◇加ふるに、漢語の作り方が右の樣に眼で見た場合を基準として居る結果、口で言うた場合に語呂が惡くて言ひ難くかつたり、又耳で聞く場合に――殊に電話などで――聞きとり難いと云ふ風な事が少く無い。かくて昔から言靈のさきはふ國と云はれた言葉の國日本が文字の國に化けつゝあるのは慨はしい事である。

◇話は多少脫線の氣味があるが、要するに口語文と云ふものは單に語尾を「である」式にしただけでは何んにもならない。漢語の整理改良を計り、成るべく本來のよい日本語をドシドシ使つて、書く言葉を言ふ言葉と並行させなければ口語文の發達は覺束無いし尙又兒童敎育上の負擔を輕くしてやる事も出來ない。察するに臨時國語調査會の御方針もここにある事と思はれる。誠に結構の話ではある。

◇が併し此問題を其樣に早合點してはならぬ。それなら國語整理と云ふ事業は果して成功の見込があるかと謂ふのに、吾々ローマ字仲間の見る處では、甚だ覺束無く考へられる。それは我々が漢字に執着して居る限り成功の望みが無い。何故かといふのに二つの理由がある。

◇第一に、右に述べた方針に從つて、「流行」、「消化」と云ふ樣な漢語を廢めて、本來のよい日本語である處の「はやり」、「こなれ」等を使ふ事にすると、談話の時は先づそれでよいとして、さて文章を書く段になると是等の日本語を表はす可き漢字が無い。漢字が無ければ假名で書いたらよささうに思はれるけれどもさうは行かない。今日漢字交り文を認めて居る時代に名詞や働詞や形容詞のやうな重要な語に假名を使ふと云ふ事は、(イ)一般に無學者のする事だとなつても居るし又(ロ)文章の中で重要な位置を占めて居る斯くの如き言葉――話や演說では一段と聲を張り上げる部分である――を假名で書くと云ふとは

（假名計りの文章ですら堪え難い事であるのに、況して漢字の使用を許す文章では）書く人の心持から謂うても堪えられないし、又讀む人の側から見ても假名書きの所は餘り意をとめないのが事實である。殊に（八）改まつた文章を書く場合には「こなれ」、「はやり」等のやうに假名書きをしにくい様な實際の有様になつて居る等の理由からして行はれ難い。かくして人々は日本語の「はやり」、「こなれ」を捨てて漢語の「流行」、「消化」を採るに至るのである。斯う考へれば文部省の口語文用例集の意味がよく判る。

◇この様に新聞や雑誌や官報などが既に此方針を採るから世を擧げて漢字の流行を來し、遂にそれが書き物の場合計りで無く、談話や演説に迄も及ぼす次第なのである。近頃の看護婦の中に氷枕を「ひようちん」と云ふ者まで出來たり、教育を受けた人に却つてよい本來の日本語を忘れて仕舞ふ様な現象の起るのなどは此藥の利き過ぎた例である。元來文字と云ふものは言葉を寫す符號に過ぎ無いから言葉は主人公で文字は家來の分際である可き筈なのに、我國が漢字を使ふ爲めに、斯くの如く家來たる處の文字の爲めに制せられて、よい本來の日本語を捨てねばならぬと云ふ様な仕組みになつて居るのはどうしても日本語にとつて正當な事ではない。

◇第二に、公爵と侯爵や科學と化學と云ふ風な言葉は何の方から見ても改めねばならぬ事は一點の疑を挿む餘地が無いに係らず、今日迄それが直されて居らないのは何故であるかと云ふに、漢字で書いた場合に、明かにそれの區別がつくからである。尤もそれを漢字の特徴だと云つて有難がるのは文字の任務が語を寫すにあると云ふ事を知らない人の淺い考であるが、併し兎に角書いたものを見た場合には公爵と侯爵とはチヤント區別が附くから、漢字を使つて居る間は國語整理の必要がピンと頭に來ない。從つて誰も國語整理を熱心にやらない。整理をしないだけならまだしも、見れば判ると云ふ便利（?）がある爲めに、聞いた場合には判らないと云ふ言葉が續々新らしく製造されつゝある。詰り此の様に日本語を亂した根本原因は見れば判ると云ふ漢字の齎した罪である。であるからそれを救ふのにはどうしてもローマ字の様な音文字に依らなければ成功し無い。何となれば、ローマ字を使ふと語の不完全な點が發露されて明るみに表れて來るから、人々は書いた場合にも意味が判るやうに言葉の言ひ廻し方に氣を附けるやうになるのが自然の成り行きであるから。

◇之等の事は理屈の上から計りでなく事實が明かにそれを證明して居る。世の中に一番熱心な國語整理實行家はローマ字仲間

であつて、どんな立派な口語文を持つて來ても此點では毎月の雜誌ローマ字世界に出る文章には敵ふまい。而も斯く國語整理や漢語排斥に力瘤を入れて居る私自身でさへ、この樣な漢字交り文を書く段になると、諸君の目の當り見られる通り、かなり澤山の漢語を使つて居る有樣である。第一此論文の標題の「考察」や「可能性」からして血祭りに上げねばならぬやうな言葉である。卽これを見ても口語文の發達は、漢字を使つて居る限り如何に困難な事であるかが窺はれる。それは實に日本がローマ字を採用する事に依つて最も確實迅速に成功するものである。因に私自身の經歷が元來軍隊用語の改良を志して、其方面からローマ字仲間にはいつたのである事も此の議論を証明する助けになると思ふ。

三、むすび

◇漢字制限に依り漢字の弊害を救濟せんとする企も、雜駁の漢語を整理して國語の獨立、口語文の發達を計らうと云ふ案も煎じ詰めれば、其根本に橫たはる國字問題を根本的に解決せねば成功の望みが無いと云ふ事は以上永々しく述べた處によつて明かに了解される筈であつて、此議論は縱から見ても橫から見ても理義明白一點の疑ふ餘地も無い。斯かる立派な議論は何も私が今急に考へ出した事でも何でも無い。凡て田中館博士や芳賀博士(今度も亦國語調査會の委員となられた)や田丸博士た疾うの昔から稱へて居られた處で、凡そ今日ローマ字仲間と云ふ仲間は誰でも皆此位の事は心得て居る。

◇勿論私は、以上述べ來つた事に依つて、臨時國語調査會の事業が全く效果が無いと云ひ張るのでは無い。あれだけでもやらないよりはマシであるし又相當の成績を擧げる見込みもあらう。假令僅かな效果でも收獲のある事は遠慮無くドシドシ着手すべきである。唯、高がこの位の仕事で國民が根本的に救はれると思ふ人があつたら大變な間違ひであると云ふ事を述べた迄である。

◇根本的で無い之等の手段は所謂差し當りの間に合せ策に過ぎ無い。言はゞこれは泥濘に足駄をはいたり、足駄に爪革を附けたり、自働車の泥除けを考案する樣なものだ。根本問題はどうしても道路を修繕してアスファルトなり煉瓦なりを敷か無ければ充分な解決が付かないのと同樣、斷然國字を改めローマ字を採用しなければ救濟することは出來無い。

◇併し其根本の道路の完成する迄には相當の暇が費るから、それ迄なりとも泥濘から逃れる工夫を考へついたのは卽泥除けであり爪革であるのだ。これは實によい想ひ着きで、値段が安

て手輕に出來る應急策は遠慮なく採用すべきである。漢字制限も此意味ならば少しも排斥する事は無い。たゞ充分なる効果は擧げられない迄の話である。

◇唯此際吳々も注意す可き事は、日本人に慾が少いと云ふ事である。諦めのよい日本人は足駄や爪革が發明されるとツイ僅か計りの便利さに滿足して、高い税金を拂つて道路を直す事を忘れて仕舞ふ傾がある。間に合はせ物の弊害は特に日本人に對して此點に存する爲め恒も根本策の解決を永引かして居る。初めの約束は道路が出來上る迄のツナギであつた爪革の發明が、ツイ道路其物の完成を遲らせる事は無いか—

◇臨時國語調査會が、凡ての國語國字問題の根本の解決策である處のローマ字問題の完成を少しも遲らせる事無しに、唯それに移る迄のツナギとして之等の問題を調査研究するならば、大賛成であるが、成案を得た結果慾の少い國民をして小成に安んじさせる樣な氣風を馴致したならば其罪や決して輕く無い。—

◇調査會の委員諸君、願はくは此問題を應急策と根本策との二種に劃然たる區別を設けて、應急策が根本策を犯さ無いやうに充分なる思慮を廻らしつゝ國語及國字の調査を進めらん事を。—

翻つて、一般國民諸君特に智識階級の諸君は調査會が三ケ年に亘る應急策の研究を遂げた後更に進んで其根本策に向つて突進せねばならぬ事を銘記して戴き度い。(大正十年七月十二日)

因にローマ字に就いて尙精しい事を知り度い方は東京本郷區駒込曙町十一番地田丸博士方『日本のローマ字社』に御尋ね下さい。

伊太利工場占領騷動及其後

早稻田大學講師　林　癸未夫

一　新社會への一道標

世界の各國及諸民族が彼等の有する現代の文明から搾り出すことの出來た一切の精神的及物質的能力を悉して、漸く其の始末を着けた人類空前の大事件——即ち今次の世界大戰が、之れから先き世界の隅々にまで及ぼして行く其の影響は、過去の如

何なる大事件よりも弘く、深く、且遠いであらうといふことは、何人にも首肯さるべき自明の事ではゐるまいか。譬へばそれは熔鑛爐の如く、數多の不純物と夾雜して或形體に凝り固まつてゐた原料鑛石の中から、一切の不純物を排除し去つて、人間に有用な或種の金屬のみを採收するやうに、從前眞の意味で人類の福利に寄與してゐなかつた諸々の不純な思想が、今回の大事變の爐の中で灼熱され、熔融された結果として、自然に分解淘汰されて、純眞な思想のみが其の光輝を放つやうな時代を導き出すことは出來ないであらうか。少くも吾等は出來ると期待したい。

此大戰の與へた民衆の政治的及經濟的思想の劇變が直接の機緣となつて、玆に人類の歷史に新しい第一頁が開かれないとは誰が斷じ得やう。ロマノフ皇家の鮮血に塗れた殘骸の上に築かれた共產主義者の治世は、それが假令現在の形式と範圍の上で無殘な失敗に了つたとしても、それが文明史上に有すべき極度に重大なる意義を沒却することが誰に出來やう。革命と共に赤化すべくして黃化した獨逸國民の常識的な頭腦の產物たる產業公有條例（ソチアリゼールング）や工場協議會法（ペトリーブスレーテゲゼツ）は、如何にそれが論理の徹底を欲求する急進主義者に一層焦燥の感じを與へたとは云ふもの丶、それが永い歷史を有する獨逸社會主義丶最初に贏ち得た實用的な戰利品であつたことを何人も否定は出來まい。而して其の勝利は自國の戰敗、カイゼルの沒落といふ大戰の歸着なしには決して得られなかつたものである。若し一九一四年七月下旬の危機に際して、獨逸政府の態度が今少しく穩和――グレーの列國大使會議の提案を容れ得る程度にでも――であつたならば、恐らく大戰は實現することなく、一九二一年の今日獨逸の社會民主黨は相變らずカイゼルの不興と軍閥の嫉視の下に空疎な咆哮を以て自ら慰めてゐるに過ぎなかつたのではあるまいか。

一九二〇年三月のカップのクーデターに對する報復手段として用ゐられたゼネラル・ストライキの神速にして決定的なる成功は、確に世界の勞働運動史上の新記錄であり、又トレード・ユニオニズムの一大勝利であつた。之れは歐洲列國の勞働運動者をして驚歎と羨望とから來る異常な感情の昂奮を覺えしむるに十分であつた。模倣は常に勞働者に附纏ふ不思議な心理作用の一つである。同年の五月國有鐵道を標榜して起つた佛國のC・G・Tの無謀なるゼネラル・ストライキは惡戰苦鬪の一ケ月の後に慘憺なる敗北を以て了つた。越えて其の八月露波戰爭の危機に際し、將に英佛兩國が武力を以て波蘭を赤軍の掌中から救ひ出さうと企てた折、英國勞働黨とトレード・ユニオン・コングレスの臨時聯合大會は、赤露に對する開戰を以て人道に對する罪

惡なりと宣言し、若し英國が此罪惡を敢てするならば、之れを抑止すべき吾等の手段は唯ゼネラル・ストライキの一途あるのみであることを滿場一致を以て決議した。そして其の準備として「直接行動實行委員會」は即座に組織せられ、英國の朝野は之れがために震駭した。或新聞は「ソビエット」が終に英國に出現したと絶叫した。勿論之れは天佑とも言ふべき波蘭軍の意外な逆襲の成功に依つて實行の必要を見ずに濟んだけれども、それは同じ年の三月に坑夫の直接行動に依る炭坑國有遂行の提唱を拒否した英國の勞働者が、必ずしも議會主義の忠實な遵奉者でないことを示して餘りあつた。

昨年の七月ゼネヴに開かれた國際坑夫聯盟の總會には、二百五十萬の地下勞働者を代表する十三ケ國の勞働指導者百四十八名が參會して、將來の戰爭を防止する手段として、又各國の炭坑公有を要請する方法として必要な場合には、國際的の坑夫總罷業を敢行すべきことを申合せた。其の翌月コーペンハーゲンに催された金屬職工の國際會議には、約二百二十萬人を代表する十一ケ國の勞働組合幹部が集合して、勞農政府に對する列强政府の攻勢的態度を非難する決議案を通過した。之れと前後してゼネヴに開かれた第二インターナショナルの大會には英獨佛伊露白其他の歐洲諸國に濠洲、新西蘭等をも加へて十六ケ國の社會黨及勞働團體、首領百七十餘名が參集して（就中英國の如きはアダムソン、トーマス、ゴスリング、スノーデン、ウエツブ等の精粹を盡して馳せ加つた）產業公有といふ新社會の組織の根本條件を重ねて高唱したのであつた。

斯くの如き目ざましい事件の連續、畢竟大戰が齎した思想上の熔鑛爐から、恐ろしい勢で噴出する焔であつた。そして此焔は大氣の中に稀釋されつゝ、忽ち各方向に瀰漫して行く。そして到處に刺激の强い色と香とを有つた特種の雰　氣を造つて行く。私が本文に說かうとする伊太利工場占領騷動の如きも、畢竟かういふ雰圍氣の裡に演出されないでは已まない顯著な出來事の一つであつた。そしてそれは其の前後に起つた、且今後も引續き起るであらう所の世界各地に於ける同じ傾向の諸事件と共に、大戰を限界として新しい世界へと急ぎつゝある人類の行程の「道しるべ」となるのである。譬へばそれは纏つた一篇物でなくて、長尺の連續物のホンの一節に過ぎない。それが結局何ういふ大團圓に導かれるかは、唯聰明な敏感な、そして人生の精透な考察者にのみ許される豫想でなくてはならない。

二　事件の背景

伊太利の勞働組合員は戰前約九十萬であつたのが、戰後には

約二百萬、即ち二倍以上に殖えた。其内最大の團體は一般勞働組合會(Confederazione Generale del Lavoro 通常C・G・L・として知らる)で會員約百三十萬。工場占領騒動の中心であつた金屬工業勞働聯合會は其中の有力な一員である。一般勞働聯合會に次ぐ大團體はカトリツク勞働組合と稱せられるもので、政治上に於けるカトリツク黨と提携してゐること、獨逸の基督教勞働組合と中央黨との關係に等しい。會員約二十萬で農業勞働者中に勢力あり、組合運動の右翼を代表してゐる。

右の外伊太利には佛蘭西のブールス・ヅ・トラバイユに似た勞働會所(Camere del Lavoro)といふものがある。一八八九年始めてミランに設けられたのが嚆矢で、職業紹介、失業者救濟、賃金及生活費に關する統計、勞働爭議の調停等を主たる目的とし、政治に關與しないのを主義とした。此勞働會所は一八九四年には全國に十六ケ所、一九〇九年には九十八ケ所に增加し、内三十六ケ所は市町から補助金を下附せられ、二十九ケ所は市町の役所の中に其の事務所を設けることを許されてゐた。其の會員總數は約五十萬であつた。

戰後に於ける歐洲各國に共通の新傾向は社會黨と勞働組合との近接である。英國だけは少し事情が違ふけれども、大陸諸國では從來政治的方面にのみ活動してゐた社會主義者は、議會で實行力のない高等批評に耽るだけで、勞働者目前の雇傭條件の改善には餘り貢獻する所がなかつた爲に、勞働組合から兎角冷眼視される傾きがあつたし、勞働運動者は社會組織の根本的改造といふが如き抽象的な理論よりも、寧ろ賃金時間等の實利問題を運動目標としてゐたので、インテリゲンチヤたる社會主義者から熱心な支持を期待しやうともしなかつた。兩者の間には政策上の協働も無つたし、感情上の緊密も缺けてゐたのである。

然るに本來合致すべくして長く分離してゐた社會黨と勞働組合とを連衡せしめたる、若しくはせしめんとしつゝある主たる動機は、勞働組合の側に就て言へば其の運動目標が向上して產業管理の根本に觸れて來たことであり、社會黨の側に就て言へば其の政權掌握の可能性の增大に伴れ實行力養成の必要を自覺して來たことである。言ひ換へれば社會黨は勞働團體と結び付かなければ政治上の實權を支配することの不可能であることを知り、勞働組合は社會主義者の主張を採納する外に其の新理想を宣傳し具體化する方法のないことを悟つたからである。

右のやうな相互の近接は、多くの場合先づ社會主義者の方から勞働者の方へ進んで働きかけることに依つて促進されつゝる。其の當然の順序として先づ勞働組合中の左翼が社會主義者に内應する。此過渡期に於て組合中の右翼は必ず猛烈に左翼に

攻撃し、さんぐ\内訌を起す。若し左右兩翼の間に比較的の勢力中堅派が出來れば、其の斡旋に依つて辛うじて左右兩翼を制肘し、外形の結束を破らずに行くことが出來るが、若し斯くの如き中堅派が現はれなければ、組合は分裂して保守急進の兩團體を形造る。併し此場合若し組合の有力なる幹部が左傾するならば、團體全部を驅つて左翼に赴かしむることもないではない。又一旦左傾した後に反動が來て再び右傾することも珍らしくない。是等は固より人と勢との問題で一様に律する譯には行かない。

上述の如き戰後の新形勢を伊太利に當てはめて見るならば、社會主義者の煽動は先づ比較的勞働團體としての結束のゆるやかな勞働會所を攫つて之れを震撼した。其の結果勞働會所は保守派と、社會主義派と、最左翼の共産主義派とに分裂して、國内の主たる都市には三派各別の會所が設置せらるゝに至つた。昨年の春ミランに開催された社會黨大會では約十二萬の黨員を代表する代議員が參集して、（一）プロレタリアツトの國際的團結を促進すること、（二）第三インターナショナルと密接なる聯絡を保持すること、（三）既成の軍隊を解散して新に赤衞軍を組織すること、（四）民衆に對する共産主義の宣傳を盛にすることの四箇條を決議して、其の濃厚なる赤化振りを發揮した。此社會黨は伊太利に於ける最大勞働團體たる一般勞働聯合會に關係して、之れを赤化するために全力を擧げたので、勞働聯合會も亦勞働會所と等しく保守、社會主義、過激主義の三派に分れて互に相軋轢し、其の最左翼は社會黨と結んで、露西亞式の革命憲法草案までも作成した。併し大勢は中堅の穩和社會主義者の手に在つて、辛うじて會の分裂を防止してゐた。

伊太利工場占領事件は右の如き背景の前に演ぜられたことを記憶して置かなければならない。

三　事件の顛末

暴風の如く、地震の如く、疫病の如く、伊太利全土を約一ケ月間の騒擾の裡に封じ込めた此事件の顛末を、比較的正確に歴史的に記述する殆ど唯一であらうと思はれる方法は、事件の根幹ともいふべき部分のみを殘して、枝葉を極度に除却することでなくてはならない。

昨年の六月、一般勞働聯合會の一員で、現今伊太利に於て恐らく最も有力な勞働團體として、會員約二十萬を有する伊太利金屬工業勞働聯合會（Federazione Italiana Operai Metallurgici通常F・I・O・Mと略稱せらる）は物價騰貴を理由として賃金六割増の要求を提出した。然るに金屬工業の雇主協會は數次

交渉の上回答甚だ遅延して八月下旬に至り斷然此要求全部を拒絶した。其のため勞働者側は八月二十五日頃から北伊各地の金屬工場で怠業を開始したところ、傭主側は之れに報復するため政府の忠告をも聽かずに工場閉鎖を宣言した。其のため益々勞働者の氣勢を昂め、形勢は頓に惡化して、八月三十日先づミランに於ける勞働者が工場内に占據して自宅に歸らず、技師支配人其他の高級職員を放逐して直接工場の管理を行ふに至つた。此事が忽ち全國に傳へられると、數日を出ない中にチューリン、ゼノア、ベニスを初めとし北伊諸都市に於ける鑄物、機械其他金屬工業に屬する諸工場は大部分其の例に倣ひ、更に南方ローマ、ネープル地方の諸工場も亦相呼應して起ち、遂に全國數十の都市に於ける大小の金屬工場約六百は全く勞働者の掌中に歸したのであつた。而して是等の工場には皆赤旗が飜つてゐた。

勞働者は工場を占領したとは言つても必ずしも亂暴狼籍を振舞つたのではない。それは寧ろ例外であつて、大多數は工場内の秩序を保つに意を用ゐ、故意に設備を破壞したり、器物を盜用したりした者には仲間から制裁を加へ、日常の操業は出來るだけ之れを繼續しやうと試みた。當時組合本部は中央及地方に臨時作業委員會を組織し、生産の監督、原料の供給、糧食の配給、製品の販賣を掌る機關としたが、技師や事務員等は大部分驅逐されてゐたので操業意の如くならず、原料は不足し、金融は杜絶し、取引は斷絶し、機械は故障を來し、作業の全部又は一部を停止したもの固より少くなかつた。

一般勞働聯合會に屬する金屬工業以外の勞働團體は擧つて金屬勞働者に聲援したばかりでなく、化學工業、紡績、護謨等の工場も亦勞働者に占領されるもの續出するに至つた。

斯くの如く工場占領の範圍が次第に擴大されて、底止する所を知らない有樣を呈して來たので、最早問題を金屬工業のみの勞働爭議として取扱ふ譯に行かなくなつたことは誰の目にも觀取された。殊に今春來過激思想の煽揚に努めてゐた共産主義者が、此間に奔走して極力革命的氣分の激成を謀つてゐたことは、彼等と志を一つにしない社會黨からも勞働團體からも危惧を以て迎へられた。そこで意外の大事件とまで發展し來つた此運動を結束する方法として、何時までも經濟運動として一般勞働聯合會の指導の下に置かうとする一派と、寧ろ進んで政治運動として社會黨の支配の下に進まうとする一派との間に意見の扞格を見るに至つたので、此問題を決定するために、九月十日十一日の兩日、一般勞働聯合會を中心として全國勞働團體代表者大會を開催したるに、四十萬票に對する五十九萬票の多數で、濟運動派の勝利に歸した。

當時政府は此大事變に對し、拱手傍觀の態度を取つて、勞働者鎭壓のために絕對に軍隊を使はなかつたのみならず、警察權を行使することさへ成るべく之れを避けたので、保守派の諸政黨や、諸新聞からは激しく攻擊された。併し後日首相ジオリツチの議會に於ける辯明に依ると、當時勞働者は工場を占領したとは言へ必ずしも破壞的の行動に出たのではないからして、强ゐて兵力又は警察力を以て之れを驅逐するならば、却て餓虎を市に放つに等しく、一般の擾亂を甚しくして、公安を危殆に陷れる虞がある。又事實問題として、全國各地方に散在してゐる六百有餘の工場に占據してゐる數十萬人を一々逮捕監禁するが如きは到底不可能であつて、强ゐて之れをやらうとするならば、內亂を誘起するの危險があつた。何となれば占領工場中には軍器製造所も少くなかつたからである。

右の如く政府は姑く形勢を觀望してゐたのであつたが、日を經るに從つて勞働者側も次第に倦んで來た氣合が見え、傭主側でも妥協を望む色が動いて來たので、機會をねらつてゐた政府は始めて此事件に干涉した。九月十八日首相は全國工業家の團體たる一般工業聯合會と一般勞働聯合會との代表者に招待狀を發し、翌十九日の午後內務省內で首相を座長として双方の會合が催された。其時資本家側を代表して出たのは一般工業聯合會會頭コンチ（元老院議員）、同會理事長オリベツチ、其他工業家六名。勞働者側を代表して出たのが一般勞働聯合會理事長ダラゴナ、理事コロムビノ及バルデシ、其他職工三名であつた。

此會合に於て首相は先づ妥協の根本要件として、產業管理上勞働者の參加權を認容すべき政府の提案を陳示し、且賃金問題及勞働者懲戒問題に就き卽日協定せんことを求めた。其の結果終に左記の覺書に勞資双方の代表者が署名するに至つた。

首相ジオリツチ氏に依り司會せられたる本會合に於て、長時間の討論の後双方左記の協定を遂げたり。

一、勞働者側は七月一日に遡つて賃金を增給し、且工場占領期間に對しても賃金の支拂を求めたるも工業主側は之れを拒絕したり。

二、工業主側は損害賠償金の支拂を要求したるも勞働者側は之れを拒絕したり。

三、依つて双方は新賃率（成年男工一日四リレと決す）は七月十五日に遡り之れを支給することに同意す。但工場占領期間に對しては、實際生產せられたる數量に應じ賃金を支拂ふべきも、勞働者の與へたる損害額は之を差引くものとす。

四、工業主の代表者は其の委任せられたる事項中に明示せら

れたる所に從ひ、勞働者復職に關する首相の提案に同意することを得ず。依て本提案は政府により强要せられたるものとして之れを採用し從つて本件に關する全責任は政府之れを負擔すべきものたることを聲明す。

千九百二十年九月十九日　於羅馬

オリベッチ

ダラゴナ

翌二十日勞働者の產業管理に關する政府の宣言が非公式に發表せられた。其の全文左の通りである。

一、一般勞働聯合會は當國の經濟的恢復の必須要件たる生產の増加及勞資關係の改善を遂ぐるの目的を以て、勞働組合を通じて產業を管理するを得せしめんがため、現在の傭主被傭者間の關係を變更するの意あることを確認したり。

一、一般工業聯合會は上記の目的及範圍に於てする產業の管理に反對せず。

一、玆に於て總理大臣は此協定を文書とし且之れがために一委員會を組織すべきことを聲明す。同委員會は一般工業聯合會の指名に係る六名と一般勞働聯合會を代表する六名とを以て組織す。但前者は二名の技術家、後者は二名の事務的被傭者を含むを要す。同委員會は產業の技術上、財政上及行政上の管理に勞働者を參加せしむべき法律案を作成し政府に提出するを以て其の任務とす。同委員會は又占領工場の勞働者任免に關する諸問題を解決すべき方法を案出すべし。

一、占領工場の勞働者は總べて從前の地位に復歸すべし。若し或作業に於て從前の勞働者と監督者とが兩立し難き事情に在る時は工場主の指名する二名と、勞働者の選擧したる二名とを以て一委員會を組織し、取るべき方法を決定すべし。

右の如き妥協案が公表せられると同時に、劇しく之れを攻擊したのは社會黨及勞働團體中の過激分子であつた。彼等は此妥協條件を以て姑息不徹底で全國勞働者の利益を裏切るものであるから、飽く迄も幹部の態度に反抗して、工場占領を繼續すべきであると論じて、必死の宣傳を試みた。彼等の企圖は言ふまでもなく此機を利用して一氣革命の擧に出やうとするのであつた。そこで金屬工業勞働聯合會の幹部は過激派の攻擊から自己の立場を擁護し、一般組合員の向背を決する必要上、九月二十二日同會の全國代議員總會をミランに招集した。其の席上同會理事長ブオッツィは羅馬會議の經過及び協案の意義を詳說して、幹部の方針に承認を求め、共產主義者のフェレロ及ガリノは之れ

を否認する動議を提出し、採決の結果、四萬二千百四十票に對する十四萬八千七百四十票の多數を以て妥協案は可決されたのであつた。

ミラン總會の翌日から徐々に各地で占領工場の引戻を開始した。數箇所で多少の紛擾を見た。ミランのピレルリ工場では、工場占領中選定してゐた事務員と勞働者との間に鬪爭が演ぜられたので、一時軍隊が同工場を警護した。又チューリンの二三の工場では過激主義者の煽動で飽くまでも工場の引渡を拒んだので、兵士四名職工一名の死者を生じた。併し大多數の工場では格別の事故もなく引渡手續を進捗し、十月七日には全國悉く舊態に復した。少數の例外を除くの外、工場內の設備は意外に善く保護せられてあつたので、傭主側は頗る滿足した。

四　首相の辯明

全世界の產業界の耳目を聳動した伊太利の工場占領騷動も右の如くにして一時鎭靜したが、其後數日にして此事件に對する政府の政策は、折柄開會中であつた元老院の論議の題目となつた。前工業大臣であつたダンテ・フェラリスの如きは、工場を占領して事業主の所有權を侵害した勞働者の不法行爲に對して、司法權も警察權も行使しなかつたのは明に政府の怠慢であるとして、劇しく首相及、勞働、司法兩相の曠職を責めた。此攻擊に對する首相ジオリッチの辯明は、本事件前後の事情及政府の態度を明にする爲に好い參考であるから、其の主要な部分を左に揭げやう。

本事件の實狀及政府の態度を過りなく理解して貰ふために、吾輩は少しく過去に遡つて說かなければならぬ。吾人は今や眞の社會改革に當面してゐるのである。此事實を隱さうとしてもそれは無益である。曾て政府と事を共にしたすべての人々は之れが眞實であることを記憶される筈である。

第四階級の運動は第十九世紀の終り頃から始つた。そして之れを防遏するために試みられた企ては甚だ不幸なる結果を惹起したのである。彼等の運動には危險な傾向もあつた。併しながら規律的で抑壓することは出來なかつた。一九〇一年から二年にかけて、ザナルデルリ內閣の下に吾輩が內務大臣であつた當時、勞働者の大運動が行はれた。此運動後吾輩は同盟罷業權を承認すべく餘儀なくされたのであつた。

其當時の都市及村落の勞働賃金は絕對的に不十分であつた。若し同盟罷業權を認めなかつたならば、非常な障害を醸してゐたに相違ない。當時の賃金は一日一リラであつた。そ

して二十五サンチームの增給を要求して多數のストライキの行はれたことを諸君は記憶して居られるであらう。一八七五年に於てすら元老院議員ジヤシニ氏はアグラリアン査問會に關する報告中に、ロムバルヂー洲に於ける勞働賃金が、勞働者の必要缺ぐべからざる需要を充すがために絕對に不足してゐることを明示した。然るに二十年後の當時の賃金はそれよりも尙少額であつた。（喝采）ストライキを行ふべき權利は人間の最も基本的な自由を承認することである。而して其の承認後賃金は三倍以上に增加し、農業は進步した。

今次の大戰は最も主要なる經濟的、社會的、財政的結果を齎した。塹壕は最も有效な宣傳教育であつた。各黨派は實行不可能な多くの約束を與へた。併しながら約束を受けた彼等はそれを權利と認めた。且又眞面目な作業修練の習慣は廢れた。之れは獨り伊太利のみではない。戰時中國家といふ唯一の顧客を有つ種々特別な事業が創設された。而して其の事業主等は國家から受取る代金に依つて其の利得を倍加することが出來た結果として、賃金の增額に應じたのであつた。

戰後に至つて勞働者等は戰爭成金が不謹愼に其の富を見せびらかす悲しむべき光景を睹たのである。（大喝采）玆に於て國民は考へた。戰爭は一度濟んだが、其の效果の總ては忽ち失せるであらう。而して國民生活は再び元通りの道程を進むであらうと。之れは誤りである。

勞資間の單純なる爭議に對する政府の干涉に就てのフエラリス氏の意見には吾輩は贊同することを得ない。斯く如き場合には政府は須く局外中立——注意深き中立の態度を保つべきである。若し政府が干涉するとしたら、それは唯兩者の和解を目的とする場合だけでなくてはならない。若し勞働者が增給請求の度每、政府の干涉を求めて工業家をして之れに應ずべく餘儀なくするならば、產業の經營は不可能となるであらう。吾輩は工業家に警告するに工場閉鎖の斷行を見合はすことを以てした。同時に吾輩は彼等に告ぐるに、軍隊の力に倚賴してはならぬことを以てした。此故に政府は此約束を破らなかつた。批評する者は政府は工場占領を防止すべき筈であつた、然らざれば占領者を驅逐すべき筈であつたといふ。假し政府が之れを實行する時間があつたとしても、工場の占領を防止するためには、六百の工場各々に對して守備隊を置く必要があつたであらう。而して之れがためには一切の武力を政府の思ふ樣に用ゆる必要があつたであらう。然かすると、工場外の勞働者は無監督の儘に放任せられ、公共の安全は等閑に附されたであらう。又工場から勞働者を驅逐するた

めには、戰鬪を行はなければならなかつたであらう。そして其の結果は非常に重大な危機を醸したであらう。其際一般勞働聯合會は此運動は政治的ではなくて經濟的だといふ證言を與へたのであつた。（中略）

今回の如き大規模なる運動に對して普通の法則を適用することは不可能である。勞働者に對して武力を用ゐるといふことは、畢竟彼等を處罰するに死を以てすることを意味したであらう。

玆に於て吾輩は工業家と勞働者との間を調停するを以て自分の義務と考へた。其の結果は諸君の既に知らるゝが如き妥協案の成立であつた。此協定たるや、從來勞働者に許されなかつた工場作業の現狀に對する正確な智識を、彼等に與へ得るが如き方法の下に、産業組織を改造するを以て根本趣旨とするものである。勞働者が作業の現狀を知るに及んで、自分の要求が如何に取扱はるべきかを理解することが出來るであらう。政府の宣言は何物をも豫斷するものではない。勞資の聯立委員會は事業の技術的、財政的及行政的管理に勞働者を參加せしむべき基礎的條件を決定する法律案を自ら作成する任務に當るであらう。（中略）

吾等は確信する。吾國の將來は主として大なる社會問題解決の如何に在ることを。（喝采）

五　聯立委員會

九月十九日の妥協案に依り産業管理實施の新法律案を起草すべき任務を授けられた聯立委員會は、勞資双方から選出した六名宛の委員に組織されて、十月二十一日其の第一回の會合をミランで開いた。此最初の會合の時から勞資双方の意見が一致して、政府から豫期されたやうな一定の成案を得べき見込の甚だ乏しいことが分つてゐた。意見の相違してゐた最も重な點は、勞働者側では管理に與る勞働者は勞働組合員に限るとし、資本家側では組合員たると否とに依つて區別すべきでないとした。前者は各工場に於ける作業の實務にも干渉することを欲するに拘はらず、後者は産業全體に關する報告を與へて之れを批評せしむる程度に止めようとした。前者は管理委員を勞資双方から半數宛出さうとし、後者は勞働組合代表者のみを以て組織しようと主張した。

斯くて數次の會合を重ねたが、妥協は到底出來得べくもなかつた。そこで十一月五日に委員會の仕事を打切つて、勞資双方の代表者は各々自案を政府に提出した。次の二項に示すのが其の全文である。

六　勞働者側の提案

(一)管理すべき産業

勞資共同管理の下に置かるべき産業は左の通りとする。

(イ)鑛山、石坑及一般の地下工業

(ロ)製作、還元、變形、修繕、裝飾、生産品販賣の爲にする仕上及準備に關する諸産業

(ハ)粗製品の精製並に原料の組立或は破壞に關する諸産業

(ニ)電氣其他一般原動力の生産、變形及輸送に關する諸産業

(ホ)總ての建設物又は家屋、鐵道、電車、港灣、船渠、波止場、運河、陸上水路、道路、隧道、橋梁、棧橋、水道、井戶等の建築、改築、補繕、修理、變更、除却、並に是等の作業を爲すに必要なる準備作業

(ヘ)道路、鐵道、水路及海上に於ける旅客及貨物の輸送並に船渠、波止場、一般倉庫及貯藏所に於ける貨物の保管（但本項は人力を以てする作業を除く）

右に列擧する諸事業所は其の組織又は法律上の性質如何を問はず、五十人以上の賃金勞働者を使用して居るものは（特種の事業例へば發電所の如きは十人以上）一切勞働組合に於て管理に參與するの權能を有する。

(二)株式會社

管理さるべき産業を經營する株式會社の重役は從來通りの方法に依つて選定されて可いが、本案に依つて選任される組合の管理委員は常に重役會議に出席して事業の經營、組織、資本の增減、契約の締結、金融、並に諸般の技術的作業に參加すべき勞働組合の權能を行使することを許されなくてはならぬ。

一會社にして一個の重役會の下に數個の事業所を經營して居る場合には、各事業所每に組合の管理委員の代理人を置き、其の業務に參與せしめる。

組合の管理委員は各事業所から必要に應じ如何なる報告をも提出せしめることが出來る。又彼等は重役會に出席して生産の改良及增進、賃金、衞生等の問題に就き提案を爲し又は意見を述ぶることが出來る。

組合の管理委員は三ケ月每に上記の事項に關する自己の報告を組合本部に提出するを要する。同時に是等の報告は會社の重役會にも送達しなければならぬ。但技術上の秘密に關する事項は右の報告に記載してはならぬ。

株式會社以外の有限責任の會社も亦株式會社に準ずる。

組合及個人經營事業も大體會社に準ずるが、唯組合員及個人は事業上の財產と個人的財產とを判然區別して、個人的財

まで組合管理の及ばないやうに用意しなければならぬ。

(三)高等管理委員會

各産業毎に高等管理委員會を設置する。各産業中に編入すべき各事業所の所屬に就ては、當該事業所従業者の多數を會員としてゐる組合と其の傭主との協議に依つて決定する。

高等管理委員會は毎年一回各事業所の組合管理委員の一般投票に依つて選ばれる組合代表を以て組織する。各産業の高等管理委員會は財政、生産其他必要なる總ての報告を交換して相互の參考に供するの義務がある。

一産業の従業者が數箇の組合に分屬する場合には、各組合毎に候補者を立て、組合員の多寡に比例して其の管理委員を選出することを得せしめる。

高等管理委員會は産業一切を管理し且つ左の諸事項を決定するに必要な資料を需むることが出來る。

(イ)別個の事業所に於ける同一物の生産費

(ロ)別個の事業所に於ける經營方法並に生産量に比例する一般經費

(ハ)生産費増加の原因を調査するに必要なる作業の方法又は使用中の機械

(ニ)賃金及其の差別

(ホ)資本の構成、分割、變形及所有權の讓渡

(ヘ)國內消費高及海外輸出高と全國各産業の總生産高との關係

本法律案制定後二ケ年間に新に事業所を建設せんとする者は豫め當該高等管理委員會に其旨通告することを要する。同委員會は之れを必要と認むるか否かを判斷して、遲滯なく其の意見を企業者に回答する。

高等管理委員會は毎年一回左記三ケ所に對し報告書を提出しなければならぬ。

一　本委員に依り代表さるゝ勞働組合

二　高等勞働協議會(註)

三　商工大臣

此報告書に記載さるべき事項は左の通りである。

(イ)株式會社の資本構成、經濟上及事業上の成績、發達及障碍

(ロ)伊太利に於ける産業上の進歩、現在の狀況、將來の發展、資本主義を改造して勞資共同管理制度を採用することの能否、事業所買收及勞資共同經營の方法

(ハ)作業及經營上の過誤缺點

(ニ)現行賃金制度並に其の改正の能否

(ホ)生産費に關する統計並に自國市場と外國市場との生産狀況の比較

(三)輸入原料に關する統計並に內國品代用の能否

傭主及傭主の團體は高等管理委員會の會議に其の代表者を列席せしむることを許されるけれども、討論に加はらず又其議權を與へられない。唯議事を傍聽するだけである。但管理委員會から提出すべき前記の報告書には產業上の利益を害するが如き機密事項を掲載しないやうに要求することを許される。

高等勞働協議會員も亦傭主と同樣の條件を以て高等管理委員會に出席することが出來る。

（註）高等勞働協議會は伊語にて（Consiglio Superiore del Lavoro）と稱せられるもので、一九〇二年の創設に係り、勞働大臣を議長とし、議員、官吏、實業家、勞働者等四十三名を議員とし、社會政策及勞働問題の根本方針に關する政府の諮詢機關である。

(四)被傭者の任免

肉體的勞働に當る者と、技術的若くは事務的作業に從事する者とを問はず、總て被傭者を雇入れるには專ら勞働團體に依り經營せらる勞働會所からでなければならぬ。若し會所のない地方に在つては、勞資双方の共同經營に係る職業紹介所を經なければならぬ。此二つとも無い場合に於ては工場主は被傭者代表者と相談の上直接何方からなりとも雇入れて差支ない。各工場は就職を希望する者の爲に登錄簿を具へて希望者の職務上の技能其他必要な事項を登載して置く。若し缺員があつた場合には其の職務の種類に應じて登錄順に採用して行く。其の選擇は全く作業本位で、政治上の意見や所屬勞働組合の如何等に依つて左右してはならぬ。被傭者の代表者は每週一回定つた日に登錄簿を檢閲し、就職希望者採否に就き不審を質すことを許される。

被傭者の仕事の成績が質か量かに於て不滿足であつた場合には、先づ其の作業時間を一週十二時間だけ減ずることが出來る。それでも尙不滿足であれば、被傭者代表者と協議の上で其者の職務の許す限り他部へ轉勤せしめる。轉勤せしむる場所がない時は解傭する外はないが、工場主は其の職工を解傭する迄に取つた戒飭の方法を記載すべき特別の帳簿を備へて每週一回被傭者代表者に提示しなければならぬ。之に對し被傭者代表者に異論があつて工場主との間に折合のつかぬ場合には、双方所屬團體の本部に申告する。但竊盜、詐欺の如き刑法上の罪を犯した者に對しては右の手續は適用しない。

(五)工場委員

前項に謂ふ所の被傭者の代表者とは工場委員のことである。

工場委員は被傭者の三種類卽ち肉體的、技術的及事務的作業に

當る者各々の集團を代表する者を全部包括したものであつても。或は別々のものであつても差支ない。工場主は是等の委員のために事務室を提供するの義務がある。委員の一名又は數名は交代で、作業時間中一時間或は數時間此事務室に出張して、被傭者から不平の訴を聽き或は必要な通知を發することが出來る。但其の委員の姓名、事務室出張の時日は毎週工場主に豫告することを要する。當番以外の委員は特別重要事項のため招集される場合の外は工場内の常務に服してゐなければならぬ。委員と工場主との交渉は毎週一回作業時間中に行はれるを原則とする。そして上記の事務室出張時間及右の交渉時間に對しては工場主から委員へ普通の賃金を支拂ふ義務がある。

委員の數は被傭者百人未滿に對し三名、百人以上五百人未滿に對し五名、五百人以上千人未滿に對し七名、千人以上に對し九名と定め、選任の方法は各勞働組合の規定に任せる。

七　傭主側の提案

(一)管理委員會の組織及任務

各産業毎に設けられたる管理委員會は傭主被傭者双方の團體から選出される同數の代表者に依つて組織する。若し産業の將來が勞資以外社會全體の利害に係る場合には、社會一般を代表する者即ち國家も亦管理委員會に參與すべきである。

管理委員會の主たる任務は、あらゆる手段を盡して勞資の關係を圓滑ならしめ、國民生活の本源たる産業の發達に貢獻し、併せて各種の産業に從事する勞働階級全體の生活を改善することである。此目的を達する爲に管理委員會の爲すべき仕事を列擧すると左の通りである。

(イ)生活費との關係に省み、賃金、時間、並に一般勞働條件を協定及監督すること
(ロ)勞働者の保健狀態を改善すること
(ハ)原料の供給に關する統計及報告を蒐集すること
(ニ)當該産業に關する經濟及財政的諸問題の研究に從事すること
(ホ)作業方法の改良を目的とする産業上の發達及科學的の調査を奬勵すること
(ヘ)産業の進歩及生産の發達に關する統計
(ト)社會保險、災害、疾病、老衰、失業に關する法令並に將來制定さるべき類似の法令を施行すること
(チ)職業教育の組織に關し相當官公署と協働すること
(リ)共同の利害に關する諸問題の解決に就き他の産業の管理委員會と協働すること

全國的に組織さるゝ上記の管理委員會の外に、各産業毎に地方的の管理委員會を設け、全國的の委員會と同様の方法を以て組織する。其の任務は全國的委員會に對し迅速に諸般の報告を爲して其の活動を補佐すると同時に、全國的委員會から與へられた權限内に於て、地方的の管理事務に從事するのである。

各種の産業に共通の問題を考慮する爲に、産業總協議會を設置し其の組織は各管理委員會と同様とする。

産業管理に關する法律は發布後六ケ月にして實施することにしたい。而して相當期間を經過した後に、其の實施の結果に鑑み必要なる修正を施すことにしたい。尤も本法實施後新設された事業は三ケ年間本法の適用を免除する。又被傭者七十五人に滿たない小工場は一切本法の適用外に置く。

（ニ）工場委員會

目下既に若干地方の事業所に於て實施せられつゝある工場委員會制度は、必要に應じて全産業に適用することにしても可い。

工場委員會の任務は工場主と協働して當該事業所被傭者全體に關する諸問題を考慮し、且産業管理に關する規定の解釋又は適用に就ての個々の要求を處理するを主とし尚ほ左記の事項に參與する。

（イ）勞働者幸福増進に關する一切の問題
（ロ）徒弟の雇傭條件
（ハ）産業に關する技術上及社會的智識の普及を目的とする講演
（ニ）當該工場に於ける作業方法及組織の改良に關する提案
（ホ）當該工場に於ける勞働能率の低下及勞働供給の障礙を爲せる事情
（ヘ）賃金支拂方法
（ト）作業時間、休憩時間の割振
（チ）一般休暇に關する提案

工場委員の數は被傭者百人未滿の工場では三名、百人以上五百人未滿の工場では五名、五百人以上千人未滿の工場では七名、千人以上の工場では九名とす。（此點勞働者側提案に同じ）選擧の方法は規定を以て定める。

工場委員の任務の遂行及會合は作業時間外に於てする。但工場主から協議のために作業時間中に招集された時は普通の賃金を給せられる。

（三）被傭者の雇入

被傭者の雇入は原則として、各産業毎に各地方に設けられる勞資共同の職業紹介所を經由する。共同職業紹介所は當該産業に關係ある傭主團體と勞働團體とから選任される双方同數の一

委員會の支配の下に置かれる。此委員の任期は二ケ年とし、双方委員間に意見の衝突があつた時は第三者たる中立の調停者の判斷に任せる。

共同職業紹介所の作業は左の通りとする。

(イ)一九一八年十月十九日の命令第二二一四號に該當する失業者は其の要求に依り求職者として登錄する。

(ロ)右の登錄は當該紹介所の管理區域内の工場に於て失業した者と、他の地方に於て失業した者にして當該地方内に新に職を求めんとする者とを區別して置き、就職口が有つた際には前者に對し優先權を與へる。

(ハ)傭主は必要な職工を必ず紹介所に登錄された者の中から採用する。但不熟練工と休暇滿期のため復職する者とは例外とする。

(ニ)被雇人の職工は組合員たると否とを問はず、其の專門に應じ分類されたる登錄者中から傭主の適當と思ふ者を選拔する。但其の職工は專門の作業に相當するだけの能力と熟練とを有することを保證されてゐなければならぬ。若し其の者の技能が足りない場合には、傭主は自由に之れを罷めて紹介所からでも新に適任者を補充する權利を保留する。此場合若し傭主が紹介所以外から職工を補充した時は直に此旨を紹介所に通知する。

(ホ)紹介所は補助的勞働者又は特種の專門家の雇傭には關係しない。

(ヘ)紹介所は現に同盟罷業若くは工場閉鎖中なる事業所の勞働者に就職口を與へたり、又は同盟罷業や工場閉鎖に原因して失業するに至つた者を登錄若くは周旋してはならぬ。

(ト)以上二項に該當する者の外紹介所は如何なる職工の申込をも拒絕してはならぬ。

(チ)紹介料は無料とす。

(リ)事業所又は勞働者にして(ニ)の條に述べた採用方法に例外を設けたいと希望する場合には之れを紹介所委員會に提案して裁決を求める。

(ヌ)事業所は一旦解雇した勞働者の再雇入を拒む權利を有する。此場合事業所は解雇又は再雇入拒絕の理由を立證するの義務は有たない。

(ル)共同職業紹介所の内部の事務は各所一律の規定に據つて處理される。

(四)被傭者の解雇

工場主が事業の一部を縮少して職工の過剩を生じた場合には、職工を解雇するに先ち事業の狀態及性質の許す限り、一時

就業時間の短縮を行ふ。まだそれでも職工が過剰であれば出來るだけ他部に轉勤せしむる。轉勤と同時に職工の收入が少くなつてもそれは已むを得ないが、又前の地位に復した時には給料も以前の通りに支拂ふ。すべて時間短縮及轉勤に關する是等の規定の實施に就ては工場委員は工場主の協議に與ることが出來る。又別の規定に依つて勞働者及傭主は解雇の豫告又は之れに伴ふ損害賠償に關する條項を省いた雇傭契約を取消すべき權利を與へられる。若し勞働者が懲戒的の理由に依つて解雇される場合には、右の豫告及損害賠償に關する權利を失ふけれども、工場委員は之れに干渉することが出來る。工場委員と工場主との間に意見の一致を見なかつた時には、双方の團體代表者間の談判に任される。

八　政府の提案

右に掲げた勞資双方の提案は、何れも政府を滿足させなかつた。そこで首相は自ら一箇の案を作つて、本年一月二十二日先づ之れを高等產業協議會に諮問した。其の案は左の通りである。最も注意すべき點は本案が勞働者をして事業の經營共者に直接參加することを許してゐないことである。

（一）產業管理の目的

政府が勞働者をして產業の管理に參與せしめやうとする目的は別つて五つとする。即ち(イ)勞働者をして作業上の諸般の狀態に通曉せしむるため、(ロ)勞働者自身の技術、智識並に經濟狀態を改善するため、(ハ)勞働者保護の目的を以て制定された諸法規の實行を確めるため、(ニ)生產の增加及生產費の低減を目的として作業方法に改良を施すため、(ホ)傭主被傭者間の圓滿なる關係を促進するため。

（二）管理すべき產業

管理は各種の產業に就き別々に之れを行ふ。殊に左記の工業に就ては是非之れを實施する。但政府の經營に依るものと、被傭者六十人以下にして設立後四ケ年に滿たない事業所とは總て除外される。

鐵及金屬、紡織、化學、電氣、陸上運輸、航海、建築、釀造、鑛山及石切、旅館及之れに類似する事業。

（三）管理委員會

管理委員會は九名の委員より成り、內六名は成年以上の普通勞働者より、三名は技師及机上事務員等より選擧する。當該事業所に組合員を有する勞働組合は委員候補者を擧げることが出來る。委員選擧の方法及手續に關する細目は高等勞働協議會の議を經て之れを定める。委員の任期は三ケ年とす。但再選を

げない。

管理委員會は管理の目的を實行し且必要なる報告を徴するため、株式會社たると個人經營の事業たるとを問はず、各事業所毎に二名以上の代議員を置く。此代議員は當該事業所に勤務せる成年以上の勞働者が、三ケ年以上其處に勤續せる者の中から之れを選擧する。此代議員の任期は管理委員と同一とし、再選を妨げない。

管理委員會は代議員を經て各事業所から次の報告を提出せしむることが出來る。(イ)原料購入の方法及價格、(ロ)生産費、(ハ)經營方法、(ニ)作業方法(但機密事項を除く)、(ホ)賃金、(ヘ)資金の構成、(ト)利益、(チ)勞働者保護法規及勞働者の雇入又は解雇に關する規定施行の狀況

(四)會議

各産業の傭主團體は其の代表者二名以下を當然管理委員會の會議に列席せしむることが出來る。高等勞働協議會の代表者一名も亦然り。是等の代表者は其の意見を述べ又其の意見を議事錄に登載すべきことを要求することを許されるけれども、決議に加はることは出來ない。又彼等は事業上の利益を損ふやうな議事を公表したり或はそれを議事錄に登載したりすることを拒むことが出來る。

(五)傭主代表者

各産業の傭主は産業管理に關する法規を實施し、管理委員會と折衝し、各傭主共同の事務を管理せしむる目的を以て、九名の代表者を選任する。而して管理委員中の二名は傭主代表者會に出席して其の意見を述べることが出來るけれども、決議には加はれない。

(六)聯合會議

必要のある度毎(年少くも一回以上)勞資雙方の代表者の聯合會議を開き、高等勞働協議會員を議長として、産業の經營生産の發達改良に關する方法並に管理の實施に原因する爭議の解決に就き協議せしめる。

(七) 勞働者の雇入及解雇

勞働者の雇入及解雇に關する特別の規定は、政府が傭主團體代表者、管理委員會及高等勞働協議會と協議の上之れを定める。但次に示すやうな方針に則ることを要する。

傭主代表者と管理委員會との共同經營に係る職業紹介所を各地に設け、特別な資格を要する者の外、一切の勞働者は此紹介所を經て雇入れる。採用は登錄の順序に依るを原則とするが、事業所所在地に住つてゐる者及以前當該事業所に働いてゐた除隊軍人には優先權を與へる。又採用に當つて勞働者の政治的色彩

の如何や、組合員であると否とに依つて何等の差別をも設くることを許さない。紹介所登錄の求職者中に候補者を見出し難いやうな特別な任務に對しては、傭主は他の何處からでも適任者を雇入れることが出來る。又傭主は重大な刑事被告人であつた者或は自分の工場から曾て懲戒解雇されたる者の採用を拒むことが出來る。若し雇入問題に就き傭主と管理委員との間に意見の衝突があつた時は、双方から選任した一名宛の調停委員と、中立の委員長とに依つて最後の判定を與へる。

勞働者は政治上の理由又は組合員たると否とに原因して解雇されないことを保證される。事業狀態の變化に依り勞働力に過剩を來した時には、勞働者を解雇する前に先づ一週三十六時間迄勞働時間を短縮し、それでも不十分な時は交代數（シフト）を減ずるのを以て傭主當然の義務とする。これでも尙且勞働者が過剩である場合には解雇しても差支ないが、永年勤續者及家族扶養者は後廻しにする。解雇に關し紛議を生じた場合は前述の調停委員に依つて決定する。

（八）補遺

同一の産業でも地方に依つて夥しく異つた方法に依つて經營されて居るものがある場合には、同一産業中に二箇以上の管理委員會を設けることが出來る。此場合には傭主代表者數も亦之れに應じて增員される。

管理委員會に要する費用は勞資折半にて負擔するが、之れに就ての細目は勞資双方代表者及高等勞働協議會の相談に依つて定める。

九　政府案に對する傭主側の反對

前に述べた通り政府案は首相の私案として、一月二十二日先づ傭主團體たる高等産業協議會に揭示して、其の意見を諮詢せられた。同會は政府案中第一の産業管理の目的に對しては異議はなかつたが、第二の管理すべき産業中に「旅館及之れに類似する事業」を加へるとに反對した。次に傭主等は勞働者の管理は各産業毎に其の全體に對し行はるべきであつて、個々の工場に對し管理を及ぼさうとする政府案は、作業上に悪影響あるものとして反對した。殊に各工場には既に工場委員なるものが在るに拘はらず、更に管理委員の補助者たる代議員を置くのは無用な重複である。又代議員から管理委員への報告事項中、原料購入の方法及價格、經營及生産の方法、資金の構成等の如きは工業經營上重要な機密に屬するもので、到底之れに應じ難いとて異論を唱へた。

傭主等は又職工任免方法に對し劇しく反對した。彼等は職業

紹介所の求職者を申込の月日順に採用する主義に反對し、且求職者が重い刑事被告人であつたか、或は自家の工場で以前懲戒解雇した者でない限りは、何人に限らず採用しなければならないやうな方法を不可とし、候補者の勤惰、技倆、性質等をも採否の條件として認めらるべきであると主張した。

次に一般工業家協會は一月三十日羅馬に會合を催し、政府の提案を審議した後、満場一致政府案反對の決議をした。其決議文を見ると、先づ戰後に於ける伊太利產業界の危機を濟ふの途は、商工業者に出來るだけ自由手腕を發揮せしむることが最も肝要であること、一般勞働組合及社會主義者の運動が益々革命的に趨きつゝある傾向等を切言した後に斯う結論してゐる。「此故に吾人は聲明する。產業の經營に勞働者を參加せしむべきことを傭主に强要する政府の提案は、產業經營の實際狀態を何等考慮せざるものである。若し該案が實行せられたとしたら、其の結果は勞資の協調ではなくて、却て兩者近接の有らゆる可能性を排除し、勞働者をして益々跋扈跳梁せしめ、產業の恢復に新たなる障碍を設ける外何物もないであらう。」

右の工業家協會の決議は政府案の內容を實質以上に重大視してゐるやうに考へられる。

十　高等勞働協議會常任委員會の討論

首相は政府案を高等產業協議會に諮詢した後、一月二十四日改めて之を閣議に附して閣僚の贊成を得、更に一月二十八日之れを高等勞働協議會の常任委員會に掲示して其意見を徴した。先づ最初勞資双方の意見の相違を調和するために種々なる論議が戰された。技術家たるタルゲツチは傭主側を代表して政府案反對の廣長舌を振つた。上院議員のベルガマスコは賣買取引に關しては各工場主に十分なる自由裁量を留保するといふ條件の下に本案を支持した。同じく上院議員にして本會の議長たるサルヂニは產業管理は各工場の操業に就ては傭主の裁斷の自由を妨げても又制限してもならないと主張した。議會で社會黨の左翼を代表するツラチも亦各事業所の操業は全く工場主の自由に放任さるべきであるといふ趣旨に贊成した。

かくて會議十回の後、同委員中の勞資双方の代表者の意見は勞働者任免方法以外の重要な事項に就ては概ね一致した。傭主等は職業紹介所に登錄されてゐる求職者中から自分の欲する職工を自由に選擇するの權利には何等の制限も設けられてはならないと主張した。勞働者側は此點に於ては原案の趣旨を支持した。

現存の工場委員會に就ては政府案は何等言及する所がなかつたが、此高等勞働協議會の常任委員會では、工場委員は操業には容喙しない。工場委員は管理委員を選擧する。彼等は又爭議和解の任に當るべきものであるといふ解釋が下された。

次に本會は新に産業協議會を設置せよといふ提案を可決した。同會は管理委員及之れと同數の傭主代表者の外、高等勞働協議會員、商業會議所員、産業組合聯合會中央委員等から編成せられ、管理委員會の報告及提案を考査及討議し、且工場監督官を經て審議上必要なる諸般の報告を徴する權能を與へられる。

右は本會に於ける論議の要點であるが、本會長たるサルヂニ氏は之れを政府に報告するに當つて、斯くの如き大問題は啻に常任委員に對してばかりでなく、高等勞働協議會の總會に對し諮問せらるべきであるといふ委員一般の要求を附言した。首相は此要求を容れて二月の末に更に高等勞働協議會を召集して本案を審議せしめた。

十一　政府案と世論

一月下旬政府案が公表せらると、諸新聞は鋭く犀利な論評を以て之れを迎へた。政府の機關新聞だけは、昨年九月の工場占領騷動を鎭靜するために取つた政府の方針は、伊太利現下の政治的及社會的狀態に適合するものであつて、本案に依つて其方針が漸く具體化し來つたことを祝福する意味の論説を掲げたが、其他の諸新聞の論調は概して政府に不利であつた。保守派の諸新聞は政府の提案を以て自國の工業を危機に陷れるものであるとし、急進派の諸新聞は、本案の姑息不徹底にして社會主義者の要求と相距る甚だ遠いことを指摘した。二三の例を擧げると、ミランの『コリエレ・デラ・セラ』は政府案を以て危險に充ち、紛爭を繁くし、結局勞働組合の勢力を不當に增進するに過ぎないと結論した。同市の商業會議所の機關新聞たる『ソーレ』は、政府は先づ本案の主義を國際勞働會議に提出して列國一齊に之れを採用することを主張すべきである。然らずして若し伊太利のみ單獨に斯の如き方法を實施するとしたならば、我邦の經濟は、忽ち萎靡沈衰するであらう。何となれば從來我邦の工業に投下されてゐた外國の資本は囘收せられるであらうし、我邦の資本家も危險な自國よりも寧ろ安全な外國の事業に投資するを好むであらう。而して最も有能な技師や配人は自己の手腕に對しヨリ大なる報酬を拂つてくれるやうな事業所を求めて自國を去るであらうと論じた。羅馬の『エコノミスタ・ド・イタリヤ』は勞働者の工場管理は如何なる方法で其の權能を制限しやうとしても「結局それは社會主義者――もつと惡く言へ

ば共產主義者の勢力を擴大し、其の普及を妨げる譯には行かないであらう。」と論じ、斯くの如き重大案件は決して輕率に實施されてはならぬ。宜しく最も愼重なる考慮討究を經べきであると警告した。『イデア・ナチョナーレ』は最も猛烈に政府を攻撃し、政府は「各產業を片手落ちなる勞働者管理の下に置き、各工場に配置さるゝ代議員を通じて各傭主の行動を制肘し工場主を被傭者の奴隷とし、戰後の恢復事業に鋭意してゐる各工業家の意志及努力を抛擲せしめ」以て伊太利產業の破滅を企圖しつゝあるものであると痛罵した。

次に一般勞働聯合會のセクレタリーたるバルデシは社會黨機關新聞たる『ラパンチ』紙上で斯く論じた。

「產業管理に關する政府案は、一切の妥協案がさうであるやうに何人にも滿足を與へなかつた。畢竟それは目的を逐ひながら結果を懼れ、希望と實行との間に彷徨し、其の方向を定めながら其方へ踏み出す第一歩を躊躇するがために外ならない。本案は、從來の權能の幾分を削がれ、其の利益を損はれることを虞れて、低級な改革にすら何時も反對する資本家側の怒を買つたと同時に、一方では、勞働組合の產業管理を以て、多年政治經濟學の樞軸であつた現存の生產組織を根本的に改造すること（それは獨り勞働階級のみならず、全社會の福利を增進する所の）を待望してゐる勞働者側の非難をも惹起した。……政府の提案したやうな方法では生產を助長せずに却て之れを萎縮せしめるであらう。併し勞働組合の產業管理は、一度問題となつた以上到底此儘には濟まされない。其の解決は我國の發展上決定的なる一廻轉期を作すであらう。」

一般勞働聯合會に次ぐ大勞働團體で、穩和な主義を保持してゐるカトリツク勞働組合の機關新聞たる『コリエレ・ド・イタリヤ』は次のやうに論じた。

「現狀及行懸りの上から考へて、何等かの形に於て政府の主張するが如き產業管理の方法を實施することは、明かに避くべからざることである。併しながら其のために產業の進步を阻害したり、又各事業所經營上の必要條件たる經營者の自由裁量を危殆ならしめるやうなことがあつてはならない。此故に勞働者管理の範圍は、產業發達上の精確なる諸條件を決定し、且傭主が法外なる利益を獲得して消費者の利益を害し、一般被傭者の利益を掠奪するやうなことを妨げるに必要な、十分の調査資料を提出せしめることだけに制限されなくてはならない。政府の干渉も亦此目的の達成に對してのみ許さるべきである。……斯くの如き制限の下に於てのみ產業管理は有益であるが、若し此制限を超過するならば、それは自國を荒

ふべからざる災危に陷れる危險がある。

十二　末了の問題

私は伊太利に取つて容易ならざる此問題を末了の儘にして筆を擱かなくてはならない。以上の記述に依つても政府の提案が何れの方面にも評判が惡くて、實行の可能性に乏しいことが窺はれるが、其後熱心な提案者たりしジオリツチが首相を罷めた爲に、此案は一層影が薄くなつたと想像せられる。併し此案が實施されないからと言つて、此事件の有する重要な意味が決して減殺されるのではない。經濟組織の根本的改造を要求する勞働者と、時世の進運に順應して社會公共の福利を念とする政治家と、其の間に介在し產業經營の實力を擁護しやうとする工業家との角逐が、結局如何に進展し、何處に落着くであらうかを知らんと欲する者は、此事件の顚末から多くの暗示を得べきであると私は信ずる。（完）

日本の勞働運動は如何に發展するか

法學博士　堀江歸一

時代後れの勞働問題觀

私共が始めて我國の勞働運動なり、勞働問題なりに注意し出した時卽ち明治二十年代若しくは三十年代の上半に於ては、勞働運動其ものは勿論之に對する國民又は官憲の態度なり、勞働問題を解決する根本の思想なりは甚だ幼稚なものであつた。勞働運動と云つても、多くは勞働者の一時の出來心に出たものであつて、決して規律ある團體的運動の如きは、之を見るを得なかつた。又勞働問題と云つた所で、當時は工場法制定の可否と云ふことが時論の中心であつて、然も同法の制定を尙早とする議論が朝野到る所に蔓延して居り、而して是等の尙早論者は溫情主義とか、主從關係論とか云ふやうなものを楯にして、我國勞資

關係の特色であるとし、或は勞働の費用は成る可く之を低廉にして、我國工業の優勢を維持しなければならぬとし、殊更に我國の勞働問題に對する知見を時代後れのものにすることに努力して、怠らなかつたのである。

然し我國の勞働問題に時代後れの思想なり、態度なりの付き纏うことは敢て當時に始まつたことでなく、今日に於ても亦其然るを認めるのである。何故私が斯る言を爲すかと云へば、我國に於ては兎に角勞働者自身の發意に依つて、勞働團體が幾多の仕事に關聯し、又多くの場所を本據として、成立して居るのである。然るに我國政府は之に對して、何等法制上の地位を與へず、随つて事業主の方でも、勞働團體を公認しようとしない、啻に之を公認しないばかりでなく、動もすれば、事業主の勢力を勞働組合に加へて、之を壓倒しようとするのである。既に勞働組合が成立したからには、組合は鬪爭的職分を發揮して、勞働條件の改善を期しなければならず、鬪爭的職分を行はうとする以上は、勞働者の罷業權も亦當然承認されなければならぬ譯であるのに、治安警察法第十七條は依然として勞働運動を壓迫する用に供されて居る。若しも賢明なる政府あつて、此條文を廢止するのは勿論、更に勞働組合法を制定して、組合を公認するに至つたならば、我國の勞働運動は自ら其面目を一新するに至るであらう。我國の勞働者が國家から何等法制上の保護を受けず、却つて其壓迫を蒙りながら、之に堪へて、今日のような團體を組織し、勞働運動に從つて居ることは、誠に偉大なる素質とするに足りるであらう。大正八年十月第一回國際勞働會議に派遣され可き勞働代表委員の詮衡に就て、政府の所爲に抗議を試みる爲め、友愛會主催の演説會の催はされた際、私は同會に出演して「勞働者は是が非でも團結を作り、又之を鞏固にすることに心掛けねばならぬ。勞働組合さへ、鞏固に爲り、有力に爲れば、如何に頑冥なる政府も、又如何に勞働問題に無理解なる政府も遂に勞働組合を公認しなければならぬ狀勢と爲るであらう」と云ふことを述べた。而して近來我國勞働界に現出しつゝある種々の事例に徴すると、私の曩に豫想した所は正に事實に的中するの觀があるのである。

勞動者の自治的行動

固より我國に於ては現行法制の下に、勞働組合は公認されて居らない、勞働組合の鬪爭的職分に對しては、嚴重なる法律の制裁が加へられる、内務省は所謂縱斷的組合を認めて、所謂横斷的組合を禁じようとする、而して動もすれば官僚の支配下に居る勞働委員會制度を以つて、勞働組合に代らせようとするので

ある。斯る頑冥なる政府に對抗して、勞働組合が働くのは、甚だ困難であるとしなければならぬ。然るに事實に於て、勞働組合は組織され、而して相當の發達を遂げた。其發達する間に、如何なる職務をしたかと云へば、爭議の起つた場合に、勞働者の後援と爲つて、其解決を有利にし、愈々爭議が紛糾して、同盟罷業と爲つた場合には、罷業者に對して、精神上並に物質上の援助を與へ、更に進んでは勞働組合其ものが一ツの勢力と爲つて、事業主をして容易に組合の要求を容れて、勞働條件の改善に資したこと等は勞働組合が我國勞働運動に致した功績の最も著しいものであり、而して其永久的功績としては、勞働組合が起つたればこそ、勞働者に對して、如何に各自の團結が有力なるものであるか、團結の内部に於て、互に調和を保つことが如何に必要であるかと云ふことの實物教訓を與へた諸事實を擧げなければならぬ。

斯の如く我國に於て、勞働組合が法律の保護を蒙らず、寧ろ其壓迫に對抗しつつ、一ツの組織と爲り、或は横斷的に、或は縱斷的に勢力を張つて來た以上は、一個の勞働者としてでなく、一團の勞働組合として事業主に要求する所のものある可きは、當然であつて、而して其要求が近頃に爲つて、勞働組合の團體交渉權と云ふ形で現はれ來り、次第に事業主に依つて、承認される狀勢と爲つて居るのである。元來不景氣時代に於ては、勞働運動は必ず銷沈するであらうと云ふことが我國に於て、一般に考へられて居つた。現に内務省が勞働問題を解決する一端として、勞働組合法を制定することを必要であるとし、草案まで編成したに拘はらず、遂に有耶無耶の態度を取るように爲つたのも、要するに不景氣時代には勞働運動は沈衰するものと考へて、之を見縊つた結果に外ならぬ。成る程不景氣時代には、勞働者の腰は弱いかも知れぬ、氣息も亦強くないようである。然し不景氣時代だからと云つて、事業主が遠慮會釋なく、勞働者を解傭したり、又減給したりしたならば、其れこそ勞働者の生活は忽にして脅かされ、非常な危險に遭遇する、勞働者が斯る危險に遭遇して、之に忍從して居るのには、時代は餘りに懸け離れて來た、此種の危險に對抗して、勞働者が團體交渉權なるものを案出し、之に據つて、勞働者階級の利益を保護しようとするに至つたのは、事の自然を得たものと許さゞるを得ない。

團體的取引の意義

外國の勞働組合では、所謂團體的取引（Collective Bargaining）なるものを以つて、其職分を果す上に於て、最も重

要素とする。ウエッブ氏は「産業上の民主々義」に於て、團體的取引の何ものであるかを説明して居る。其言に曰く

勞働組合の組織されない場合には、一個の勞働者は仕事を求める際、事業主の提示した條件に服從するか、又は之を拒否するかに就て、他の勞働者と協議をしない、又自分一個の必要より外に、何ものをも考へない、勞働を賣却するに就て、勞働者は事業主と嚴格なる個人的取引を爲すに過ぎない。然るに勞働者の一團が互に商議を凝し、全團體の爲めに、取引を行ふ可き代表員を事業主に送遣する事としたならば、全體の狀況は一變する。事業主は孤立した個人と個別的に契約を締結するのでなく、團體的意思を相手とし、單一の約定で、或る期間を通じて、或る特殊の團體なり、特殊の階級なりに屬する總ての勞働者の雇傭される原則を決定するのである。

團體的取引の性質にして、右の如きものであるとすれば、此方便こそ誠に勞働組合の要義を完成し、又其效果を發揚する最良の武器であるとしなければならぬ。卽ち個人的取引の下に於ては、事業主が一個又は少數の勞働者の生活に窮乏を訴へ、如何に不利なる條件を忍んでも、或る仕事に就かうとする弱味に乘じたならば、忽にして勞働條件は不良のものと爲る。而して一個又は少數の勞働者に對して、勞働條件が不良と爲れば、事業主は必ず之を楯に取つて、新に勞働者を雇入れる場合に於ては勿論、從來雇入れて居る多數勞働者の條件をも劣等の程度に引下げようとし、斯くて全體の勞働條件が事業主の權力に依つて、切り崩されることゝ爲るのである。是れでは勞働組合が組織されたとした所で、組合組織の眼目が備はらないと同樣の次第であるから、組合は必ず事業主に向つて、團體的取引を要求しなければならない。團體的取引の下に、如何なる事項が協定されるかと云へば、其重要なるものは仕事を終始する時間（卽ち勞働時間の長短と爲る）、賃銀の最低率、殘業に對する賃銀割增の步合、徒弟の年齡並に員數、個數賃銀算出の標準、契約廢棄を通告する猶豫期間等である。而して是等の内、團體的取引で協定される賃銀は勞働組合の標準賃銀であつて、勞働報酬の基準として、頗る重要なるものには相違ないが、固より賃銀の最低率卽ち勞働組合所屬の勞働者であれば、如何なる事情があつても、是れだけの賃銀を以つて、酬いられなければならぬと云ふ限度を示したものであつて、此以上に個々の勞働者が各自の技能を標準として、給與され可き賃銀は個別的取引に依るのである。然も團體的取引で、組合所屬勞働者の要求し得べき賃銀の最低限度が定まつて居ればこそ、此以上に個別的取引で、賃銀をして其上進し得る程度まで、上進せしめ得るに至るものと解

される。

既に斯く團體的取引で、右の如き勞働條件が協定されるものである以上は、其の協定の成立しなかつた場合に、又以前の協定を廢棄して、新たなる協定を成立させようとして、其の協定の容易に成立しない場合に、勞働組合が團體の威力に依つて、有利なる形勢を展開する爲めに、或は同盟罷業を決行するとか又は之れを決行する氣勢を示すとか云ふようなことも、團體的取引に伴う勞働組合の戰術として、必要の所業としなければならぬ。

團結權と團體交渉權

從來我國の勞働組合が政府に對し、將た又事業主に對して、要求して居つた個條の一ツは團結權の承認又は勞働組合の公認と云ふことであつた。若しも政府が勞働問題に對する態度を一變して、勞働組合法を制定し、其一個條に事業主は勞働者が勞働組合員である故を以つて、之を罷免したり、雇入を拒絶したり、又は組合から脱退することを雇入れの條件としたりするような所業をするを得ないと規定すれば、是れが即ち勞働組合を法制上に於て公認したことに爲るのである。然るに現行法制に於ては、此種の規定が缺けて居るものであるから、事業主の方で、若しも勞働組合を以つて、目の上の瘤の如くに考へ、未だ其力の充分に伸びない幼稚の内に刈り取つて、後難を除かんと思へば、何時でも自家の工場に於て働きつゝある勞働者中、組合に屬して居る者に向つて、從前通り此工場で働かうと云ふ意思であれば、速刻組合を脱しろ、組合を脱したければ、工場を辭せ、申渡し、同時に今後新に雇入れる者は組合に關係のない勞働者に限ることゝするのである。事業主が申合せた上に、互に聯絡を取つて、斯く勞働組合を壓迫する方針を取つたならば、我國の勞働組合中、其基礎の薄弱たるものは、忽にして大なる打撃を蒙らざるを得ない。斯くて勞働組合が相當の規模に於て存立し、一方に國家が法制を以つて、團結權を與へて居らないとすると、勞働組合自身が自分の力で團結權を掌握し、國家法制の足らざる所を補う手段に出るのは、自然の數としなければならぬ。現に大正九年六月富士瓦斯紡績會社の押上工場に於て、友愛會所屬の職工を解傭した結果、勞働者は之を以つて團結權を蹂躙するものであるとし、團結權を承認させることを標榜して、同盟罷業を企てた。當時此爭議は罷業者側に於て、推る可き力の缺けて居つた爲めに、失敗したが、本年四月足尾銅山に於て、古河鑛業會社と坑夫との間に起つた爭議は結局會社側で勞働者の組合加入の自由を妨げないばかりでなく、寧ろ勞働組合に對して、好意を持つと云ふことに爲つて解決したのである。

斯の如く勞働者の團結權は勞働組合公認と云ふ形で、段々事業主に於て承認しなければならぬこと丶爲つた。然し團結權承認と團體交涉權とは最近まで全然別柄のものと見られて居つた。是れは團結權の承認が極めて昨今の事に屬し、法制上に何等の根據を持たず、又一般に普及して居らない場合には、已むを得ない所であるかも知れないが、兩種の權利は實に不可分の關係を有するのである。團結權が承認されて、勞働者が團體的に訓練されて來たならば、勞働組合が組合全體の爲めに、勞働條件の協定に當らう、勞働條件以外の一切の問題に就ても、團體自ら交涉の任に當らうとするのは、自然の勢であつて、團體交涉權即ちウエッブ氏等の所謂團體的取引なるものは、我國に於て正に發生す可き時に於て、發生した次第である。

不景氣時代と勞働問題

即ち團體交涉權は我國の勞働運動に於て、當然發生する勢に居つたと云ふもの丶、其今日に於て發生したのは、何故であるかと云へば、私は之を以つて當今の不景氣の産業界に及ぼしつ丶ある影響の一ツに外ならないと考へる。昨年の恐慌以來我國の産業界は不景氣の狀態に陷り、何時に爲つたらば恢復の緒に就くか、窺ひ知るを得ない。一時暴利に近い利益を貪つて、飽く所を知らなかつた事業主も今や營業上に缺損を招いて、慘憺たる狀況に陷るのを已むを得ざるに至つた。是れは經濟社會に於ける反動來の齎した必然の結果であつて、不可抗力とも見らる可きものであらうか。事業主は之を以て自家の營業に生じた破綻を辯明しようとして居る。然しながら最も冷靜なる、又最も公平なる立場に身を置いて、觀察を下すと、今日の不景氣時代に最も大なる打擊を蒙つた事業主は何れも好景氣時代に猪的に事業の膨脹に突進した人々であつて、好景氣時代に無暗に調子に乘らず、事業の計畫に相當の戒愼を加へて、他日當然來る可き不景氣に處する準備を施した事業主は今日比較的少しの損傷を蒙るに止まり、又は全然何等の損傷をも蒙らないのである。

斯く觀察すると、恐慌以來の不景氣に依つて、苦しみつ丶ある事業には必しも不可抗力の支配を受けて居るのではなく、寧ろ自己の短見、放縱、貪慾の然らしめる所としなければならぬ。果して然らば今日不景氣の爲めに彼等の蒙りつ丶ある損失の如きは、自己の不德の致す報いとして、之を甘受するのが當然であつて、個人營業者であれば、從來收めた利益で此損失に當る可く、會社であれば、缺損を塡補する爲めに、減資でもするのが其正に爲す可き手段である。然し事業主が斯る手段に出るのは、切羽詰つた場合であつて、彼等の多くは先づ第一番手

として、勞働者の一部を解雇したり、又は彼等に與へる賃銀を減じたりして、不景氣に伴う損失の一部分に當らうとするのである。即ち事業主自身の短見其他の缺點から生じた損失に對して、自ら責任を負はず、無辜の勞働者をして之を負はしめんとするものであつて、是れ社會上の關係に於て、公正を失し、又正義に悖つたことは、他に其類を見ないのである。之に對抗する爲めに、勞働者の案出した武器は即ち團體交渉權の要求であつて、先づ大阪電燈會社の爭議に端を發し、藤永田造船所から、住友の電線、鑄鋼、伸銅三工場に於ける爭議を經て、次第に此要求が勞働者の間に強烈と爲るの趣を示して居るのである。何故我國の勞働運動が團結權の承認から、一歩を進めて團體交渉權の要求と爲つたか。既に勞働者間に一ツの團結が生れ出て、既往幾年かの間、同じ利害關係に左右され、又同じ軌道を歩んで來た場合に、事業主が不景氣を理由として、彼等の一部を解雇して、失業の災厄を蒙らしめようとするのを、他の勞働者が自分等には何等の痛痒を感じないとして、默視して居られるであらうか。又事業主が同じ理由で、一部の勞働者に對して、減給の處置に出でようとする場合に、他の勞働者は平然として、之を見て居ることが出來るであらうか。是等は啻に團體の德義に反するばかりでなく、團體員の一部に加へられた非道の處置を默過することは、總て他の團體員にも同樣の處置を誘致するに至る所以と爲るのである。此際に勞働者が團體交渉權を持つて居つたならば、如何であらうか。事業主は自己の意思だけで、勞働者の利害に關係を有する處置を專斷するを得ない。勞働者の一部を解雇しようとする場合に、斯く解雇された勞働者が容易に他に就業の道を見出し得るならば、勞働組合は解雇の處置を甘受するかも知れないが、然らざる場合には、全體の勞働者を以前よりも短い時間で、仕事に就かせることを要求し、斯くて失業者の發生することを防止しようとするかも知れず、又一部の勞働者を解雇しなければならないように爲つた事業上の損失が事業主自身の不德に基くものであれば、勞働組合は其團體的勢力に依賴して、何處までも一部の勞働者の解雇されることに反對し、事業の上に生じた損失を當然負擔させ可き所に負擔せしめるを得るのである。

即ち不景氣時代には、勞働運動は必ず沈衰するものと臆斷し、一旦其緒に就きかけた勞働立法すら撤回した內務省一流の考は今日に爲つて見れば、甚だしく事實に違つたものと云はなければならぬ。不景氣に爲つて、却つて勞働運動に眞劍味が加はり、而して勞働立法に就て政府が懈怠であつたことは、勞働者に不便を與へたばかりでなく、起らないで濟む勞資の紛爭を

挑發した譏のあることを免かれない。斯くても政府は今後勞働問題に就て、依然たる曖昧の態度を取らうとするのであるか。世の中に於て、済度す可からざる者は實に頑冥事理を解せざる輩である。

政府の時代錯誤

以上は勞働者の團體交渉權が勞働爭議の起らんとする場合又は其起つた場合に於て、如何なる働きをするかを示したものであるが、是等以外に平和時代に事業主に對して勞働條件の協定される際に、團體交渉權が勞働者に幾何の強味を與へるか、殆ど測り知る可からざるものがあると思ふ。我國の勞働者が此權利を得ようとする、一方に事業主が之を與へまいとする、一旦與へられた團體交渉權も時に事業主に依つて、奪はれようとし、勞働者は之を死守しようとするが如く、我國今後の勞働問題は團體交渉權を中心として、渦を卷くことゝ思はれる。而も既に關西に於ける二三の大會社が假令ひ勞働者に強要された結果であるとは云ひながら、團體交渉權を勞働組合に許した以上は、此事實が自ら我國勞働運動の近き將來に於て進む可き目標と爲り、又刺戟と爲ることは論を俟たない。

團體交渉權の要求に關聯して、關西地方に起つた勞働爭議に就て、私は種々の感想を懷くことを禁ずるを得ないのである。左に其一班を述べようと思ふ。

第一、頑冥なる内務大臣以下其他の雜輩が勞働組合は縱には造らせるが、横には造らせぬと世迷言のようなことを云つて居る間に、勞働者が次第に横に向つて、組合を發展させようとして居るのは、明白なる事實であつて、現に藤永田造船所の爭議に於て、造船職工が單に藤永田に於ける支部ばかりでなく、大阪造船勞働組合を承認せよと要求した一事に顧みても、事の一端を知るに難しとしないであらう。

第二、我國の勞働者は團體的生活をするまでに、發達し來つた。其れにしても、彼の同情的同盟罷業の如きは、容易に我國に於て現實の問題には上るまいと想像されて居つたのに、事實は必ずしもさうでない。現に藤永田造船職工の罷業に際しても、大阪全市の勞働者が罷業者に與へた援助は頗る著しいものであつた。卽ち全市の勞働者は罷業者に向つて、或は白米を給與したり、或は金錢を贈與したりして、只管罷業の目的の貫徹されることを祈つたばかりでなく、神戸の勞働組合でも、屢々演説會を開いて、大阪の罷業者に聲援を與へることを忘らなかつた。斯る有樣で進んで行つたならば、我國に於て今後の同盟罷業に臨んで、同情的同盟罷業の起ることは、之を想像して、

誤りなきを得るのである。此危機に對して、當局者は之に臨む成算を持つて居るであらうかどうか、私の疑問とする所である。

第三、我國の政府は斯の如く勞働運動の進んで來た際に、尙ほ治安警察法第十七條の如き惡法を實際に施して、勞働運動を壓倒しようと考へて居る。然し當局者が幾ら治安警察法を勵行した所で、勞働爭議を未然に防ぐが如きは、到底望む可からざる所である。而して爭議の起つた際に、警察官が此法規を適用する者で、爭議の現場に臨めば、却つて勞働者を激昂させて、勞働運動を惡化させるに至ることは、從來幾多の事例に徴して、之を說明するに難からぬ次第である。私は今日に至つて、尙ほ治安警察法第十七條を廢止して、勞働運動なり、勞働組合の行動なりを解放することの出來ない內務當局者の態度に對して、侮蔑の念を懷かざるを得ない。

勞働運動指導者問題

斯くまでに發展し來つた我國の勞働運動は結局如何なる邊まで、其力を伸ばすであらうか。此問題に對して、適當の斷案を下すことは、甚だ困難であるように見へるが、私は斯う云ふ考を持つて居る。第一勞働組合が團體交涉權を獲得し、勞働組合の利害に着目して、事業主と勞働條件を協定する、而して其勞働條件は如何なるものを以つて、適當とするかを知るには、事業經營の實際に就て、詳密正確の知識を持つことが必要であるとしたならば、勞働者は團體交涉權を完全に運用する爲めに、更に一步を進めて產業管理權を持たなければならぬ。團體交涉權の獲得に成功した勞働組合が次に要求するものは、產業管理權を除いて、他に之を見るを得ないのである。

第二に勞働組合が團體交涉權を獲得する一方に事業主も之に對抗する目的を以つて、事業主組合を組織したならば、二個の階級は社會に於て嚴として對立し、階級的鬪爭を劇成するに至らしめるかも知れない。然も階級鬪爭の極まる所は必ず階級の調和であつて、前記產業權管理制度の如き、其目的を此一事に置くのである。資本家と勞働者と二個の階級を對立させて、其間に兩者の調和を謀るが如きは、至難の數であつて、私は資本家が資本家であつて、同時に勞働者であり、勞働者が勞働者であつて、同時に資本家であると云ふ狀態が社會に出現して、始めて眞の調和を得たものと考へる。階級鬪爭の如き、此終局の理想境に到達する楷梯であつて、隨つて私は階級鬪爭に對して、何等疑惧の念を懷かないのである。

近頃我國の勞働運動には、頻に知識階級の排斥が主張され

て、已まないようである。元來勞働に就て、何等の實驗を持たない知識階級の人が勞働運動を指導しようとするのは、變則であり、又僭越である。然し從來のように、勞働者の間に於て、勞働運動指導の任に當る人が見出されないとすれば、知識階級の内で、比較的勞働運動に理解があり、又勞働者に同情の厚な人に之を託さなければならぬ。而して今日勞働者が勞働運動から知識階級を排斥しようとするのは、詰り自分の等仲間即ち勞働を體驗した人の間から、指導の任に適する人物を出せると云ふ確信を持つに至つた證據であつて、是れ亦我國勞働界の進步を語る資料に外ならない。

私は曩日勞働運動指導者の資格を數へて、第一勞働の實驗を有すること、第二多數の人を統御する才能があり、又彼等と調和する性質はあるが、同時に鐵の如き強固な意思を有すること、第三現代の勞働問題に對しては勿論、政治や思想の問題にも相當の理解があり、時代の進運に伴うだけの見識を備へて居ることとの三條件を擧げた。(改版勞働問題の現在及將來三九〇—一頁參照)英國に於て嚢に勞働運動の指導者であり、又今日現に其任に當つて居るジョン・バァーンス、エヌ・ジー・バアンス、ラムセイ・マクドナルド、ロバート・スマイリー、フランク・ホッヂス、ジエー・エッチ・トーマスの如き何れも是等三條件を具備した人であつて、英國に於て勞働運動が常に實際に卽して着々成功を收めて行くことも必ずしも偶然でないのである。私は我國に於ても勞働運動の指導者が勞働階級から選出するに至ることを以つて、自然の趨勢と認める。唯斯く選ばれた指導者が知識を貯へ、見識を高くし、德望を收めて、充分に指導の任を盡し、我國の勞働運動をして成る可く順調に其到達す可き所に到達させるのは肝要の事である。

太平洋會議の批判

華盛頓會議の由來と予の希望

エム、エー、エル
エル、ピー　米田實

一

華盛頓の軍備制限及太平洋極東問題會議開催の報は、我が軍閥一派は勿論、一般國民に執つても宛かも晴天の霹靂の感があつた。政治家的地位から言つても、今少し冷静である可き後藤男などさへ「國難來る」と叫び、其他にも悲憤慷慨の聲が高まつて居る。然かも所謂「日本孤立」「日本の被告人扱い」てふ現象は、華盛頓會議のお蔭で生るゝと考ふるものあらば、それは馬鹿々々しい極みである。日本彈劾の空氣は始めから充滿して居た。それが此會議で結晶する乎否乎、將た日本が此會議に於て禍を轉じて福となすの策を實行し得る乎は、則ち今後我國政治家外交家の重要事業であらう。

二

世間で此會議を「日本苛め」と斷ずるものがある。一面から見ると、ソウも思はれやうが、會議を促進した最近の歴史を考へると、之が主なる目的とはドウしても考へられ無い。是れ我國民が先づ記憶すべき所である。

抑も此華盛頓會議の由來に就ては、種々の說がある。中には英國が火元であり、外相カーズン卿が日英同盟問題に行惱んだ揚句、米國の助ケ船を呼んだと言ふものもある。予の所見に依ると、實際は次ぎの如き事情であらうと思はれる。第一は何と言つても、國際聯盟に加入せ無かつた米國が、矢張り對世界政策を放棄する譯にも行かず、其苦しい立場から、何とか新天地を開拓しやうと企てた爲めであらう。第二としては、右の如き米國の事情ある所へ、英國が日英同盟及び日英米關係の離間及び海軍問題に苦しんだので、遂に倫敦で英米外交官間に話し

繰り、ハーデング大統領の同會議召集となつたことを疑は無い。

先づ第一の點から述べんに、米國共和黨は歐洲問題不參加、不干渉、國際聯盟脱退を呼號して政戰に勝ち、大統領ハーデング氏の就任を見たのであるが、サテ愈共和黨が責任ある地位に立つて見ると、世界比隣の如く、東西各國の政治的經濟的關係密接なる今日、米國のみ孤立で行けるものでは無い。たとへば、軍備縮小の如き、米人本來の希望であるが、米人の國際聯盟不參加の結果、昨年末の國際聯盟會議も「大體一九二〇年豫算を超えざる程度」と言ふやうな不徹底、無意義な協定以上に何ものもなし得ず、米國自身も亦た縮小どころか、年々十億圓の巨額を海軍に投じて擴張に汲々たる有様では無い乎。此點ではハーデング氏は不景氣で負擔輕減を望んで居る一般國民、人道主義非戰爭主義の言論家、宗教家連に對しても面目無い譯である。又た米國は委任統治問題(メソポタミア、ヤツプ其他をも含める)其他に就て、歐洲大戰の效績を理由として發言權を主張して居るけれども、今日の如く同問題が國際聯盟に附せられて居る間では、一向干渉の方法がない。ソコデ米國は本年五月六日附の對聯合國回答で聯合國の最高會議に再び參加し、新任駐英米國大使ヂョルヂ、ハーウェイ氏をして之に出席せしむることを定め、此外例の大使會議にもウオレス大使を參列せしめ、對獨賠償委員會議にもボイデン氏を出すことゝしたのである。即ち斯くの如くにして歐洲會議に復歸し、之に依つて米國としての發言權を獲得したのであつた。言ふ迄も無く右の最高會議若くは大使會議は講和會議進行中即ち國際聯盟成立以前からあつたので、米國之に參加しても國際聯盟に參加することとならぬと言ふ辯解方法も、米國の體面維持上、便利なものであつたに違ひ無い。又た米國參加の結果、最高會議は強くなり、之に反して米國の加はらぬ國際聯盟は益々弱くなり、重大問題が段々最高會議に集る可く、ハーデング氏としては之を利用して其世界聯合案の一要項たる「コンフエレンスに依て重要事項を決する」と言ふ策戰を進めんと考へたに違ひ無い。而て米國が此最高會議參加に依つて促進せんと欲した問題は種々あつたが、五月上旬米國に於て堂々傳へられて居たものは(一)軍備縮小問題(二)ヤツプ島に於ける米國の權利(三)支那に於ける開放主義(四)メソポタミアに於ける英國の委任統治及石油問題(五)日英同盟に於ける米國利益の維持であつた。之等は駐英米國大使ハーウェイ氏が最も努力すべき關係問題と目せられて居たのであつた。其後ハーウェイ氏の活動振は茲に叙説する遑が無いけれど、之丈けの事實でも、米國が中心となつて、軍備縮小及太平洋極東問題の

會議(コンフエレンス)を提唱する豫報と目して差支無いと思はれる。

三

斯る處へ、英國としても此種の會議を希望せねばならぬ事情が生じた。それは第一、日英同盟更新期の切迫である。日英同盟繼續は英國として別段異論が無く、之を繼續する方、少くとも從來の日英親善關係を維持する爲めにも好都合のやうだが、同時に英國としては米國の惡感を恐れて居た。よしや日英條約上「共同敵國よりの米國除外」を約束したにしても、之丈けでは米國人は安心せ無かつた。ソコデ米國を安心せしむる爲には太平洋に於ける日英米敵對の機會を除去することが大切となつた。濠洲加奈陀等の政治家連も其必要を切説した。然るに之が方法としては、一は日米間の紛爭を見易き太平洋諸問題を滿足に協定し、一は危險に導き易き軍備の制限を實行するの方途存するのみであつた。殊に近頃海軍擴張を中止した英國としては、軍備制定位ゐ難有いものは無かつたのである。此事情は下記の表を見れば判明するだらうと思はれる。

日英米海軍力比較

		一九二一年		一九二四年
英	戰鬪艦	二十六隻	同上	二十六隻
	巡洋戰艦	六隻	同上	六隻
米	戰鬪艦	十七隻		二十七隻
	巡洋戰艦	無		六隻
日	戰鬪艦	七隻		九隻
	巡洋戰艦	四隻		八隻

以上は艦齡十五歲以下のものを算したのであるが、若し十歲以下のもののみを算すると、一九二四年に於ける三國海軍力は英國戰鬪艦十隻、巡洋戰艦八隻、米國十七隻及六隻、日本八隻及六隻となり、目下英國より劣れる米國は却つて英國を凌駕することとなるのである。

是を以て之を觀ると、米國本來の希望に加へて、英國の事情が本會議を促進したこと明瞭であり、太平洋會議若くは華盛頓會議が「日本苛め」の目的と許りは考へぬが、善からうと思はれる。

四

併し會議共者の目的がそうでないにもせよ、一見日本苛めのやうな感じが生ずるかも知れぬ。

然らば我國が此間に執るべき方策は孰れにある乎。予は其唯だ世界の大勢に鑑み、從來の行懸りに捕はるゝこと無く、公明正大なる主義と行動とに出づべきであると思ふ。

少し具體的に言ふと、右の內海軍縮小協定に就ては、我國民も軍備縮小を希望し、世界の利益も之を命じて居るのであるから、我が代表者は十分に軍備制限に協力する至誠を發露す可きであると思ふ。唯だ海軍々人連が言ふ如く、現在の海軍勢力比較を標準にすると、英國が有利であり、建造中の軍艦數に重きを置くと米國が有利となつて、計畫のみで建造が後れ勝ちな我日本が不利となり、更らに計畫中のものに重きを置くと我日本が有利となつて英國が最も不利となると言ふやうな事情もあらう。從つて六箇敷問題には違ひ無いが大體は今日の大勢を標準とし、公平なる建艦計畫完成の延期の如き方法が差當り實現し易いものではあるまい乎、又た太平洋各方面の公平なる防備工事撤廢も善いやうに思はれる。若しそれ太平洋極東諸問題に就ては、之が討議を防止せんとの希望もあるやうだが、予は之を防止するの有害無益を考ふるものである。寧ろ我國は此際大に我が正當なる主張を縷述し十分に我立場を列國に了解せしむるが善い。狹小な國土に充滿せる我人口問題をも十分に彼等に理解せしむると共に、支那其他に於ける我が過去の誤れる政策を拋棄するけれど、正當なる發展策を講ぜねばならぬことを、十分に主張するが善い、遠慮は無用と考へる。之は書生論のやうだが、之迄の外交官が勿體振つて書生論をやり得無かつた爲めに、種々相互の理解を缺き、無爲恰かも石佛の如くにして終つたでは無かつた乎。

現に日本は山東を還附し、ヤツプにも讓歩し、西伯利から撤兵する方針を定めて居るでは無い乎。斯くの如く政治的に自制し矯正する以上は、列強は日本が東洋に存立するに必要な經濟的活動を十分に許さねばならない。又た英米にして亞細亞大陸に於ける門戶開放、機會均等を請求するは善いが、之を極端に嚴密な所まで請求するに於ては、彼等は、太平洋の他の方面に於ても日本に機會均等を保障すること當然ではあるまい乎。代數幾何は西でも東でも同じ筈だ。道理に二つは無く、義務に偏務は無い筈である。之も日本が稱道す可き正論ではあるまい乎と予は思ふ一人である。詳細の議論は別に試むる折もあらうが、一寸頭に浮ぶのは右のやうなものである

思ひ浮べた儘述べたので、議論の形式に缺點があるかも知れぬ。敢て江湖の寬恕を乞ひ置く。

國際聯盟から太平洋會議へ

上西半三郎

一

國際政局の推移は單なる事件の共存及び継續ではない。因緣及び因果關係の法則に據る推移であつて、事件は個々に取扱はるべきものでなく、全體として批判者の俎上に置かれねばならぬ。米國大統領ハーヂング氏の太平洋會議開催の提唱も亦之が例外でない。太平洋會議の開催、其には英國首相ロイド・ジヨージ氏が七月十一日英國下院で試みた演説の示す事情、又英米兩國の海軍縮少熱、各種の日米交渉の停頓と云ふ事情以外に廣汎な意味に於ける有らゆる國際事項が聯關して居る。直接關係のない様に見ゆる獨佛兩國の反目嫉視、聯合國の對露西亞態度又小亞細亞に於ける希臘土耳其の確執も之に關係のない事がない。時と處を異にする有ゆる國際又國內事件が渾然として因子となり、此處に太平洋會議を生むに至つた。此意味に於いて太平洋會議は歐洲大戰後生まれた國際的嫡子たる國際聯盟及び其弟、姉妹に當る幾多國際事件の總勘定であつて、向後の國際局面は此太平洋會議――其が成功すると否とに拘らず――を出發點として展開するものと見ねばならぬ。

第一回國際聯盟理事會が聯盟規約第四條に據り巴里に開催されたのは昨年一月十六日であつて、形式的にも實質的にも同日を以て國際聯盟は呱々の聲を揚げたのである。爾來一年有半、七月十日ハーヂング氏の會議提唱の發表に至る迄、國際舞臺には幾多の事件が演ぜられて居る。そして其等の事件は其自身に結末を見出し得ない。卽ち轉々し展開して新らしい局面から局面に移り、漸く太平洋會議で其結末小くとも結節を見出さんとして居る。人或は云ふかも知れない。太平洋會議は太平洋に於ける海軍制限協定を目的とし、太平洋及び極東に限られたる外交爭議を一掃するものに過ぎないと。此意味で太平洋會議は限地的國際紛爭處理會議であり、日英米の海軍協定會議とも云へるが、先に述べた如く國際事件は因緣因果の理法に支配せられる。タトヒ限地的國際紛爭の解決とは云へ、又三四强國の海軍協定に終るものとしても、其由來と關係及影響は世界大であり全國際的と云はねばならぬ。其上軍備制限協議は、國際聯盟の活動開始以來の懸案として理事會總會の問題となり、特別專門

委員會の組織となり、七月十六日から巴里で開かるゝ委員會は之を審議せんとして居るから、即ち軍備制限を協議する太平洋會議の地位も如何に高きか知られる。又會議の參加國は已に招請せられたる日英佛伊支に米を加へたる六國に限らない。或は和蘭白耳義を加ふるやの風說もあり、其他參加國の增加する傾向もあるし、殊に米國大統領ハーヂング氏は氏獨特の國家聯合案を同會議に持出すやの觀測も行はれて居るから、內輪に見ても太平洋會議は單なる國際紛爭の處理を目的とする部分的會合ではない。國際的の有ゆる問題に亘る大會議である。之を以て第二の巴里會議と云ひ、國際政局の立直し會議と云ふ。蓋し無理からぬ見方である。

二

話しは二年前に遡る、國際聯盟は生れた初から畸形兒であつた。セシル案とウヰルソン案は相搏擊し、セシル案勝つたかと見る間に、クレマンソー氏の國家主義とロイド・ジョージ氏の傳統を尊ぶ尊大的大國主義に攪亂せられて、理想としても實際の機關としても不完全なものとして生れた。尤も國際聯盟は千八百九十九年及び千九百〇七年に締結された國際紛爭平和處理條約其他各種の戰時法規に比して一層整備せる形式を具へ、聯盟は即ちリーグであつてソシエテでないとは云ふものゝ、然し朧氣ながら其處に國際社會なる新團體を誕生せしめたのであるが、聯盟の中核たる軍備制限は未だ出來ない。國際司法裁判所制度は骨拔きとなつて、實質上既存の海牙仲裁々判所と選ばない。爾來聯盟規約第十五條に據り聯盟に訴へられた爭議、即ちオーランド問題、ヴヰルナ問題、アルバニア問題、何れも之を解決し得ない。加ふるに聯盟の重要眼目である第十條は特別の註釋を加へられて伸縮自在となり、第二十一條も亦死滅に瀕して居る。纔に文化的國際事業の遂行でお茶を濁すに過ぎない。

此國際聯盟無勢力の主たる原因は米國上院がヴエルサイユ條約の批准を拒み、國際聯盟加入を肯ぜない點にも依らうが、實は聯合國が最高會議と大使會議なる二個の機關を組織し、此機關を通じて國際外交の高等政策を切盛りしたにある。巴里會議で聯合國軍事會議が知らぬ間に五國會議となり三頭會議となつた樣に、ヴエルサイユ條約が調印された後五國會議は知らぬ間に最高會議となり、別にセクレタリアの意味で大使會議を生んだ。最高會議と云ひ、大使會議と云ひ、條約上の機關ではなく國際間の慣例上出來た機關であるが、過去二ケ年半最高會議は或者は陣頭に立ち或者は黑幕に在つて世界の大事件を處理して來た。米國は講和條約の調印以來、最高會議、大使會議に代表

者を出して居たが、昨年春以來、米國上院の條約批准態度が鮮明となるに反比例して、代表者の實際上の權能は減退し、殆んど會議に於ける傍聽者として終始して來た。從つてヴエルサイユ條約の調印後、國際政局の中心となつて動き來つた發行機關指導機關は、最高會議と米國——米國上院內の一派の勢力——此二者を並べ舉げねばならぬ。維也納會議後神聖同盟が國際間の中心勢力となり、十九世紀の後半には二國同盟に對する三國同盟の均衡が國際間の中心勢力として國際事件を統整し來つた樣に、歐洲戰爭後の國際中心勢力は國際聯盟でなく、右の最高會議とそして米國とであつた。已に述べた樣に國際政局上の諸事件は一體として動き、其間因緣因果關係で結合されて居る。從つて講和會議の後、國際聯盟が生れ聯盟の出生を出發點として今日に至る國際間凡百の諸事件は實は一個の事件が各種各樣に顯現して居ると見える程密接の關係があるのであつて、其は最高會議と米國、此二個の中心を持つ楕圓形として動き來つた。一層具體的に云ふと、過去二ケ年の國際事件は國際社會の組織に向ふ求心運動と、國際社會の組織より離るゝ遠心運動との二つであつて、佛國の大陸覇制策、露國を中心とする通商開始運動、米國の對歐財政經濟策の樹立、英の世界商業復等は前者に屬し、獨佛の反目、近東の不穩、小國の强國に對する反感、南米と墨西哥の對米反抗等は後者に屬すると云はねばならぬ。

三

過去二年間の國際外交は米國と最高會議を中心として動いた。今其動き方を具體的に述べると、其發足點は講和會議である。從つて戰後の跡始末の名に於ける對露國問題、獨佛兩國の關係、米國と歐洲の關係、極東問題、近東問題等に要約が出來る。此等の起り來る問題に於いて、英國は先づ經濟勢力の恢復に着眼し、對外貿易に力を注いだ。從つて對露通商を再開し、獨逸と經濟的に接近するに至つた。其結果として佛國と常に對露、對獨の意見を異にした。此事情は歐洲に於ける英佛の抗爭を生まねばならない。然し乍ら英國は更に經濟的に擡頭して世界の覇者たらんとする米國と拮抗する形勢にある。此際英國は寧ろ歐洲を閑却し、世界を地盤として米國との對抗に急であつて、對獨逸問題では數回佛國に讓步を强いたが、寧ろ佛國の大陸覇制策を默視し、自己は其屬領植民地の統一と對米協調に心を碎くに至つた。殊に英國の財政難は其海軍擴張を許さず、此點特に米國との協調に待たねばならない事となつた。一方米國は其戰後の形勢から世界一の覇王たるの觀があり、云ふ處行ふ處一として聞かれざるはない形勢にある。たゞウヰルソン氏に對

する反感と米國一流の法理思想とのため、國際聯盟加入とヴェルサイユ條約批准を行はない。獨逸に對してはノックス氏の對獨逸戰爭狀態終結案を法律としたが、未だ米獨通商條約を締結しない。玆に於いて講和條約を批准せざる結果として幾多の不便を忍ばねばならぬ。然し之れは一片の行懸りとして止むを得ないとするも、其國力の充實からして寧ろモンロー主義と矛盾せる經濟的帝國主義に走り、フーヴアー。ヒユース等の意見に基いて世界的商權の樹立に急である。此間に處して英の屬領植民地中、加奈陀の如きは寧ろ米國と共利害を等しくし、英本國に遠ざからんとの氣配を示し、濠洲、新西蘭は、擡頭せる日本の勢力を怖れて米國と結んで之に當らんとするに至つた。此等の影響の示す處は英米の妥協であり協調であり、日英同盟條約の廢棄であらねばならぬ。更に軍備制限の形勢を見るに、戰後の各國は所謂反動主義の大勢に支配されて居るが、平和熱軍備制限熱は相當以上に有力となつて來た。波蘭其他中歐小國の軍備熱、希土兩國の軍備熱は、邊境に對する備へとして例外であり、佛國の軍備熱も獨逸に對する必然の結果としても亦例外と云はねばならぬが、英は巳に述べた如く軍備制限に焦慮し、其他の政府が軍備に熱中せる國に於いても國民は一齊に制限を望んで居る。唯各國の協約申合せを待つのみである。國際聯盟は此間に處して何等の實行手段に出でない。其昨漸次米國に海軍制限輿論が濃厚となつて來た。此機會を捉へたのがロイド・ジヨージ氏であつた。卽ち講和會議以來の問題のエキスである英米の協調、軍備制限問題は、英帝國會議で灼熱し、英米の下相談となり、遂に米大統領ハーヂング氏の太平洋會議開催の提唱となつたのである。見來れば講和會議以來、國際社會の組織より離るゝ遠心運動たる幾多の國際紛爭は、國際社會の組織に向ふ求心運動卽ち軍備制限に進み來つた觀がある。此遠心求心の兩運動の運命を決するものが太平洋會議である。

四

順序として先づ太平洋會議が國際聯盟に就いての關係を見るに、今日の處太平洋會議の協議範圍は必しも定まつて居ない。餘程自由な樣である。尤も大統領ハーヂング氏の招待狀には、軍備制限協議の前提として極東及び太平洋に關する外交問題を協議すると云つて居るが、米國自身も其範圍に就ては腹を定めて居ない。從つて[illegible]說子の傳へる樣に國家聯合案が提出されるかも知れない。假に國家聯合案が提出されるならば、太平洋會議は明白に第二の巴里會議である。そして國家聯合が假に成立したとすると、國家聯合は世界の平和を保障する尤も有力な機

關となつて、國際聯盟は單に文化的國際事業の聯盟となるか、或は歐洲中心の聯盟たるに止まり、死滅に至らない迄も聯盟規約は今日第一回及び第二回平和會議の取極めが有する如き地位に陷るであらう。然しハーヂング氏はウヰルソン氏と異なり、假りに自家獨特の自信ある案を藏して居るとしても、之れを自己のみの責任で會議に出し得る人ではない。殊にハーヂング氏の側近には國際聯盟修正派に屬するフーヴアー氏が居る。ロッヂ氏の意見必しも實現されるものでもあるまい。一方英國側の意嚮も看過出來ぬ。七月十一日セシル卿の試みた演說と云ひ、倫敦新聞紙の論調と云ひ、英國は必しも國際聯盟は擁護せないとしても、討議の紛糾を避けるため國家聯合案の提出には極力反對するであらう。卽ち國家聯合案が物に成る機會は至つて少く、國際聯盟のために左迄悲觀を要しない。然し乍ら太平洋會議が國家聯合案を以て國際聯盟を紛碎せないとしても、同會議はヴエルサイユ條約及び國際聯盟規約と、非常な關係にある。第一、軍備制限は國際聯盟の斷行すべき筈の重要問題であつた。理事會の決議に依り軍事專門委員會が創設せられたが、十二月の聯盟總會では滿足な結果を得ない。來年度より向ふ五ケ年間の各國軍事費を本年度の其に超過せない樣との希望條件を加入國に送つたに過ぎない。引續き軍事專門委員は調査して居るが纏つた結果もなければ、調査が進捗したとも聞かない。然し平和會議其他で締結された國際條約は、戰爭開始前に爭議を平和的に處理する一般原則か、或は戰爭開始後に於ける戰爭行爲の制限を規定せるものであつて、軍備を制限する規約ではない。聯盟規約第八條第十一條は軍備の制限を以て平和を確保せんとする最初の實行手段であつて、從つて國際聯盟及び聯盟の行動は――タトヒ微弱であつても――軍備制限を遂行すべき正統機關であつて正統の行動である。今太平洋會議が軍備制限を討議するは國際聯盟から依囑された譯でもない。國際聯盟と獨立の行動であつて其の太平洋會議が軍備制限上何等かの協定に達したならば、其協定は國際聯盟の軍備制限行爲に侵　するであらう。之れ法理的には不法の樣だが、國際慣例から見て必ず然るを覺える。次ぎに目下懸案中のヤツプ島問題にしても、又山東問題にしても、之が會議で何等かの協定に達するとすると、ヴエルサイユ條約の部分的破棄となり、聯盟規約の部分的修正となる。縱ひ國家聯合案は提出の運びに至らないだらうと云つたが、提出され通過すると否とに拘らず太平洋會議は國際聯盟及びヴエルサイユ條約の修正を意味すと云はねばたらぬ。

聯盟規約とヴェルサイユ條約の修正が行はれるならば、之に加盟し調印せる各國は何とするか。少數の關係國英米佛伊日支で取極めた國際基準を、其他の三十有國に強制し得るか。玆に於いて太平洋會議に多數國を參加せしむべしとの論も起れば、參加する樣になるとの觀測も行はれる。此問題に關する英國の腹は稍明白である。行詰まつた東洋の外交關係の基調を早く作りたい。其は抽象的のものでもいゝ。又手ツ取り早く海軍制限協定を作りたい。其がためには協議が紛糾化し複雜となる事を虞れる。從つて多數國の參加には同意しまい。但し米國となると事情が違ふ。場合に依つては國家聯合組織に落ちてもいゝのであるから、上院さへ承知すれば多數關係國の參加を厭はない。今日の處形勢の推移を見て居る許りである。若し四十有國否少くとも太平洋と極東に關係ある多數國が參加するならば、太平洋會議は其協議進行に非常な困難を感ずるし、假に協定が出來たとすれば協定の效力は非常に有效であらうが、依然少數關係國で會議を開くと、小國の反感、參加せざる關係國の關係が面倒となる。第一回聯盟總會の形勢に見ても、小國の大國に對する反抗反感は漸次熾烈となり、大戰後の國際標語たる國際デモクラシーは相當有力となつて居る。從つて小國は從來最高會議の專横に振り向けて居た鋒、聯盟總會で現はした鋒鋩を太平洋會議と其成果たる協定に向けるに違ひない。一方極東及び太平洋に關係ある國にして唯小國なるが故に會議に參加し得ざりし國は、協定が實行に移る際何とするか。反對せない迄も其關係は複雜を極め、或は某々野心國等が此小國の不平反感を利用して國際政局を一層紛糾せしめないとも限らぬ。聯盟條約の修正とヴェルサイユ條約の一部修正は、必ず之に加盟し批准せる各國の再承認を得なければ有効とならない。其間に露獨兩國の態度も何とあらうか。又少數強國で修正された聯盟規約は多數弱小國の希望に添ふか。其間後の禍を藏して居る。和蘭白耳義を加へるならば、太平洋沿岸關係諸國の外獨逸も露西亞も加へねばならぬとの議論が生れる。獨逸は其舊領土を處分さるべき被告として、又露西亞は西伯利問題の討議に關係あるからと云ふにある。獨逸は暫く措き、若し西伯利問題を協議するならば必ず露西亞を加へねばならぬ理屈である。事實上太平洋問題はタトヒ多數國を參加せしむるとしても、露獨兩國は之を加へないに違ひない。然し乍ら太平洋會議が若し或程度迄進行するか、又は協定に到達するならば、露西亞及び獨逸は各異なつた立場から會議又は米國に對して質問或は抗議をなすかも知れない。即ち此等の困難に相遇して會議は聯盟規約の修正もなし得ず、ヴェルサイユ條約も修正しない。只だ海軍制限の協定と抽象的東洋

平和の基調を成文とするに過ぎまいとも見られて居る。此意味即ち最狹義に見た太平洋會議となると幾多の難問題を切り拔け得るだらうが、唯之に依つて各人の希望せる懸案が依然未解決に殘り、其上歐洲は歐洲に、太平洋は太平洋にと世界の國際政局が二分する虞がある。

六

歐洲の事は歐洲でやるとの思想は從來ない事もなかつたが、米國のモンロー主義に比すべきものは絕無であつた。唯米國が共和黨の天下となつて昔、モンロー主義の變形せるものに復歸せんとし、英國が屬領植民地の統一と世界の商權掌握に忙しく、露西亞は眠り、獨逸は衰へたる時、佛國が自ら歐洲大陸の覇者として立つの意氣込を示して居る。佛國は軍備制限に關する協議會の招待は受けたが、太平洋及び極東問題討議に關し招待を受けて居らない。此形勢展開に將來は揣摩出來ないが、現狀を以てすると佛國は太平洋の外交問題の協議に與らない。又太平洋の外交協定に加はらない事となる。さらでだに野望に富める佛國政治家が、此機會を捉へて國際聯盟を守り立てないとも限らぬ。其場合英米兩國は之を阻止するものとは限らない。國際聯盟と太平洋協定の二個の國際條約が世界平和の基礎を確保するものとして並立し、其細目に至つては前者にヴエルサイユ條約を以て歐洲關係事項を規定し、後者は協定自體の細目を以て太平洋及び極東の關係事項を規定し、前者は歐洲の、後者は太平洋の守護神として成立つ事も想像が出來る。其際米國は太平洋協定の盟主として、佛蘭西は國際聯盟の盟主として表面に立ち、英國は黑馬として幕の中から兩者を動かすに至るだらう。之れ歐洲大戰後漸く成立せんとした國際社會の樹立に向ふ求心運動を一時妨ぐるものであるが、或は案外早く渾一せる國際を作り出す前提であるかも知れない。只何れにせよ日英同盟條約其物の運命は定まつて居る。法理上から云へば、國際聯盟規約が批准された時已に日英同盟は消滅した。唯國際間の事は國內法の如く法理のみを以て推論が出來ない。從つて昨年七月八日の日英兩國の對聯盟共同通告となり、本年七月七日の再通告となつたのである。太平洋に於いてタトヒ微弱でも又抽象的でも何等かの協定が出來るならば、其時を以て日英同盟條約の運命は公式に決せられねばならない。軍事條約を忌避し、英語國民に對する脅威を除くの二條件を尊重し、別に太平洋及び極東に關する外交關係の基礎が樹立さるゝならば、日英同盟條約の運命も知るべきである。之れ英國は豫て期する處であつて米國も亦望む處であらう。以上述べた事は太平洋會議が一般的國際協

定を締結するか、將又特殊的國際協定を締結するかに依つて異る。若し太平洋會議が特殊協定、地方的協定を締結するならば一個の單なる何々條約として調印國のみを拘束し、其條約は國際聯盟に登錄せられて部分的効果を持つであらうが、太平洋會議としては從來の國際的惰性、其開催の事情、又參加國の顏觸れ等より見て、必ず一般的國際條約を作るに違ひない。從つて國際聯盟規約、ヴェルサイユ條約との複雜な關係も發生し、小國不參加國との微妙な關係も生れ、國際政局二分の觀測も生れる。其處に太平洋會議の强味も弱味もあり、世界の視聽を集る所以である。

七

之を要するに純理上から云ふと太平洋會議は不法である。形式上既存の國際條約たる國際聯盟及び、ヴルサイユ條約を改訂し、其一部を破棄せんとするからである。但し國際關係は必しも純理のみから論ぜられない。國際條約は國內法律と異なり屈伸自在であつて、時機に適應して變つて行くから、必しも咎めるに及ばない。從つて太平洋會議は講和會議以來二ケ年の國際政局から必然に生れた國際會議として認められねばならない。唯太平洋會議が最高會議の延長であり、英米の世界覇制會議と見る人もあるが、國際デモクラシーの樹立されない今日としては致し方もあるまい。今日の處太平洋會議は討議題目の範圍と參加國の多少と、國家聯合案が提出さるゝや否や等の問題で未だ具體的に準備が完了しないが、其開催さるゝは已に自然の結果であるから、十一月十一日近くに開かれるに違ひない。唯其成果に就いては必しも樂觀を許さない。太平洋及び極東諸問題に就いては個々の具體的取極めが出來上るかどうか疑問であるが、少くとも大體の原則は協定せられるであらう。又軍備制限に就いても、陸軍制限は疑問としても海軍制限も部分的には協定せられるであらうか。唯此會議に依つて日本及び支那の國際的地步を決定する。そして英米の協調が出來る。副産物として對露問題も定まれば、米國の對獨逸態度も決するであらう。即ち講和會議以來進展し來つた國際政局は太平洋會議において國際社會の組織に寄與するか否かを決し、之を一結節として新しい進路に進むに違ひない。此意味で太平洋會議は國際社會に意を注ぐ者の見逃すべからざる處。後世の史家は之がために數頁を割くに違ひない。

（七月二十日）

國際關係に於ける感情・利害・正義の力

國際關係に於ける感情、利害、正義の力

杉森孝次郎

從來、國際關係を決定した力は、正義よりも利害及び感情であつた。一九一四年七月二十三日に、墺洪帝國が、セルビヤにむかつて、同年六月二十八日に、セラジエオに突發した兇行の、連累者の檢擧審裁に從事する役人をば、墺洪帝國からもだす旨を通告して、四十八時間の期限を附して返答を強要したのは、主として感情であつた。國民的自尊心に對する凌辱を憤激したかたちの感情であつた。福澤諭吉が、一片の獨立は生命よりも重しと說き、東波が、匹夫はづかしめらるれば、劍を拔いて起ち、身を挺して鬪ふと述べたが、墺洪帝國の、あの際の心事は、やゝそれであつた。セルビヤが、その難關をはねつけて、戰爭を甘受したのも、恥ぢをにくんで、誇りを愛する感情であつた。國民主義と愛國心そのものが、過半は感情であることを忘れてはならん。

七月二十八日に、墺洪帝國が宣戰して、獨がその後援者として立つたのは、複雜な心理であつたが、利害及び感情が主であつた。墺塞戰は、露獨間に久しく蓄積され、鬱結し來たれる爭利心、嫉妬心、恐怖、憎惡の堤防の決潰であつた。獨墺間と、露塞間には、利害及び感情の一致が、露獨間にはその不一致が在來すでに準備されたのが、機會をえて新形式をとつたのであつた。佛が露についたのは、獨を憎む感情に助けられての露を愛する感情、多年、露に投資し來たれる利を愛惜するところ、獨に對する恐怖心等に、かなりに動機づけられたのであつた。英が、八月四日に、對獨宣戰したのは、その第一動機を利害に有した。白の中立が侵犯されたのを公憤して、國際正義を擁護するために參戰したといふのは、友を國外に呼ぶ看板でもあつた。口實でもあつた。政治家が愛國心を勵ました便策でも

た。最眞動機は、國防の危險と、商利の保護にあつた。要するに利害と感情であつた。白、佛の海岸を占領した獨は、英の外廓を占領した獨であることを、英は事の未發に確知した。そも〳〵英の對獨心は、すでに久しく、獨の大海軍策に對する恐怖、嫉妬を中心とし、商賣競爭がこれに加勢して、險惡であつた。日の參戰は、利害第一であつたといふ批評が、一部の識者間にある。英は、露佛が、陸上に於いては首尾よく獨を挾み撃ちにすると打算して、必勝を期し、比較的に樂觀して參戰し、日は、英佛側が、早く勝つことを信じて、早く參戰したといふ批評がある。日は獨を憎んではゐなかつた。英は正であり、獨は邪であると、單純に判斷するほど不聰明でもなかつた。米の參戰の動機に至つては、最も複雜だ、

米は、佛の敗折を坐視し、佛の求助を冷遇するには忍びない一掬哀憐の情を、佛に對して懷抱した。さすがに、獨立當時の佛の情誼を忘れないのだ。英に對しては、その專横な處置を、殊に、一九一六年に、英が、中立國戰時禁輸品の目錄を、手前勝手に變改した際など、憎いとも思うた。ロイド・ジョージ氏の英となつてからは、米は、英佛側の勝算をも立てた。商品の賣り込みをば、米は、英が封港さへしてゐなかつたら、獨へもし續けたにちがひない。後日の太平洋問題に備ふるために、專制君主國たる獨を討つ名義下に、自國を武裝する考へもいくらかはあつたかも知れん。日が、英露側に立つてをる關係上、日との競爭意識に於いて、米は、英の側についたといふ事實も、絕無ではなかつたかも知れん。一九一七年の晩冬向春に、獨が、水中攻勢の敵、中立無差別の宣告を實行し始め、米は、物を英佛へ寶送するために、商船武裝の必要に迫られた。折もあれ、獨の、誘盟策が曝露した。商船武裝の程度まで進めば、公然、對獨戰を布告した方が利害にも徹底したやり方だ。最後まで中立を守り通ほせば、敗者の怨みを買ひ、勝者の驕慢と輕侮とを買ふ。あれほど哀願したのに救はなかつたと、怨嗟されると同時に、お前の御蔭で勝つたのではないと慢侮される。日さへも、兎に角加參してをる英露側か勝つたら、戰後の歐洲はおろか、地上、水上の全局にもわたるべき、戰後の、國際政權、國際經濟權、國際軍事權の再分配、改作に際して、米は、なんらの發言をも許されない事になる。米の一助によつて、勝敗が、俗眼にも鮮やかに決定される時機の熟するを見て、いさゝかたりとも、助けがひの多い、助けばえのする、助けのどくのあへ方を、國論を總統して、雄起して助けることに果決斷行した。建國以來の自由主義の自信と習慣とは、米の內外人心を、米の功利的目的に自然に合するやうに、緊張させ、興起させ、或る程度ま

では催眠させるに有力であつた。利害、正義、感情が、米の參戰の動機に於ける大、中、小の三部位ではなかつたか。感情は、米のやうた、日のやうな、緣遠いところには起こらない。獨の宣戰時の心實は　愛國、恐怖の、白熱化した感情であつた。感情化した利害であつた。米の參戰心は、正義まがひの利害であつたのだ。

國際には、人際に於いてよりも、正義が、一層稀れに、そして小さく機會をえ、利害と感情が、その反對に、しばしば、そして大きく機會をえる。デモクラシイの國となつても、デモクラシイの社會、すなはち國際的または人類的社會とならない限りは、この關係は、要するに失はれない。それは、國がデモクラシイでも、社會がデモクラシイでない間は、一國の對外行爲は、意思に於いて專制的であり、そして、國民の平均程度の良心が、及び聰明が、その對外行爲の主動者だからだ。假りに、ウイルソン氏自身は、一九一七年の一月二十二日の上院で開陳した通りに、英獨の間に正邪の別なく、隨つて無勝利の講和が正義的必要であることを、正直に信じてゐたとしても、米の民意を代表する議員が、その信念を裏書きしない。隨つて國策とはならない。國内的にデモクラシイを採用し、國際的に專制主義を採用してをる國の對外政策が、利害本位になるのは數の自然だ。有名なる十四個條には、國際的經濟障壁の撤去も特筆大書されてゐた。しかし、保護貿易は、米その他の、依然たる實行だ。

近代の國民主義は、學藝復興期に初發し、佛革命に際して加速轉進した。佛革命以來の國民主義は、人民本位の國民主義に方途を向けてをる。その以前の國民主義は、酷烈に君主本位であつた。當時の國際關係は、君際關係であつた。盟交を固めるためには、君家と君家との結婚、往來訪が、必要にして且つ十分な手段であつた。君主の好感と、惡感とが、國際平和と、國際戰爭の原因であつた。痕跡は、最近まで續いた。しかし、それは、文字通りに、痕跡にすぎなかつた。戰爭の前夜及び當日へかけての、英獨間、英露間の、君家の姻戚關係を一顧しても、この事實は分明だ。

國民外交の端は開かれた。不幸にして、國民そのものが、外交となると、いまだに。掠奪、竊盜、詐僞などいふ、原始的本能を發揮する。國際といひ、外交と呼ぶこゝろが、すでに時代錯誤だ。際と外とが、あまりに重要視されてゐる。自國と國内が、偶像的自己であり、他國と外國が、偶像的非自己であることに、現代の諸國民は識達しない。得到しない。社會を至寶として所有しながら、その至寶的所有を發揮しない。現代の

關係は、殊にその外交は、浪費そのものだ。外交がわるいのではない。背後の國民全體がわるいのだ。社會民の名と實が、飛行機が、騎兵に代はり、やうやくにして步兵にも、軍艦にも代はらんとするにも似た勢ひをもつて、國民の名と實に代はれ。社會民が國民に代はる時代的必要は、自由讀書が通學聽講に代はる時代的必要と匹敵する。發音本位の假名づかひが、現在の假名づかひに代はる必要にも比すべく、日本歷史を、年號に依らず、紀元年次に依つて書き改める必要にも比すべきだ。その他にも、比すべき必要時務は多い。

感情は主觀的事實だから、これに時代の最高聰明と、最高良心をさしむけて、保存すべきをば保存し、掃滅すべきをば掃滅し、發達さすべきをば發達させねばならん。利害は客觀的事實だから、小利害を去つて大利害につき、偶像的利害を捨てゝ眞實の利害を求むべきだ。さうすれば、感情と利害とは、正義の內容を形成することになるのだ、眞の正義は、常に感情と利害を生命とし、主要素乃至全要素とする必然的約束が個人心理的にも、社會生活的にも、絕對的確實性をもつて存する。國際關係は、原則に於いては、人際關係と別であつてはならん。人際關係の意識に於いて、われらは國際關係を改釋し、改造せねばならん。責任觀念が、個人際に於いて厚く、國際際に於いて薄い通弊を除かねばならん。民衆敎育、社會敎育が、國際關係を感情化され、利害化された正義にするために、先要事だ。國際心の開發、社會心の養成、これが急務だ。

正義と卑屈、正義と損失との間には、およそ二個の事實が、反對し、背馳しうるかぎりの反對と、背馳がある。本質的に不兩立だ。世のいはゆる國際正義には、國際不正義の稱呼に値ひする實質のものもある。われらは、感情と利害を批判すると同時に、正義を批判する必要を常に有する。批判された正義、研究された正義のみが、國際にも要求される。至美の感情と至大の利害、正義はそれの形式にほかならない。それ故に、われらは正義を主張するよりも、感情の美化と、利害の大化を主張する。美化は感情の本質的目的であり。大化は利害の本質的目的だ。

國籍を異にする人々の間に、情愛が發達し、共通利害が成長して來なくては、國際間に正義は伸びない。その發達と成長をわれらは、自然に放任せずに、保護しな てはいかん。旅行、學問藝術の綜合的研究、これらも、國際的に促進さるでき手段の一端に屬する。往昔、君家と君家との間に義理、人情が滯惰された智と術とは、二十世紀に於いて、各國の各人、他の各國の各人との間に、進化した方式において、復活さるべきだ、

各人を動かさずに、團體を動かし、社會を動かすことのできない時代が、幼稚ながらも發生した。國、國といはずに、人、人といふ人が、一人でも增員することは、國際關係正義化の勝利の兆候だ。私は、この問題の場合に於いても、人格的個性主義の主張者だ。それの間接主張者でなく、直接主張者だ。人格的個性主義の發達を 國際關係を正義化するための最捷徑と見るといふ意味に於いての、直接だ。

國家的感情と國際的正義

長谷川 如是閑

一 群生的動物としての人類

生物は、その群生狀態に於ては、必らず個體を吸引する樣な環境を造る。群生動物に於ては、其群生の生活が個體の生活に必要な條件なのであつて、個體はそれから離れると其の生活が危險になる。從つて群が大きくなればなる程、生活は安全になり、生活狀態は旺盛になる。それが爲めに弱小な群は勢ひ強大な群に合同せしめらるる、強ち征服といふ樣な形をとらないでも、強大な群の環境は弱小な群を吸込むに充分の力をもつてゐるのである。此の環境は微生物に於ては一種の瓦斯の樣なものである事がある。或は液體であることがある。大きい動物になると特有の臭氣をもつ。その臭氣は同類の嗅覺を刺戟して、それらを惹きつける働をするのであるが、それは臭氣が彼等の生活に適するからではなくして、其空氣のうちに彼等同類の生活に適する環境が存在するからである。人類の場合は其臭氣は所謂「文化」といふ言葉で呼ばれてゐる發揮物がそれである。

此の「文化」なる臭氣は、それを發散せしめてゐる集團内の人々の生存に取つて最も適當な環境であつて、必ずしも、他の集團の人々の生存に適する譯ではない。が、それは元々人間の臭氣なのであるから、人間といふ大きい類に屬してゐる生物にとつては、決して毒瓦斯ではないのである。酸素は、有益な瓦斯ではあるが、その必要な分量は、すべての人類にとつて必ずしも同一でない、それと同じく、「文化」といふ瓦斯も、異つた肺臟の發達を持つ人々の間には、異つた程度を必要とするといふ迄もない。然しながら、兎も角も、酸素量の多い空氣が人間を引付けるやうに、旺盛な文化は、貧弱な文化よりも、より多く人間を引付ける。で接觸した人類の間には、何うしても優等な文化

による統一といふことが起る。古代日本の文化が、大陸文化への合同の傾向を持つてゐたのもその理由である。

そこで、意識的動物である人間は、右の事情を意識すると同時に、その意識に基いて、始めには無意識であつた合同傾向を、次には意識的に働かせるに至つて、帝國主義的合同が起る。その以前から、生存競爭や、本能的敵對關係やによる征服的合同は存在してゐたのであるが、それが後には、文化的意識による英雄主義の合同となつて、歴史上に所謂帝國的合同が起るのである。中世の支那が日本に對して往々さういふ合同を試み、日本は、古代から韓半島に對して、屢々同じ意味の合同を試み、最近に至つて成就したのである。古代の例での最も大規模のものは、誰も知る通り、アレキサンダー大王のそれや、羅馬帝國のそれや、思吉汗のそれやであつた。

帝國的合同は、民族の接觸から起る必然の過程であるに拘らず、それは如何に完全に成立しても、早晩必らず崩壞する。羅馬帝國の統一の如きは、その完備せる點で、歴史上稀有のものであつたに拘らず、矢張一時的の現象たるに終つた。(無論一時の現象といふのは、その一般文化に及ぼした效果についていふのではなく、その合同の形式についていふのである。)さう崩れてしまう理由は、個々の場合について、それ／＼異なつた事情があるので、其の或る一つの場合についても、眞正の理由を發見することは困難な位であるから、一般の原則を見出すことは不可能といつて好いが、生物學的見地からいへば、意識的に昂進した合同は、往々實際の共同の環境を發生せしめるに足らないで、言ひ換へると、集團的嗅覺を刺戟する臭氣が足りなくなるのである。で餘り大きくなつた集團は、同一環境の下にある個體であるといふ意識が弱くなつて崩壞の運命に立ち到るのである。然し一端發生した合同は、その形式は崩壞しても、その合同から生じた空氣は、既にその合同を組織する各の個體に對して新らな環境を作つてしまつてゐるのだから――もう臭氣が染まつてゐるのであるから――合同國家は無くなつても、直ちにその空氣が消散するものではない。そこで大合同の行はれた時には、それが崩れてしまつても、必らずそこに存在した文化的共通から、異民族間に何等かの融合現象が殘存し、發達し、もう以前の通りの孤立的獨自の民族感情に逆戻りすることは出來ないのである。

二　民族的意識の性質

兎に角、合同されたものは結局或る單位に迄分離される事を免れないのであるが、その單位は、今日では民族的單位といふ

ことになつてゐるのである。今日の分離的傾向は中々强烈で、この民族單位まで持ち來されない合同に對して、それが如何に僅かの合同でも、結局破壞されんとする形勢を示すものである。だから澤山の單位の合同から成つてゐる帝國は、今日では、甚だ所謂跼步艱難の狀態を呈してゐる。その帝國を構成する單位のどれもこれもが、分離運動を起してゐるからである。現在では、英國が最もその意味の困難にあると云はれてゐる。

所が、此の民族的單位なるものは、頗る性質の明らかでないもので、元來民族といふ集團の根柢となるものゝ何であるか、又民族といふ集團其物は何であるか。其の邊のことは曖昧至極である。多くの人は、日本民族とか獨逸民族とかいへば、そのまゝ絕對の事實のやうに思つて、民族的精神といふやうなもので、何もかも解決がつくかの如く考へてゐるが、實は、民族とか民族精神とかいふものは、それほど絕對の事實でもなければ、自明的の事實でもないのである。血族關係とか、言語の同一とか、利害の共通とか、共通の地理的根據とか、色々のことが、民族的性質を組織してゐるのは事實であるが、然しそれらのものがすべて共通でも一民族を爲さないものがあり、共通でなくとも、一つの民族を組立てゝゐるのもある。血族の同一といふことは、たゞ比較的の話で、決して絕對に同一の血族的集團などはあるものではない。あつたら却つて混血の行はれない爲め、生物學的に滅亡してしまうのである。又言語も、利害も、共通でないものが、一つの民族的集團を爲すに至つたことは、民族歷史を研究すれば、明かなことである。卽ち民族は、利害相反したものが、征服されたり、雜婚したりして出來あつてゐる場合もある。今日でも、同一民族內の階級間の利害相反は甚しいもので、爲めに「階級戰爭」なんて言葉さへ出來た位であるが、それでも彼等は同一民族的生活を續けてゐるのである。更らに、一つの支配者の下にある集團が同一民族であるなどゝいふことの事實でないのは、多くの民族が一つ支配者に歸したことに對する反對運動が「民族運動」と呼ばれてゐることによつても明かである。

で今日の理解によれば、民族といふものに、絕對的の根據があるのではない。それは集團生活の或る條件から發生した意識狀態であつて、平たくいへば、「心持」なのである。此心持の事實上の根據は、前云つたやうないろ〳〵の生活樣態の共通、生活利害の共通、歷史の共通（歷史の共通は、要するに生活利害の共通である。盛衰興亡の結果を一樣に感受する生活の聯絡狀態なのである）に係ることは無論であるが、それたけが直ちに民族的意識そのものを構成するのでなく、それらの事實外に、

一定集團の人類が、心理的聯絡狀態――集團的個體の意識――を構成することが肝要である。これは、原始時代に於ては、同一totem を持つことであつて、共同祖先を持つてゐたといふ信仰(それは信仰だけで事實さうだはなかつた)であつたのであるが、後代に於ても、民族的精神は、畢竟さういふ信仰的心理に基いた意識なのである。祖先崇拜といふやうなことが、民族的結帶を強めるに必要であると、今日でも唱へられてゐるのは、畢竟、右の原始的心理の延長に外ならない。然かも進化した集團に於いては、科學的智識が、右のやうなトーテム式(共同神)の信仰や共同祖先の信仰を打破してしまつて、同一民族は、決して一つの神から產まれた神の子の殖へたのではなく、又神でない、人間の一夫婦から增殖した子孫であるといふとも事實に反するといふことが解ると共に、自然の結果として共同祖先といふやうなことは、民族的結帶を強める上に、餘り力のあるものでないといふことになる。のみならず場合によつては却つて弱めることになる。何故なれば、日本の或る一部の臣民は、外國民族の子孫であつたといふことが、日本歷史の科學的研究の結果明瞭になつたので、祖先崇拜を一般に行き通らせると、朝鮮人の子孫は、日本臣民の祖先でない別の祖先を崇拜しなければならないことになつて、民族的集團の分裂を招く虞があるのである。要するに祖先崇拜といふことは、共同神(トーテム)の信仰に次ぐところの原始的信仰であつて、混合民族の國家に於ては、科學的知識の進步しない間だけ有効な集團的精神なのである。で結局今日の民族的意識は、或る一定期間の共同生活の事實が產み出した心理狀態であつて、一定人類の集團生活の可能性を意識することたるに止まるのである。即ち前に擧げた微生物に於て、集團生活から發生する瓦斯が、彼等の生活の可能性を保障する時に、その微生物は、集團を離れることによつてその瓦斯から離れるので(生活の保障が無くなることを意味す)直ちに又その集團の方へ歸つて行くのであるが、民族的意識は、さういふ生活事實が意識の上に現はれて、一つの集團に附着する心理的傾向を持つに至るといふ、その心理共物に外ならないのである。今日の國家的集團が尙ほ此の民族的單位に基かしめなければならないといふのは、集團生活の單位としては、この民族的意識に基く集團が一番心理的牽附を持つてゐるからである。その以外の大集團は、さういふ共通の瓦斯のないところに生活體を寄せ集めるのであるから、集團の生物學的根據に乏しく、從つて心理的根據に乏しいといふことになるのである。

然しながら、民族的意識といふことも、決して人類に固着した先天的、絶對的、神秘的の條件ではないのであるから、それよりも強い集團意識が發生すると、民族内に分離が起る。例へば、アングロ・サンソン人といへば、民族的意識の強いので有名な民族であるが、それでも、その一部が米大陸に渡つて、別個の生活集團を作つた後には、その集團内に、民族的意識よりも強い集團意識が發生して、本國の民族的結合を破つて別の集團を作つてしまつたのである。

同じく「民族」といふことが、絶對的のものではないといふ事情から、右の例とは反對に、或る程度の大さにまでは、民族的單位が纏つて、一つの更らに大きい民族的集團を完成せしめることがある。イギリスの本國もさうであるが、獨逸民族と稱するものもさうであるし、佛蘭西人も、人種的には三つに分かれてゐるといふのである。つまり、民族的意識は、要するに集團的生存の爲めの意識であるから、同一種族であつたもの同士が、互に今の異民族のやうな感情を持つこともある（昔の希臘のやうに）と同じく、異民族同士が、同一民族の意識を持つことも出來るのである。此頃北米合衆國で唱へられてゐる「アメリカニゼーション」の運動は、異民族でも何でも、アメリカ合衆國に住んでゐる以上、皆アメリカ民族の意識を持たせやうといふ運動なのである。これは異民族の集團から成る國家に於ては誠に已むを得ない運動なのである。しかも、さういふ異民族の結合から成る國家は、例へばアメリカのやうに、國家としては統一的傾向よりは寧ろ分化的傾向の強い組織に於て始めて可能なのであつて、帝國主義は、かういふ國家に取つて禁物なのである。一時ルーズヴエルト等が世界の帝國主義的傾向にカブれて採らうとした同國の帝國主義は、今日では、最早何人もその可能を信じてゐないのである。要するに、民族的意識は絶對のものでないから、アメリカのやうな煩雜な國家に於ても、或る程度の民族的意識は成り立つのである。無論それは、小國家に於けるほど強固のものでないが、然かも立派に米國といふ國家的生活が成り立つてゐて、何となく同國人間に、アメリカ人といふ感情が成り立つてゐるのである。

然し兎も角も、國家を民族的根柢に置くといふのが、今日の人類の集團生活の一般的の信仰であるとすれば、それは確かに現代的トーテム（理知で解釋出來ない感情生活）なのである。

三　民族的感情と國際道德

國家といふ生活が、右のやうに、民族といふ心理的事實を核子としてゐるとすると、國家的發動の外部に對する關係、

所謂國際關係なるものは、何よりも感情によつて支配されるといふことはいふまでもない。國家生活そのものが元々感情の生活なのであるから。

然かも、民族的意識は、民族の生存の可能性の意識であるといつた通り、「民族」といふ感情は、決して生存に對する實際的の功用なしに生起するものではない。それは甚だ功利的の見方のやうではあるが、生存の實用的作用が、感情生活の事實上の根據であることを否定する譯には行かない。民族的感情は、民族的生存の利害に反して起り得る筈はない。如何なる感情でもその感情を持つことによつて生存が力づけられるところの感情は、生存の利益の爲に生起し、發達し、强調せしめられるものなのである。親が子を愛する感情は、それによつて種の保存が確保されるための作用である。偶々その感情が、獸の雌のやうに、自分を殺すことになつても、それを以て、種の保存を危くする感情であるとはいへない。民族的執着は、獸の雌的に時に、利害を超越した感情として現はれることは無論あるが、然しそれは何時でも民族的生存を確保する爲めの感情であることはいふまでもない。たゞ人間の意識に於て、生存といふことは往々觀念的となつて、生存を失うことによつて生存するといふやうな觀念的生活に走ることもあるから、民族についても同じやうな傾向があつて、奴隷的國民として生存するよりも、生存を破壞してしまふ方が意義のある生存であるといふ風に考へることもある。けれども、民族的感情の本來の作用は、民族的生存への執着であつて、それは決して民族の利害と全く相反して、生起するものでもなければ、働くものでもないのである。故に國際關係に於ける動機は感情であるとはいへ、それは國家的利害を離れたものではなく、終局に於て、それと一致して働くところの作用に外ならない。

然かも、元來集團的生活を營む人類に於ては、その生存を力づける感情は、亦從つて、集團的生活に於ける感情即ち所謂社會的感情にまで進化する道理である。此社會的感情は、道德、習慣、法律の根柢を爲すところの感情であつて、即ちそれによつて、集團的生活は、純個人的感情による全然の支配を脫れて、集團的完成に進み得るのである。而して國家的生活に於ても亦此の進化は働くのであつて、國家の孤立的生活の感情は、次第に、國家の集團的生活(國際生活)の感情にまで進むのである。國際關係に於ける正義其他の道德的感情は、畢竟その國家的集團生活の保障の爲めの感情の發露として働くのである。

かういふ風に集團的に進むといふことは、國家的利己の立場

を全く失うてまでないのはいふまでもない。個人が社會的生活に於て、利己心に立脚して行爲することを脱れないやうに、國家の集りの國際社會が出來ても、一國は尙利己的動機を失ふものではない。國際的道德は、此利己心の自家調節であるといふ點で、頗る社會思想としての自由主義の立場に似た實效を持つてゐるのである。有名なグロチーウスの國際法の思想でも、正義法とかいふ抽象的な動機から出たのでなく、當時の和蘭の商業上の立場を確保する爲めの理論――殊に葡萄牙との係爭事件即ち和蘭の會社の船舶拿捕の事件を和蘭の有利に解釋しやうとしたり、葡萄牙の海上の占領を、和蘭の利益の上から否定する爲めに、海上自由の法則を考へたりしたといふことは、さうあるべき筈のことである。

さういふ風に、利己的立場といふものが何時も、決して集團的生活に不利の結果のみを持ち來すものでないことは、功利主義者の指摘する通りであつて、英吉利の商業道德が『道德的であることが自己の利益であつた』といふ經驗から成立したものであるといふのも同じ理法である。

五　國際道德への進轉

然し一つの國家が其獨自の存在を、絕對であると考へて行動したならば、國際的道德なるものは、結局事實の上に現はれることは出來ない筈である。絕對的の存在である一つの國家は、文化的にも暴力的にも、あらゆる國家を征服する權利がある。故にさう云ふ國家的感情が成り立つてゐる間は、友情と平等とか正義とかに基く國際關係は、只其絕對國の承諾する範圍内に於てのみ存在し得る譯である。

今日の國家的集團の生活、即ち所謂國際生活が、一つの國家の絕對的存在を不可能にして了つたことは、丁度社會的生活が個人の絕對的存在を不可能にして了つたのと同じである。野蠻部落同士の生活に於て、弱い部落は直に掠奪され、殲滅せしめられたが、今日の國家集團の生活に於ては、土耳古の樣な支那の樣な、大きくても弱い國、又白耳義の如く瑞西の樣な、强くとも小さい國と雖も、直に之を打ち潰すといふ樣なことは出來なくなつてしまつた。昔は腕力の强くない國、即ち軍國的に弱い國は必ず滅ぼされるときまつたものであつたが、今日の國際生活に於てはさうは行かない。弱小國が事實に基いて存在の權利を主張するを得、現に有力に主張してゐるのである。其處に、如何なる集團も、個體としての生存の權利を有つと云ふ平等感が具體化される事になつた。それは、丁度佛蘭西革命が、個人は悉く個人としての生存の權利があるといふ平等感を成立せし

めたのに似てゐる。即ち當時個人について成り立つた道德が、今は國家について、成り立つてゐるのである。各國家はその國家内の生活に於ける個人と同じやうに、各自均等の機會を持つ權利があると考へられ、觀念上、公正の法則を破らずに生活し得るといふ狀態になつた。(尤も事實の上では、觀念的の公正を立派に具體化しては居ないが) これはつまり民族的感情が孤立的、自己絶對の感情である事を許されなくなつた事である。許されなくなつたとは、さういふ孤立的感情に固執すれば共民族の國家的生活は成り立たないといふ生活事實を生じたとである。

國家生活がこういふ程度に進んだ以上は、國家の集團の生活は、個人の集團の生活と同じくそこに、所謂「行爲の法則」が意識される譯である。云ひ換へれば「法」の意識が國家生活に於て有力となる譯である。國際聯盟などといふ思想がかなり昔からあつたに拘らず、今までのそれは皆空想に終つて、今日に到つて稍國際的に具體化されたのは、前に云つた樣な國家的生活事實が發生したからである。

が個人生活に於ても國際生活に於ても同じであるが、正義といふ樣な絶對的なものが何處かにあつて、それが人類の間に次第に現實されて行くと云ふ樣な事を考へるのに空想である、道德は矢張り心理學者の所謂 trial and error の結果であつて、生活の爲めの法則に外ならないのであるから、萬人共通の生活に於ては一つの道德が成り立ちもしやうが、共通でない生活が存する限りは、違つた道德が時と場所を異にするに從つて存在する譯である。即ち生活が異なれば道德が異なり、道德が異なれば法律が異たるのである。

此事實は一つの社會的集團の生活に於ては顯著には認められない。何故ならばさう云ふ集團内の生活は大抵似寄つた生活であるからである。之に反して、違つた民族の間の生活は必ず違つた生活であるから、共生活の利害の互に相反する事は、一つ集團内に於ける個人同士の比ではない。從つて生活維持の方法として現はれる凡てのものが、自ら互に違つて來る。本能でも知識でも感情でも夫々に違ふ。そこでさういふ民族なり國家なりの集りである所の國際生活に於て、どういふ法則が凡ゆる國家を支配する可きであるかといふ事について、到底一致を見ることは出來ない。つまり何が道德であるかといふ事を結局自己の國家的生活の立場から見て決定することを免れないのである。即ち前云つたグロチユウスの立場は、今日に於ても到底免れ難いのである、國家交際が一層社會的になつて、そこに感情の一層の融合が

成り立つと、同一集團内の個人間のこれの如くなるに及べば、自ら共通の立場即ち、凡てを抱括した立場から考へる事が可能になつて、一般法則がヨリ容易に成り立つ譯であらうが、個人同士の集團でも、今日のやうに、階級的利害から殆ど別々の道德が同一集團内に發生するといふ樣な事情があるのだから、國家同士の生活に於て、右の樣な融合が成り立つ事は容易でない。

然し異つた利害も亦永久的なものではないことと既述の通りであるから、それに立脚する民族的感情も次第に共通的の分子が殖へて行つて、「外國」といふ感じも、年々變化して行きつゝあることは、何人も感じてゐる通りである。

要するに人類は、集團的生物である限り、如何に利己的に働いても、それが生存に向つて、生存の滅亡に向はない限り、結局集團に合目的である外はなく、——さうでないものは自滅する故に、淘汰が自づと道德を見出す——その人類の集團が、更らに集團生活をする場合——國際生活の場合——も亦同じ事情が働いて、一國の利己的動機が、純一國的にのみ働けば、その國は自滅し、自滅しない國家の利己的動機は、自から集團生活の目的に副ふことによつて、合目的化されるのである。感情といひ、利害の念といひ、道德的觀念といひ、何れも、——個人にも、國家にも——無くてはならないものであつて、それが生存競爭的に、優越したものゝ保存となつて、そこに共通のものが産れるのである。尤もそれは、現今の集團に合目的であるといふ意味なので、哲學的の意味の、所謂普遍妥當的のものであることを必要としないのである。普遍妥當なる絶對的正義といふやうなものは、たゞ考へ得られるだけで、國際生活の實際としては、矢張りグロチユウスの正義を去ること遠からざるものに過ぎないのである。

國際間に於ける感情、利害、正義の關係

法學博士　堀　江　歸　一

道德法律の制裁と個人

國際間に於て、國と國との關係、即ち一國の他國に對して爲す所は何を動機として、定められるかと云へば、感情、利害若しくは正義の一に出るものに外ならないであらう。若しも國家の爲す所が悉く正義の觀念に基礎を置き、國民は常に正義、

ものであるかを明にし、國民自身の力で、國家の所爲をして正義の常道から逸出せしめないやうにしたならば、是れ位喜ばしい事はないのであつて、國際間の關係に局面一新を見るであらう。昨今軍備の制限であるとか、國際聯盟の成立であるとか、種々の問題が起つて居るが、要するに諸國が利慾の念に左右されて、軍事上の實力を利用すればこそ、國際間の平和を維持することの必要から、諸國聯合の力に訴へて、各國が單獨に又率先して、爲すことを好まない、又敢てしない所を强制的に行はせようとするものに過ぎないのであつて、大局から達觀したならば、誠に馬鹿馬鹿しく感じられざるを得ない。

個人が感情の赴くまゝに任せて、勝手氣儘に行動し、正義とか、道德とか云ふ高尙な觀念で、其行動を掣肘しなかつたならば、必ず社會の秩序を紊し又他人に迷惑を及ぼすに至るのは、論を俟たない。自分の利害一天張りで行動する場合も亦同樣であつて、斯る人々に對しては、社會は輿論の制裁を加へることもあり、又法律上の制裁の及ぶこともある。斯くて人々が感情を抑へて、理性に從つて、行動すれば、社會は其人を以つて常識に富んだものとし、又篤行の仁であるとして、尊敬を拂うことゝ爲り、一方に自分の利害を擲つて、社會公共の利害に殉ずるやうな人があれば、之に對して志士仁人と呼ぶことを辭さないのである。而して個人の間に於ては、法律の制裁もあれば、輿論の監督もあり、正義に適つた行動を勸奬する方法も亦備はつて居るので、餘程個人の行動の感情や、利害の一天張りに偏することを防ぎ得る。唯近頃日本で社會の制裁が頗る微弱と爲つて、綱紀の頽廢を來しつゝあるは、私共の遺憾とする所である。

感情や利害に傾く國家の行動

然るに國際間に於て、國家の行動する場合には、個人の行動を律する場合に於けるやうに、法律の制裁があるか、社會の制裁があるかと云へば、さう云ふものは全く認められない。成る程獨逸皇帝のやうに、世界を敵として、戰へば遂に帝位から退けられると云ふ悲慘な境遇に陷る。之を以つて、國際間に於ける輿論の制裁が加へられたものとする人もあるかも知れないが、實は附會の說たるに過ぎない。或は獨逸皇帝なり、開戰の責任者なりに法律上の制裁を加へようと云ふ說もあつたが、結局立ち消に爲つた所を見れば、國際法規を蹂躪したとしても、遂に法律上の制裁は加へられない譯である。國際聯盟の規約は或る程度まで、此般の缺陷を充し得るものゝやうにも考へられるが、國家の行動が正義の觀念に適つて居るか、又は之に外れ

て居るかと云ふことは、戰爭とか、開戰とか云ふような非常の事變に際してのみ生ずる問題ではない、平生凡百の問題に就て國家の爲す所が感情に流れ、利害に趨つて居る場合に、國際間の力で能く之を控制するを得ないとしたならば、國際聯盟が成立した今後に於ても、國と國との關係が常に正義の觀念に支配されるとは考へられないのである。

早い話が北米合衆國にかける有色人種の排斥が經濟上の根據に基いて居るものとすれば、自ら議論が違つて來るが、若しも人種の差別から生ずる偏見に據るものとしたならば、誠に道理に外れたことゝしなければならぬ。天は人類の生活を富裕にする爲めに、吾人に土地を與へ又種々の天然資料を供されたのである。而して土地の廣大であり、天然資料の豐富である國には前者の狹隘であり、後者の貧瘠である國に比較して、多數の人民に向つて、繁榮なる狀態の下に、生活を營ましめるを得るのであるから、生活程度が劣等であつて、人口の過剩である國から生活程度の優等であつて、人口の僅少である國に向つて、移住民の送遣されるのは、天意に適つたものである。然るに濠洲聯邦であるとか、北米合衆國であるとか云ふような新開國が濫に外國人の入國を拒絶する。何の意味で、之を拒絶するかと云へば、現に新開國に居住して居る少數の人民だけで、富源を獨占し、利益の及ぶ所を一局部の人民に限らうとする爲めであつて如何に國際間の關係を律する點に於て、正義の觀念が閑却されて、利害の欲求が强く現はれるかを、知るに足りるであらう。

國際道德と個人道德

國際道德と云ふことは、頻に多くの人々に鼓吹される。一國が文明に進めば進むだけ、其國は國際道德を遵奉するに至ると云ふ說もあるが、私は平生國際道德なるものに大なる疑を懷いて居る。何故疑を懷くかと云へば、個人道德に於て、不法であることも、一度び國家の名を冠して行へば、適法と爲るように、兩者の間に矛盾があるからである。例へば個人が他人の生命を奪う、他人の邸宅を侵し、財物を掠めるとしたならば、如何であらうか、刑法は斯る不逞の罪に向つて、嚴重なる制裁を加へ、時には身首、處を異にするに至らしめることさへある。然るに一旦國家の命ずる所に據り、戰爭と云ふ名の下に於て爲したならば、他國の領土を奪はうが、他人の財物を掠めようが、將た又他人の生命に損傷を加へようが、毫も罪されないばかりでなく、却つて賞されることさへある。又獨逸一部の學者をして云はせれば、先進文明國が後進未開國を併合して、一つの國家とすることは、後者の人民に對して、洽く文明の恩澤を及ぼ

所以であつて、何等憚るものなしとしたのである。斯くて帝國主義は文明普及の假面を被つて、主張され、帝國主義を實現する爲めに、軍備の擴張が計畫され、結局軍備擴張の窮局する所として、戰爭が起つて、文明普及の理想と背馳する結果を生じるに至つたのは、私共の滑稽に感ずる所である。

要するに今日の如く列國が互に豺狼の心を以つて、相對して居る限りは、國際間の關係は何としても正義の觀念に依つて、律されることを望み得ない。常に感情なり、利慾なりが國家の行動を定める上に、大なる勢力を現はして、紛爭の絶ゆることを期し難いのである。殊に今日の經濟組織が資本主義を基礎とし、金權者階級が政治家と聯絡を通じて、政治上に權勢を及ぼして居る場合には、彼等が資本放下の安全なる場所を求めよう、通商上の販路を擴張しようと云ふ利慾心から、帝國主義の下に他國の領土を侵すが如きは、最も行はれ易い所であつて、國際聯盟の力が能く之を制し得るかは、疑はしい。人々が今日以上に心術を公正にし、有形上の慾望を全うすることに或る限度を置くと云ふ考に向はない以上は、國際間の關係に於て、正義を貴んずるの念は日に消滅するものと見るのを至當とするであらう。

私は社會主義には賛成するを得ない。然し社會主義者が今日の資本主義を以つて、國際間に爭議を惹起す一原因であるとする說に對しては、之を承認するに躊躇しない。獨逸が歐洲の禍亂を醸成した張本人であることは、疑ひなき事實であり、而して世人は之を皇帝の野心の發露したものであるとし、又皇帝を圍繞する軍閥者流や、保守頑冥の政治家が皇帝を動かしたものであるとする。或は然らん。然し同時に資本主義者が此一戰を通じて、英國と云ふ資本主義の巨擘に打擊を加へて、自ら取つて代らうとする野心から、皇帝を誘つて、戰禍を起させた事實を認めなければならぬ。日米戰爭の風說にした所で、今日こそ感情に刺戟された結果もあらうが、其始めは戰爭熱を高めて軍備を擴張させ、斯くて私利を謀らうとする造船業者の私心に基いたものに外ならない。斯う云ふ私心を一掃しなければ、到底正義を國際間に盛にするを得ないのである。

東亞は多く感情に、歐米は多く利害に

文學博士　三宅雪嶺

國際關係に利害を先きにするやうで感情に走るのは支那であ

り、感情に走せつゝ利害を先きにするのは歐米である。セーガル朝の印度が英國と爭ふたのも、感情の爲めに利害の打算を誤つた所を觀れば、感情に支配せらるゝ事、亞細亞大陸の通習として可からう。外國人に乘ぜられるのは、利害の問題でありながら、感情の爲めに眼前の利を爭ひ、更に大いなる利を忘れてしまふ。亞大陸の國々が獨立を失つたのは、大抵、一時の感情で事を起し、何回か類似の事を繰返すによる。感情を制し得ぬが爲めか、利害を打算するの眼識の鈍きが爲めか、何れにしても、一文惜しみの百文知らずのやうな事をなし、甚だしいのは僅かばかり威張らうとするだけの爲めに面倒を惹き起し、取返しの付かぬやうな事になる。

　支那は亞大陸の他の諸國と違ひ、外交に長ずるを以つて知られ、或は支那人の生れながら外交官たるを稱するが、それで感情の爲めに損した事がどれ程あるか知れぬ。歷史上種々の外寇事件あるが、其の損するのは感情を以つてして居る。宋が遂に苦しめられ、金と結んで之を滅し、次いで金に苦しめられ、元と結んで之を亡し、遂に元に亡ぼされたのは、復讐に急にして大敵を忘れたのである。成吉思汗が殁する時、豫め其勢を知り、金を討つに路を宋に借れよ、宋は金を仇として必ず之を許すと云ふて居る。復讐戰の爲めにより大いなる害を忘れる。復讐戰に臨んで利害を考へぬのでなく、復讐の利を認めるのであるけれど、復讐を愉快とし、他を考へようとせぬ。思想が複雜のやうで、單純なるを免かれぬ。

　近代李鴻章が外交を以つて、知られ、米國のグラント將軍の如き、世界第一の人物と稱した程なのに、外交に溺んで眼前の愉快を求め、大局を措いて問はず、大局の分らぬのも餘りでないかと思はれる位の事がある。臺灣事件で琉球の事が定つたに拘らず、グラントに琉球の處分を依賴して居る。かの大國を以つて日本と一の琉球を爭ひ、何の得る所あるか。朝鮮に對しても同じく目先の利かぬ事をして居る。日本で陸奥外相が決して開戰にならぬと見込をつけ、開戰で意外に感じたのは、李を買被つたのであつて、假令開戰するやうな下手な事をすまいと思ふたのである。支那に於いて朝鮮半島の爲めに事を起すべきでなく、之を外にして爲すべき事が山程あるのに、支那を如何にすべきかと云ふよりも、眼前氣の霽れる樣な事をしようとし、初め豫期したよりも損する事になる。露、獨、佛三國の干渉で日本を排けたのも巧みに似て巧みでなく。而して後に自ら損し、尙ほ悟り得たかゞ疑はしい。後に露と結ぶが如くし、獨と結ぶが如くしたのも、眼前の策のみに止まり、大局に着眼して居らぬ。近頃米國の後援を賴んで排日の運動を事とするのも、

情の爲めに大局を誤まるの行爲に屬する。忌ましい事があるにせよ、適當の途を踏んで日本に改善を求め、支那の安寧を保持し、富源を開發すべきであるのに、只徒らに騷ぎ、何の目當てあるか分らぬ狀態になつて居る。支那といふ國家なく、個々人々愉快を求めれば可いとするならばそれまでの事、世界に相當の力を伸ばさうとするには、今少しく大局を慮らねばならぬ。爲す所只感情に追はれての事であり、一時を愉快とすれば可いとなつて居る。未だ政府の基礎が固らず或る部分の愉快を感ずる如くせねば、位置を保ち難い懸念はあらうが、他の事に利害を圖り、國際關係に臨んで一時の浮れ心で事を決するの有樣、不思議に思はれる程である。彼の如き國情で何人も彼の如くなるかも知れぬが、痙攣的に神經過敏になつて居るらしい。舊印度の如く甚だしくないのは有繫である。

之に比べて歐米は利害の打算に重きを置く。感情の衝突で水火相容れぬと見えるのも、利害關係で一致共同し、只及ばぬのを恐れる。英國は曾つて極力佛國と戰つたもの、曾つて露國を第一の敵國としたもの、而して獨逸に對し、佛と結び、露と結び、能ふ限りの援助を與へた。獨逸に對し國家の存亡を賭しながら、いよいよ勝利を得るや先づ之と協議しようとし、佛と意見の合はぬ事がある。佛國にしても曾つて那翁一世が露國にて敗れ、露帝亞歷山一世が第一に巴里に乘込んだのに、後之と同盟を締結し、犧牲を拂ふを辭せなんだ。米國獨立以來英國は常に之に快からず、南北戰役にも其分裂を望み、米も英に不快を感じて居つたのに、近來英米互に相接近するの形がある。果して之が永續きするか。利害の衝突せぬ限りに於いて續き、一旦衝突するや、如何になるか分らぬ。

歐米人はなか／＼感情強く、熱中もし、意地も張るけれど、利害を直覺し、忍んで爭ひを止めてしまふ。自制の力も相當に强いと云はねばならぬ。所で感情で事を爲すのも、利害で事を爲すのも、德義上に稱すべからざるは一。利害を打算するのは利巧と云ふ丈の事であり、惡しく云へば狡猾であり、老猾であり、感情で事を爲すのも、狡猾でないのでなく、狡猾の拙なるものである。好き嫌ひで事を爲すのは、淡白のやうで實は我儘であり、利害を打算して誤まるに過ぎぬ。何と云ふても德義上最も力あるは正義とするが、國際的法律に遲れて居る如く、國際的德義も尙ほ頗る弱微の狀態である。狼は羊を喰ふべきもの、羊は狼に喰はるべきものとせられて居る。國際的關係に正義を振翳すのは裝飾であつて、實力の前に何の權威無いと思はれる。併し極めて遲い速度を以つてしながら、幾分づゝ正義に重きを置かうとする傾向がある。狼が羊を食ひ殺すにしても、跳躍

なる狼は他の狼が來つて喰らし、場合によつて嚙み殺してしまふ。國力の發展する國は成るべく正義に背かぬやうに努め、少しでも正義を輕んじようとしては、其處に禍が伏在して居り、急に發しなくても早晩發する。

世界戰役に於いて禍亂の責任が誰に歸するか。聯合國側と獨墺側と互に塗り付け合ひしたが、聯合國側は比較的正義を振翳すに於いて成功して居る。墺國の皇嗣夫妻が殺されたのは塞比亞の過失であり、之を責めるのが當然であるが、塞比亞の應じ難い條件を持出し、四十八時間に答へよと威壓した所、如何にも機會を摑まうとするかに見える。斯くては露國で默つて居れず、延いて佛國で默つて居れなくなり、露佛が物云ひを付けるとあつては獨逸で默つて居れず、いよ／＼事が難しくなつたが、其處で獨逸が善いか惡いか未だ分らぬ。白耳義の中立を破り、佛に雪崩込んだので、正義を蹂躪すると云ふ事になつた。佛は豫め獨軍が白耳義を通過するを考へぬのでなく、其附近の防備を嚴にしようといふの議があつて果さなかつた。開戰すればそれより外に途が無く、獨佛の間直接に何とも通過しようが無く、佛が其防備を嚴にしなかつたのは力の及ばぬのであり、同時に失策であつたが、中立國を何處までも中立とし、其國境に備へないのは、正義を信ずるの餘りと云へば云へる。獨逸とて眞逆其途から兵を進めまいと思ふたのに、亂暴狼藉至らぬ所ないと責め立てる事が出來る。英國で獨軍が白耳義を通過したのを怒り、何處までも之を打たねばならぬと決定したのは、本來利害の衝突よりの事でも、理由の宜しきを得て居る。米國が之を咎めず、自國の商船を潛水艇で擊破するのを憤り獨に宣戰したのは、英ほど名義正しからねど、歐洲の外交に干渉せぬとの國是からして申譯ないではない。獨墺側は理由があつて其理由を明かにするに長せず、力を以つて何でも出來ると思ふたのが、少からぬ損失を招いて居る。聯合國側が正義を振翳し得たのは、世界の輿論を後立てにするに與つて居る。正義の力が微弱のやうで、蔑るべきでない。

日本は如何であるか。三百年前豐臣秀吉が兵を動かすや、必ず名義を正しくし、正しきを得たのが勝つて居り、之を得ぬのが敗れて居る。明智に對しても、北條に對しても、島津に對しても、正々堂々たるものである。織田德川連合軍に對して斯く名義の宜しきを得ず、遂に失敗に終つた。明に對しても名義の正大を缺くと同じく、結果が宜しくなかつた。舊幕の末及び明治大正、外交の巧みを得ぬが、正義を氣遣ふと云ふ所、せめてもの稱すべき所である。餘計な心配すると云ふものもあるけれど、之を取除いたらば、何を稱すべきか。大隈内閣の下に支

那に於ける、寺內內閣の西伯利に於ける。今一層思慮したならばと惜しまれる。日本が正義を看板にし、看板に僞りなしと知られれば正義の力を示し得るが、今日まで之れに近付かうとして、岸打つ浪に揺られる形がある。

第一義に生くる者は強し

永井柳太郎

(一)

國家にも個性がある。恰も個人が一箇の單位であつて、特定したる目的を有し、其目的を遂げんとして生活するやうに、國家も亦一箇の單位であつて、夫れ自身の目的を有し、其目的を完成するが爲めに存立する。個人が自己の生存、自己の目的及び自己の關係を意識しつゝ生くるやうに、國家にも亦同じ種類の意識がある。さうして個人が自己決定力を有し、自己の生存目的のために、自己の選擇に依て其行爲を決するやうに、國家も亦自己決定力を有し、政府とか議會とか云ふ機關の決議に依つて自己の意志を發表し、其發表したるものを行ふ。結局國家も個人と均しく人格を有する。從つて國家の生活は正不正を判斷し、權利義務の主體たり得る事に於て、毫も個人に異なる所はないけれども、併し國家は個人が道德的人格であると同じ意味に於て道德的人格であり得ない。國家には個人の道德の眞髓である感情の働くべき餘地が、皆無ではないけども、甚だ狹い。個人の道德は東洋では孝を基とし、西洋では戀愛を中心として居るが、孝は親子の間に於ける切つても切れぬ情愛に根ざし、戀愛は異性に對する燃ゆるが如き本能より發する。國家は人格を有するけれども他の國家に對して斯くの如き情熱を持ち能はぬ。だから個人と國家とは同じ人格者であるけれど、其生活の目的が異なるのである。個人の生活目的は複雜である。人に依つて違ふ。各其欲望に從ひ、各々其智識に依り、各々其遺傳の儘に、又各々其環境に應じ、個々別々の理想を望み、思ひ思ひの目的を追ふて生く。併し國家の目的は單一である。固より歷史哲學上より之を見れば、古今東西の國は皆獨特の目的を持つて存立したと云へぬ事はない。假へば雅典は學藝のために、羅馬は征服のために、英國は憲政のために、佛蘭西は自由のため存立したとも云へるが、それは其國々に於ける國民の歷史的信念に過ぎぬ。正確なる科學的見地より見たる國家の目的とは云へ

ない。科學的見地から見た國家の目的は結局各個人の生存を保障し、各個人をして各々其最深且つ最大なりと信ずる生活目的に徹底せしむるに必要なる社會狀態の建設にありと云はねばならぬ。近代の政治學者の國家の生活目的に關する意見は、大體に於て、さう解釋する事に於て一致して居る。だから國家の生活目的は個人の夫れの如く複雜であり得ないと同時に、又國家の人格は個人の夫れと同じ程度に道德的であり得ない。國際法の大家プーフェンドルフは十七世紀の昔夙に「國家は道德的人格者なり」と喝破し、「だから國家は總ての善人が行ふ所を行はねばならん。」と云ふたけれども、それは確かに云ひ過ぎて居る。國家は道德的人格には相違ないが、併し其主體は正義（ジャスチス）である。正義は道德の一部であるが、全部でない。道德の他の一部は何かと云ふに、愛である。而して愛の最大要素は感情であるが、國家に其感情の完きを望む事は出來ない。だから國家と國家との關係は結局正義の實現を以て其目的とするのであつて、人類文化が進歩すればする程、正義の觀念は國際間の機運を決定する上に益々重大なる勢力となるに相違ない。現にデヴィッド・ヒル教授の如きも其著「近世國家論」に於て國際問題は窮極する所遂に國際裁判に依つて解決せらるゝ時代の來るべき事を豫想し、「外交家の任務は益々多忙を加ふべしと雖も、而も其多忙の性質は變るであらう。何となれば外交は人類文化の進歩と共に陰謀を其主要なる手段とする時代より、正義を內容とする法理の適用時代に移るべければなり。」と云つて居る。

（二）

然らば國際間の出來事には感情より發したるものがないかと云ふに、決してさうではない。恰も個人が生活上の目的を有し、道德上の理想を抱いて居るに拘はらず、屢々自己の內に在る他の生活目的に反する慾望感情のために、其目的に悖り、其理想に反するが如き行爲に出づるやうに、國家も亦其內に在る國民の感情や慾望のため同じ矛盾に陷る事がある。譬へば宗教的及び人種的反感のために國際的正義の蹂躙せらるゝ場合が夫れである。回教國たるトルコ、基督教國たるギリシヤ、ルーマニア、セルビア、ブルガリア等の間に於ては十字軍以來の宗教的反感が歷代傳承せられて、それが屢々虐殺となり、動亂となり、戰爭となつて勃發し、國際的正義の實現を妨げた事は著しい。白色人種と有色人種との間にも亦人種的反感に基く排斥、凌辱、憎惡、復讐の暗黑なる歷史が存在するのであつて、日本が大戰後の講和會議に際し、國際聯盟の規約中に人種的差別撤廢を意味する條項を挿入せん事を主張したるは、即ち全人類を此暗黑

なる歴史より解放し、人種的反感に代ふるに國際的正義を以て國家と國家との關係を律せんと欲したる精神に出でたものである。大戰後の講和會議に於ける人種差別撤廢の提案と云ひ、又民族自決主義の確認と云ひ、孰れも國際關係が人類文化の進歩と共に、次第に合理化せんとする趨勢ある事の証據であるが、併し國際關係の合理化を妨げる事に於て、宗敎的又は人種的反感よりも更に有力なるものは排他的經濟主義の觀念であると思ふ。

ウキリアム・ベートソンは「生物學上の事實と社會の組織」と云ふ講義の中で、生物學者の立場から極力人間の他愛的感情を否認し、「文明の進歩の動機として、人類に最も普遍なる力は只富を蓄積せんとする慾望のみ。人間は平等なりと云ふ如き觀念や、總ての人は其生活のために均等の機會を得ん事を要求すると云ふ如き主張は共に事實に非ず、何となれば人間は、如何なる點に於ても、決して平等にあらざるのみならず、總ての人は何れも出來得る限り自己を他より卓越したる地位に置かん事を慾望し、毫も他と對等の者として同一視せらるゝ事を欲せざればなり。」と云ふて居るが、私は決して斯う云ふ風に人間の生活動機の經濟的解釋の普遍性を信ずる事は出來ない。人間が富を蓄積せんとする慾望も、富の蓄積其事が動機ではなく、人間としての生存目的が他に在つて、其目的を遂ぐる手段として富が必要である所から其慾望が起るのである。從て人間の生活目的に對する思想の進歩と共に、ベートソンの主張するが如き人生觀は、次第に明白に其缺陷を曝露するであらうと思ふけれども、今日の國際間に於ける關係に於ては、尚未だ大なる程度に於て、國際的正義の確立と云ふが如き道德的動機よりも寧ろ國家的利益の追求と云ふが如き經濟的動機が遙に重大なる決定力を持つて居ると云ふ事を恐らく何人も否定する事は出來まい。

今日に於ては國際的正義の確立を標榜する諸種の運動も、其動機は屢々經濟上の理由に存する。譬へば千八百九十九年、時の露國皇帝が初めて萬國平和會議を發議し、軍備擴張休止に關する議案を提出した時の如きも、其主要目的は人道上に存せずして、寧ろ經濟上の負擔の輕減に存した。現に時の露國外務大臣ムラビエフ伯が皇帝の命に依り千八百九十八年八月二十四日付にて露都駐在の各國使臣に回付した文書に於ても「各國に起る經濟上の恐慌は、其原因を過分の軍備擴張と戰鬪材料の蓄積に依りて起る間斷なき危險とに歸すべき者多し。玆に於て現時の武裝平和は國民を壓迫する重荷となりて各國民は殆んど其負擔に堪へざらんとす。」と云ふて居るのであつて、其動機は明かに道德的と云ふよりも經濟的である。從て國際的正義の確立が經濟的慾望の追求と矛盾するが如き場合に於ては、尚未だ多く

の場合に於て國際的正義が經濟的欲望の犧牲となつて居る。第一平和會議に於ては三箇條の重大なる宣言が可決せられた。第一は空中より爆發物を投下せざる事、第二は毒瓦斯を使用せざる事、第三はダムダム彈の如き有害なる砲彈を使用せざる事であつたが、此三ケ條の宣言は此度の世界戰爭に於て全然破棄せられた。敵も味方も棄てゝ顧みなかつたのである。又戰後不完全ながらも國際的正義の確立を目的として國際聯盟が組織せられたに拘らず、米國は其提唱者たる關係があるのに、米國自身の利益上恣まゝに脫退して、今や「米國第一（アメリカファースト）」などゝ唱へながら世界に雄飛するの自由を確保したのを以て見ても、今日の國際關係は、國家の存立の眞の目的たる正義の實現其物よりは寧ろ其目的に反する感情や欲望のために支配される場合が多いと云ふ事を認めざるを得ない。だから國際法學者の理想とする樣な國際生活の合理化は、猶未だ前途遼遠なりと云はざるを得ぬ。

(三)

併しながら斯くの如き種々なる矛盾した力のために其進路を妨げられては居るけれども、各國家は猶確かに國際的正義の確立を理想とし、其追求が善である事を意識しつゝ進んで居るに相違ない。宇宙の神秘なる法則は其理想を無視し、人類文化の大勢に逆行せんとする國家の存立及び發達を不可能ならしむるのであつて、孰れの國家も永久に國際的正義の反逆者として止つて居る事は出來ない。孰れの國家も其存立と發達とが國際社會の全體にとつて有益であり且つ必要であるやうに自國の經濟的及び文化的生活を改良して行かなくては生くる事を許されないやうになつて居る。若し強て國際社會の邪魔になり、他の國々の害毒になるやうに生活せんとする國があれば、それはナポレオン一世時代の佛蘭西の如く、ウヰルヘルム二世時代の獨逸の如く自然淘汰せらるゝ運命を免がれ能はぬ。故に今後の國家は正義を國內に確立すると同時に、又正義を國際間に確立する事を理想としなくてはならぬのであつて、之に魁し得る國家は、軈て人類文化の先導者である。私は國際聯盟其物に滿腹の敬意を拂ふ事も、又信用を措く事も出來ない。それは滿腹の敬意を拂ひ、又信用を置くには餘りに矛盾撞着に富んで居るからである。けれども國際聯盟の背後には過去數千年に亘りて全人類の最も優れたる階級に屬する人々の血淚を以て擁護せられたる國際正義の觀念が働らいて居る事を否認する事が出來ぬ。而して此國際的正義の觀念と、人類共存の倫理とを守り立てゝ、之れを其柱としたる新世界を建設して、之を子孫に遺す事が現代人の世界文明に對する最高且つ最大の義務なりと信ずる。

LYNOSOL

結核性内服新薬

醫學博士 大野禧一氏推獎

リノソール

醫學博士大野禧一氏は同種製劑中の白眉として推奬せられ醫學士岡村進氏は幾多の實驗例を舉げられ結核菌に對する殺菌力强大にして咳嗽の消失喀痰の減少を促進し殊に食慾を増進すと報告せられたり

錠劑
- 五十錠入 金五拾五錢
- 百錠入 金壹圓也
- 五百錠入 金四圓五拾錢

粉末
- 二十五瓦入 金壹圓
- 百瓦入 金三圓八十錢
- 四百五十瓦入 金拾五圓九拾錢

最新强壯劑

ヨードリノソール舎利別

（四五〇瓦入 金壹圓八拾錢 二五〇瓦入 金壹圓也）

本劑はリノソール並に沃度を結合し舎利別に調製したる服用極めて容易なる一新化學製劑なり、醫學士岡村進氏は左記諸症に實驗し奏効的確なりと推奬せられたり

〇腺病體質〇結核體質〇虚弱體質〇病後衰弱時等

【文献進呈】

發賣元 ラヂウム製薬株式會社

東京市京橋區中橋廣小路町

出張所 京都・福岡・京城



近世疑獄史論

高須梅溪

疑獄流行の現代と文化的缺陷

最近の事である。私は文學上の參考書を借りやうと思つて、ある圖書館へ出かけた。冷めたい、しめつぽい空氣が漂うて居る書庫の中から、所要の書籍をやつと探し出して、借入の手續を終へてから、平生心安い一人の老事務員と無駄話をした。其の時、不圖疑獄流行のことに私が言及すると、無慾で、正直で、世外に超然として居るやうな顔付をした老事務員は急に眼を輝かして『昨今のやうに中流以上の人間がわるいことをして、贅澤をして居るのを見ると、泥棒をせぬものは損ですね。』と云つて、重い溜息を洩らした。

私は、自分も世の中を忘れ、世の中も亦彼れを忘れてしまつたであらうと思はれる老事務員から、斯うした皮肉らしい嗟嘆の聲を聞くと、社會を白眼に見て居る一老人の頭にも近時ひつきりなしに續出するところの疑獄事件が、深酷に印銘されて居ることを思ふと共に、此の老人よりも、もつと社會の生きた空氣に觸れつゝある中年者や、青年らには、どんなに不快な暗い印象を與へて居るだらうかと想到して、私も亦重い、深い溜息を洩らさないわけに行かなかつた。

現代は疑獄流行の時代である。此の數年來大小の疑獄が活動寫眞の映畫のやうに展開されて殆ど窮極するところを知らない。滿鐵事件、阿片事件、砂利事件、道路事件其の他稅關、瓦

斯、電氣、郵便、外米に關した方面にも疑獄のヒルムが、目まぐるしく展開された。比較的に正直物の集團であるところの文人社會を除くと、どの方面にも、疑獄的な空氣が隱晴のうちに敏活に渦卷いて居るではないか。今日まで、隱微の鐵假面を剝がれて世の中に發表された疑獄だけですらも、可なりに社會の道德的頽廢を思はせるものがあるが、尙ほ司直の手が鈍く黑幕のうちに隱蔽されて居るところのいろいろの醜い事件を剔決するならば、いくらでも、新しい疑獄のヒルムが展開されることであらう。

文化が今日のやうに非常に進んで、疑獄の數が年々殖えてゆくことは、一見矛盾のやうであるけれども、決して左様ではない。現代文化に附纏ふ制度上、組織上の欠陷が執念強く殘存して居て、それが個人の飽くことなき生存慾と觸れ合ひ、搦み合ふと、いろいろの犯罪が釀し出さるゝのである。資本主義を背景として居る社會組織から來る弊害、思想上の混亂から來る病毒、金權政治の中から生ずる各種の毒菌、左様した環境にあつて、生存競爭の荒波にもまれながら、放恣な生存慾を無限に擴張してゆかうとすると、どうしても罪惡の淵に陷り易いのである。唯物主義的で虛榮的で、道德意識の鈍いものは、ともすると、殺傷、詐欺、横領と云つたやうな罪を犯し易くなるわけだ。

それが現代日本の大勢である。

思ふに、現代文化が理想的境地に達して、社會の組織及び制度が完成されて、萬人の幸福を比較的平等に實現するやうにならない限りは、疑獄の發生や、流行を阻止することが出來ないであらう。畢竟、各種の疑獄は、進歩の途中にある現代文化の蔭に發生するところの文明病で、社會及び個人の欠陷に付け入つて、其の恐るべき病毒を逞しうするのだ。私が專攻して居る近世日本史を見ても、收賄や、詐僞や、横領や、邪教利用の疑獄が比較的に絕えなくなつたのは、江戸時代に於ける文藝復興期の前後からである。江戸文化が漸く發達の序幕を開いた頃からである。それで私は、最近の疑獄續出を見るにつけて、近世日本史の上に現はれた各種の疑獄と對照して見て、現代の醜い世想の一面を江戸時代に見出し、江戸時代の病的な世相の一面を現代のうちに見出した。

江戸時代の疑獄中には、今日の大本教事件を聯想させるものもある。滿鐵事件、阿片事件に酷似したものもある。東京市の議員及び公吏の一部が收賄した事件に類したものもある。唯江戸時代に於ける疑獄は、其の險惡に於て、智巧に於て、術策に於て、今日の疑獄ほど深酷で複雜でない。それは、畢竟、文化狀態の相違から來たことで、宜い方にかけても、惡い方にかけ

ても、現代人の心が鋭く、複雑に微妙に働きかける點が、江戸時代に見られないほどになつて居ることを思はせるのである。

經濟中心の時代に壓迫された武人階級

江戸時代の疑獄が漸く増加し始めたのは、武力中心の時代が去つて、經濟中心の時代が來た頃からである。收賄、詐僞、横領、譎詐を主とした疑獄は、武力中心の時代に殆ど其の片影すら見出すことが出來なかつた。少くとも、幕吏や、武士の間には、それが絕無に近かつた。

蓋し武力中心の時代には、幕吏や、一般武士の生活が質素で剛健で、物慾に累せられるやうなことがなかつた爲め、收賄の必要もなく、詐僞を働く餘儀ない事情もなかつた。彼等は、其の品位と體面とを安全に維持してゆくことが出來た。けれども久しい間、靜平な時代が續いて、殆ど武力を中心とするところの必然性がなくて、寧ろ經濟を中心としなければならぬ時代が來ると、今まで強く壓迫されて來た町人が經濟を支配する一分子として徐ろに頭を擡げて、逆に武士、大名らを壓迫することになつたのである。

大名や、武士は、金錢に淡泊であると云ふよりも、寧ろそれを卑んで、經濟觀念が皆無であつたから、時勢の轉回から來た經濟中心の世の中に對しては、餘りに經濟的に幼稚であり、無力であつた。彼等は、表面それに對して、昂然として降伏しない態度を示した。けれども彼等は、それが爲めに何の得るところもなかつた。經濟中心の時代は容赦なく、彼等の前に肉迫して、彼等を事實的に壓迫しなければ措かなかつた。而して彼等が夢想だもしなかつた經濟上の貴族が町人中に續々發生した。

斯うなると、今まで、經濟力を蔑視して來た大名も、武士も、經濟中心の時代に向つて新たに降伏しなければならなかつた。左様した徴候が現はれ始めたのが元祿時代である。此の時代は、久しく武權の前に小さくなつて居た町人が、經濟的勢力を背景として、其の生存慾を伸張すべき時勢に遭遇したのである。其の個人生活の上に於て、大名、武士を凌ぐほどの豪奢、華麗を示したのも、此の時代である。當時紀國屋文左衞門、石川六兵衞、奈良屋茂左衞門の兄弟らは、町人の生活向上を代表した人々である。要するに優秀な經濟力を擁するものは、たとひ其の身分が武士より劣つて居ても、生活上に於ては、勝利者たり得ると云ふ趨勢を示して來た。

斯うして、町人が擡頭すると共に、民衆生活が進んで、物價が漸次騰貴するやうになると、武人階級は、それに比例してゆく文の増俸を得ないために生活難の壓迫に苦められねばならな

かつた。其の多數のものは、消極的に儉約主義を守つて、窮乏に堪えるか、或は積極的に自家の收入を増してゆくか、何れかを擇ばねばならなかつた。それで儉約主義に堪え得ないものは、借金主義を執つて、札差などのために巨利を貪り取られる有樣になつて來た。それは、時代の大轉換である。

斯うした時代に町人のみが、飲食に於て、衣服、住居に於て、遊蕩生活に於て、自家の思ふまゝの享樂をつくして、ひとり、大名、武士が、享樂の外に起つとを許さない。武人階級も町人階級とひとしく、奢侈を欲し、贅澤を好む傾向から脱するとが出來ない以上は、矢張、衣食住の上で、町人に讓らない善美を實現したくなるわけだ。在來に比して生存慾が膨脹し、擴大さるゝことを避け難いことになる。それは士風の一大變化である。

それ等の新趨勢を前にして、元祿時代に收賄、横領などの罪名を附せられて、非難された柳澤吉保や、吉保の下にあつて、財政を掌つて居て、醜聞があつた荻原重秀のことを考へると、既に疑獄的空氣が、此の時代から漸く濃厚になり始めて居たことが想像さるゝのである。

それで私は、玆に柳澤吉保や、荻原重秀のことから書いて行きたいと思ふのであるが、それに先立つて、家康時代に奇怪な一大疑獄を發生した大久保長安のことを簡單に述べて置きたい。江戸時代に於ける官金横領の罪を犯した最初の人は、恐らく、長安でなかつたらうかと思はれるからである。

江戸時代に於ける最初の官金横領者

慶長十八年四月二十五日のことである。金山奉行として、敏腕の名を得て居た大久保長安が突然、發狂して死んだ。得意の頂上に居て、非常に贅澤な生活を續けて來た長安が何故、狂死したかと云ふことは、一つの大きい謎であつた。既に彼れを信任して居た家康や其の周圍の謀臣の頭にも不可解の謎として當然思ひ浮べられたことであらう。

ところが、長安が狂死すると間もなく、彼れの嗣子藤十郎と長安が抱えて居た諸妾との間に財産上の爭ひが起つた。長安が有した巨額の財産は、其の生存中「自分が死んだら、必ずお前たちにも、其の一部を分與するぞ。」と諸妾に約束したのであるが、藤十郎は、嗣子の權利を主張して、何處までも、一切を自分のものとしやうと決心して、諸妾を壓迫した。それで諸妾は、其の事を幕府に訴へ出たのである。それが動機となつて、當局が、次第に長安の仕事を調査してゆくと、恐るべき彼れの陰謀と官金横領の罪跡が現はれて來たのである。

長安は、元來、武田信玄に仕へて居た猿樂師であつた。武田

家が亡びてから、家康の臣となつたが、勿論、最初は微賤の地位に置かれて居た。だが、彼れは聰明で、財政上に於ける手腕が優れて居たので、其の立身の機會を逸しなかつた。或時家康が近臣を集めて、『今所領の多い點からいふと、俺は相應に宜い方だが、財政の方では實に貧弱だ。年貢を重くすれば、金錢の窮乏は補へるが、百姓が苦むだらう。だから、年貢を重くしないで、金を作り出す方法はなからうか、どうぢや。遠慮なく、意見を云つて見ろ。』と左右を見廻はした。

其の折、近臣の多くは『家康ですら、解決し得ない難問を自分らの力でどうしやうと云ふわけに行かぬ。』と云つたやうな顏をして、何とも答へなかつた。だが、遙かに末席に居た長安は當時、未だ十兵衛と云つて、誰れにも注目されない程の身であつたが、家康の問ひに對しては、速座に宜い解答を與へ得る自信を持つて居た。けれども矢張、沈默を守つて一語も發しなかつた。結局、家康の難問は、難問の儘に殘された。

其の翌日、長安は、何と思つたか、家康の近侍靑山忠成の許に赴いた。忠成が長安を引見すると『昨日上樣が御下問なさいました財政上の事につきまして、私に一策が御座います。實は小身者ゆゑ、遠慮して、何も申上げなかつたので御座います。宜しく上樣へ御取次願ひます。』と云つた。それで、忠成から其の事を家康に上申して、長安の策が直ぐ採用された。それは、領内の鑛山から金銀を採掘することであつた。

家康の烱眼は、長安の材幹を見抜いて、先づ十分に取立てた上鑛山事業を掌らせた。長安は、玆に始めて金山奉行となつて、伊豆の金山から、金銀を採掘して、家康の財政を裕かにした。關ケ原の戰爭の時に家康が軍資に困らなかつたのも、それが爲めだつた。それ等の功績によつて、長安は家康に重用されて八王子で、三萬石を領する身となつた。また近江佐渡の税務を管理する地位をも與へられた。

斯うして、長安が微賤の境地から、富貴を恣にすることが出來る時代に入ると志が驕つて、秘密のうちに官金を横領して、あらゆる奢侈に用ゐた。だが、彼れの隱蔽術が巧妙であつた爲め、容易に其罪が發覺しなかつた。而して彼れの野心は益々大きくなつて、金山奉行位では滿足しなくなつた。はては幕府を顚覆しやうとするやうになつたと傳へられた程である。だが、それは正確な形跡がないので、長安が果して、イスパニヤから兵力を借りて、幕府を倒さうとしたか、どうかは疑問だ。けれども官金を横領したことは、彼れの巨富によつても明白である。彼れが臨終に其の遺體を『金棺に收めて葬つてくれ』と云ひ殘したのでも、豪奢な一端が窺はれる。

それ等の罪惡が、長安の秘密文書のうちから明みにされると、家康は、謀叛及び官金横領の罪名の下に長安の遺族を悉く死刑に處した上、其の所領、財産を沒收した。大名のうちにも、長安に親近した爲め、家康に睨まれて罰を受けたものがあつた。

以上は江戸時代に於ける官金横領を中心とした最初の疑獄の大要である。

柳澤吉保と荻原重秀の醜聞及び七十五萬兩分取事件

元祿時代に於ける疑獄的中心人物は、柳澤吉保と荻原重秀である。吉保は當時、德川内閣の首相たるべき實權を握つて居た手腕家である。重秀は、事實上の大藏大臣とも云ふべき地位に居た財政通である。此の二人が結托すれば、政治的にどんなことでも出來ると云ふ勢だつた。殊に閣僚中には、經濟的才幹ある人物がなくて、財政の基礎となるべき幕府の歳計表すら未だ出來て居なかつた時代であるから、官金を横領したり、費消したりすることは、極めて容易であつた。

吉保は、五百三十石の小身から出て、甲府十五萬石の大名となつた人であるから、其の異數の立身に對して、反感を抱いて吉保を見聞した政敵も少くない。これで、彼れに關する數實は恐く事實として受け入れるわけに行かないけれども、今悉く傳說さるゝところを擧げると、元祿八年の貨幣改鑄を利用して其の原料を鑄取した事、土木工事のある毎に御用商人と結托して私利を計つた事、諸大名から賄賂を取つた事などである。

彼れの收賄は、どの史書にも、事實として記錄されてあるから、必ずしも、政敵の中傷から出たものばかりとは思へないところゝある。元祿四年前後から、吉保の權勢が增して、政務のすべてを自分の意見通りに行ふことを許さ て居た程であるから、諸〻の得意と失意とは、彼れの一顰一笑によつて決せせられる爲めに、誰彼れの差別なく、吉保に贈物をしないものはなかつた。それが爲め、干鯛、氷砂糖、夜食少將と云ふやうな特殊の名稱さへ生じた。

氷砂糖とは、表面、器物のうちに氷砂糖を入れて、其の下に白銀を列べて吉保に贈ることである。干鯛とは箱の中へ二三尾の干鯛を列べて其の下に黃金を布いて贈ることである。夜食少將とは、吉保に媚びるものが贈物に苦心した末、手輕な夜食の獻立と共に粗末な菜や、籠へ國產の乾物などを載せて、質素らしく表面を裝うて、其の實多くの黃金を添へて贈ることである。少將の二字は、當時吉保が左近衞權少將の官位を有して居たので、夜食と少將とを結び付けて、一種の名稱としたのである

る。

彼れが貨幣の原料を窃取したと云はるゝ理由は、甲府城の主人となつた時、綱吉の許しを得て、自領内に通用する金貨を鑄造するため、幕府の官有物を窃かに流用したと傳へらるゝからである。當時、甲州の金鑛は、既に廢鑛となつて居て、原料を他から仰がねばならぬ事情があつたので、吉保は、勢ひ他から其の原料を集めねばならなかつた。それで彼れは、手近なところから、それを取つたのだと解釋されてゐる。

綱吉の時代には土木工事が極めて旺んであつた。紀伊國屋文左衛門の如きは、東叡山根本中堂の工事に材木を請負うて、一擧五十萬兩の巨利を得たと云はれた。而してそれ等の工事を催督したのは、大抵吉保であつたから、財利に疎くない彼れは、御用商人がひとり巨利を獲得するのを傍觀しなかつたにちがひないと傳へられてゐる。

勿論、幕府の歳計表すら出來て居ない時代であるから、吉保が貨幣の原料をどうして盜んだか、或は御用商人から、どの位の利益を分配せしめたか、それ等は、正確な證據を擧げて、明白に斷言する事が出來ない。けれども收賄を正當の役得として是認して居た彼れの人格から類推してゆくと、其處に暗い影が附纏ふて居るやうに思はれてならない。今日ならば、勿論、大疑獄となるべき問題である。

荻原重秀は、新井白石が家宣の代時に度々奸吏として斥しやうとした人物である。勿論、重秀とても、白石の云ふやうな徹底的な惡人ではないであらうけれども、大奥に出入するところの有力な女中や、醫師に少からぬ金品を贈つて、自家の地位を確保すると共に榮達をも計らうとした形跡が明かに存するところを見ると、大藏大臣の地位を惡用して、私腹を肥したと云はれたのは必ずしも不當の非難とは云へない。

彼れは、元祿八年の貨幣改鑄事務の主任となつて、敏活に働いて、幕府のために五百萬兩の利を作り出した。それ以來、正德二年に至る十八年間に金貨を改鑄すること二回、銀貨を改鑄すること五回に及んだが、何れも重秀が、それに主任となつて關係した。此の十八年間に彼れは相當に幕府のために盡すと同時に、自分は七十萬兩を横領して部下のものには五萬兩を得させた。それは、白石の身方とも云ふべき帆足萬里が「東潛夫論」のうちに斷言したところであるから、一概にそれを信用するわけに行かないけれども、重秀に私曲があつたことは、白石が私的感情からではなくて、公憤の上から、彼れを彈斥して餘力を殘さなかつたことでもわかる。而して白石が到頭、重秀に勝つて、重秀が大藏大臣の地位から斥けられたのみならず、重秀に

身方した金座年寄四人が遠流の刑に處せられたのを見ると、益々其處に暗い影があつて、今日ならば七十五萬兩の官金横領事件として一大疑獄を生じて、社會を驚かせたであらうと思はれる。

だが、吉保と重秀とが、司直の糺彈を免れたのは、未だ法權の活動が鈍かつたのみならず、二人の疑獄的人物が幕府の要路に居て、充分、其の罪惡を摘發し得なかつたのに依るのである。要するに、幕閣の人物が經濟中心時代の初期に入つて、其の風潮に動かされて物慾中心主義の傾向を示したことは、先づ吉保と重秀との上に反映されたと云つて宜い。

田沼時代の收賄流行と收賄文學

元祿以後、收賄、詐僞、横領などを中心とした罪惡が頻出して、當時の耳目を聳動させた疑獄が續いたのは田沼時代である。其の以前に天一坊の疑獄や、大阪城中に於ける官金一萬圓の紛失事件などがあつて、江戸文化の進歩と共に、文明病であるところの詭詐を主とした犯罪が、三都に增加した傾向を示して居た。左樣した色合が殊に濃厚になつたのは田沼時代である。

文化的に見ると、田沼時代は、日本最近史に入る序幕で、民衆文藝が漸く旺盛とならうとした時である。蘭學の進歩と共に醫術や、理化、博物などが近世的風潮に觸れて、新生の勢を示した時である。斯ういふ點から見ると、田沼時代は、甚だ有望であるが、風紀の上から觀察すると、餘りに悲觀すべき材料の多くを持つて居た。

此の時代に於ける風俗は、一體に優柔で、男女混浴や、春畫の流行や、女裝した美少年の跋扈や、髮を延ばした比丘尼の横行を見た。新たに出來た中洲の地には、隱賣女が多く集つて、殊に三味線すら彈けない不見轉の元祖とも云ふべき町藝者が始めて出來た。概して淫靡な空氣が、何處にも濃厚に渦卷いて居た。四千石の旗本藤枝外記が新吉原の大菱屋の遊女綾衣と田甫の農家で情死したのも矢張、此の時代であつた。

斯うした時代の軟弱な空氣の中にあつて、ひとり、武士のみが、剛健で、質實であることは出來なかつた。元祿期の豪華を生命とした武士でさへも、元龜天正時代の武士にくらべると、稍軟弱味を加へた觀がある。それが、享保の治世を經て、田沼時代に入ると、武人階級の多くが、經濟上の敗北者となつてしまつたのみならず、其の思想、感情も、大體に於て、町人化して餘程、軟弱の度合を增した。元祿期には、町人の武士化の方が多かつたのだが、田沼時代には、武士の町人化の方が遙かに多くなつた。

勿論、武士の町人化と云ふことは、不自然な、非人情的な狀態から、自然的な、人情的な狀態への推移を意味するもので、其處に一面、喜ぶべきところもあるのだが、風紀の方面に於ては、寧ろ悲むべき徵候が少くなかつた。殊に江戶の武人階級には左樣した弊害が最も著しかつた。收賄は一般に是認せられ、亂醉、遊蕩、賭博の類が流行して、武士の大墮落を實現した。

斯うした有樣であるから、收賄は、官吏の正當所得で公然の秘密だとされてゐた。當時將軍家治の信用を得て、德川內閣の總理大臣とも云ふべき地位に居た田沼意次は、收賄の本家となつてゐた。彼れは、新しい時代精神を代表して、積極的財政方針を執つた總明な進取的な自信を有した政治家であつたけれども、俗臭が多くて、道義的意識が鈍かつた。賄賂の多少によつて、人物の待遇を異にすると云ふやうな傾向が强かつた爲めに諸侯は爭うて彼れに贈賄した。

彼れの執政時代には重要な地位が、賄賂によつて得られる有樣だつた。大老となつた井伊直幸は、田沼に數千金を贈つた爲め、其の報酬として、大老職を得たと傳へられた。堀田正順が大阪城代の要職に就くことが出來たのは、田沼に三千金を贈つた爲め、松平正敏が奏者番に昇任されたのも、田沼が平生から望んでゐた屋敷地を贈つた爲めだつた。島津重豪は、田沼と提携するため、長さ三間の白銀の橋へ多くの金銀細工を盛つて贈つて、田沼の歡心を收めた。

金銀以外の贈物も亦田沼の門に山積されて居た觀があつた。諸侯は、田沼が奇巧を極めたオランダの器物を愛することを知つて、何れもオランダ人に珍しい贅澤品を作製させて、七曜の紋（田沼の常紋）を付けて贈つたので、オランダ人は、七曜の紋を日本の國民的紋章だと誤解した程であつた。

既に田沼が、斯うした有樣であるから、其の下僚にも收賄に力めたものが極めて多かつた。赤井忠晶、松本秀持の如きは、其の筆頭であつた。彼れ等は、收賄から得た黃金によつて、數十萬石の大名と同じやうな奢侈を極めた生活をした。秀持は當時の勘定奉行であつたが、夏になると、數人の妾を置いてある左右の室へ同じやうな蚊帳を釣らせて夜中、どの室へも自由に行くことが出來るやうにした。また彼れの小供が癇が強くて、雨の音を嫌つたところから、家上に棚を作つて、天幕を張つて、雨聲が全く聞えぬやうにしたと傳へられて居る。

天明元年に出版された通笑安宅關は當時の收賄流行を諷刺した黃表紙の一種で、其のうちには、義經の一行が、事なく、奥州へ下ることが出來たのは、安宅の關で役人等に贈賄した爲めだと云ふ意味のことが書いてある。而して義經の臣下で円天

下の一人とも云ふべき龜井が『此奴は富樫めを拖込む算段をするに限るね。』と云ふところも書いてある。『古今百代草叢書』のうちにも、田沼のことを『まいなゐ鳥』として『此鳥金華山に巣を喰ふ、名をまゐない鳥といふ、常に金銀を喰ふ事おびただし、恵少き時は、けんもほろゝにして、寄付かず。』と記した落書が出て居る。

宮中役人の不正に關する大疑獄

以上のやうに、收賄中心の時代に疑獄が發生するのは當然の歸結である。それが爲め、京都では、宮廷の役人が收賄して、百數十人のものが所罰された大疑獄が起つた。伏見では、奉行小堀政方が遊蕩のために人民を苦めたり、收賄、贈賄によつて自己の權勢を維持した爲め、疑獄を生じた。江戸では、邪教を唱へて、民衆を惑はした御藏門徒の疑獄が起つた。

蓋し、京都では、江戸と同じく、收賄の風が役人の間にひどく流行して居た。當時幕府は、再三禁令を發して、請托や、賄賂の弊害を根絶しようと力めたけれども、內閣總理の地位に居た田沼が、徹底賄賂主義者であつた以上、左樣した弊害は絶えるわけがなかつた。殊に京都では宮中の役人で、賄方をして居たものが私曲を營んで居るとの噂が高かつた。

最初、幕府は、それに對して、傍觀的な態度を執つて居た。其のうち、安永二年十月、御所の賄方役人の不正が發露して、田村肥後守、高屋遠江守、津田能登守、西池主鈴、飯室左衛門少志の五人が官位を奪はれて獄に入れられた。彼等の罪狀は、出入の御用商人と結托して、賄帳に附かけをして置いたり、商人に支拂ふべき金を掠めたり、文書を僞造したりして、私腹を肥したと云ふにあつた。

幕府は、宮中賄方の不正を直ぐに知つたが、別に干涉しないで、尙ちつと傍觀して居た。ところが宮中役人らは幕府が干涉の手を伸ばすことをしないのを看て取つて、其後も不正を働くものが少くなかつた。いろ〳〵の醜聞が、續いて幕府當局の耳を驚かした。それで幕府でも、もう打ち捨てゝ置けないと決心して俄かに鋭い檢擧の手を不正役人の上に加へた。

穩かな京都の天地には、俄に暗い疑獄の空氣が漲り始めた。其行動に不正のあとがあるものは、容赦なく、町奉行の許に召喚されて、糺明を加へられた。或は突如として家宅搜索を受けたものや、獄舍に入れられたものが續々あつた。斯うして、嚴密に審理を加へてゆくと、其の罪人の範圍は、日每に擴大してゆくばかりであつた。宮中の思召では、特に憐みをかけて、寛大に處置するやうにとのことだつたが、幕府では、一旦、手を

附けた以上、根底から不正分子を一掃しなければやまない態度を示した。

斯うした結果、安永三年八月、宮中に奉仕して居た役人四十餘人が、官位を奪はれて、獄中の人となつた。また其の連累者百二十餘人も、重いのは死刑、輕いのは追放に處せられた。それから此の不正事件に關係のあつた御用商人八百餘人も悉く追放された。要するに京都では、空前の大疑獄であつて、當時の社會は、一寸此の噂で持ちきつた程である。

伏見奉行小堀政方の疑獄

京都の疑獄に續いて起つたのは伏見奉行小堀政方に關する疑獄である。小堀は、田沼の推擧によつて、安永七年九月、奉行の要位に就いて、最初は、相應に民政的方面に冴えた手腕を示して寧ろ評判の宜い方であつた。

けれども彼れには、以前から、遊蕩癖があつて、少しく、得意になると、女色に溺れてしまう弱點があつた。彼れが伏見奉行となる迄は、大阪の城番を勤めて居たが、其の任中、ある一歌伎の才色に魅せられて、時々外泊したり、職務を怠つたりした。それが爲め身分にふさはしくない金を撒いて、少からぬ負債に苦められた。其の時、彼れは祖先以來の家寶として傳へられて居た在中庵と云ふ茶壺を一千兩の質に入れて、僅かに當面の難局を切り抜けた。在中庵の茶壺は、足利義政が明から得たもので、茶道の方面では容易に手に入れることの出來ない名品であつた。

小堀は、伏見へ來て以來、最初は謹愼して居た爲めに彼れの欠點はわからなかつた。ところが、少しく評判が宜くなると、いろいろの私曲をやり出した。其の時分、彼れには一人の愛妾があつた。其の女は、江戸の醫師半井立仙の娘で、艶つぽい容姿をして居た上に文藝の素養もあつて、溢るゝばかりの才氣を持つて居た。だが、性來多情で、素行がよくない爲め、彼の女の兩親は、絶望して自分の子として見ないやうになつた。其の女の名は、芳子と云つた。

小堀は、不圖途上で、芳子の容姿を見て、ひどく懸想して、自分の妾としたのである。それ以來、芳子の才色に魅せられて彼の女の爲めには、千金を費すことを惜まないやうになつた。そればかりでなく、小堀は、京の歌伎の白い纖麗な肌や、優しい容姿にも誘惑されて、日夜遊蕩の空氣のうちに浸り切ると云ふ有樣になつた。左樣した結果は、直ぐに彼れの財政に影響して、再び莫大な負債を生じた。

當時、小堀は、京都所司代久世出雲守から家寶の茶壺を見せ

て貰ひたいと云はれて、非常に困つたことがあつた。彼れは芳子の知慧を借りて、やつと質に入れた茶壺を取出して出雲守に見せた。それには、伏見の豪商二十餘人を呼び出して、茶壺を請け出すべき一千兩の用金を命じたのだ。豪商らは、奉行の依賴だと云ふので、斷り切れないで、小堀の命令を受け入れた。だが、小堀に對しては、それ以來、不快な感じを抱くやうになつた。

ところが、小堀は、左樣解釋しなかつた。彼れは、豪商の手で、直ぐに一千兩の金が調達されたのを見て、自己の威望によるのだと信じた。而して芳子と共に、豪奢な生活を續けて、金がなくなると、また豪商らに用金を出させた。それが度々重なると、小堀の名望は全く地に落ちた。典醫師で、小堀の前途を心配した水島甲庵は、其の主人の非行を諫めて天明元年五月、自双してしまつた。

けれども小堀は、甲庵の諫めを容れないで一層、町民の上に壓迫を加へた。彼れはある一人の町人から巨額の賄賂を貪り取つて、附近の漁獵權一切を獨占させた。また伏見船改所の關錢を自分のものにして遊蕩費に充てようとした。勿論、それ等は漁民や、町人の烈しい反抗に逢うて、間もなく、取消したけれども、小堀の虐政は、一般に知れ渡つた。のみならず、彼の放蕩と妾宅とには、當局の有司にも發見された。江戸の道中奉行がある時、伏見役所の帳簿を點檢して、驛夫總立一萬二千五百人とあるのを見て小堀を究問すると、小堀の遊所通ひの送迎や、愛妾の供揃ひに使用したことがわかつて、ひどく、叱責したことがあつた。

それでも、小堀が其の地位を保つことが出來たのは、田沼の妾が小堀の妾と姉妹關係があつた爲めだと傳へられて居るが、これ勿論眞僞は明かでない。だが、收賄主義の田沼に對して小堀が賄賂を贈つて、始終、田沼の機嫌を伺つたことは、云ふ迄もないのである。ひとり、悲慘を極めたのは、小堀の壓制の下に呻吟した民衆であつた。彼等は、深く小堀を怨んで、其の嚴重な捜索の眼を逃れて、丸屋九兵衞、文珠九助の二人を代表者として天明五年七月、江戸に出發させた。二人は、九月十六日、寺社奉行松平伯耆守に一通の訴狀を差出して、小堀の虐政を暴露した。

當時は松平定信が、溜間詰となつて、幕政に參與する時代となつて、田沼の政治的壽命は日毎に短縮されつゝあつたので、小堀の虐政に對しては、愈よ糺明を加へられる時が來た。幕府は、天明七年十二月、小堀以下の人々を江戸へ呼び出して、嚴しく其の罪跡を調べて多年解決されなかつた問題を解決した。

其の時、小堀は、所領を奪はれて、失意の人となつた。九助は公事宿に監禁されてゐるうちに病んで、六十餘歳で罪人としての最後を遂げた。

邪教中心の疑獄と民衆の迷信

江戸時代に於て、最も振はなかつたのは宗教であつた。切支丹禁制以來、宗教家の地位は、生活安全を保證された上、新說を唱へない方が宜いとされて居たので、すべての僧侶は、殆ど靜平の夢を貪つて居た。偷安と荒怠と放埒とが、彼等の生を支配して居た。左樣した沈滯し切つた空氣中から、多くの破戒僧が出た、邪教を以て、民衆を惑はすものが出た。

邪教を唱へて、それを自家の利益を收める道具とする奸惡者に對して、當時の民衆は、兎角迷信に左右され易い傾きが多かつた。冷靜に其の是非を批判するやうな餘裕も、素養もなかつた。邪教を其の儘、眞理として受け入れた。其處に邪教を中心として起る無智の悲劇や、喜劇があつた。此の方面の疑獄は、左樣した事情の下に發生した。

歷史の表面に現はれた宗教方面の疑獄は、明和三年に於ける御藏門徒の處刑、文政十一年に於ける豐田貢一件などである。

御藏門徒は、最初京阪の地に勃興して、寶曆年間には多くの信者があつた。世間では當時『切支丹の邪法を行ふものだ。』と噂したが、勿論、キリスト教に似たところが少しある丈で、大體は、幼稚な邪教的のものに過ぎなかつた。

それを唱へたものは、一向宗御藏相傳などと云つて、非常に勿體を付けたのであるが、『德川太平記』などに記すところに依ると、其の修法は、先づ信徒を極めて靜かな一室若くは薄暗い藏の中へ導いて、在來辿つて來た罪の懺悔、告白をさせた後鏡に對して、自己の姿を凝視せしむるのである。其の罪の大小や有無によつて、佛菩薩とも見え、馬や牛や、犬とも見えると教へて、無智な男女を誘惑して、罪障消滅の方法を示すと云つて、金錢を貪り取るのを常とした。畢竟、幼稚な邪法を行ふたものに過ぎなかつた。

御藏門徒の一派が、江戸で旺んに流行したのは、明和二三年の頃である。最初、それが京阪から傳つて來たのは、寶曆六年頃であつた。其の敎頭となつた小細工次郎兵衞は、鍛冶方用達をして居た。其の高弟中には、行德村の百姓善兵衞と云ふものが居た。善兵衞は、信徒を隨喜させることに優れた技術を以て居た。彼れは、無智な男女を藏の中へ入れて、催眠術的な方法の下に、一同を感激的迷信に惑溺せしめた。それ等のことが、町奉行の耳へ入つたので、明和三年三月、御藏門徒と稱するも

のを悉く捕へて、吟味を加へることになつた。而して約半年の審理をした末、其の悉くのものを追放や、流罪に處した。其の人數は、可成りに多かつた。

豐田貢一件は、御藏門徒の處刑以上に京阪の町人を驚かした。貢の稻荷教を當時の町奉行は切支丹邪宗門と解釋して磔刑に處したが、其の内容には、キリスト教の一部を模したところや、神道を參考としたところがあつて、それへ幻術的、催眠術式の色彩を加へた奇怪なものであつた。貢の稻荷教の眞相を明かにするには、貢の師匠水野軍記と貢との關係を明かにする必要がある。

軍記の出生地は、はつきりしないが、西國方面だと云ふのが一番正しいやうだ。彼れは壯年時代に江戸へ出て生活したことがあり、京阪地方にも深い親みを持つて居た。彼れの職業は、書道を指南することであつた。其の關係から、一時、知人の推薦で、二條家の祐筆頭役となつたことがあつた。二條家をやめると、今度は、閑院宮家へ仕へたが、結局、我儘な彼れは、何處でも長く用ゐられなかつた。此の時代に彼れは、彼れ一流の邪教を思ひ付いて、そつと其の宣傳を始めたのである。

彼れの邪教宣傳に共鳴した數人の隨喜者のうちに豐田貢が居た。貢がそれに動かされた動機は、極めてロマンチツクである。貢は越中の出生で、二歳の時、父母に伴はれて、山城國才院村に移つた。十二歳から、諸所に下女奉公をして、二十四五歳の時、二條新地の藝者となつた。其の後、陰陽師齊藤伊織と夫婦になつたけれども、伊織にはまた宮川町の遊女桂との關係が出來て、貢は見捨てられた。貢は非常に伊織の薄情を恨んで刺殺さうと迄思ひつめたがやつと思ひ返して、糸屋わさの家に寄寓した。其の時、ふと、軍記と親しくするやうになつた。

貢は、ある時、自己半生の悲痛な經歴を軍記に話して、伊織と桂とに對する怨恨を洩らすと、軍記は、「それ程、憎いなら、桂の姿を見せてあげやう。」と云つて、桂の年齡、容貌を聽取つてから、ある一箇の密室へ導いて其處に點してあつた蠟燭を吹き消すと、忽ち桂が下女を伴うて、貢の方へ近付いてくる姿がはつきり見えた。貢はそれが幻像だと思へないで怒つて飛び付かうとすると、軍記はそれを留めて、桂の姿を消してしまつた。貢は蠟燭が元のやうに點されてから、軍記の幻術に魅せられたが如く、ぼんやりして居た。軍記は「今一つ私の奇術を見せよう。」と云つて、鉢の中へ水を入れた後靜かに、呪文を唱へると同時に、水が奔騰して、二尺ばかりの高さに達した。

貢は、それ等の不思議を見て、軍記に感服した色を見せた。ところが、軍記は快く笑つて「今のは一種の妖術だ、素より何の價値もない。だが、それよりも一段立ち優つた新しい宗教が

ある。それを教へてあげよう。」と云つたので、貫は玆に始めて軍記の邪教の説を聞くやうになつたと傳へられて居る。

幻術家の誘惑と三人の妖女

軍記が貫に教へた邪法は、要するに、天帝如來の畫像を用ゐた事や、センスマルハライソの咒文を唱へた事などの點に於てキリスト教の一部を模したと思はれる節がある。だが水浴を勸めたり、不動心を養成させたりするところは、神道の禊などを模した節がある。斯うした曖昧を極めたもので、信者は、常に天帝に向つて、センスマルハライソを唱へさへすれば、現在は勿論、未來も幸福だと云ふのが、其の要點であつた。

それに附隨して、迷信的な加持祈禱を教へたのだが、それは極めて幼稚な遣り方であつた。病人を早く快癒させようとするには、紙人形を作つて、其の裏へ病人の生年月日を記して、板へ張付けた後、病所を目當に大釘を幾本も打込むのだ。而して病人が全く快くなる迄、毎夜子の刻から丑の刻迄、一時間ばかり、鉢に清水を汲んで、人形に注ぎかけて、天帝に祈禱するのだ。斯うすると、どんな病氣でも快癒すると云ふのである。

また金銀が欲しいと思ふなら、矢張、紙人形を作つて、釘を打たずに、毎夜、センスマルハライソを唱へると、自然に湧くやうに金銀が夥しく寄つてくると云ふのだ。吉兇や、禍福の豫想なども、自分で、はつきりわかるやうになると云ふのだ。今日から見ると、幼稚で、迂拙なものだ。

けれども當時の町人の知識程度から云へば、それが、必ずしも、幼稚でも、迂拙でもなかつた。誰れにでもわかり易く、信じ易かつた。貫は下女や、藝妓などをして來た無智な階級に居たのであるから、彼の女が軍記に傾倒したのは當然の成行であつた。而して貫が軍記の邪教宣傳を手傳つたのは、文化七八年頃からであらう。軍記が文政七年病歿する頃には大分旺んでなかつたかと思はれる。

貫が唱へたのは稻荷教だ。彼の女は、文化七八年頃、京都八坂上ル町に家を構へて、易占稻荷明神下の看板を揭げた。其の家の内には稻荷社を設けて、それを豐國大明神と云つた。當時貫は五十歳を越えて居たが、眼鼻立が整つて、白綾の重ね着に緋の袴をはいて、檜扇を持つて、飽く迄、品位を高くしようとして居た。而して其の辯舌は、爽かで誰れとも應對することが巧であつたから、自然、彼の女に逢つたものは、其の魅力に引付けられた。

だが、形式は、斯うして、軍記のやり方と、ちがつて居ても内容は、大抵軍記の傳授を繰返したに過ぎなかつた。軍記が用

ゐた幻術のやうなものを貢も用ゐた。それでも當時に於て、斯うした邪教を弘める女性は、容易に出なかつたので、貢の評判は、いつか京阪に傳はつて、彼の女に歸依する信者も續々出來た。此の時、貢の邪教宣傳に最も早く共鳴して軍記の遺志を繼承したのは、貢と姉妹の約束をしたきぬと云ふ寡婦及びさのと云ふ同年配の不幸な老女であつた。

貢は流行に信仰的によくも、悪くも徹底したところがあつたけれども、さのは、きぬと共に、矢張、軍記の教へを受けたけれども、唯慾心のみ旺んだつた。さのは、其の忰新助と共謀して表面、宮方の隠居だと云つて、稲荷明神下を本業として、無智な男女を欺いて、少からぬ金品を取つた。其の被害者は約二十名に上つた。さのが貪り取つたのは、銀五十九貫目、金二十八兩、錢七百二十貫文、衣類三百二十點餘に上つた。

此の事は、大阪町奉行によつて摘發されて、さの及び其の共謀者新助以下數人の男女は、文政十年正月、獄舍に入れられた。其の吟味に當つたのは、有名な與力大鹽平八郎であつた。平八郎は單なる與力ではなかつた。陽明學者として一流の地歩を占めたのみならず、民政的手腕に於ても、町奉行に匹敵する程の材幹があつた。彼れの手が、此の邪教の上に伸びた以上、漫然其の皮相を摩する丈では止まなかつた。

平八郎は、根氣よく、さの等以下を究問した結果、天滿瀧田町に居たきぬとの關係を知り、きぬの居所で家宅捜索をして始めて豐田貢の手紙を發見して、到頭、大疑獄を生じた。當時きぬの家には、人の目の付かぬ天井の透間や、地下などに少からぬ金銀が隠匿されてあつた。それで、平八郎は、直ぐにきぬを捕へて投獄すると同時に、「八坂の見通し」と綽稱されて居た貢をも捕縛した。其の頃俗間では、平八郎が幻術を用ゐて、身形を變へて、貢の家に忍び入り彼の女の妖術を看破つたのだらうと傳説した程であつた。

斯うして、水野軍記の邪教宣傳を手傳つた三人の主要な女性が捕へられて、其の罪状が定まると、何れも、切支丹邪宗門を弘めたものとして、大阪三郷町中引廻しの上、磔刑に處することになつた。中心人物の軍記は、墳墓破壊の刑罰を受けた。其の他此の邪教に關係したり、共鳴したものゝうちに、牢死したもの磔刑に逢つたもの、禁錮、手鎖、過料等に處せられたものを合すると、二十數人に上つた。

以上のうちで、最も不幸なのは、軍記、貢らとは何の關係もなかつたのに、唯キリスト教に關係した本を書いたり、書籍を貯藏して居たと云ふので磔刑に逢つた藤田顯藏及び其の事をうつかり官憲の前で告げて罰せられた伊良子屋植藏らであつ

た。顯藏には、「燃犀餘稿」と題したキリスト教評論があつて單記とは全く異つた立脚點に居たのだ。

疑獄の上に反映された現代思潮

幕末になると、諸藩留守居役の驕奢、幕吏の墮落と云つたやうなことが、殊に目立つてくるが、疑獄方面は、安政の大獄の如く、勤王思想、倒幕運動などを主眼として起つたものゝほかには、別に記錄する程のものはない。

勿論、小さい瀆職事件のやうなものはあつた。例せば、松林伯圓の講談『安政三組盃』に現はれた鈴木藤吉郎が米油取引所設置其の他について、商人から収賄した嫌疑を受けて連累者數名と共に、安政五年七月、投獄されたことがある。

藤吉郎は、潤澤係と云ふ役を勤めて、品川臺場の工事や、藍染川、今川橋前の埋立、柳原、筋違門火除地開拓などに關係した。其の他、某藩の財政整理に當つたり、下總印幡沼の開墾にも力を入れた。要するに、彼れは相當の材幹はあつたが、それを抑制することを知らなかつた爲め、到頭、収賄の嫌疑の下に牢死した。

明治に入ると、一體に疑獄事件が殖えたやうに思はれる。茲に私が主眼として見るところの収賄中心の疑獄が最も多いのである。今、それを列擧すると、明治六年には、岩倉具視を中心とした二千兩分取の風說があつて先づ疑獄的空氣をほのめかした。次ぎに明治七年の尾去澤銅山事件、十三年の開拓使官有物拂下事件、二十二年の東京府會の収賄事件、二十四年から二十六年にかけて世の中を騷がした相馬事件、二十八年の鐵管事件、三十三年の東京市參事會員の収賄、三十五年の教科書事件、四十二年の日糖事件などがあつた。

更らに大正時代に入ると、シーメンス事件、大浦事件、阿夫利山林事件などが起つて、此の兩三年來、疑獄續出の有様となつた。以上の疑獄を觀察すると、其處に時代精神の推移が明かに反映されて居る。明治初年から、教育勅語が煥發される迄の時代は、新人と舊人との鬪爭から來た不安動揺及び道德的、宗教的に新舊思想の錯雜と混亂とを生じた空氣中に尾去澤事件、贋札事件、東京府會収賄事件が發生して居る。教育勅語の煥發があつて以來、國民的自覺が識者の間に高調されて、道義的標準が明示された爲め、思想界は一時、安定を得た形となつて、相馬事件を除くと、暫く醜惡な疑獄が發生しなかつた。

けれども日清戰爭後、思想界にいろいろの新運動が起つて、日本主義、世界主義、帝國主義などが唱へられ、續いて、ニイチエの個人主義、天才主義が高調されて、大西祝、矢野龍溪らに

よつて、社會主義思想が紹介さるゝに及んで、時代思潮は、著しく變つた。ニチイエの個人主義は、當時、舊道德、舊倫理、舊宗教から解放されて、何等か新しい思想のうちに憑據を得たいとあせつて居た青年を風靡したのみならず、中年者にも影響を與へた。三十三年に於ける東京市參事會の疑獄的中心人物だつた星亨は明かに個人主義者の權化であつた。勿論、個人主義そのものは必ずしも病的なものではないが、それが星亨のやうに極端なところ迄行くと、勢ひ弊害を生じないではやまなかつた。教科書事件、日糖事件などにも、宜い意味の個人主義ではなくて、わるい意味の個人主義が明かに反映されて居る。

大正時代の疑獄流行については、序説の中に於て、文化的に其の起生する所以を解釋してあるから、重ねて云はない。要するに、資本主義萬能の社會組織が改められない限り、自我中心の唯利思想が緩和されない限り、階級鬪爭や、生存慾の戰ひが調節されない限り、頽唐的享樂が矯正されない限り、金權政治が撤廢されない限り、力ある新宗教、新道德が起生しない限り醜い疑獄の續生することを抑へることが出來ない有樣だ。

明治時代に於ける二大疑獄

明治大正の疑獄中(收賄中心)私の頭に比較的に深く印象されて居るのは、星亨を中心とした東京市參事會の收賄事件、代議士二十餘名が買收された日糖事件、一部海軍々人の腐敗を曝露したシーメンス事件などである。思ふに、東京市の議員腐敗は明治三十二年春、二廓四宿の娼妓賦金全廢を議決した前後から明かに曝露されて來た。それは、遊廓の代表者が營業上から打算して、賦金輕減を熱望して、當時の府會議員福地源一郎、武藤直中らに賄賂を送つて、問題を起したのである。其の暗い秘密が先づ『大阪東雲新聞』のために摘發された。續いて『東西新聞』が東京方面で、その記事を轉載して、非難の聲を揚げたので、疑獄を生じたのだ。福地源一郎が政治的に失脚したのは、此の時のことで、彼れは東京府會議長の地位に居て、遊廓方面から五千圓を收賄したと傳へられたのである。

三十三年に於ける東京市參事會員の收賄は星亨が主動者となつた爲め、『東京毎日』で島田三郎の痛擊に逢つて、一大波瀾を生じた。星は米國公使時代に、ニューヨーク市に於けるタマニー・ホールの一派が、市政機關を左右して一切の有利事業を其の掌中に握つて居たのを親しく見て、東京市に於けるタマニー・ホールを自分の手で作らうとしたのだ。

彼れは三十二年六月、東京市會議員となると同時に、其の主我主義、唯利主義を極端に發揮して、關東派の自由黨員を指導

しつゝ、一部の商人と結托した。彼れが横濱港埋立地、東京市街鐵道、小樽築港問題に手を染めて、私腹を計つたのも、東京市參事會員を始め、市長、書記を門派のものによつて滿したのも、彼れの部下に居た市參事會員の一部が日本鉛管會社から三千圓の賄賂を貪つたのも、すべて、星享の活躍時代に起つたことである。

それ等の結果、收賄、贓金收受、公金費消、詐僞取財等の罪名の下に、星一派の市參事會員が續々、拘引されて、茲に大疑獄となつたのである。當時、星は『公盜の巨魁』として、四方から攻撃されて、到頭、遞相の地位を他に讓つて、辭職するに至つたが、其の主我主義、唯利主義を毫も改めなかつた爲め、結局、三十四年六月、伊庭想太郎の手で刺殺さるゝに至つた。

代議士の收賄は、帝國議會が開かれて以來、時々、起つたことがあつた。けれども日糖事件の如く、二十餘名の代議士が一時に處罰されたのは、空前の出來事であつた。此の疑獄は、製糖會社の重役が會社の非況を救ふため、政府に其の一切を買付けて不當の巨利を得ようとしたのが、物慾主義に囚はれた代議士と結び付いて發生したのである。

ところが、彼等の不誠實から出た計謀は、物の見事に失敗した。それと同時に、會社の內情が曝露して、四十二年四月、司法官の手によつて、吟味を加へらるゝに及んで、伏魔殿の蓋が切つて落されたのだ。代議士で收賄した人物中には、キリスト教の信者で清操を持して來た横井時雄なども居た。他に知名の政治家として、相當手腕ある松浦五兵衛、臼井哲夫なども居た。

當時傳ふるところによると、製糖の重役磯村、秋山らは、政友會の松浦五兵衛、澤田寧へ三萬圓を贈つて、成功謝金三十萬を與へる約束を結んだ。大同倶樂部の臼井哲夫には二萬圓を贈つて、成功謝金十萬圓を與へる覺書を交附した。それから進步黨の西村眞太郎へ一萬一千圓、横井時雄以下數名のものに六千五百圓を贈つた。荻野芳藏は、磯村らに向つて、成功謝金十五萬圓を要求したけれども、拒絕されたと傳へられた。何れにもせよ、其の贈賄金額は、在來の醜獄に比較すると、餘程、多額に上つた。收賄代議士の罪狀が確定してから、裁判官から命ぜられた追徵金が十三萬圓餘に上つて居たのである。

金權政治の弊！　日糖事件には、それが痛切に出て居るのだ。實業家の唯利主義も亦茲に極端に現はれて、國利を損じても、私利を得ようとする醜い心がはつきり出て居るのだ。其の犧牲となつて自刃した酒勾常明は悲慘だつた。

シーメンス事件と海軍々人の物質化

最後に私は、シーメンス事件の要領を記して此の篇を結ばう。

明治初年以來、薩閥が海軍を獨占して芋の蔓を伸ばし過ぎたことは國民の非難するところであつたが、未だ海軍々人の物質化功利化迄思ひ及んではゐなかつた。ところが、プーレーと云ふ男が、シーメンス會社の秘密書類を手に入れて、それを同社の重役に賣附けた事から、わが海軍部內に於ける物質化、功利化が、一部の有力な幹部に及んで居たことが明白に曝露されたのである。同時に、シーメンス會社のほのかにヴヰツカース會社からも收賄したことが明かになつたのである。

其の收賄は極めて大袈裟なものだつた。松本和(前中將)は四十萬九千八百圓、藤井光五郎(前少將)は約四十萬圓、澤崎寛猛(前大佐)は一萬一千餘圓を收賄した。而して此の事件に關係のあつた會社重役や、軍人が十餘名所罰された。此の問題は非常に重視されて、薩閥の海軍の巨頭山本權兵衛に對する攻擊となり、結局、山本內閣倒壞の致命傷となつた。勿論、山本伯の身邊に關して、種々の噂があつたのは誰れも周知の事だ。

故山路愛山氏は當時、海軍々人收賄のことに就て『獨立評論』で『シーメンス・シュッケルト會社事件に關し、獨逸法廷に於て一辯護士が引照せる書面の中に「シーメンス會社は日本の海軍某大官に總ての注文に對し三分五厘の口錢を支拂ふべきを約し且會社は該海軍大官の前任者とも同一方法にて好都合に取引したることを附言しあり」とある、其の「該海軍大官の前任者」とは果して何人を指せるものぞ。前年川崎造船所が經營難に陷れる時、巡洋艦平戶を建造せしめ、以て其の危急を救ひたるは誰なりや、昨年の春、其の造船所の鐵槌の音に促がされて、立つて內閣を組織したるものは何人なりや。』と叫んだ。

嗚呼疑獄の日本！　私が玆に『近世疑獄史論』を書いた微衷は、讀者諸氏の自ら諒解されるところであらう。文化的に頹唐の色を示しつゝある大正時代は、今正に一大轉換を行うて新しく更正せねばならぬのではないか。

現代人と山海思慕の心理

寺田精一

一　はしがき

峻嶺を攀ぢ幽谷を探り又蒼海に遊ぶことは、一部の現代人に見られる流行事となつた。而もその流行は、經濟界の好況時に見られ勝ちな一時的の淺薄な歡樂慾や輕浮な虛榮心などから企てられる旅行と異つて、頗る眞面目な又頗る高雅な或は又頗る熱心な思慕の情に驅られ、山や海そのものを愛し、それを憧憬し、それに自己を見出すことと自らに、痛切な要求を感じ、その要求に深い根柢を持つた流行である。私は、一面に於てこの事實の存在を眺め、他面に於て現代人の日常生活から得られる心理を思ふ時、この兩者の間に存する特殊な因果關係を見出し、少からぬ興味を感ずるのである。

二　他鄕の寛ぎ

山海を慕ふ心は、それを廣く解する時は旅を樂む心ともいはれる。旅を樂む心には、固より種々なものが加はつて居るからそれを一概にいふことは出來ないにしても、其の主な一つは他鄕の寛ぎといふことである。「旅の恥はかき捨て」といはしめた程に、自らの住地を離れ、未知の人々の間に投ずることは、旅人の心を寛げさすものである。

樣々な事情から、自己の自由な解放の出來ない狀態にある現代の人々は、如何に不本意ながらも自己を屈して居ることであらう。殊に單なる正義のみでも通れなければ、又自己のみが清ければと超然たることも出來なければ、又筋道が立つて居れば何時でも宜しいとはいはれない現代に於て、奥の奧を見、裏の裏を眺めなければならぬ現代人は、延びたい延びたいといふ自己を、如何に不自然に屈せしめて居るか。そればかりでなく悠々と人生を味ふといふことすらも不可能な境地に置かれて居る現代人は、自己並に自己の愛する妻子の生存の爲めに、脅されながら强ひられた激甚な競爭上の努力に、如何に不快を覺えながらも

引摺られて居るか。

このやうに不本意ながらも自己を屈して居る人々には、假令それが一時的の經驗に過ぎないにしても、又假令それが日常の自己を裏切つた形式で現はれるにしても、自己の自由な解放の經驗が、如何に貴い如何に樂しいものと映ずることであらう。旅行による他郷の寛ぎは、誠に偶然にもこの經驗を與へるものである。未知の人々の間に交りながら、或は何人の看視からも離れながら、思ふがまゝに動き又思ふがまゝに歌ひ食ひ遊ぶことは、如何に延び延びとした眞實の自らが、自らに生きて居る心地を與へることであらう。元來同類相集り相識互に親しむのは、吾々の最も自然な現はれではある、けれども其の最も自然な現はれを假令一時的であるにせよ去らしめたいと希ふ程に、吾々の現代の生活は、變態な不自然な事實に富んで居る。

或人は、この他郷の寛ぎに因つて得られる「旅の恥はかき捨て」を、世道人心の廢頽せる一表徴として居る。勿論、多くの様々な人々が、彼方からも此方からも入り亂れて、都市の生活といふやうなものが現はれて居る今日では、特別な旅に依らない恥のかき捨てが、他郷の寛ぎの氣分で可成りに放縦に行はれて居るのは爭はれない。けれどもこのやうな他郷の寛ぎを味つて、そこに暢達な生き甲斐ある經驗を追はねばならない事實を思ふ時、吾々は考へなければならない多くの問題を得るのである。吾も吾もと、旅に他郷の寛ぎを求める人々の多い丈け、愈痛切な問題が提出されるのである。

三　境遇の變化

現代程に人々が、自らの生存する境遇の變化を求めて居ることは少いであらう。假令知らず識らずの間にそれが求められて居ることが多いにせよ、又時には已むを得ず行はれて居るにせよ。創造や發展や進歩が、各變化に相違ないことから、人類の向上を望む上に變化は已むを得ぬことでもある。幾千年來同じ島嶼に又同じ谿谷に、特別な變化も見ずに遠い祖先の傳統を受け繼いで居る素樸な人類を見る時、變化を追ひ變化を求めて來た吾々の生活は、強ちに呪ふべきものではない。けれどもこの變化は必しも人類の高い發達の理想に、一歩一歩と近よる變化のみではなかつた。時には變化の爲めに變化が樂しまれ、或は強ひられた變化に苦しめられて、而もそれ等が已むに已まれぬ強い心的要求として現はれて居る。現代の人々の可なりの部分は、この種の心的要求に少からず惱まされて、それを醫す手段として或は酒精が或は性慾が或は單なる破壞が用ひられて居る。現代人の流行となつて居る山海を慕ふ心も、亦この種の比較的に

實知された形式のものといふことが出來るのである。

よく人はいふ、田園の人々が都市に憧憬することは、現代の一特徴であつて、それは都市が生活様式の複雜と文化の集中と享樂の可能とを有するからであると、如何にもさうである。農閑期に田園の人々が驚愕と讃嘆とを味ひながら、都市の大路を一團一團と相率いて彷徨するを見たものは、如何にもそれを信ずるであらう。けれども又他面から観察して、如何に都市の人々が田園の生活を追つて、其の餘裕の程度に準じた田園の味を樂しまうとしつつあるかを見たならば、そこに現代の生活といふものに包括された意味で、田園の人々の場合と相共通した何ものをも見出し得ないであらうか。私は、こゝに變化を愛好する心を擧げたいのである。

この變化を愛好する心は、現代人にとつて山海を慕ふ心で少からず達せられて居る。殊に交通機關の普及發達は、この變化を愛好する心を一層挑發した。比較的に短い時間で、日常の生活と全く異つた境地へ自己を入れ得るやうになつた。平生過度な心身上の刺激を受けて居る現代人は、耳目に映ずるものに何等かの變化を求めて居る。換言せば變化がないならば何等の感興をも覺え得ない狀態となつて居る。今日民衆的に享樂の中心となりつつある活動寫眞の、如何に變化に富める點に感興が向けられて居るかを見ても、上述の事實の一端を推察することが出來る。

且又現代人の焦々した落ちつかない心持は、それ自らが變化と調和し易い狀態である。而して變化の豐な、さうして比較的に穩なものは、山海の跋渉である、それればかりでなく、これは一時的に作爲的に自己の四圍を變化せしめ得る便宜がある。かくて現代人の心と山海を慕ふ心は、恰もよく調和し得るものとなつて居るのである。

四　征服の滿足

山海を慕ふ心には、往々征服の滿足の加味されて居ることがある。殊に峻嶺幽谷を跋渉する場合に於てさうである。極めて單調な山容であつても、それが群峯を拔いたものであると、其其の山顚を極めることと自らが、旅行者の心を惹くことになつて居る場合が少くない。我が邦の富士登山の如きそれである。勿論展望の絶佳なることも、主な要素となつて居るには相違ないが、假令展望は雲霧に遮られてしまつても、絶頂に達することが出來れば、登山の大部分の目的は達せられたとして滿足されるのである。又幽谷を探つたものが、斷崖に妨げられて奥を極めることの出來なかつた場合に、それまでの道程に神巧の

觀を味ふことが出來ても、甚だしい殘念なこととして考へられる。それに反して幽谷を極め盡して何等賞すべき奇勝の得られなかつた場合にも、其の谷を極めたといふ點に、多大の滿足が感ぜられるのである。

山嶺に登り得たものが、吾を忘れ手を振り上げて萬歳を絶叫し、氣息奄々として居た瞬間前の疲勞が、喜悦の情に蔽はれるのは何故であらう。それはいふまでもなく一つの仕事の完成に對する滿足の喜びであると共に、自ら踏破して地上の萬象を眼下に見たところに、自然を征服し得たとの感が、暗々裡であるにせよ、影響して居るのである。而してかかる經驗は幽谷を極めた場合よりも、絶頂を極めた場合が明瞭に知られるだけ、一層顯著な快感が味はれるのである。かかる征服の滿足は、誠に現代人によつて求められながら、而も得られなくて居るものである。即ち激甚な生存競爭から特に痛切に誘發されて居る、優越慾の要求を持ちながら、それを赤裸々に發表し滿足せしめることの出來ない現代の生活は、甞て本誌で述べたやうに、それが客觀化によつて滿足されたり、對人的でなくて滿足されたりして居る。登山者が好んで絶頂に攀ぢる心理などは、其後者に屬する一つの形式であつて、「お山の大將俺一人」を其のままに味つて居るのである。

而してここに興味のあることは、對他人的に激烈な競爭をなす丈けの勇氣を持つて居ない内氣な消極的な性格の人が、一面に於て峻嶺幽谷を跋渉することに無二の快樂を得て居る場合が往々ある。それは自ら對他人的に優越慾の滿足を遂し得ない人で、それを客觀化し他への競技を見物して、優越慾の滿足を買つて居る場合と、同一型に屬するものである。

この種の事實は、征服慾の旺盛であつた國民の中から、大旅行家を輩出せしめ、又大旅行の冒險に對して熱心な應援者を得て居ることに於ても注意される。のみならず最も征服慾の旺盛な青年に於て、最も多く山海殊に險しい山や絶壁が慕はれる點にも注意される。

五　自然の憧憬

如何に自然を支配し得たと信ずる人類も、矢張り自然の羈絆を脱することの出來ないと共に、自然に對しての極めて痛切な憧憬を持つて居る。如何に人工的な庭園に、藝術や科學の手腕を誇つても、そこに自然の石や草木が忘れられずに配される。如何に自然の風物から沒交涉に生活して居るものも、一鉢の植木に一輪の花に又一羽の鳴禽に、少からぬ愛着の念を持つて居る。

翻つて現代人の生活を見ると、次第に自然其の儘なる境地から自己を離して、人爲的な境地に陷つて居る。殊にこの關係は現代の生活の象徵とも云ふべき都市に於て甚だしい。即ち其の街路にも家屋にも、耳目に觸れるもの悉くが、自然から引き離されたものである。而も吾々自らの有する自然に對しての思慕の念は、これが爲めに忘れられるほどに、しかく薄弱なものではなくて、寧ろ愈々益々强められて行く。このことは複雜な心理に支配されて居ない兒童の場合に最もよく見られる。例へば村落の兒童が大都市の繁華雜閙な街路にあつて、驚愕自失の表情をなせるのと、大都市の兒童が村落の青々とした原野に立つて、歡呼して喜ぶのと、何れが吾々の本性に適したものであるか、それはいふまでもなく後者である。それ丈けに自然を離れて居るものには、自然に對しての憧憬が痛切なものとなるのである。從つて大都市に生活するものほど、人工の加はらない自然に最も强く憧憬し、それを索めては接しやうと努めて居る。

かくの如くに人工的環境の中に生活することの次第に多くなりつつある現代の生活は、出來る丈け人の踏み入らない深山幽谷へ分け入らうとする人々を、益々多く輩出せしめて居る。尤もかかる事實の一面には前に述べた變化の嗜好も加はらう、又單なる好奇心も交らう、けれども最も自然的な自然に觸れやうとする吾々自らの本性に、其の最も强い要求のあることを忘れてはならない。この意味で、海特に海岸よりも山地が、自然を慕ふ心持を以てされる旅行家には、一層適當したものとなるのである。而して實際上の現はれ方は、正しく其の通りである。從つて保健の問題の附加された海水遊びや温泉浴、懷古の問題の附加された舊蹟廻り等を除いた旅行は、吾々の生活が自然を離れることの多くなればなる程、益々山地へ向つて進められることとなるであらう。急劇に人爲的生活に倦きされるやうになつた現代に於て、深山幽谷の跋渉が、一つの流行となるに至つたことは、頗る興味ある事實といはねばならない。

六　有機的快感

動物である吾々には、相當な身體的活動に伴つて、有機的な快感を味つて居る。これはいふまでもなく主として身體的活動に伴つて旺盛にされた新陳代謝機能から、生理心理的に味はれる經驗である。この有機的快感は、自然のままの生活であるならば、特別に問題とされることではないが、若し自然的生活に比較して、身體的活動が少からず阻碍されでもすると、意識的に不快感を覺えるのみでなく、積極的に何等かの身體的勞作をなさうと努めしめる。

所謂筋肉勞働に對する精神勞働に從事して居る人々は、日常の生活が主に座業であつて、身體を大きく動かすことなく、肉體上の新陳代謝機能が緩漫になり勝ちである。この爲めに生理的心理的に得られる鬱した氣分は、常に活動の怠られてゐる方面の身體を動かすことによつて、最もよく放散せしめることが出來易い。而して現代の文明の進歩は、この所謂精神勞働者を增加せしめ、假令煩瑣な過勞な生活關係から得られる心理的變調はないにしても、常に何等かの鬱積した不快感を有機的に有して居るものを多からしめて居る。かくて現代人の精神生活に於ては、單純な運動要求から樣々な遊戯や娛樂や運動が試みられて居る。山海を慕つての旅行が、又この方面からも說明される。尤もかかる場合に、一次的の要求が表面上は二次的のものとして取扱はれ、「旅行がしたい、氣分も淸々しくなるから」といはれるやうなことも少くはない。

何人も一日の旅程を終へて相當な疲勞を得、夕方の宿に汗を流し去つて落ち付いた時の爽快は、忘れ得られないものであらう。或は急坂を登つて峠に達したものは、峯越しに吹き來る凉風の心地よさを、忘れ難いであらう。勿論かかる場合に、空氣の淸らかな中に入つて得られた有機的快感も忽にすることは出來ないが、それにも增して新陳代謝機能の旺盛に伴ふ快感は、旅行者の心を生々と麗かならしめるものである。この意味でも單なる海への旅行よりも、山地の旅行に殊に現代人所謂精神勞働者を向はしめる根柢がある。

七　神秘の迎合

現代人が山海への旅行を好む尙一つの根柢に、神祕の感の迎合といふことを加へたい。

現代の社會を論ずる人の多くが、殆んど相一致して迷信の流行を述べて居る。元來迷信の原因には、種々なものがあるけれども、生活の危惧や健康の不安や科學の過信や急劇な社會的變遷や現代宗教の不滿といつたやうなものが主なものであつて、之等に遭遇した人々は極めて容易に迷信に陷り易いのである。然るに現代の吾々の生活は、如何にもこれ等の迷信の原因たるべきものを、痛切に經驗せしめるやうな狀態となつて居る。かくて一面に文化の急速な發達を誇つて居るのに、他面に於ては樣々な形式と內容とを持つた迷信を、流行せしめて居るのである。

而して迷信に迎合し易い心の所有者は、迷信其のものが常に何等かの神祕の感を與へるものを包含して居ることから、如何なる現はれ方のものであつても、神祕的なものには極めて容易に迎合するのである。現代の人々に迷信に陷り易い要素のある

ことは、やがてこの神秘的なものに接してそれを讃嘆し、のみならず其のやうなものを常に求めつつある狀態といふことが出來る。けれどもかかる神秘的なものは、殆んど常に人の力を離れたものに於て、最もよく見出される。何等人工的要素の加味されて居ない自然の莊嚴や壯大や神巧や美觀は、誠にこの神秘的な對象として取り入れられ易いものである。この事實は、古來の宗教家が、自然の有するそれ等を如何に巧に利用したかでも知ることが出來る。

誰も仄暗いやうな沈默の谷に立つて、木の間から幽に漏れて居る日光の金線に觸れたものは、又人跡未踏の深山に分け入り、澄み渡つた紺碧の空に、天を摩するやうな峻峰の浮んだのを見たものは、如何に特殊な感に打たれることであらう。朝日に映え夕日に燒ける連峯や、黑曜のやうに明滅する星や、時々刻々に變化する展望や、風による山の唸りや水による谿の響など如何に特殊な感を與へることであらう。又大自然の中に、眇たる自らを見出した時、如何に特殊な感を得るであらう。而してそれ等の特殊な感は、何れも吾々を恍惚として自然の中に融合せしめ、神秘の感に導き易いものであつて、山嶽に對する思慕の念の厚い人々の、最も喜び味ふところのものである。

このやうに考へて見ると、山地殊に深い山地の旅行は、神秘の感を與へる材料に豐であつて、恰も現代の人々の要求して居るところを、滿足せしめ易いものといふことが出來る。かかる事實から興味のあることは、旅行に對する思慕の傾向が、海よりも山に進んで居ることである。即ち一般から見て海よりも山は、自然から得られる神秘の感を、一層多く有し勝ちで、それが現代人の心理に迎合し易いのである。殊に普通の山よりも靈山といはれるやうな山が、人の入り易い谿谷よりも人跡未踏の谿谷が、より慕はれて居ることは、益々現代人の神秘感に對する迎合を、立證するものといふことが出來る。

八　刺激の要求

最後に私は、四季の中殊に夏に於て、海や山の慕はれる根柢を、少しく述べて見たい。

今日の生活に於て、海や山を慕つてそれを比較的自由に滿足せしめて居るものは、概して何等かの方面に餘裕を有して居るものである。其の主な一團は、所謂精神勞働を以て生活して居るものである。從つて夏に與へられる休暇に、一時の閑散を得て居るものの少くないことも爭はれない。健康なものであるならば、何等かの活動をなすことと自らに、特殊な快感を味ふものである。そこで日常繁忙に生活して居つたものが、一時の閑散を

得ると程なく、そこに無聊の感を經驗し、必ずや何等かの活動を求めるやうになる。この要求に夏の旅行が少からず滿足を與へて居る。これも明かに認めねばならぬことであるが、その外に夏の炎暑に伴つた精神的事實からも、考へて見なければならないものがある。

其の一つは、單純な避暑の要求であつて、熱さ　ら弛緩した心身を冷氣によつて恢復せしめることと、山や海に遊んで新鮮な空氣と清麗な環境とによつて精神を爽快ならしめることである。これは何人も心づくところである。

其の二つは、私がここで述べやうとするものであつて、熱さから萎徴した心身は、常に何等かの刺激によつて興奮を得、それに依つて萎徴から脫しやうとする傾向がある。これは自己の生存の爲めに、企てられた自然の巧みには過ぎないが、この萎徴から興奮にまた弛緩から緊張に至らうとすることが、知らず識らずの間に、相當な强い要求として、吾々の行爲を支配して居る。熱帶地方の住民が、調味料に辛いものを好んで使用することも、吾々の社會で夏に刺激的の飲食物が喜ばれて居ることも、共に上述の事實を說明するものである。

かくて夏季に於ける吾々の心理の特徴は、單なる官能の方面ばかりでなく、複雜な精神的方面に於ても、何等かの刺激を暗々裡ながらに要求して居る。從つて夏季に試みられる旅行は、他の季節にも增して、變化の多い個處や普通の日常生活では到底想像することすらも出來ないやうな個處が選ばれ勝ちである。さうして其の種のものが、夏の旅行者には滿足を與へるのである。この點から觀ても、比較的に單調に終り易い海よりも、複雜珍奇變化を得易い山の方が、夏の旅行として喜ばれる場合が多いといはねばならない。殊に大都市の生活をして居て甚だしい人工的環境に慣れたものであるとその環境と最も相違した個處、換言せば最も自然的な自然に接し易い山殊に深山幽谷が、旅行地として最も感興を湧かしめ易いところとなり、喜ばれるところとなるのである。

九　結　末

山海を思慕する心に對して、私は上のやうに考へる。而も現代人が山海を思慕する場合に於て、殊に上述のやうな根柢の存在を認めるのである。

元來流行は、一般に一時的現象たるに過ぎない、從つて若し山海を思慕する心が、單純に一時的の流行思想であるならば、早晩見限らるべきものである。けれども吾々が現代の生活を考察する時、この山海を思慕する心が決して單純な一時的の流行

思想ではなく、相當に深刻な根柢の上に得られて居る現はれと認めなければならないから、今日見られて居る山海を思慕する心は、それが一時的の流行思想として忽諸に附せらるべきものではない。のみならず現代のやうな生活が、其の特色を發揮すればする程、愈廣く且強く、この山海思慕の心が人々の精神に培はれるものといはねばならない。

或る富豪の朝飯

淺海鰒庵

實業家のSは朝飯の紅茶を不味さうに啜つてゐる。

五六種の朝刊を取散らした十二疊敷の和洋折衷の居間の眞中に、大安座をかいて、煖爐棚の飾時計のセコンドにあやされながら、昨日の晝のB倶樂部のウエートレスの尖つた顏や、昨夜のM待合の藝者のペチヤンコな腰附きなどを念頭に浮べてゐる。然し視線は食卓の前に畏こまつてぎごちない居住ひをしてゐる仲働の胸のあたりに遊んでゐるのである。毎日何かで叱鳴られるに極つてゐる仲働は、粗相をすまいとする用心から、落附かない眸を俯向き勝に左右に配つてゐる。藝者やウエートレスから取戻して來たSの意識は、視線の留つてゐる仲働の胸の邊へ來て、其處で暫らく停滯する。それから除々にその鼻まで廻つて行く。

「これが女の數の中へはいるのか。イヤ俺達と同じ人間の部類に入れられてゐるのか。どうも不思議なほど莫迦らしいことだ」

と考へる。仲働が頭を上げる拍子に、Sの視線と打つ突かる。仲働は慌しい瞬きをする。Sの世界と仲働の世界の輕い交叉である。

第二の仲働が錫の盆の上に食後のバナナと枇杷を載せて靜かな足取ではいつて來る。飽きつぽいSの視線は忽ち第二の仲働の穢れた白足袋の爪先へ飛んで行く。爪先から眞直に銀杏返しの天邊まで一瞥して行く不氣味なSの視線を折疊んで、第二の仲働きが膝を突く。

「何だつまらない」

と云つた顔をしてSは外方を向く。硝子障子の外の中庭の棕櫚の緑が、今日も快晴の九時近い朝陽を受けて光つてゐる。

無造作にバナナを剝きながら、Sは今日のプログラムを思ひ出す。九時からのT財團法人の協議會、これはもう行けさうもない。十時はK會社の總會、K會社を思ひ出すと、すぐH專務の爺むさい頭髪や鐵線の近眼鏡を聯想する。するとに今度はプログラムを列擧することは已めて、Hの安全第一緻密一天張の野暮臭い人物を上場させる。あの茶羅鉾な、然し果斷で社交上手なP會社のT社長が、Hのことを低能兒だと云つたといふ話を思出して

「アイツにはア、見へるだらう」

と思つて可笑しくなる。Hに率ゐられてゐるほどの社員共である以上、皆Hに劣らない野暮臭いヤツ等の揃つてゐるに不思議はないなどとも思ふ。K會社の重だつた社員共の面を一緒くたに意識に上せて、點呼でもするやうに、並べた顔の上を通つて見る。特に氣を留めてやるやうな顔は一つもない。どれもこれも自分の前では堅くなつてペコペコ頭を下げるやうに出來てゐる人種であるのに失望する。

「段々世間が矢釜しくなつて、仕舞にはアイ等が束になつて俺に打つ突かつて來る?それがどうした。勞働問題も知識階級運動も、自分には精々犬の遠吠位のものだ。あの中でRとかいふヤツが理窟つぽいことを知つてゐて、危險團體に加入してゐるとか理解を持つてゐるとかいふ話だつたが、片つ端から頸を斬つて了うが可い。Hは何をしてゐるののだらうなどとも思ふ。

「ア仕舞つた。あんなヤツ等のことを考へるんではなかつた。そんな暇があるなら、S橋 B子の細い頸の一が餘つ程俺の頭に浮べてやる値打がある。ア忘れてゐた。Y堂の禿げ頭が持込んで來た丈山の布袋の横物の値踏をするんだつたつけ」

Sは少し苛々して、第三の仲働が置いて行つた緑茶の茶碗を下へ置くなり

「下げろ」

と吐鳴ると同時に食卓を顋で指す

Sの頭はプログラムへ戻つた。K會社の總會のあとは十時から商業會議所の小委員會、それを濟ましてN會社へ出勤して晝飯、この間にK男爵から廻す採用志願者との會見、S會者の社債引受現物團との會合がある筈だ。此處まで思出したが、餘り多いのであとは思出せない。呼鈴を鳴らして「お書齋」の書類鞄の中の手帖を取寄せる。追ッ掛けて書生がはいつてきて來訪者の名刺を差出す。Sは無表情の儘それを絨氈の上へおッ放り出

す。書生は中腰でまご／＼する。

『通して置けば可いぢやないか』

と「可いぢやないか」の「可い」の處へ特に語勢を強めて與慳貪に叱鳴りつける。書生がその不快なる來訪者その者であるやうな見幕である。Sは腹の中で「まア胡麻を擦りに來やがつた」と思つたのである。

Sは手帖を披いて

『成程午後はU侯の資立を見に行くんだつた』

と獨言を云ふ。

『それからS協會の役員會か、ヤア次はS子爵の社會事業寄附金物當の相談會か。さうは廻れるか知らん』

とまた繰どつ。SはS子爵を鬼門にしてゐる。追ツ掛け／＼寄附金の勸誘をして來るからである。Sは出席して顏役だけの面目も保ちたくもあるし、逃げて金を出さずに濟ましたくもあるのである。

Sは「毎日からせか／＼して立廻つてゐなければならないには遣り切れない」と思つてゐる。「と云つて葉山の別莊も飽き／＼する。輕井澤の方の普請を見に行つても可いんだが、木曾の棒材がまだ届いてはゐまい。マア仕方がないから不相變飛び廻つてゐることにしやう」といふ邊りへ考が落附く。

Sはかうして飛廻つてゐる位であるから全く忙しいに相違ないのであらうが、特に人に逢ふと『忙しい／＼』と云ふ癖がある。さうして約束時間などには正直に出掛けないことにしてゐる。待たせて置いたつてさうぐず／＼云ふほどの者が二三の人を除いて、ないことを誇らしく思つてゐる。新進のNなどのやうに流行ツ兒になつてゐて、本統に忙しさうな人間を待たして置くことを殊に愉快に思つてゐる。日の打合せなどには、×日も差支える、×日も駄目だ、×日は×次官に逢ふ日だ、×日は×會だ、×日の晩か、×日の早朝位なら明いてゐるといふやうなことと許り云つて、打合せ電話を架ける秘書を手胡擦らせることにしてゐる。それでゐて先が差支えると云ふと『ナニ×風情が差支るもないもんだ』てなことを云ふ。然し忙しい筈のSは存外大底の會合に顏を出してゐる。最近にでも緣の薄い工業協會の發會式や、平生反りの合はないM翁の壽宴や、舊部下のKの娘の結婚披露や、F新信社の二十紀年祝會などへまでモーニングコートを着て出席してゐる。孰れも御馳走や餘興の出る會ばかりである。

Sが寄附金相談會の席まで來て、S子爵のおせつかいを苦々しく思つてゐる處へ電話が架かる。Sのお齒眦りの取れない取次書生の言上する處によると、Rから自分の作つてゐるB會社の發起人會を明日正午に開きたいから出てくれるかと云ふので

ある。Sは

「行くッ」

とたゞ二言に儉約して而も捨言で云ひ放つ。Sの頭はS子爵から歸つて來て、今度は今の電話のRの子澤山な家庭と、その子供等がまた一人なしに活動家であつて、派出に賑やかに實業界に氣勢を揚げてゐることに想到する。さうして自分の千何百萬の富の中に一人の子寶のない——それは出來るだけ物に紛れて思出すまいとしてゐる處の——ことを氣附かせられる。

「餘計な電話だ」

とSは中腹になる。さうして自分の使つてゐる會社の何百人もの貧乏人共が增俸運動を始める時の言立ての一つは乾度家族が段々殖えて行くといふことであるとを思出して、彼等が、この俺に取つては何物に換へても欲しいと思ふてゐる子寶を、身の程知らずにどん／＼殖やしてゐることに反感を持つて、妙に反對してやりたくなるのを例としてゐる。

寄附金相談會のあとは六時から銀行團の招宴でH待合へ行くことになつてゐる。Sは今日の日課のつまらない驅け廻りの中では、この招宴に輕い興味を持つてゐる。銀行團を牛耳るのがIである以上、藝者のT子が必ず出て來ると思ふからである。太つちよのお婆に、變な眼附きと金の總入齒を見せられるのは下さらないが、T子に輕く水を向けられてゐるとの噂を惡るくは思へないのである。

招宴を中座して、Sが春から世話をしてゐるM子を聘んで、K待合で一時頃まで巫山戲る場面を想像すると、Sも稍蘇つたやうな生氣を感ずる。それがSの今日の心持ちにすればする主要な興味である。そんなことでもして一日の命の洗濯でもするより外はないとSは思つてゐるのである。そのM子を意識に上せると、Sは乾度N待合のお嬶からほのめかされたM子・K座のUとの風評を氣にする。Uなんて河原乞食風情が、自分階級の贅澤な樂しみと同じ程度の樂しみを、而かも金もない癖に、而も當の自分から奪つて、樂しんでゐるのを奇怪至極なことに思ふ。さういふことの出來る社會組織は可けないと思ふ。資本制度が勞働階級や智識階級を壓迫するのは些も不思議ではないが、自分の持つ購買力を持たないで、自分の獲る效果以上の效果を收める人間のゐるやうな社會組織は亂暴だと思ふ。Sは凡そ社會に行はれる不都合といふ不都合には瞑り切つてゐるに不拘、この不都合は一日も許して置けない不都合であると思ふのである。

仲働が一抱への郵便物を持つて來る。大抵は將課狀や會社の通知狀や西洋封筒の招待狀や相場新聞や田舍新聞、それでなければ押賣りの經濟雜誌などの印刷物ばかり、でなければ大概用

向の判つてゐる營業向の許狀、使てくれといふ賴み狀、金を貸してくれといふ手紙、明けて見やうと思ふやうたものは一向にない。孰れも封の儘で執事に下げて了う類のものである。中でK會社の社員を非難する拙い字の中傷の手紙を一通すさびに開けて見る。無文家のSでも三舍を避けるやうな珍妙の文句を半分ほど拾ひ讀みをして放り出す。

無意識に郵便物を引繰返してゐると、細君が出て來る。細君は時々Sの居間を覗いてはSの話してくれさうた汐合を待つてゐたのである。Sの太り肉の良い色艶をしてゐる軀に比べると、細君は瘦ぎすの引ツ立たない變哲もない細君である。

細君は年中執事總支配人と三人の書生を指圖して、Sの事務所を担當してゐる庶務取締役のやうなものである。Sの實印を保管して、Sの金庫の鍵を握つて、株券の虫干をして、銀行の通帳を合せて暮してゐる。Sは逗子にY子を、輕井澤にM子を置いて、その外には築地で半年一年の關係で遷延して行く多くの女を持つてゐる。だから細居は女でゐる必要がなくなつてゐる。旗本の娘である細君はその邊の覺悟を充分に持つて、女の嗜みを極度に遵守してゐる。細君は家に夫を見ないでS家の社長を見てゐる。Sは家の中では細君を意識しないで、細君の事務長を意識してゐるに過ぎない。細君はもう中性になつてゐるのである。だからSは何時だつて細君と夫婦らしい對談をする興味も時間も持たない。だから細君は大抵用談ばかりで引下がる。

『Kさんのお弔ひに贈る生花は何圓位のにいたしませう』

『三十圓人夫附で可からう』

『それからOが暇を貰ひたいと云ふんですが』

『五十圓も涙金をやれ』

これで二つ持つて來た用件が二つ極まる。細君は用件以上に物を云ふことを冒瀆だと思つてゐるらしい。Sも用件以上に受答ひをするのに煩勞を感ずるらしい。細君は無表情に引下がる。Sはそれを無表情に見送る。Sは細君に對して鐵筋コンクリートのやうに不燃質である。

ものの五六秒もあたりを見廻したSは、俄かに兩手を存分に宙に擴げて、大欠伸を一つする。その序に腹の底から出るやうな聲を張上げて

『オイツ』

と仲働きを呼ぶ。Sは今度は呼鈴に氣が附かないのである。

『自働車の用意をしろツ』

Sは力を入れてむツくと立上つて居間を出る。拭き上げてある廊下に、Sの履いたスリツパがピチヤ〳〵音を立てる。始めて

應接間のドアを閉める音がガチヤンと鳴つて、廣い邸宅が一頻り森となる。

夏、雜感

室生犀星

○

夏の暑い日中など、ふと動物園へ行つて見たくなる。冬のきらきらした寒い日もいいが、夏の日中もいい。他のものを見ないで、れいの白熊をぼんやり眺めてゐると、いい氣もちになる。白い毛並が濡れてゐる。ときどき、水溜へ浮いたりする。可哀いい氣がする。見つめてゐるほど飽きない。大きな奴が食パンを噛つてゐるのも可愛い氣がする。それが食パンだけに西洋くさいやうな氣がする。

それから元氣のいい虎や豹も、ついでに象も見てかへる。白く光つた外光や樹木や暑氣や、どこかで煌めく白晝の星座や、さういふものが、これらの動物と私の頭との間をうまく調和してくる。

動物園を出て、公園の立木の間のベンチに腰かけてゐると、ふしぎに青い樹々の間に、白熊や象や虎や、さういふものが、ぼんやり虫目金を覗くやうにみえてくる……。動物と樹木とのつながりがハツキリわかつてくる。

○

夏になると、星をみることが多い。さういふ機會がふえる。星からも人間からも近づき合ふやうな氣がする。子供の多い家庭では星へ電話をかけて見るなどと言はれるほどである。

庭へでて、ぼんやり星をみてゐると、やはり星の美しいのに驚く。どうしてああいふ色があるかと思ふくらゐだ。數へても數へつくせない。ふしぎに、星をみてゐると五分や十分の時間がいつの間にか經つてゐる。五分や十分の時間でも、それを特に經たせようとしても、たいがい倦きるものだ。人間の顔なぞ一分間見てゐると倦きる。が、ふしぎに星をみてゐる

と、それが何時の間にか經つてしまつてゐる。

私は毎年夏になると、きまつて去年讀んだ星の本を引張り出して讀む。幾度も讀み、かなり解つてゐるが、やはり何處かに新味があるやうな氣がする。北國に生れた私は、大吹雪のあとの鋭い斷雲の間に煌めく星にも馴れてゐるが、ふと、上野廣小路や銀座や、電車や自働車の窓から、きらめく星をながめるのも、頭へ殘る。街巷のさまざまな賑はひのなかから、それと同じい天上の祭のやうな星座をながめることも樂しみだ。時計塔の避雷針に引ッかかつてゐるやうな星も、みてゐて忘られない氣がする。

○

去年、輕井澤へちよいと行つて、そこから發つ客車に乘り合せた。五六人の西洋人が汚れたトランクを積みかさねて、ちやうど適當な高さで、トランプを切つてゐた。緋鯉のやうな奴や、鯰のやうなのや、キリギリスのやうな細い服の人や、また、ふしぎに巴丹杏のやうに肥つてゐる奴もゐた。みんな傍若無人にトランプに熱中してゐた。私と商人風な男きりで、あとは西洋人ばかりだつた。かれらのうちの巴丹杏のやうな奴は、輕井澤から上野まで五時間打通しにパイプを啣へてゐた。他の連中もみな煙草を嚙むやうに喫んでゐた。その喫煙の量の多いのに驚いた。

それから、其トランプで殆ど何のたいくつもしないで五時間を客車に送つてゐたのにも、ちよいと感心した。自分の室にでも居るやうに慣れてゐたからだ。一人の婦人がしきりに切札をながめてゐたが、上野へつく二時間前にとうたう仲間へはいつた。始めて乘り合した人のやうに思へた。

かれらが上野へつくと、立派な自働車が迎へにきてゐたのにも、ちよいと用意周到な旅行のやうで感心した。

○

やはりその旅行で、長野の善光寺の、あの廣い境内の熱い日の匂ひに滲せて屋根頭の鐸鈴が、もの憂い風にゆすられて鳴つてゐたのも、まだ忘れない。緑青を噴いた形のよい古い風鈴であつた。それが白い境内の道から反射した光に浮きあがつて絶えずれりりんと鳴つてゐた。

上野の五重の塔の鈴とよく似てゐた。一つ欲しいやうな氣がした。

○

輕井澤では、草の色が、目ざめるほど透きとほつてゐた。柔らかく、それでゐて、ふちにあるぎざぎざの强烈な高原の雜草は、穗にしろ莖にしろ、水氣がたつぷりあつて、思はず口でプツツリと切つて見たりしたほどだつた。其雜草の小徑を往來する西洋婦人の、ちいさい白い靴も忘られなかつた。何かの穗のやうで、すつすつと、動いて歩いてゐたからである。音もなく、極めて靜かで、可哀くて、品があつた。

それから西洋人に使はれてゐる女中らしいものの多いこと、それらが決つて西洋人らしい目つきを持つてゐることもまだ頭に殘つてゐる。

○

夏になると何よりいいことは、どういふ女の人でもちよいと美しく見られることである。紺や藍地の浴衣がよく黄色人種に調和がとれて、皮膚との工合が非常にぴつたりしてゐる。あれが西洋人のやうな白づくしの朝衣のやうなものだつたりすると、白着ばかりが幅つて顏が小さくて調和がとれない。やはり、藍や水色や紺のやうな植物色のあるものが、靜かな肉體を遶ふてゐるのが、どれほど美しいか知れない。

それに夏はあまりおしろひ氣が施されないために、地肌の潔よさがどの女にも見られる。お白粉といふものは、其自身が女を痩せさせてみせるため、皮膚の組織がそれをしつとりと吸ひ込む質のひとにのみ向くやうに思はれる。それ故、その反對の質の皮膚には向かない。潤澤のある皮膚にのみそれが向く。しかし夏になると、その潤ひがどのやうな皮膚にもゆき亘つてゐるため、さまざまな皮膚の自然色が踏き出される。もゝ色、べに、光つた赤、冴えたうすい紅色、黄味がかつた紅色など。

さつぱりと洗つたやうな顏が、夏といちばんよい調和をもつ。も一つは、烈しい紅色をもつた女は、樹木の旺んに伸び茂む季節だけに、よけいは美しく見える。靜かな白い顏など、夏では寂しげに見える。自然があまり激し過ぎる青色や光線をもつために。つまり光線を撥きつけるやうな健康な皮膚の彈力あるものに限り、夏と和合して見える。

○

靑みの堆積してゐる樹木ばかり見てゐると痩せるやうな氣がするが、それはこちらの健康がよくないからである。ほつそりした身つくろひをした婦人が、あまりに痛々しく見えるのもほつそりしたところが、夏の樹木や光線や道路なぞの盛んな色彩に負けてしまふからである。

○

よく晩なぞ、氷店でラムネやサイダア、氷水などをあをあたと冷たさうに飲む女をみると穢な氣になる。唇の色ばかり冴えてゐる。それに女のからだには非常な水分が必要なやうにも考へられる。なんだか植物のやうに、それが私どもにない特別な露のやうにみえる。むかしからいふ水性といふことも考へられく。真赤な唇でがりがりと透明な氷を噛んだり、生水を飲んだりする。いつたい。あゝいふ弱々しい肉體にあゝいふ冷たい飲みものが、注ぎこまれることさへ不思議な感じがする。

○

郊外へきてから五六年になるが、雨がふると、訪問者が滅多にない。春とか、秋が一番多いのもふしぎである。雨がふると落ち着いて仕事ができる。

珍らしいものでは、百足、すいちよ、いなご、甲虫など、ちよいとした庭木があれば、きつと啼きにくる。それと同じいやうに、郊外には珍らしい女優のやうな女や、モデル女などが、白い犬のやうに晩方など、青い垣根にはさまれた小路の奥から出てくる。さうかと思ふと、市街自働車の車掌などが、朝と晩とにステエションを指して、朝は朝日の光に、晩はおそく人通りもない路をこつそりと歩いてゆく。

どこか、馨しい匂ひと、オペラバツクのやうに匂つたのと、山梔子花のやうに瘠せて白いのと、すうと澄したのと、それらが、ごつちやになつて、郊外の晩方、れいの、小路の奥から出てくる。

それから不思議な何々大學生とか、何々詩社とか、何々通信社とか、養鶏所とかの看板が至るところにある。何々大學生はきまつて自炊で、きまつて一日不在で、近所に不思議がられてゐる。肖像畫家が強盗だつたり、煙草屋が博奕場だつたりする。空氣銃をかついで、子供をつれた署長が、日曜の朝、ぽんぽん、屋根の雀をねらつては打つ、さうした二三日がつづくと、れいの、ふしぎな何々大學生が拘引されてゆくのである。

○

郊外生活は煩さい。

私がさきの家から越してきたとき、近所の家で植木屋があと始末をするために、手箒を借りた。それは私だちの知ることでなかつたに拘らず、二三日すると、その近所の家から葉書がきて、手箒のさきの切れないうちに返してくれと言つてきた。

いて、その手簡に不愉快な端書をはさんで返しにやつた。女中はかへつて、さきの奥さんが赤い顏をして、よう顏を上げなさらなかつたと言つた。その奥さんが去年の春、妹さんの手紙を持つて、文學をやる人からきたのだと言つて、私に意見をしてくれと云ひにきた人だつた。人の意見どころか、私自身さへあぶないと、その折の客と話して笑つてゐた。が、妹さんは間もなくやつてきて、その男の人の相談をしにきた。私は、自然にまかして、あなたの好きなやうにしたらいい、私はどつともいへないと返事をしてをいた。

その妹さんが來たことが、奥さんの旦那さまの氣にふれたらしく、手簡も、奥さんにかくして、一本やつつける氣で出したものらしかつた。奥さんが赤いかほをしてゐたといふからには、さうしか思へなかつた。やさしい人のやうに思へたからである。

○

その長屋にゐたころ、私の家に猫も犬もゐた。猫も犬もきらひな向ひの家では、よく女の人が水を打つかけた。ひどいときは足蹴にした。それから客の多い私の家では、近所へ戸の開け閉てや、玄關の立話などにも、ずゐぶん氣のひけることが多かつた。女中を使ふことさへ遠慮しなければならなかつた。一つ一つの生活が鏡と蓄音機とカチ合せたやうに聞える近所へは、できるだけ注意しても、なほ反感を買ふことが多いのである。

夢と現實

橋本五郎

はしがき

『痴人夢を說く』と謂ふ。語法を少しく換えると『夢を說く者は痴人である』とも謂へる。すると私抔もやはり、其痴人の仲間なのかも知れない。

少年時代の夢はいゝ。お月樣がぽかりと口を開いたり、何とか大將が相撲を取つて負けたり、そんなのは取立てゝ珍しいと云ふ程でもない。私は、地球が眞つ二つに割れたので、いゝことりも

ちを塗つて喰つ着けた——經驗さへある。然しそれらは、お笑ひ草でありお愛嬌であるに過ぎない。

金錢を拾ふ抔の夢は、貧しい者の誰もが見る。子供も大人も見る。殊に、少年時代から青年の初期へかけてが最も多いやうだ。念入りなのに成ると、一錢が二錢になり十錢になり——圓になり、遣へば遣ふ程殖えて行つたりする。それは單純で熾烈な欲求の念が、極めて端的に夢現化するものであらうが、年をとるに隨つて、諦めの修養が積んで來る故か、其度數がだん〳〵減つて行く。くだらない然し悲慘な夢だ。

聖人は夢を見ないと謂ふが、滿更さうでも無いだらう。聖人にも聖人らしい夢があるに違ひない。が、見る度數が俗人に比して非常に尠かつたと云ふ事だけは、容易に肯く事が出來る。それは、聖人には夢を見る必要が殆んど無かつたから。聖人の現實生活其物が一種の夢——理想であつたから。してみると、夢は滿たされぬ現實に對する理想化であり、囚はれた現實に對する自由化である。科學者の內にもさうした說を唱へる者があるやうだが、一部の眞理には違ひない。然し、もとよりそれが全部ではない。

奇拔なもの、もつともらしいもの、在りふれたもの、くだらないもの、詮じ詰めると大抵は雜夢だ。現實とまるで緣の懸け離れて居るか、縱し連絡はあつても出鱈目だつたりする。又さざ〳〵と見て居ながら、眼が醒めると同時にけろりと忘れて了ふやうなのも多い。要するに無意味で取り留めがない。隨つて私には、古來俗間に行はれて來た所の夢占——蛇や火事を見るといゝとか齒が拔けると惡いとか云つた類の、吉凶判斷は信じられない。考へやうに據つては多少の根據を見出せない事もないが、それも要するにつけたりだ。

唯玆に正夢と云ふのがある。暗示や豫報の性質を帶びたものだ。神佛のお告げ——靈夢とか瑞夢とか云ふ宗敎的色彩を含んだものも、やはり其種類だ。此正夢に就いては、口碑や傳說が數多く物語つて居るが、今でも時折、老人達の間に繰り返されたり寄席抔で聽かせられたりする。それらは、もとより全部を事實として信ずる譯には行かないが、又一概に迷信や暗合と見做して排斥する事も出來ない。虛僞、誇張、修飾、さうした不純な分子も隨分含まれて居るだらう。が、中には確かな根據をもつて居ると認めてよいもの〻在る事も、忘れてはならない。

私はよく夢を見る。さうしてやはり雜夢が大部分を占めて居るが、時には暗示性に富んだ不思議な夢にぶつかる事がある。凶事、吉事、何か非常なものをそれに據つて豫知させられる場合もある。で、少年時代から夢を好み夢に親しんで來たが、近

年は特に其傾向が著しくなつた。慰籍、希望、光明、反省、さうしたものを與へられる事も尠くない。現實は餘りに窮屈で苦しい。窮屈で苦しい現實の絆から放たれて、自由な不思議な世界を悠遊する事に、私は限りない興味と慰樂を感じる。

さうした意味で、私は今玆に夢に就いての記錄を綴つてみやうと思ふ。――サテ、まづ私自身の實驗談から。

祖母と私

此頃私は中國邊の或歩兵聯隊で、一兵卒としての苦役生活を送つて居た。苦役――抔と云ふと、何だか或一派の人々の冷語じみて居るが(まあ話を聞いて下さい)、實際其當時の私としては、それが僞らぬ實感だつたのである。それ程私は苦しんだ。何しろ性來の運動嫌ひで、あの元氣盛りの中學時代でさへ、運動と名のつく事は殆んど何一つ遣らなかつたし、課業の内の器械體操さへ全然遣らず了ひに終つた位だつた。それが突然(と私には思へた)一變した生活に入つて、飽くまで頑丈な體軀と勤勉な勞働の經驗とをもつた若者達に交つて――私の隊には百姓の子が大多數を占て居た――、噂以上に激しい運動を強ひられたのだから、全く堪つたものではなかつた。

第一期の檢閲が終つて、所謂新兵時代が去つて、いよ〳〵初年兵と改稱されやうと云ふ時、それは私が入營してから五ケ月目、春の事であつた。東京では上野や飛鳥山の賑ふ頃であるけれど、私には、自然の美とか恩寵とか云ふものは更に感ぜられなかつた。廣い營庭の何處かには花の一瓣位は私に微笑を送つて居て呉れた事だらうが、又練兵場には櫻の一本や二本はあつた事だらうが、そんな悠長なものは、私の視界には全く入らなかつた。唯人間としての現實の絶大苦だけが、弱虫の私の全部を占領して居た。私としては麗かな光線を送つて來るあの太陽さへ、却て怨めしいものに思はれた。激しい勞働に驅使される身に取つては、それは盛夏の炎熱以上に苦痛を與へたから。

檢閲が終つて二日か三日かの慰勞休暇が出た。連日――と云ふよりは入營以來の身心の疲れが一時に出て、と倶に異常な精神の緊張が幾分弛んで、私は其晩、茹つたわかめのやうにぐつたりと成つて、熟睡して居た。……ふと幽かな物音が、水の傳はるやうに胸に感じて來た。遠い潮音を聽いて居るやうな、寂しいやうな懐しいやうな、變な響だ。響はだん〳〵はつきりして、ん、ん、ん――と一定の間を置いた輕い呻き聲が聽こえて來た。苦しみを愬へると云ふ程でもない。謂はゞ習慣性の音樂的の呻き聲だ。それは、私が十四五歳の時分から聽き慣れて居

るものだつた。

『あつ、お祖母さん！』

と思はず叫ばうとしたが、咽喉は鉛のやうに重くて聲が出ない。すると呻き聲は一層私の身近く迫つて來て、今にも祖母の姿が見えさうな心地がした。彫像のやうな端正な顔と鶴のやうに瘠せた身體とが、今にも眼の前に現像されさうな思ひがした。私の胸は懐しさで一杯だつた……。

ふと氣がつくと、私はやはり他の戰友達と同じやうに、鐵製の寢台の上に横はつて居た。びつしよりと全身に汗をかいて居た。高い天井から釣り下つた小さな電燈が、黄ろく濁つた光りを滲み出して佗しげに見えた。整頓棚の上にきちんと乘せられた、重箱を積み重ねたやうな幾枚もの軍服類が、光りの屆かない片側を闇に集めて、何ものかゞ其陰に潜んで居さうに思はれた。何時頃だか確かな刻限は判らないが、現に眞夜中である事は、深い水底のやうに靜まり返つて居るあたりの氣はひで頷はれた。

夢を見るのは久しぶりだつた。入營した初手の内こそ、母や姉妹達の夢も屢々見たけれど、激しい軍務に責め苛まれる爲めだらう、此處三月ばかりと云ふもの、寢た間の事は殆んど何も知らずに過して來た。それに、全く忘れて了つて居たと云つてもよい祖母が――姿は到頭見えなかつたけれど――夢に逢つて來たと云ふ事は、現もあれ珍しい事に違ひなかつた。してみると、忘れて居るやうでも私の胸には、やはり何處かに祖母が住んで居るのだな――そんな風に考へ始めると私の眼は妙に冴えて來て、少年時代の事共が沁々と憶ひ出されたのである。

祖母は、もう八十幾つかの老齢だつたが、數年前に生れて初めての病氣をした。其時一寸苦しんで呻いたのが、間もなく快くなつてからも口癖になつて、ん、ん、ん――と絶えず云つて居は。それが煩く耳について、私の旺盛な神經に障つて、祖母が退屈しのぎに態と云つてでも居るかのやうに思はれて、私は矢鱈に癇癪を起した。さうして勉強の妨害になると云ふ口實を楯に、あけすけに抗議を申込んだものだ。すると祖母は『はいはい』と肯きながらおとなしく默つて了ふが、ものゝ二三時間も經つと忘れたやうに又、ん、ん、ん――と始めるのだつた。

さうした小やかな爭ひを繰返して居る内に、いつか私の方で根まけをして了つたし、それに其後私は東京へ遊學に上つて了つたりして、其事は自然問題外へ消えて行 た。私が入營の爲めに四五年ぶりで歸つて來た時も、祖母はやはり呻き聲を止めなかつたが、それはもう、私の耳に不快な刺戟を與へる程のものでなく成つて居た。却て一種の懐しみをさへ感じさせた。

『五郎さんもう行くのかえ。ん、ん、そんなら達者でな。ん、ん、もう逢はれるか逢はれんか、判らんさかい、ん、ん、…』

私がいよ〳〵H市――其處は私達の郷里なのだが、私が遊學中に一家はK市に近いSと云ふ際地へ移住して居た――の兵營へ向つて出發する時、祖母は兩眼に涙を溜めながら、さう云つて別れを惜しんだ。

『お祖母さんちうたら氣の弱い。そんな心細い事云ひなさつたら、折角の首途に五郎が氣い惡うしますがね。何も心配しなさらんかて、直ぐ戻つて來るんやさかい、また逢へますわいね。……お祖母さんが此處一年や二年で、死ねて堪りますかいね。ほゝゝゝ……』

母はさう云つて可笑しがつた。亡くなつた父の遺命を承け繼いだかのやうな祖母の達者ぶりには、家族の誰もが日頃呆れて居る位で、隨つてさうした別れの言葉も無意味に取れるのだつた。私も思はず微笑を洩らしたが、それでも一寸變な心持になつた。

曾て祖父――私の産れる年に死んだので私は其顏を知らない――が、勿論維新以前の話であるが、幕府の催した砲術の競技會か何かで美事な手練を示して、中國筋に於ける斯道の大家として名譽を博した時の事だつた。祖母は其當日、氏神へ願ひ稀れな難行と祈禱を捧げた。決死の覺悟で演技に臨んだ祖父の爲めに、早朝から演技の終ると云ふ刻限迄祖母は油を湛へた自分の手を燈火の皿として、ジリ〳〵と燈心の焦げつく苦痛を耐へ忍んで、專念其成功を祈願して居た。云ふまでもなく掌の皮膚は無慘に燒け爛れて、事が終つてからも數日の間、激しい痛みに惱ませられたとの事だつた。

さうした女丈夫的な祖母だつたが、道に寄る年波で、私の眼には一個の好老婆としか映らなくなつた。それも私の上京以前に較べると、其頃はもう全くの子供同樣になつて居た。以前は小遣ひ錢の殆んど全部を孫達の爲めに、特に私の爲めに、喰べ物抔を買つて費して了つたが、私が東京から戻つて來た時は、私も大人に成つて居たけれど、もう飴のネヂ棒も煎餅も買つて與れはしなくなつた。さうしてそれとは反對に、私の持つて歸つた土産物のカステーラ抔を、齒が拔けてすぼりと落ち込んだ口もとをもぐ〳〵させながら、羊のやうな容子をして喰べて居た。其時も私はほろりとさせられた。

さうした記憶の頁を次々に繰つて居ると、私は、暫らく忘れて居た家庭が堪らなく戀しくなつて來た。

翌日、私は朝食を濟ますと直ぐに營門を出た。二時間足らず

の汽車が、妙に逆行して居るやうでもどかしかつた。

Ｓ驛から驅け足で辿り着いて門を潜らうとすると、ざわ〳〵と落着きのない氣はいがした。私は何となく胸騷ぎを覺えた。

『あゝ五郎さん、えらい早かつたやないか。どうしてまあ、そない早うに……？』

私の聲を聽きつけて來た母は、玄關に立ちはだかつたまゝ不思議さうにさう云つた。何か仔細でもありさうで、さうしてそれが何だか判じかねて、私がぼんやり突つ立つて居ると、

『あんた電報を見て來たんやろ……え、見ずに來たんか。そんならまだ知らんのやな。まあ早うお上り……』

母は早口にさう云つて、少しく狼狽氣味の私を、そゝくさと奥の間へ案内した。勝手の方には、近所の人達でも來て居るやうだつた。

思ひがけない室内の光景に、私は再び驚かされた。座敷の中央には、白い布で顏を覆はれた祖母（と私は直覺した）が横はつて、其枕許から細ひ香煙が靜かに立ち昇つて居た。さうして學校の敎師をして居る上の姉と、Ｋ市へ嫁づいて居る二人の姉と、十一になる末の妹とが、つゝましやかに左右に控へて居た。誰の顏にも、云ひ知れぬ愁ひが籠つて見えた。それが祖母の死んだものであると云ふ事は、母の說明を聽くまでに一目で私に知れた。

『死に目には逢へなんだけど、それでも亡くなられた翌日直ぐに、ひよこりあんたが戻つて來ると云ふのも、やつぱり佛さんの引合せやろかい……』

母は敬虔な態度で沁沁と物語つた。祖母は、一ケ月程前から何處が惡いと云ふ事なしに臥せつて居たが、到頭、昨夜の一時頃に安らかな往生を遂げて了つた。病氣の事を私に豫報しなかつたのは、軍務の忙しさを推し量つての母や姉の心遣りからで、さうして今朝二時間ばかり前に、隊へ宛てゝ死去の電報を打つたのだつた。それは多分、私の出發後に屆いた事だらう。

『然んな事を云ふと氣殘りになるかも知れんけど、お祖母さんはあんたの事を忘れられんと見えて、死なれる前ずつと、五郎々々と云ふてなさつてた……いとしいとは思ふても、何を云ふても軍隊の事やさかい……』

さう云ふ母の涙聲を聽いて居ると、私も知らず〳〵首垂れて、瞼が熱くなつて來るのを覺えた。

『私も實は、昨夜夢を見たんです……』

と口籠りがちに一伍一什を物語ると、母を初め姉達は顏を上げて私を見た。さうしてお互ひ同志も、異樣に緊張した眸を見き合つた。

『さう云ふとね、不思議な事があつたのです。ねえお母さん！』
上の姉がさう云ふと、母は思ひ當るやうに肯いて、
『ほんとやで！ いよ〳〵落ち入られる前に、五郎々々と云ふては塞ぎかけた眼を又開けなさるさかい、これがね……』と姉を指差しながら『お祖母さん、それ五郎が歸つて來ましたで。よう顔を見なさいや……さう云ふてあんたの代りに、自分の顔をひよいと突き出して見せて上げたんや。さう云ふたかて何が分りますかいな、もう眼が見えんのやもんね。……それでもお祖母さんは、安心したやうな容子をしなさつて、それから間もなく息を引き取んなさつた。今から考へると思ひ當るんやが、それ迄あんたの事を一生懸命に思ふとんなさつて、それで魂だけあんたの方へ行きなさつたんやね』

さうした話を、私は深い感激に戰きながら聽いて居た。そうして今更のやうに、子供の時から人に聞いたり書物で讀んだりしたそれに似た不思議な例が、身に泌みて思ひ合はされたのだつた。

魂が――通ふ科學者は何んと説明を下すか知らないが、兎に角それは、尠くも私個人には疑ふ事の出來ない事實である、死に臨んだ者の精神が或者に向つて集中され統一された時、其クライマツクスに達した最後の意志力が、對象者――殊に其精神が統一狀態に在る時の――に對して、普通人の驚異に價する反應作用を起すと云ふ事は、極めて有り得べき事ではなからうか。

祖母の姿がまさに見えやうとして私の夢が破れたのは、時刻の點から云つても、きつと『それ五郎が……』と云つて姉が首を差し延べた爲めに違ひない。それに據つて祖母は、最後の執着から放たれたのである。もし姉がさうしなかつたならば、あの時、祖母の姿は夢の中へ現れたであらう――と、私は今でも固く信じて居る。

女と牛

私は丑歳の生れである。（と云ふ事を、一寸記憶に留めて置いて下さい）

今から六年前の事だつた。其頃私は、關西のK市で小さな株式店を經營して居た。云ふまでもなく私達の商賣は、歐洲戰亂の好影響を受けてとん〳〵拍子に榮えて行つた。私も其の前の年は、二三の株式に思惑を試みたのが都合好く當つて、其に生れて初ての素晴らしい經驗だつたので、可なり上つ調子の氣分になつて居た。

『よう、若手の成金！』

そんな煽ての言葉を浴びせられては、仲間の者からほんとに目

た叩かれたりした。が、其年の二月に可なりの變動が起つて、素人は云ふまでもなく女人筋でも、東京や大阪の大手筋でさへ、倒れした者が尠くなかつた。もと〳〵經驗の淺い私が一溜りもなく、其餘波を喰つて溺れて了つたのは、別に不思議な事でもなかつた。私は致命傷に等しい手傷を負つて、折角ひれの附きかかつた店もむざ〳〵人手に渡さねばならなくなつた。是も生れて初ての苦い經驗だつたので、尠からず狼狽して、悲觀して、さうして誰もがする自棄遊びを始めたのだつた。

三月から四月へかけて、私はお靑樓（ちやや）に入り浸つて居た。何しろ正氣の沙汰では無かつたから、關係する藝妓抔も手當り次第と云ふ、亂暴狼籍さであつた。でも其內で一人、S子と云ふ若い妓との仲が最も永續きした。それが稍や――私自身としては――眞實の戀らしいものに成つて居た。

或夜の事、私は一人とある川べりを辿つて居た。すると、私の側を掠めるやうにつと追ひ越して行つた、二つの人影が眼に入つた。一人は、薄暗がりで顏がはつきりしないけれど、身裝（みなり）の模樣で男だと云ふ事は確かに知れた。連れの一人は女で、さうして驚いた事にはS子だつた。私の側をすり拔ける時に、まざ〳〵と其橫顏を認めたのである。私は思はずはつと立ち竦んだ。近頃ずつと逢ひ續けて自分の占有物のやうに思つて居た彼女が、今目前に他の男と連れ立つて、而も私を憚るやうな容子をして小走りに走つて行く。私は、不意に突き倒されたやうな激しい衝動を感じた。

『S子！』

私がいきなり呼び返すと、彼女はちらりと振り向きさま、

『ゆるして下さい！　ゆるして下さい……』

さう云ひながら、男と倶に直ぐ前の橋を渡つて逃げやうとした。私はかつと逆上して、續いて驅け出さうとしたが、足がしびれて動かない。渾身の力を罩めて焦（あせ）つても、動かない。どうしても動かない。…あつと血の出さうな叫び聲を擧げた途端、私の眼は醒めた。

夢だつた。厭な夢だつた。私はやはり彌生と云ふ待合の二階に、いつもの室に、何事もなく橫はつてゐた。傍を見るとS子も、宵のまゝの姿態で、やはり何事もなく臥せつて居た。絹の覆ひを洩れて來る電燈の靑い光りが、あどけない寢顏を彫像のやうに照らして見せた。私はほつと溜息を吐いた。

『う、う……』

と輕いうなり聲を洩らしたかと思ふと、ふと、S子もぱつちり眼を啓いた。

『あゝ恐（こは）かつた……』

『どうしたの？』

『夢を見ましてん。恐い〳〵そら恐い夢。……妾がな、川端やろか田圃やろか、何んでもそんな寂しいとこを歩いてましてん。するとなあんた、大けな〳〵そら大けな牛、其牛が妾の後から追ひかけて來まんね。そして逃げても逃げても、やつぱり追ひかけて來まんね……』

『お前一人だつたのか』

『いゝえお客さんと……』

『お客さんと……どんなお客さん？』

『さあ、誰やろかなあ……あんたかも知れん』

『嘘を吐け！』

私はさう云つたまゝ黙つて了つた。さうして自分自身の夢と照し合して、不思議な空恐しい思ひがした。彼女を脅かした其牛と云ふのは、此私では無かつたか――私の魂が牛の姿となつて、さうして彼女の夢に通つたのでは無からうか？

其翌年の夏だつた。

私はN市のTと云ふ事業家の許に寄寓して居た。失敗後O市に移つて或新聞の經濟記者を勤めたのが、其社に關係のあるT氏と知合になる原因だつた。T氏は所謂親分肌の人でもと〳〵世話好きな質でもあつたが、私の經歴（年の割合に波瀾に富んで居た）を面白がつて、特に株でしくじつたと云ふ點に一種の親しみと同情を寄せて、それで一方ならぬ面倒を見て呉れた。それはT氏自身も種々な投機市場に手を出して居て、可なり黒つぽい相場師だつた故でもあらう。それにT夫人も、株や期米に趣味をもつて居たから、私には持つて來いの肌合だつた。――私は夫妻の勸說で、半ば其參謀官と云ふ格で、N市の新聞社へ轉任して行つたのだつた。

それ迄の半年ばかりのO市生活に、私はすつかり氣を腐らして居た。華やかな町筋から俄に暗い横丁に這入つたやうに、堪らない寂しさを感じて居た。で、N市へ歸つて行つた時は、それは秋の初だつたが、全く甦つた思ひがした。それから十ケ月ばかりと云ふものは、唯もう夢のやうな思ひで暮して來た。處で人間の心と云ふ者は得てしてさう云ふ際に、古桶のたがのやうにいつとなく弛みが來て居たり、長期を過した未決囚のやうにふと變な退屈を感じて居たりするものだ。さうして、何か知ら新しい出來事を望んで居る。

私もそれに違ひはなかつた。T家へ行儀見習に來て居る小間使、名はK子と云つた。十九でも歳の割合にあどけない容子があつた。私はいつか、其の處女と關係を結んで居た。或蒸し暑

い晩、それはT夫妻がO市へ出掛けた留守中の事だつた――

私達二人は、廣い庭園に出て凉を入れて居た。K子はしやがんで、私は其側に立つて居た。瓢なりの泉水の面には、小さな噴水が降り注いで、其處へ燈籠の火がぼんやり映つて、薄白い飛沫と波紋が獅子のやうに縺れ合つた。すると貴婦人のやうに悠々と、緋鯉や金魚が水面に浮んで來た。二人は無言だつた。でも私は、何か知ら彼女に話しかけてみたい、物足らぬ思ひがして居た。……颯つと一しきり涼風が吹いて來た。すると築山の向ふの植込みから、薄暗い木蔭から、不意に怪しい人影が現れた。はつと私が肚胸を衝かれる隙も與へず、曲者は非常な素早さで駈け寄つて、K子の手を把つて引つ立てやうとした。彼女は一寸抵抗を試みたけれど、其異常な力の前には何の効も見えなかつた。私は必死の勇を揮つて、曲者を目がけて飛びかゝらうとした。が、何か知ら大きな物が行手を遮つて、焦つても踠いても、どうしても進めない……わつと喚いた自分の聲に氣がつくとそれは夢だつた。

私はやはりT家の一室で寢て居た。枕を外して背のあたりまで蒲團の外へずり出て居た。風を孕んだ蚊帳の裾が、私の額を壓しつけて居た。

『どうなすつたの？あなた何だか、魘されてゐらしたやうね』

『あゝ、夢を見て居た。厭な夢だつた……』

と云ひながらも私はK子の無事な顏を見て安心した。さうしてあたりを憚つて耳を澄ましたが、夜も可なり更けたやうだし、婆やの寢間は遠く隔たつて居たので、幸ひ悟られたやうな氣はひも無かつた。

『Kさんは起きて居たの？』

暫くして私はさう訊ねた。

『いゝえ、あなたの聲で眼が醒めたんですわ。妾も、厭な夢を見たの……』

『Kさんも……どんな夢？』

『牛の夢。大きな牛がね、妾のあとをつけて來て仕樣がないの。妾何だか氣味が惡かつたけれど、別にどうもしやしないやうだから、終ひには凝としやがんで居たんですの。するとね、其處へ人が妾を連れに來たものだから、其牛があばれ出して……』

『其連れに來た人つて誰？』

『誰だか……妾の伯父さんのやうでもあつたし、よく判らなかつたわ。兎に角厭な人。妾厭だつて云つても、無理に引つ張つて行かうとするのよ。そして眼が醒めたら、あなたも魘されてゐらしたの』

さうしたK子の話を、私は奇異の感に打たれて聽いて居た

――忘れもせぬ去年の春の經驗と思ひ合はしながら。

其後間もなく私とK子との仲は、T夫妻に知られて了つた。T氏も夫人も、却て渡りに船と喜んで、二人の緣を纏める事に奔走して呉れた。が、先方の、養ひ親の伯父とか云ふ頑固さうな老人がやつて來て、有無を云はさず彼女を連れて歸つた。K子は跡嗣の一人娘だつたし、それに私自身も一家の名跡を建てねばならない身だつたので、どちらか一方が主張を曲げない以上、妥協の餘地は無いのだつた。――又、云ひ遁れたが藝妓の子も、私がK市を引き拂ふ前に、或船成金とかに落籍されて了つた。

それにしても、さうした儚い別れを告げた私の女が、申合したやうに二人が二人とも、夢で牛に脅やかされたのはどうしたもので有らう？是を偶然の暗合と云つて了ふには、總ての事象が餘りに暗示的では無かつたらうか。もとより私は自分が丑歳生れであるからと云ふやうな荒唐無稽な十二支說抔を擔ぎ出さうとするのでは無い。が、年若い女抔は、私のやうな謂はゞ神秘的神經の持主に戀され愛されると、あの執拗を象徵化したやうな不氣味な動物を無意識的に聯想させられて、其結果が夢に現れて來るのだらうか。それとも又、女の心の奧底に何か知ら不純なものが潜んで居て、其意識――潜在と顯在とに拘らず――がさうした働きを爲すのだらうか。にしても、それが私の夢と交通し感應し合ふのは、どうした譯であらう？

それは兎もあれ、私の女が牛を夢見る場合が若し今後にも在つたとすると、私はまづ、やがて迫つて來る不吉な運命を豫期しなければ成らない。然しそれは、恐らく逃れる事の出來ない運命であらうも知れぬ――と、私は覺悟をして居るのである。

避暑し得ざるものの爲めに

秋水心頭に閃く

高島米峰

○

快川、慧春の火定、聞くだに肌に粟すと雖も、焉んぞ能く、鈍根劣機の徒の、範を爲すに足らむや。洞山、教ふるところの無寒暑の處、熱時熱殺と言ふと雖も、暑い時にはどうしたつて暑く、

大名と煽がれながら暑さかな

氷柱　煽風器、アイスクリームに漬つて居れば、成程、暇と財布は冷えもせむ、未だ心頭を滅却し得ずして、しかも果して何の涼ぞ。寧ろ、禪榻に臥して古賢と語らば、或は清風腋下に生じて、却つて苦熱を忘るゝを得むか。

○

道信大師は、禪宗の第四祖なり。その沙彌たりし時、三祖に禮して曰く、願くば、和尚慈悲、請ふ解脱の法門を與へよと。三祖曰はく、誰か汝を縛せる。道信曰く、人の縛するなし。三祖曰はく、已に人の縛するなし、何ぞ更に解脱を求めむや。道信言下に大悟すといふ。多少の涼味無きにあらず。

○

風外和尚、性枯淡、敢て塵事を念とせず。爲めに、米麥絶乏して、粟水を養ふこと難し。しかも、風外、尚ほ參徒の來宿を許して平然たり。會下の典座、奕堂、方丈に進んでその情を訴ふ。風外、舌を出して曰はく、我が舌猶存りや。奕堂曰はく、有り。風外曰はく、既に舌あり、何ぞ食ふに苦しまむやと。奕堂の頭上、正に冷水三斗。

○

白隱會下の一狂僧、自己即佛なりと稱して、佛經を破り一[illegible]

穢を拭ふ。人のこれを咎むるものあれば、則ち昂々然として曰はく、佛穴を拭ふに佛經を以てす。何の不可かこれあらむと。白隱これを聞き、狂僧に問うて曰はく、汝、佛經を以て臀糞を拭ふといふ、果して然るか。狂僧曰はく、然り、自己卽佛なり、何の妨げかこれあらむ。白隱徐に說いて曰はく、汝既に佛なり、佛穴を拭ふに、何ぞ佛經の故紙を用ゐむ。須く、淸淨なる白紙を用ひて、以てこれを拭ふべしと。白隱、氷嚢を狂僧の頭上に置くもの多少、狂僧の高熱忽ち下りて、禪病頓に平癒することを得たり。

○

遠州新居町龍谷寺の第九祖木堂和尙、磊落にして物に凝滯せず。曾て、江戸に入らむとして品川宿を過ぐ。偶々一ヶ郎あり、和尙を見て呼んで曰はく、和尙、冀くば登樓せよ。和尙顧みて曰はく、汝はこれ誰ぞや。女曰はく、和尙の檀家桝屋十藏の娘なり、連夜客無く、樓主爲に虐待すと。和尙卽ち之を憐み、圓頂黑衣のまゝ、女郎の室に入り、端坐して動かず。女郎曰はく、冀くば衾を共にせむ。和尙曰はく、汝は寢るを業とし、我は坐するを業とす、坐するものは坐せむ、寢るものは寢ねよと。乃ち、女郎の枕頭に兀坐して夜を徹し、若干の錢を與へて去る。

○

近世禪門に於て、曾は良寬を推し、濟は仙厓に服す。仙厓また、狂歌を能くして、頗る洒脫の風あり。信者あり、別莊を築きて祝筵を張り、和尙を請じて揮毫を乞ふ。和尙、快諾して筆を執り、まづその別莊の圖を描き、その上に賛して曰はく、

此家を貧乏神が取り卷きて

主人これを見て不吉となし、色を作して和尙に迫る。和尙破顏一番、更に筆を下して曰はく、

七福神の出所もなし

驟雨一過して、涼風堂に滿つ。

○

井上圓了、始めて海外に遊學せむとし、友人數輩、爲めに送別の宴を張る。原坦山、鳥尾得菴等相會す。坦山突如として曰はく、近時本心を失へるものあり、得菴聲に應じて曰はく、然らば、何人かこれを拾へる。坦山曰はく、我これを拾ひ得たり。得菴曰はく、何ぞ速に、遺失せるものに還さゞる。坦山曰はく、警察に屆けて然る後にせむと。

○

坦山、中根香亭と善し。明治十三年、本所區に大火ありし時、香亭、火後爐灰中に坦山に邂逅す。香亭曰はく、和尚何處に行く。坦山曰はく、知人の類燒せるものを訪はむがために來れり、たゞ、その住處を失念して、これを尋ぬるの策なきに困しむ。香亭曰はく、其の人の姓名は如何。坦山、その姓名をも亦忘失す、乃ち曰はく、此の如きの大火、姓名の安危、未だ知るべからずと。焰々たる猛火裏に、潺々たる清流あり。

○

梅痴和尚、淨土門の人にして、しかも頗る禪機あり。梅を愛すること深く、自ら梅痴と稱し、詩佛五山等と交游し、湖山枕山等を打出す。曾て、飯沼の弘經寺に住したる時、伽藍の普請を爲す。官寺の故を以て、縣吏來りてこれを監督す。一日、吏偶に謁を和尚に請ふ。曰はく、小吏、今庫裡の床下を檢したるに、魚骨散亂して狼藉を極む、山內、必ず破戒の僧あらむ、殿にこれを糺斷せられむことを。和尚破顏微笑して曰はく、今時の緇侶、その齒の弱きこと、何ぞそれ此くの如きや。衲等若かゝりし時、食ふに、魚の頭と骨とを擇ばず、これを以て此くの如きの醜を他に暴露することとなかりしなりと。吏、赧然として言ふところを知らず。後、和尚、窃に大衆に告げて曰はく、衲、汝等を救はむがために、故らに破戒の言を僞す、汝等、若し、心あらば、懺悔して復た犯さゞれと。慈敎懇到、慈母の赤子に於けるが如し。衆皆感激慟哭して、その罪を謝したりといふ。甘露の法雨沛然と到り、枯木死草一時に蘇生す。

○

勝海舟、維新當時、幕臣のために悄まれ、刺客常に身邊を覗ふ。一日、騎して行く。一士の銃を執りて、これを狙ふものあり。海舟、瞥見して直に其の士を指し、大聲これを叱して曰はく、汝の覘ひ誤てり、如何ぞ我を斃し得むと。士、驚きて逡巡す。海舟、乃ち悠然として過ぐ。謂はゆる機先を制し得たるもの。

○

倶胝和尚、人の佛法を問ふ毎に、一指を竪てゝこれを示すのみにして、他の提唱なし。門下に一童兒あり、人の事を問ふ毎に、一指を竪つ。人あり、これを和尚に告ぐ。和尚、一日、刀子を袖裏に秘して、童兒に問うて曰はく、如何なるかこれ佛と。

童兒、忽ち一指を竪つ。和尙の刀子、一閃してその指斷つ。童兒、泣いて走り出づ。和尙、童を召す。童、首を回らす。和尙言ふ、如何なるかこれ佛と。童兒、手を擧ぐるに指を見ず、豁然として大悟す。應に知るべし、彼の殺人刀は、此の活人劍。

○

阿三婆、白隱に參ず。白隱、拶するに隻手を以てす。阿三、直に一首を口吟しては曰く、

白隱が隻手の聲を聞くよりも
兩手を打つて商をせよ

白隱、又、自ら、竹箒の圖を描きて與ふ。阿三、乃ちこれに題して曰はく、

日本の惡い知識を掃く箒
まづ第一に原の白隱

秋水三尺、心頭に閃いて、冷氷の如し。

○

雪潭和尙、犬山瑞泉寺の請に應じて、臨濟錄を提唱す。時に、犬山侯、また臨みて、簾を垂れて聽講す。雪潭、講座に上り、大喝して曰はく、咄、何者の無禮漢ぞ、簾中に坐して講を聽くか、雪潭の說法に、毫末の粃糠無し、何ぞ敢て、簾を用ゐるを要せむと。侯大に悔ひ、簾を捨てゝ謝す。雷聲霹靂の後、天地淸明。たゞ、禪門の末徒、猥りに人を罵るを以て禪機となさば、雪潭が、法を重くする所以に徹すること能はざるなり。

○

濟法寺物外、膂力絕倫、柔道劍法槍術の奧祕を極む。ために世人、その名を呼ばずして、拳骨和尙と稱す。一日、安藝の劍客河內一滴齋、和尙を訪ふ。和尙曰はく、何のために來れる。一滴齋曰はく、願くば、和尙が拳下に殺さるゝを得む。和尙、呵々大笑して、心要を說き、その歸るを送るに、

雷公の力も蚊張の一重かな

の句を以てす。劍禪一味の妙境、人の來りて遊ぶに任す。

○

伊豫の大洲侯、槍を把つて、盤珪禪師に擬す。禪師平然として曰はく、槍未だ動かずして、公の心まづ動くと。徐に槍頭を拂つて、禪要を說き、侯心服す。世の、旗の風に靡くを見て、或は以て旗動くと爲し、或は以て風動くと爲す。爲んぞ知らむ汝の心の動いて止まざることを。寒熱冷暖、畢竟、汝が心を外

にして、また何のところにかこれを求めむ。

○

一官人あり、趙州に問ふ、和尙も亦地獄に入るや。趙州曰はく、老僧も亦入らむ。曰はく、大善知識、甚麼としてか地獄に入る。趙州曰はく、老僧若し入らずむば、誰か、汝を敎化せむと。焦熱地獄の釜中に吟唱する、またこれ衆生濟度の菩薩行、闍梨を熱殺して、こゝに始めて眞凉を掬すべし。

○

唐僧元曉は、海東の人なり。初め海に航して、支那に至り、道を名山に訪はむとして、獨り荒陂に行く。夜、塚間に宿し、渴すること甚し。手を引いて水を穴中に掬みて、泉の甘凉なるを得たり。黎明これを視れば、則ち髑髏なり。大にこれを惡んで、盡く嘔き去らむと欲す。忽ち猛省して歎じて曰はく、心生ずれば種々の法生ず、心滅すれば則ち淨穢不二なり。如來大師曰はく、三界唯心と、豈我を欺かむやと。遂に、復、師を求めず、即日海東に還つて、大に圓頓の敎を弘むといふ。

若し果して、三界唯一心にして、心外無別法ならば、淨も心穢も心、動も心靜も心、冷も心熱も心、寒も心暑も心、善醜善惡、正邪曲直、一として心の所造ならざるはなけむ。心生ずべきか、心滅すべきか、生雖も樂觀にあらず、滅と雖も悲觀にあらず。月夜江上に舟を浮べて過ぐ、爽凉我を囲繞して、炎熱の追隨を許さず。咄、這の心什麼生、(大正十年七月十九日)

紐育の暑さ

佐々木指月

今年も紐育は暑いさうな。何でも、山火事があるので、それが、紐育市の暑さを非常に高めてゐると云ふことである。

米國の最も暑いさかりは、例の七月四日の合衆國獨立祭の前後であるが、その頃はいつでも山火事が起る。

暑いさなかには、乾燥した森林からは自然に火が出る。何しろ米國の夏は雨が少ないのだから、さうして、海に遠い大陸のなかなぞは、何もかにも、みんなドライアップしてしまう。だから、風が吹いて樹の枝と枝とが摩擦し合つても、そこから火が出る。

私は、オレゴン州の大森林の燃えてゐるなかを、汽車で横斷したことがあるが、それは壯觀だつた。

その煙と熱は、風にしたがつて、百哩、二百哩の外へひろがる。若し或る都會が、暑中の暑さにかてて加へて、この、山火事の熱によつて蔽はれることになるとその溫度は、非常に增してくる、都會の空は朦朧たる煙に蔽はれてしまつて、高い、スカイスクレーパアなどは、下からは、その頂きが見えなくなる。眞つ直ぐな往來のはてては、黃ばんだ空氣のなかに沈む。さうなると、それは實際寒暖計の示す溫度ばかりでなく、感じの上から云つても、やりきれない程、重苦しく、息苦しい。

あれは、いつだつけなあ？　たしか、千九百十八年の夏だつたと思つた、無論、それは、七月なかばの暑いさかりだつたので、私はいつものやうに、日の暮れ方から散步に出た。風が少しもない。步いてゐるうちに、靴下へ汗が流れ込んで、靴の踵がきしんで、いかにも足が運ばない。私は、元來、あまり汗きではないのに、頸のまはりのカラーはもう、ぐしよぐしよになつてしまつた。額からは、大滴の汗が流れてきて、それが目にしみる。これは、病氣ではないかしらと私は思つて、自分の住んでゐた、スチウデヨ、ビルデングへ歸つて來たが、いつもは、ドーアを閉してゐる、みんなの部屋々々が、みんな明け放されて、平生は肌を見せない人までも、着てゐるシャツ一枚の胸をはだけて、暑さに苦しんでゐた。何しろこれは、恐しい暑さだと皆(みんな)が云ふ。

その翌朝の新聞を見ると驚いた。昨日の暑さは、日沒後で、百度を越してゐた。さうして今日は、もつと高溫度を示すだらうと云ふ報知だ。ハドソン河の上流、アルバニイ近邊の森林に火災が起つてゐるから、今日の紐育は多分烟に蔽はれるだらうと云ふことだつた。それは丁度、朝の八時頃だつたが、窓の外を見ると、もう太陽は血のやうに赤く、空は黃色くなつてゐた。なる程、暑い、外へ出ないうちから、もうシャツは、ぐしやぐしやになつてしまつた。

外へ出ると、これは、また大變な騷ぎだ。先づ第一に、往來には、馬が倒れてゐる。それは、今朝もう早いうちに倒れてしまつたのだと云ふ。馬の腹のなかには瓦斯が發生してゐると見えて夥しく膨らんでゐる。四本の足はぴんと伸びて、口からは黃色い汁がたれてゐる。蠅はそのまはりに、黑くたかつて、ゐると云ふ有樣だ。

馬の倒れてゐたのは、一ケ所きりではない。四五丁目に、きつと一匹くらゐづゝ倒れてゐた。何しろ暑いので、その馬をかたづけるために働かうと云ふ勞働者がない。馬は炎天に曬され

て、一日賑はつてゐた。人間の行き仆れは、市の病院の非常車によつて收容された。行き仆れが、方々に出來ると見えて、非常車は警笛を鳴しながら、幾臺も幾臺も往來を通る。暑さのために氣が狂ふものも澤山あつた。また急に眩暈を感じ出したのに驚いて、行きあたりばつたりに、その邊の醫者の家へ駈け込むものも、多かつた。サイドヲークは焼けてゐて、靴の裏は熱かつた。ことに氣の毒とも滑稽とも云ひやうのなかつたのは薄い衣類を着た女のスカーツが汗のために、まるで水へでも落ちたやうになつて、醜い形や、お尻の形が、あんまりはつきり見え過ぎるために、進退、谷まつてしまつて、娘なぞは、泣き出しさうな顔をしてゐることだ。

夜分はまた、大變だつた。公園なぞは、人で一ぱいだつた。さうして人々は、みなそこで夜明しをした。私は自分の室へ這入つて寢やうとしたが、壁へさはれば壁は熱いし、卓にさはれば卓は熱い。とても、ベツドのなかで寢ることなぞは思ひもよらない。それで今度は、ベツドを、屋根の上へ擔ぎ上げた。西洋の家には、平な屋根の造りもあるから、かう云ふ時には、都合がいい。然し、とても、マトレスの上へは寢られないから、私は、スプリングの上へ新聞紙を敷いて、眞ツ裸で寢た。翌朝目がさめて見ると、體にスプリングの網の目が喰ひ込んで石垣のやうな、痕がついた。さうして、そこへは、大勢の人が、ベツドを持つて來てやつぱり裸體で寢てゐたので、大笑ひになつた。

その暑氣は四五日續いた。何しろ、あの都會は、ビルデングが高いから、風の流通が惡くつて、それに、晝間の高熱を、そのビルデングの石や煉瓦が吸收してゐるから、夜るになつてもなかなか冷えない。然し紐育は、まだ寒暑共に凌ぎいい都會だと云はれてゐる。今日も紐育から手紙が來たが、私の友人は、その暑氣を冒して、何かの原稿を書いてゐると云ふ。文面には It's a cruel hot night. I've been working hard. と書いてある。いづくも同じく、無産者は、どんな熱さにでも、働かなければ活きられない。

炎天の下に荷車を曳きて

内藤辰雄

チエホフは「六號室」でドクトル、アンドレエイ、イエエフイミツチに、「疼痛は疼痛の活きた概念で意志の力を持つてすれば

……云云。」といはしてゐるし、又羅典では（心頭を滅却すれば火も亦冷し）なんかといふが、さうしたことは、どうも俺達の考察なり實感なりの以外として受取る丈だ。よし其考察は眞實さうであるにしてもこの頃の夥しい避暑客は何を語つてゐる？　つまりそんな考察は實際の上では役に立たない信條に過ぎない、といふことだ。おほよそは刺激に對する反應を呈するものだ。

二、三日前、もと本屋をしてゐた若い人が、費用を負擔してやるから行かう。といふので、でも富士山は平凡だとは思つたが、自分の金では行けるやうな身分でないので、俺は工場を休んで、生れて初めて遊び氣分になつて汽車に乘つて見た。俺が汽車に乘つた記憶を辿ると、田舍から東京へ來た時一度と、足尾銅山へ人夫誘拐者の手にかゝつて行つた時一度と、信州の方へ土工になつて行つた時一度の、都合三度以外に乘つてゐないもんだから、あの文明の怪物の背中に腰掛けた丈でも俺には榮冠を戴いたやうな氣がした。而して、汽車が動き出して、はだし足袋の足を片ッ方の足の上にのつけて、俺が腹がけの丼から藤井眞澄に借りて來たロプシンの「蒼褪めたる馬」を取出して煙草の烟をそこらあたりに送りながら、讀書に耽り出したが、俺を襲ふて來たものは何であつたか？　避暑し得ざる人々に對するいろ〳〵の感慨。

俺は過去十年間に知合つたあらゆる下層の職業から、あらゆる仲間達を眼に拾ひ來つて、思つた。――この暑いのに奴等はやつぱり十年前と同じやうに生活してゐるだらうかナア、お天道様に文句一ついへない程意氣地が無いんだ、食ふに困つてやはり諦觀と不平とを持つて炎熱の下をもがき蠢めいてゐることだらう、たゞ飲酒とか賭博とかに慰められながら……チエッ……かりに――さうした勞働階級によ、勞働は神聖なりとか、生産者に非ずんば消費者の資格は無いとか、もつともの言をいつてゐる奴があるにしたつて、いつたい環境は彼等に對してどんな責任を持つてゐる！　持つてゐるとしいへば、牛馬のやうにボイ使つて、甘い汁を吸ふ位のものである。然るに何故反抗しない！　何故彼奴等は自分等をボイ使つてゐる奴等にのみ避暑をさせて默つてゐてうんともすんともいはないんだ！　チエッ――何故××しないんだらう？　何故掠奪されて默つてゐるんぢや？　俺は嘲つた。しかしながらめさめてない彼等を嘲つたとて、それは盲人をつかまへて目あき同樣な注文をするに等しいと思つた時、俺は、又川中で一廉の小説家氣取りで讀書してゐる俺と、もと本屋だつた伯未に不快を覺えて心で嘲らずにはゐられなかつた。――環境が俺達。――個人――に責任を負はないから俺達は自己を中心にして考へ且つ行ふといつてすまして

ゐられるか？　粗野の奴（もとの本屋の若い人）は、社會主義がどうだとか、こうだとか、文壇がどうだとか、こうだとかといつて、讀書からいろんな智識を收得して、自己擴充の鍵を磨いてゐる、しかし實際生活上の無能者ではないか！　俺は成程一人の勞働者である。生活と取ツ組んで、炎天の下に氣息も絶えなん大角力を取つてゐるが、しかし、俺は三日でもから避暑出來るのは何が起因したのだ？　同じやうに、或は俺以上に働く仲間が一日の旅だつて出來ないのに、俺がかうして旅が出來るといふのは、下らない俺の小說がさせたわざだ。もとの本屋の若い人から受けた好意は、俺といふ勞働者が貰ふ愛撫ではなくて小說家見習生としての俺が貰ふ愛撫だ。勞働に對する好意ではなくて、藝術に對する好意だ！　さう思つた時、それを受けてのんべんだらりとなつてゐる俺を、俺は輕く叱らずにはゐられなかつた。何度となくとりどりの仲間達の襤褸姿と顏が眼に浮び何度となく同情の洪水が心を搖ぶつた。といつて、仲間と共に橫恣なブルジョアの慘虐な笞（無智）の下に殉死することは俺には出來ないのだ、環境は個人に何の責任も負ひはしない——さう思つて、でまア、俺は不合理な此世の組立法を嫌惡し、呪咀しながら富士へ行つて歸つたわけである。

歸つて見ると、又仕事が俺を迎へてゐる。俺の血や肉をしやぶらうとする工場主と、仕事は、狼が牙をむいだやうに、俺には無で、恐ろしい、腹が立つことばかりだ。でも四十人近くの愚鈍な仲間の中で、車力の俺が、やつきになつて吠へたつて、パン屑を工場主の食卓から拾ふことに忙しい職工は、耳をなくして聽にないのだから仕方がない。でも諸君、だからといつて俺は書齋に歸つてしまつていゝだらう？　又さうかといつて俺は、彼等と共に人間ならぬ生活にいつ迄もひたつてゐねばならぬ責任を果さねばならぬだらうか？　彼等が人間への復歸運動に參加して來るのは何時になつてのことだらう？　俺はかうした點に苦悶の重心を置いて、やはりけふ此頃、炎天の下に荷車を曳いてゐる。多くのぐうたら作家はあつちこつちに避暑する。

さうか——あまり肩のこる話をしたから、ちつと冷しい話をせうか、この話は、避暑に行くことの出來ない兄弟の手淫的喜悅に對する贈り物に過ぎない罪な話だが……俺はいつたい弱氣で、新聞で小說家仲間の里見が何處へ避暑したとか、宇野が何處へ行つたとかいふ消息を見た丈でも、聞いた丈でも勞働者仲間の竹や、善や、松ベイにすまなく思ふに、自分の登山などの話をして、皆なに手淫的の喜悅を與へたくないが、手淫も時に取つては必要だらうから、富士山で見た裸の美觀を話さう

か。手帳に書留めて來た登山日記の一節にはかうある。

七合三勺目の朝。石室にて。

白い中でも、こんな白色はなからうか、と思はれる雲が、足下から、ほんとに靜かに、この嵐風の下にあはてふためく樣子も見えず立ち昇つて來る。其雲が白い門を拵へる。其中へ河口湖が、昨夜泣き明した女のやうに蒼白い顔を覗ける。藍色と黒青色の山の寢床の中で眠つてゐたのか？　遠く連山の裾を襲ふた雲は氷塊のやうに、又雪の塊のやうに。而して其下端は、强烈な酒を呷つた太陽の眞赤な顔が反映すのか、血でもなく、羞恥でもなく、たゞの赤色でもなく、何ともいへない生命的な赤色を持つて裾を染めて居る。荒れ狂ふ風に送られる山上の雨は、ゴオツ、ゴオウヽいふ風の怒號に相和して、ザアー、ザアーと石室の上を打つ。窓に覗いてゐた俺も思はず、イヨオウー！　と吠へる。瞬きをするともう其色彩ある雲は意地惡い雲に襲はれて、悲しげに姿を滅する。しかも諦れ切れないところを見ると、餘程我々を愛してゐて吳れるものと思はれる。雲は絶えず變化する人間の氣持ちをかうも有形的に表現するのか！刻々に變化する雲は、鳥渡でも他見をしてゐるともう我々を瞞るかのやうに消え失せる。昨日見えなかつた一つの大きな湖が鳥渡見えて直ぐ雲の中に消滅して、右の方が曇ると左の方が晴れる、かと思ふと又もとのやうになる。かと思ふと、窓には灰色の塗抹のほかなにも見えなくなる。雨は硝子を釘で引張るやうに顔を隔てゝ、線を引く。若しも文壇が、かうした變化に富み色彩を放つてゐたら、誰も文壇を離脫して他を顧みる暇がないだらうなどゝ思ふ。まつたく高山にある雲は素敵に美しいものだ。女に「あなたは美しい」といふ時は、いろ／＼の意慾で不純さが思出されるものだが、これは純一なる感歎の聲である。命主は山に馴れないものだから此雲をも見ないで、蒲團にくるまつて、忙しくも一萬何百尺かの高所の小舍で雨を聽いてゐる。これを見なくてはとてもお話にならないなアー眼が一時間餘もあつちこつちの雲に招待された。俺は自然の大きな生命力を感ずると、もうぢつとしてはゐられなくなつた。絶大の興味が俺を誘つた。俺は石室から嵐風の外に出た。雲を脚下に見下してはるか東京の方向に眼を放つた俺は、

「バツカヤロウ！」

俺は咽喉いつぱいの聲で、一聲、東京でこそ／＼働いてゐる小說家達に喚び掛けてやつた。小つぽけな家の中で、こつ／＼原稿を書いてゐる奴等があまりに意氣地なく思はれたのだ、可哀相に！

其時の天國へ分け進んだ氣持ちは、いまの焦熱地獄へ墮ちた

やうな氣持ちと何といふ違ひだらう！　三日天下で、四日目にはもう俺はこんなに炎天の下で荷車を曳く丸だ。情けないではないか！　いまは二重の苦しみを持つて俺は生活してゐる。重量車から肩へ掛けたレンチヤクは不合理な資本主義の鎖のやうである。夕方になると草鞋をとくが、しかし此儘では、それは非人道で、慘虐な足枷だ。熱した土は眼に毒だ。汗は一足一滴地面に落ちる。原稿用紙にピリオドを打つたに較べて、地上に打つこの力のピリオドは何たる苦惱と責任感だらう！　しかし個人が持つたつて、何時だつて環境は個人に責任感を持つて呉れりやしない！　プロレタリアートは無學ながらも此味をよく味つてゐる。

仲間は、物好きにも新聞記者から勞働者になつた俺を嘲笑してゐる。そこいらの小說家の多くが、環境は無責任なんだから俺達も環境への責任は無用、それを持たうとする內藤なんかは民衆熱に醉拂つてゐる、淺薄な頭惱の持主――空想的の理想家だと俺を嘲ると同じやうに、でない時は其以上に、俺を馬鹿扱ひにする。馬鹿でなくては持つてゐないものを彼等知らないのであるか？　とまれ、ブルジョアの生活をしてゐる人達が、何もしないで、芋虫みたいに室に轉つてゐて、「やり切れないから避暑に行く……」などゝは以ての外――沙汰の限りだ！　個人主義の極みだと思ふ。さうした意識は人間的だから赦されにしたつて、この三伏の炎暑を浴びて街上に出て働かねば生きて行くことの出來ない俺達のことを何人位考へて呉れるだらう？　何人位相互扶助、相互喜悅の感情にひたつて呉れるだらう！　ブルジョアの生活者が、美しく着飾つた妻君や子供を伴れて、海や山に寢轉つてゐるに、何でプロレタリアが炎熱の下で、襤褸を着て稼いて、そこへ自分自身の血や肉を輸送せねばならぬのか俺にはわからない！　遊ぶ者が有力視せられ、尊敬されないで、最も苦しい勞働をする者が、より有力視せられ、尊敬されるのは何時の御代になつてからだらう！　若しさうでもなつた時は、或は「心頭を滅却すれば火も亦冷し」といへたり、(疼痛は疼痛の生きた概念だから、意志の力を持つてこれを……)といへるか知れない。が、世間から牛馬みたいに思はれて働く人間がどうしてそんな心頭が持てやうぞ！　さうした者が社會の九分通り迄占めてゐることを考へたら、室の中に芋虫みたいに轉つてゐるブルジョア奴が暑いなんかといふのは贅言の限りであるぞ。それは芋虫が人間の聲を出す程癪に障り不思議にも思はれる泣聲であるぞ。さうした者こそ、心頭を滅却していゝわけではなからうか？　さうした者こそ「疼痛は疼痛の生きた概念だ、意志の力を持つてしてこの概念を變へねばならぬ、[illegible]

炎天の下で力いつぱい働いてゐる者があることを考へ、さうして其人々は氷もろくすつぽ飲めないのだ、其日〳〵のパンを得ることのみに汲々としてゐるのだ、何で彼等の勞働に寄生して家にゐる我々が暑からう……」と懺悔しなくてはいけないのではなからうか？

いつたいに此頃の避暑――いやこれ迄の避暑だつてさうだが避暑が、字義通りに行はれないで、悪い虚傲となり、悪く流行化し、それがブルジョアの生活をする上での一つの裝飾となつてゐる傾きはなからうか？　それによつて、愚人を手馴付け、尊敬を支拂はし虚色を張らうとする人間達の野心のまとゝなつてはゐなからうか？　それとも資本主義制度の下では、室内で夏を迎へる方が、街上で働く者よりもより暑さを感ずるのだらうか？　より苦しいのだらうか？

贅澤も休み〳〵にいふがいゝ。　（オシマヒ）

北陸線の苦熱

上司小劍

身體中の汗を絞つてしまつたといふやうな苦熱の經驗は隨分あるが、數年前の夏、北陸線の日中を、のろい汽車で通つた時も、其の經驗の一つだ。

其の頃、東京の上野から同じ東京の烏森（今の新橋）方面へ行く交通機關が三通りあつた。其の一つは言ふまでもなく、市内電車であるが、もう一つ大廻はりをすれば、烏森から郊外電車で山手線を通つて、上野と往復することも出來る。これは今も同じことだが、今は省線電車が中央線で萬世橋へ來て、あれからズツと、大廻はりして、目と鼻との間の上野へ行く。私は田舍から來た客に、『街上の電車は上野行が北を向いて走つてゐるのに高架電車は同じ上野行が南を向いて走つてゐる。一體上野といふところはどつちにあるのだ。』と問はれて、答へには窮しないながらも一寸面白く感じたことがあつた。

ところが其の頃新橋（今の汐留）から直江津行の汽車が出た。さうして、直江津まで行くと、それが上野行になる。上野からも同樣其の汽車は直江津行で出て、中途で新橋行になる。つまり山手線をもう一つズツと大きく迂廻をした上野新橋間の交通機關であつたのだ。私は物好きにもこの大迂廻で上野から新橋へ行つてみたいと思つて、夜の七時半頃に上野を直江津行で乘つて出發したのが、直江津から糸魚川を經て、烈日の下に親知らず子知らずのあたりを走る頃、車内の寒暖計はだん〳〵昇騰し

敦賀あたりではもう見てもたまらないと思つた。寒暖計を見ると百十幾度になつてゐた。汽車の動いてゐる時はまだ好いが、停車すると、氣が遠くなつて、五體が碎れるほどの熱さであつた。煤烟で鼻の孔や口が眞ッ黒になるし、手巾は五六枚も取りかへて、どれもこれも汗と煤とに汚れてしまつた。市内電車で行けば三十分かゝらない上野新橋間の交通にこんな大苦みをして、私は到頭米原から大阪行に乘りかへ、石山で下りて、あすこの宿屋へ轉がり込んだ。

夏東京に住むものゝ幸福

松崎天民

×

同じ「都會の夏」と云つても、大阪は晝も夜も暑い。水の都だなどゝ自慢しても、夏の暑さには堪えられない。夜になると例の夕凪で、蒸し暑くて、一夏に寢られぬやうな晩が、二晩か三晩は必ずある。そんな大阪で、十年も十五年も、暮して居たのかと思ふと、不思議な氣持にさへなる。

京都も晝の間は、暑くて、ジリ／＼と汗が出る。東山の綠とか鴨川の夕涼とか云つても、一體の感じが暑い。神戸は海に面して、丘陵に沿つて開けたやうな町並でありながら、濕度は非常に高く、大阪よりも暑いと云ふ氣持がする。そんな暑い神戸や京都で、幼年、少年の頃を過したことが、今から思ふと、ウソのやうな心地さへする。名古屋は暑いことに於て、六大都市中での第一で、一夏の七八日間を、汗で暮したことがある。岡山、馬關、長崎、佐世保、横濱、甲府、前橋、宇都宮、千葉、金澤、何處の夏も暑かつた。

夏は何と云つても、東京が一番涼しくて、凌ぎ易く暮し宜い。私は毎年、夏になる毎に、「東京に住む者の幸福」を、しみ／＼と感謝せずには居られない。

×

その東京に住で居ながら、七月八月になると、やれ山だの、それ海だのと云つて、暑を避けたがる人が多い。謂はば一種の流行で、貴族階級、富豪階級、紳士階級で無い者までが、別莊へとか、溫泉へとか、海水浴へとか云ふのが、見え坊のやうになつて居る。

これは決して、善い傾向であるとは云へぬが、鐵道省は汽車

賃割引の廣告をするし、避暑地だよりは新聞や雜誌に出るし、樣々の刺戟に動かされて、人々は山水の自然境に引ずられて行くのである。平生、一年の間、自營にのみ汲々として、自分で自分の生活を顧みる暇も無いやうな、忙しい人達にとつては、夏の或る期間を、當代流行の避暑旅行で暮すことを、頭から惡傾向、惡流行、惡現象と貶してしまう譯にもいかない。避暑旅行の出來る人は、その時間と金のある人は、見聞を廣めるためにも、自然の姿に接するためにも、少しは旅らしい氣分、居所轉換の妙作用を試みて、自分を修養する一助とするも宜いであらう。

然し、八月盛暑の候に、避暑旅行をするのは、決して愉快なものではない。別莊でも有つて、有餘る金があつて、一流の旅館で、大平樂の云へる人は、論外であるが、その他の人々に至つては考へものである。

×

大入滿員の宿に泊つて、茶代の多少に依つて待遇を二三にされ、三四流の小室に押込められて、反つて不愉快な思ひを堪え、「避暑はもう懲り〱だ」と云つても遲い。金と時間を費して、世間體は如何にも餘裕があるらしく、體裁が好いやうであつても、不愉快な氣持は、何時までもコビリ着いて居やう。

溫泉では箱根、修善寺、伊東、湯河原、伊香保、日光、草津、四萬、鹽原、那須と、何處へ行つても、不愉快を堪えて歸るが落なら、むしろ行かぬに上越す策にない。海では逗子、葉山、大磯、三崎、内房、外房の村々と、何處へ行つても滿員で、滿員でなくても、紛然雜然として居て、子供達を手離しては、惡い風儀の惡感化を受ける心配もあるし、一家族連れて行つたところで、想像した快樂に裏切られて、失望して歸る例が多い。甚だ消極的ではあるが、暑い盛りの八月は、何處へも行かずに、東京にジツとして居るに限る。

避暑へ行き得ぬ人にしても、行き得る人が行かぬにしても、八月夏の涼趣は　東京にあることを、東京生活にあることを、東京の我が家にあることを思ふが宜い。日常茶飯、家庭を宿屋と思ひ、家庭に避暑氣分を漲らせて、一夏を樂しく愉快に、妻や子や女中達と共に、清く暮す方が、何んなに眞の避暑となるか知れない。

私は去年の夏三週間を、北海道の旅に暮したが、今年は市外中澁谷宇田川八三九の貸居で、何處へも行かぬ避暑旅行をしやうと思つて居る。金や時間の餘裕が無くて、避暑し得ぬ負け惜みもあるが、一方には「行つたつてつまらない」と云ふ氣慨からでもある。

×

私の今住んで居る家は、二階が六疊と八疊の二室で、階下は六疊、四疊半二、三疊一の四室しか無い。一家六人暮しには、少し手狹であるが、住宅に脅威を感ずる當今では、これで辛抱するより他はない。

院線澁谷驛か、市電宮益坂下から、歩いて十二三分、借賃四十錢と云ふ丁場であるが、明治神宮へ十一二分、代々木練兵場寄りの凹地なので、冬は恐しく霜柱が立つ代りに、夏向は非常に涼しい。繼ぎはぎのきりぎりす籠のやうな家だけあつて、東南と、南西と、東北の三方が開いて居り、少し風が吹く日には、扇風機などに用はないほど、自然の涼風が、ソヨ〳〵と見舞つてくれる。

庭は八坪ほどの手狹でも、夏菊や、おいらん草や、藤や、百日草や、杉や、檜や、コスモスや、ダリヤや、あじさいや、鳳仙花や、楓などがあつて、細長い竹の枝葉を出すには別に窮屈を感ずるほどでもない。七月十日頃から蚊帳を吊り初めたほどで、出る蚊も少く、二階に寢そべつて居れば、一泊五七圓の宿屋で、二室を領して居るだけの贅澤な氣持にはなれる。此の上は淺い床の間に、瀧か何かの半折を懸け、楓の盆栽でも置いて、間の襖を取外し、葭の障子に替へると、申分無いのであるが、家賃四十圓の借家であつて見れば、何だか餘計な事のやうにも思ふ。そこで襖は一切取外し、陽に焦げた古疊の上には、備前の花蓙を敷いて、その上に寢そべりながら、少づ輕い本でも手當り次第に讀む。たゞこれだけの事でも、心の持やう一つで、涼味和樂の氣分になれる。

聲の美しい苗賣は、もう來なくなつたが、青唐辛屋が來るし、近在から婆さんが、紫の色濃い茄子を賣りに來る。西瓜が出たと云ふから、高いけれど、一個を裏の井戸へ吊らせる。

×

ポンプで揚げる井戸水は、少し臭いけれど透明で、冷たいこと此の上もない。何時の間にか午睡の夢に落ちて居ると、「お父さん西瓜を切りますよ」と云つて、三男が起しに來ると、妻も長男も二男も、臺所の板の間に集つて、咽喉をキユツ〳〵鳴らして居る。

冷たくて、甘くて、涼しくて、暑さは何處へやら去つてしまふ。「金を使つて、避暑地の雜踏に汗かきに行つてる奴は、馬鹿だなア」と、負け惜みでなく心から言つて遣りたくなる。子供達は何と思つて居るのか、口では「さうです〳〵」と云つて、西瓜の汁ついた顏で、グチヤ〳〵と笑ふ。一ケ月の臺所費に、四十圓か五十圓も奮發すれば、少し贅沢が出來て、避暑地へ行

かぬ避暑氣分に、家を擧げて興ずることが出來る。心の持ちやう一つであると共に、生活向き臨時轉換一つで、避暑淸樂の氣分を、我が家に漲らせることが出來る。

四十四の私と、十九と十六と十二の子供と、四人ともサル股一つになつて、ポンプで水を揚げては、バケツで六十杯ほどを角風呂の中に入れる。五時にはもう「お湯が沸々ました」と云ふので、いの一番に飛込んで、サツと汗を流す。子供達は二階から家の周圍を掃除して、バケツに幾杯も水を撒く。六時近くには、もう黄昏れが來て、ビールとサイダーが冷えて居る。ビールは妻が好むけれど、私は極上等日本酒を二合、ぬる燗にしたのを折々飲む。それも四日か五日に一度ぐらゐで、さかなにむつかしい註文はない。靑唐辛を上等の醬油で辛く煮詰めたのと茄子と瓜の淺いどぶ漬と、冷豆腐でもあればそれで宜い。鄕里の友達が持て來てくれた旭川の鮎のうるか、靜岡産のむき蝦、それに水貝でもあれば、陶然として和樂の氣分に浸ることが出來る。

子供達は、牛肉を煮て冷たくしたので、そこそこに飯を食つて、代々木練兵場の方へ、散歩に出て行つたらしい。

×

宵の間は蚊も澤山に出ないので、それから二階へ上つて、書齋にして居る風通しの宜い六疊で、和譯のトルストイ物を讀むが、何だか嚴しく叱りつけられて居るやうで、面白くなくなつてしまう。田中貢太郎が贈つてくれた怪談「黑影集」や、如是閑、碧梧桐の「日本アルプス縱斷記」を讀むと、面白くて〱ツイ十時頃になつてしまう。

妻が階下から「お父さん、道玄坂へ散歩に出ませんか」と云ふが、少しでも歩くと汗が出るので、ムニヤ〱と碌な返事をせぬ。そして「松虫か鈴虫を買つて來い」と怒鳴ると、「お隣のが、よく聞えるわ、ねえ」などゝ云つて、クス〱笑ひながら女中と二人で出て行つてしまう。子供達が歸つて來て、井戸端で足を洗つたり、何事か大きな聲で語り合つて居るかと思ふと階下の六疊でドタンバタンと、相撲のやうな事をして居る。夏の夜は更けても、寢るには惜しいやうな氣持が、何時までも私を宵張りにさせる。

暑い晩には、東南の硝子窓を開けたまゝで、曉近い頃まで寢てしまう。大抵、五時か六時に眼が覺めると、階下から味噌汁の香がプーンと響く。岡山、京都、大阪で、朝は冷飯の茶漬に育つたので、朝から溫い飯の味噌汁が、冬でも私には胸に支へて、何だか食慾を唆らない。茄子の糟漬さへあれば、朝から晩まで、殆どそれ一つで、茶づけ飯ばかり食つて居ても、私には

不平が無い。

何と云ふ貧乏な、何と云ふ安價な、何と云ふ簡易な欲望であり、生活であらう。

×

朝、起きると、先づ裸體になつて、冷たい水で全身を拭つて直ぐ飯にする時もあれば、はだしで庭へ下りて、水を撒くこともある。八時頃から机に向つて、十一時頃まで三時間に、十枚か十五枚の原稿を書くが、勤め先へ出る時には、九時前に家を出て、午後は早くて二時か三時には歸宅する。他へ廻つて遲くなり、夜に入つて歸る時もあるが、夏は早く歸つて、涼しい二階で寢そべるに限る。

この頃は近眼を保護するため、夜は絶體に原稿を書かぬが、その代り輕い本は、夜二三時間だけ讀むやうにして居る。朝顔が咲き、とうもろこしが食べられ、茄子、西瓜、鮎が食べられるので、一年中で最も暑熱に苦しむ私も、貧しい夏の生活に、生き甲斐ある歡びを感じて居る。從つて、海へ行つて、ギラギラする光線に、射られやうとも思はない。山へ入つて、綠の中に寢やうとも思はない。アイスクリームが食べたくなれば、銀座の資生堂へ行く。夏の夜の情趣に浸りたくなれば、カフエーへ行つたり、近い道玄坂の夜店を、そゞろ歩いて居る。風の無い夕暮れに、風に吹かれたくなると、六時七時頃から山の手線電車で、澁谷から上野へ往復する。そして宅へ歸つて、冷たい麥湯かサイダーで、好い氣持になつて寢る。「避暑へ行くのは馬鹿だなア」と、淋しい心持からでなく、實際、滿足して、さう言ひたいやうな氣持になる。

夏の生活の樂趣は、お互の心持までが、赤裸々となる點にあるやうに思ふ。——

×

要するに、日常生活の諸相を其の儘に、避暑遊樂の氣分へ引ずつて行くことは、卑怯な事でもなく、訶譏さるべき事柄でもない。何んな人でも、何んな家庭でも、私の實行して居るやうな生活相の上に、より豐富な、より贅澤な、より金持的な、より貴族的の加減鹽梅をして、差支へないことである。從つて「避暑し得ざる人々のために」は、「避暑し得る人々」のためにも、生活樣式一面の眞理として、私の實行して居るやうな避暑方法を、強いても宜いわけなのである。以上

七月二十六日夜、瀧田兄の命を傳へられて、興趣直ちに動き、一時間半の大速力を以て、以上匆々執筆し終る。自家身上の生活相斷片を、如實に語り過ぎたる嫌あれど、日常茶飯の避暑法、豈この他にあらんや。失敬。

旅に出でざる夏に、旅に出た夏の思ひ出

村松梢風

避暑し得ざる人のために、避暑し得ざる自身のために、古い旅の思ひ出を拾ひ出して書いて見ようと思ふのである。

桑名

桑名の一つ手前の永島といふ驛で私は汽車を下りた。其處は木曾川と長良川とが一旦接觸して、再び離れて海に注いでゐるために、兩川の間に細長く横たはつてゐる中洲である。驛の建物だけが、田圃の眞中にぽつんと立つて、八月中旬の燃えるやうな陽に包まれてゐた。稻の葉が二尺位に伸びた水田の間を廣い往還が通つてゐる。私の前を跛の郵便脚夫がヒョコヒョコと歩いてゐる。呼び留めると、「はあ――」と間の拔けた頓狂な聲を出して振り返つた。と見る偏目の老爺だ。アラビアンナイトに出て來さうな人物だ。「桑名へ歩いて行くにはどう行けば宜いでせう?」と訊ねると、「向ふに藪があるだあ、あの藪になつてゐる處が永島の宿でなあ、其處から長良川へ出て、桑名行きの渡船に乘らつしやると直ぐでやすがな」と饅頭笠を振り仰いで指差しながら敎へてくれる。

人家の並んでゐる處へ出た。村役場や銀行や、立派な樓門を有つてゐる寺などがあつて、一寸した町のやうになつてゐる。よくこんな處に不思議なことには貸座敷が軒を並べて澤山ある。どれも切つた格子の奥の暗がりから、幽靈のやうに靑ざめた女の顔が覗いてゐる。厭らしい、胸苦しいやうな哀愁の感が起こる。町の中央に空家の儘立ち腐れになつた湯屋があつた。紙はすつかり剝がれてしまつた障子目から覗いて見ると、浴槽も流し場もカラカラに干上つて、埃は堆く、雨漏りのした天井には大きな蜘蛛が巣をくつてゐた。私はゾツと身顫ひが出た。

長良川と揖斐川とが、葦の生へた、ところどころで杜切れてゐる細長い中洲を狹んで流れてゐた。岸の石垣から棧橋が出てゐて、渡し船にはもう大勢の人が乘つてゐた。

船は、流れに隨つて下つた。何んといふ佳い景色だ。上流に架かつてゐる鐵橋は、日光を受けて血のやうに燃えてゐる。遙か川上の方には美濃の連山が靑々と横たはつてゐる。葦の中からは白帆が半分現はれて動いてゐる。水は玻璃のやうに澄んで白い雲の影を映しながら平らに流れてゐる。小舟を洲へ寄せて

裸足で砂地へ下りて遊んでゐ　若い男と女があつた。女の差してゐる綠色の洋傘や、白地の浴物の上にしめてゐる紅い帶の色が美しく光つてゐる。

「巫山戯んなよう――」と突然一人が呶鳴　たので、船中は忽ち笑ひこけて陽氣になつた。

十丁ばかり下ると對岸に桑名が見えて來た。帆柱を立てた親船が澤山碇泊してゐる。白壁の土藏が並んでゐる。川の中へ突き出した處には、松の樹に包まれた朱塗りの社が見える。料理屋らしい大きな建物がある。

私の眼は感激　耀き、心は歡びに躍つた。廣重が五十三次に畫いた景色を其の儘だ。其の昔、尾州宮の宿から海上七里を渡船で渡つて、初めて此處へ着いた時の廣重の歡びを其の儘私は味はつたのだ。

それから今日までは丁度十年經つてゐる。

×

昨年の正月早々桑名にゐる舊友を訪ねた時、一夕案内されて船津屋へ行つた。船津屋といふのは桑名第一の會席だ。泉鏡花の「歌行燈」に書かれてある。近松秋江の隨筆にも船津屋のことを書いた物があつたと思ふ。

上方風の貸座敷の並んでゐる町幅の狹い通には松飾りがしてあつて、晴れ着を着た藝者などが歩いてゐた。船津屋はそうした町に接して、揖斐川に背を向けて建てられてあつた。昔の本陣に改築を加へた建物だとかで、表付きは屋根が低く、大きな字で障子に屋號が書いてあつたりして、實に古　だ、座敷は多く川沿ひにある。間取りも幽雅で、川を眺める景色に至つては天下一品だが、惜むらくは川が北にあるために、冬は寒くていけなかつた。

藝者が三人ほど來た。名前は忘れたが、顏も衣裝も田舍臭くはなかつた。私は所望して「桑名の殿樣」といふ名物小唄を聽かせて貰つた。

桑名の殿樣ャンレ、やつとこせえーよおいとな。桑名の殿樣時雨で茶々づけ、よおいとなア。

といつたやうな文句だ。東京の寄席などで聽くとはちがつて、本場のものだと地方調（ローカルトーン）が感じられて面白い。

伊勢の人間は言葉尻に（なア）を附ける。「あのなア、このなア」と云ふ具合。處が此の藝者達は、桑名育ちだといふのに「なア」を使はず名古屋言葉で「なも」と云ふ。何故と思つて訊いて見たら、お客に對して「なアなア」では餘り失禮に聞こえるからだと、ちつとも失禮なことはないからと、木地の「なアなア」でやつて貰ふ。

料理も土地の自慢の一つだ。海老を澤山種に使つた茶碗蒸しが、見た眼も綺麗なら味も上等だつた。はんぺんのやうな物を四角に切つて、錦手の丼で湯に浸けて出されたのも、珍らしかつた。

渡鹿野

まだ日の高いうちに的矢へ着いた。午少こし前に鳥羽を出て三里ばかりの山越しをして爰へ來たのだ。其の旅は友のYと一緒だつた。昨夜は鳥羽へ泊まり、折りからの名月に誘はれ、船頭を雇つて小船を出させたのだが、其の船頭の話に、南の的矢灣の中にある渡鹿野といふ島の異風を聞いて、さてこそ遣つて來たわけであつた。

的矢といふ村は、灣の緣にある船着き場で、うしろには山を背負つてゐた。全體志摩の國は陸地よりも灣の面積の方が多い位だが、其の中でも的矢灣は最も大きい灣の一つだ。灣の眞中に可成り大きな島が見えてゐる。それが渡鹿野であつた。

私達は渡船に乘つた。他に乘合は無かつたが直ぐに舟を出した。船頭は卅五六の丈の高い溫和しさうな顏付の男だ。本業は湯屋で、傍ら船頭をしてゐるのだと云つた。——舟は砂地の濱へ着いた。前には小山があつて向うは見えなかつた。船頭に敎へられた通りに、其の小山を越えて僅かばかり畑の間を進むと村へ出た。

可成り高い山の裾に五六十戸の家がゴチャ〳〵かたまつてゐた。海際には石垣が築いてある。海水浴旅館のやうな二階造りや三階造りの家もある、路で行き會つた人に「宿屋は何屋が一番上等か」と訊くと、「此處には宿屋は無い」と答へる、「それではあれは何か」と、其の三層樓を指差すと「あれは貸座敷だ」と云ふ。何遍訊いても同じ挨拶、宿屋は無いが貸座敷なら十二軒有ると云ふ。呆れた話だ。

私達は一番上等らしい三階の樓へ上つた。玄關で草鞋を脫ぎ三階へ通された。それは素晴らしい風景だ。紺碧の灣の彼方には、松原續きの平らな陸地が見える。其の尖端が安乘崎で、遙かに白い浪の荒れてゐるのが見える。靜かな灣の中には、鰹船が一艘と、近海航路の小汽船が一隻碇泊してゐた。夕陽が海を染め松原を染めた。

浴衣を借りて錢湯に行き、序でに村を一廻りした。狹い土地に家が立て込んでゐるので、何處にも夕暮れのせわしさが漲つてゐる。村の上にある寺の鐘が「ゴーン」と鳴り出した。其の音が、靜かな灣の上を何處迄も滑つて行く。

樓へ歸ると、女が二人化粧をして私達を待つてゐた。鳴海敎

りの浴衣に、巾の狭い帶をグルグル卷き付けてゐる。北の女達のお給仕で膳に向つた。鯖のあらひ、鯛のぬた、鮑、江戸つ兒に食べさせて遣りたいものばかりだ。志摩の南部では、魚は捨てるほど豐富だ。馬方茶屋でも鯛の刺身を出す。貝と云へば、眞珠以外に尊々を知らぬ此の國では、鮑などは田螺位に思つてゐる。酒は非常に强烈だ。攝津から船で灘野謎を運んで來る此の邊の酒は、熱帶の果物のやうな芳醇な香を放つてゐる。

女達から樣々な島の話を聞いた。彼女等と同じ種類の女が何十人もあるが、皆此の島の者だといふ。女は齡頃になると、蜑をするか、娼妓をするか、其の孰れかを撰ばなければならぬのだ。以前は此の島の資産家だつたが、眞珠養殖事業に失敗して産を破つた人の悲劇的な物語などもあつた。

女達は三味線を持つて來て、鄙びた調子で船唄を歌つた。遣る瀬ない、やうな、妙な哀愁を喚る唄だ。三味線は、撥の替りに櫛で彈く、ゴム櫛に紙を幾つにも折つて卷き、それを持つて櫛の背の方で彈くのだ。それが此の島の慣ひだといふ。

月が昇り掛けた、遠い松原が影繪のやうに浮き出してきた。潮の中には黃金色の鱗のやうな光が躍つた。安乘の燈臺の火は星のやうに明滅してゐる。

魚がところ〲で飛んだ。

寂寥の氣が天地の間に盈ちてゐるやうな感じだ。私はなんとなしに、旅に出てゐることを强く意識した。Yも矢張り同じやうな感傷的な氣分に浸つてゐるらしい容子で、欄干の側へ出て月を眺めた。

女達は、魚のやうに無心な眼つきをして、私達の方を見てゐた。

南極圏内の氷山

白瀬矗

過熱の天候無聊に苦しみ居る折柄予がマッチ箱式寓居を訪問せられしは中央公論社の木佐木君なる御仁であつた。同君は初對面の挨拶了り、予に向ひ申さるるは何にか涼味のある話をと。予答へらく、予に涼味の話を望まるるは極地附近の話ならん。夫れにても宜しくばと。同君云はくよしと。此より以下少しく南極圏内の氷についてお話することにせり。

回顧すれば我が日本國民諸氏援助の下とに二百四噸の帆船開南丸に乘じ、品川灣出帆南極探檢の途に上りたるは今より約十三年前即ち明治四十三年十一月三十日なりき。（南極より歸りたるは明治四十五年五

(月であつた)夫れより開南丸は「怠らず行けば千里の果ても見ん牛のあゆみのよし遲くとも」龜の旅行然たるあゆみを續け、翌年二月中旬には愈々南緯六十六度以上の南極圈內に乘り入つたがポツ〳〵氷山や流氷の卵に遭遇し始めたのであつた。その氷山なるものはどんな形狀で何にから成り立つかといへば、總面積五百四十萬方里ある南極の周圍を取り圍んである大氷堤(氷の厚さは五十尺以上三百尺位ある氷堤)の一部一端が暖流の爲崩壞して大氷堤より分離ロス海より阿非利加方面へ流出て行く氷塊にて、小なるは周圍五六町より、大なるは二三海里より五六海里にも達すると思はるる樣な雄大なる姿にて、色は靑味を帶び、右に左に轉々しつつ間斷なく次から次へと續々流來るが、速度は頗る緩やかなるものにて、潮流に乘じて流れ來る爲め注意を怠らなければ船は大抵の場合には危險を避けることが出來るのである。又流氷は氷山とは違ひ、南極海中に張り詰めてある平氷(厚さ二三間より五六間のもの)が矢張暖流の爲め氷山と共に流出するので、此の流氷には(平面五六間より百間位のものを見た)海豹が乘つて寢込んだ儘流れ來るのが多い。又ペングキン鳥も二三羽或は十數羽の一群が流氷に乘りガヤ〳〵騷ぎながら流れ來たのもあつた。此の時血氣の隊員は流氷上の海豹を發見するや、攝氏氷點下六七度の寒氣をも意とせずシャツ一枚となり、直ちにボートにて流氷へ乘り移り、海豹狩りの一幕を演ずるのであつて、手に手に棍棒又は小銃を携へ、流氷上に橫臥し大敵の身邊に迫るのも知らずに白河夜船然たる四五尺より一間以上もある海豹の頭部を目掛け一擊を喰はすと云ふ荒療治を演ずるのであるが、此時海豹は不意の一擊に目を廻はし身を藻搔いて海中へ逃れ去らんとするも最早遲く、急處の痛手に目闇らみ口を開き敵に向ふも更にその甲斐なく、二擊三擊の後遂に斃るる段取りになるのであつた。「此の時さすが血氣の隊員も惻隱の心よりか、一休の古智に倣ふつもりにや斃れし海豹の一々に對し下の如き引導を與へたるは人の性の善なるを立證せしものか。引導に云はく「汝ち海豹逃際の如く氷上に橫臥しあつて棍棒の一擊を喰ふもゴロ〳〵として氷海に逃げ去ること叶はず、しかず此の棍棒の下とに斃れ食肉となりて我等日本男子の腹中に入り肥料となれ喝」

此の時白皚々たる流氷上は眞紅の色に變じ、隊員又全身血に染まり物凄き姿となる。亟いで海豹の死體をボートより甲板上に引き上ぐる一段に移るのであるが、一間餘の海豹の重量は約七八十貫目より百貫目位ある爲め總員掛にて大ロップにて海豹の胴體を縛り付け甲板上に引き上げ大海豹八頭の處分料理方を熟練しある樺太人二名に命じたのであつた。その處分料理と云ふのは最初皮を剝ぎ取りて石炭代用として機關の釜に投じそれ

より肉を切り取りて一行の食用に供したのである。此の時の寒氣は前に云ふた通り攝氏氷點下六七度であつた爲め、海豹の肉なぞは皆氷の如くになり、保存上頗る好都合であつた。此の海豹の肉は現今東京市府の公設市場にて販賣してある鯨肉の赤味と殆んど類似してある爲め、食用に供するには脂肪分にてエリ付け、少許の食鹽をフリ掛け食膳に上ぼすのが特に好味であつた。次に流氷上のペングヰン鳥狩り、此れは海豹狩とは全く趣を異にしてあつて頗る困難な仕事である。ペングヰン鳥も最初は餘り人間を見た事が無い爲めか、人間が彼等の身邊に近づいても仲々逃げない、じつとして人の顔をみつめて居る樣な案配であつたが、愈々手をのべ、捕へんとするとき、始めて人間と云ふ奴は我等を捕り喰ふ人鬼ででもあるかの樣に驚き、キー〳〵と奇妙な鳴き聲を擧げ、流氷上より身を躍らして海中に飛び込み、水中深く潜り入り、他の流氷上に逃れ移る爲め、流氷上のペングヰン鳥狩は失敗に了り、極地に至り大氷堤下の海氷上にて大小百數十羽のペングヰン鳥を捕獲したのであつて、その肉は全部食用に供したが、鳥と獸とを混合した樣な肉味を覺え頗る好味であつた。此のペングヰン鳥は彼等の種類が澤山あつて、その種類毎に一群をなし、小なるは二尺位、大なるは五尺以上のものもありて、人間を見ると彼等は矢張彼等と同樣なものとでも思ふのであるかは分らぬが、先づ一群のペングヰン鳥は必ず人間に對し首にて輪を二三遍畫いて敬禮をする樣な身振をする。それがすむと廻れ右又は左をして自己の住家たる氷上に歸へるのである。歐米の南極探檢家はペングヰン鳥に對しゼントルマンバード（紳士鳥）と命名してある位、仲々人格ではない鳥格の高き品位を備へてゐる。形は恰も背部は黑の燕尾服を、前方は純白のチョッキを着たに酷似してゐる。此の鳥は御承知の通り世界中南極地方のみに居る天下一品の奇鳥である樣に思はる。

此のペングヰン鳥は飛ぶことの出來ぬ鳥にて羽がなく水中游泳に、必要な水搔のあるヒレがあつて氷海中に潜り込み小魚類を食し、氷上に棲息して居るのである。彼等が産卵する場處は矢張り氷上であるが、産卵期が近づくと夫たる雄鳥が海中深く潜り込み海底の小石をついばみ來りその小石が廿個以上にもなれば夫れを氷上に圓形に並べ、その並べた小石の圓形狀内に婦たる雌鳥が腹部を押し當て、小石の暖氣にて産卵するのである。數百尺の海底より此の小石をついばみ來りて産褥を構造する雄鳥の困難も大なる哉で、時としては小石を取る途中にて發病等の爲めかその儘海中に斃れ死體となりて氷海に浮き上るのも往々ありて、斯樣な時には雌鳥は可哀想にも未亡鳥となりて止む

を得ず氷上に產卵するのであるが、氷上への產卵は到底孵化の效力無く、卵は皆凍結して仕舞ふのである、此ペングヰン鳥はその數幾千萬なるか殆ど無數である。此れが皆氷上に生れ、氷海に食を獲、氷上海に棲息する無人寒鄕の氷鳥とでも云ふものか。

偖て前に戻り氷海中の壯麗大觀の一句をもう少しく述べ樣と思ふ。或る日周圍二三海里ある青味を帶び一見身體粟を生ずる如き氷山が、開南丸の左舷に二海里の水海に流動しあるを見た。その氷山の周圍には二十間餘もある數頭の大鯨が氷山を圍繞するが如く、各々潮れを冲天高く吹き上げ、護衛するが如く取り卷くが如くブーブーの聲高く氷山と共に流れ行く。その壯麗大觀殆んで筆紙にて形容し難き程なりき。又或る日見た氷山の如は周圍一二海里であつたが、船を去る約二海里の右舷に當り流動しありしが右に左に轉々しつゝある後俄然百雷の轟くが如く大音響を發し、海水奔騰天に冲せしが暫時にして平靜に歸せり。此れ卽ち大氷山の寢返へりにて、氷山の海面に現はれある部分は海中に沈みある約六分の一である爲め、暖流に洗はれつつ漸次海中の部分融解するに當り海面に浮み出である部分より輕くなるや上下の位置轉換する爲め所謂氷山寢返へりの一大活動を惹起したのであつた。

槪して大氷山が船の左右一海里バカリの近距離を通過するの都度、甲板上に立ち之れを見物するや、身體俄然寒威に打たれ凛烈の氣身振るひするに至つたのであつた。

嗚呼偉大なる哉南極圏內の氷海の氷盤。嗚呼雄大なる哉南極の大氷堤の氷層。

炎天三伏の時周圍一二海里ある氷山の一二個を我が品川灣內に持ち來たらばその涼味果して如何。了

壺中の涼味

田中貢太郎

吾輩が僑居へも夏が來た。海岸へ行つて、熱風に吹かれ、不快な夕凪に苦しめられるのは厭だが、山の中へなら行つてみたい。水晶のやうな谷川の流れを見、瀧の霧しぶきを浴び、雲の中を峰から峰傳に行くなどは、登山の經驗ある者の忘れられないところだが、その日その日に追はれてゐる吾輩のやうな者には、その時間もなければ費用もない。たまに時間があつても、金がなかつたり、金があつても、時間がなかつたりして、田岡嶺雲先生の云つたやうに、貧乏人が避暑の支度をして、浴衣の質受けをしてゐると、もう秋風が立つて、行く時期が過ぎてしま

ふのである。

吾強は負けおしみかもしらないが、必要な旅行は別として、決して避暑のために旅行したことはない。そんな暇があれば、二軒長屋になつた二階の書齋へ寢ころんで、手あたり次第に物を讀む、章の中からであらうが、おしまひであらうが、そんなことはどうでも好い。開いた所へ眼をやつて讀む。飽いて來れば肱枕をして睡つてしまふ。客が來れば、客と番茶を啜つて話す。商人のするやうな將棊をやらうとも思はなければ、碁石を握らうとも思はない。

二階の閑寂に飽いて來ると、庭におりる。庭には蕗と苣を植ゑ、その苣畑の縁には、朝顏を植ゑて、竹垣を設けてある。下の室で仕事をしてゐる細君や子供と話をしながら、苣の枯葉を採つたり、朝顏の蔓をなほしたりする。米の洗ひ汁があれば、それをかけもする。その畑へは、昨年いんげん豆を蒔いて、紫の花を見、秋には茶柿の實を蒔いて、その二葉の根元に夜々鳴く蟋蟀の音を聞いた。

二階の西窓は崖に向つてゐる。崖には雜木が生え、竹が生え、薄が生え、蔦が生えてゐる。書物に飽き、午睡に飽き、庭いぢりに飽くと、その西窓の傍へ行つて、靑々とした崖を見るのもその日日の勤めの一ツになつてゐる。雨の日は殊に趣がある。白い大粒の雨が薄の葉にころがり、驟雨は横さまに降り注ぐ。その驟雨がからりと晴れて、涼しい風がその草木の葉に渡る趣は、壺中の天地に喘いでゐる者でなくては、味ははれないところがある。

東窓の軒端には、友人が仙臺から持つて來て吳れた松笠風鈴と云ふ、蜂の巢がこはれず假ばかり殘つたやうな形をした小さな風鈴があつて、風が來ると、チロチロと云ふ合圖をする。風鈴の鳴らない時は、さすがに暑[illegible]。そんな日には、晝頃から湯を立てて貰つて、暑くなると二[illegible]三度でも這入る、しかし、さうした人爲的の涼味は、直ぐ[illegible]物から消えてしまふので、詩集や句集をひつ張り出して來て、心を詩の中の涼境に遊ばす。それは觀無量壽經の極樂觀に一致するものがある。趙元が『旱雲火を飛ばして長空を燒く、白日渾て爐中に墮つるが如し、廣寒氷雪宮に到らずんば、扇頭能く幾多の風有らんや』と云つたやうな酷暑の時でも、蘇軾の『黑雲墨を翻して未だ山を遮らず、白雨珠を跳らして亂れて船に入る。地を卷く風來つて忽ち吹き散んず、望湖樓下水天の如し』の詩に心をやつたなら、夕立のしぶきが顏にかかるやうな氣になる。驟雨の詩では、賴山陽にも「晴江一帶孱顏を界す、夕照斜明蒼翠の間、雲意猶ほ餘興を留めて在り、將に殘雨を載せて他山を過ぐ」の詩があつた

やうに思ふ。

雨には雨の涼趣があり、水邊には水邊の凉趣がある。橋本蓉塘の『漾漾たる風暖碧波濕ぐ、雨餘の樓閣晩涼多し、湖心已に飲む斜陽の影、一霎の秋聲開荷に在り』の詩には、傘のやうな大きな蓮の葉が、夕風にばさばさと音を立ててゐる容が偲ばれる。山陽の『萬人聲裡夜如何、月は天心に到つて露氣多し、叢竹哀絲船櫛比、一江處として金波を著くる無し』の詩は、寒い程に涼しい橋の上の涼境が想像せられる。

高駢の『綠樹陰濃やかにして夏日長し、樓臺影を倒しまにして池塘に入る、水晶簾動きて微風起る、一架の薔薇滿院香ばし』には、山亭の涼味が動いてゐる。山邊の涼風を思ふことは、水邊の涼味を思ふと同じ效果がある。『無數の山蟬夕陽に噪ぐ、高峯影裡陰涼に坐す、石邊偶ま見る清泉の滴るを、風過ぎ微に聞く松葉の香』は、汪萃の詩である。『珠宮翠嶽氣氤宿す、鶴唳天風只だ自から聞こゆ、昨夜石樓窓鎖さず、曉來飛び入る滿床の雲』、これは俯虛歎の詩で、既に雲が來て床の上にかかつたと云ふ三斛の涼味を齎らす詩だ。これに清水南山の『峭壁高く一派を懸けて垂る。飛煙奔碧氣凄其、請ふ看よ三十三線の練、碎けて千條萬縷の絲となる』の詩を配するのも無用の所爲であるまい。

夜は酷暑に苦しむ者を蘇らす救ひ主である。如何に涼境に遊するの工風に精進しても、この夜の世界がなかつたなら、人間の過半は、酷熱のために倒れるであらう。夏の夜は貧乏人の樂園だ。赤い銅盤のやうな月が出て、涼しい風の吹く縁側で、一二台のおしきせを飲む快味は、吾輩のやうな境遇の者でないと判らない。蚊がゐても決して興をさまたげない。膳の肴には、もがれた莢の葉がのぼる時もあれば、冷やツこや、枝豆ののぼる時もある。

夏の月枝豆の味淡かりき
打水の葉蘭のそよぎ風鈴に
蚊遣ほそほそ闇の女聲

螢が一ツ二ツ飛んで來るのい。夕暮の庭には、この頃來てゐる親子のやうな二匹の[illegible]、のこのこ出て來て、それが蚊をねらふ。卷煙草の飲みさしを投げることがあると、餌と間違えるのか、パクリとやつて、驚いて眼を白黑にして吐き出す。それを見ると氣の毒になつて、二度とそんなことはすまいと思ふ。二階へあがつて、譚榻ならぬ籐の寢椅子によつかかつて、風鈴の音を聞いてゐると、男の子と女の子が、花火を買つて來て、縁側の暗い所で、プチプチと燃やす。

夕飯の後の散歩は、夏の夜の最大樂事だ。都會の夜は、それ

ぞれ設備をして散歩の人を待つてゐる。遠くへ散歩に行くのが厭なら、庭を歩いて蟲の音を聞くのも好い。不性者の吾儕は、その夏の夜の情景も、やはり書籍によつて想像する。『夜熱依然として午熱と同じ、門を開いて小立す月明の中、竹深く樹密にして蟲鳴く處、時に微涼有り是れ風ならず』は楊萬里である。『夏雲絮を擘いて月新に晴る。細葛風を含んで歩歩輕し、數點の籬燈橋外の市、籠蟲一擔秋聲を賣る。』これは野田笛浦の詩だ。『瓊樓玉宇簫笙を奏す、似ず淫哇世上の聲、忽地天風夢を吹き落す、一庭の凉月草蟲鳴く。』これは門田朴齋の詩である。東京に生活する者で、夏の夜と兩國の川開を一所にしない者はない。それには、成島柳北の詩がある。『燗然たる煙火半空に開く、百丈の長橋客堆を作す、奇幻誰か揮ふ彌陀の手、萬人頂上花を雨らし來る』

避暑の法は、いろいろあるが、要するに人爲的な、煽風機をかけるにしても、入浴をするにしても、涼しい飲料を取るにしても、それは一時のしのぎで、本當の涼味はやはり白樂天の『何を以て煩暑を銷せん、端居す一院の中、眼前長物なく、窓下に清風あり、熱の散ずるは心の靜かなるに由る、涼の生ずるは室の空しきがためなり、此時身自得す、更に人と同うし難し』と云ふのでなくてはならない。

避暑し得ざる者のために

小川未明

新聞の人事消息欄を見ると、この頃大分避暑に出かける人が多いやうです。また、避暑地だよりには、寫眞などが出てゐて、それを見てさへいかにも涼しさうです。しかし社會面に眼を轉ずると、昨今、阪神の勞働爭議がます／＼熱氣を加へて、一片の記事すら、すでに火を吐かんとしてゐます。

避暑などを夢想し、實行するのは、畢竟有閑階級のなすことであつて、どんな炎天にも勞働者は汗を流して働いてゐるのです。都市に林立する煙突から休みなく黑煙が空に漲るのも、朝夕汽笛の響きが何處の家庭にもきこえて來るのも、また大工場の四壁を揺つて蒸汽機關が廻轉するのも、其處には幾萬の勞働者が働いてゐることを知らしてゐる。かうしてみんなの必要品が生産せられ、事實となつて、社會が文明に向つて、刻々に呼吸をつゞけてゐるのは獨りこの階級が存するがためです。

人間として産れ出たものは、すべての人の權利が平等であり、同じ社會に生活する限りは、また苦樂幸福が一つでないと

いふ理由のあるべき筈がない。しかるに事實は、また決してさうではないのです。

「よく避暑になど出かける金があるな」

この言葉は、しば〳〵私が消息欄を見る時に口から出る言葉です。

いまやかうして、階級闘爭は實に哲學であり、この相異せる倫理思想の相剋は、直に眞理に到達するまでの過程とはなつたのです。――意見は、こゝに止めて、少しく、私のこの夏を過しつゝある經驗について語ります。

東京に住むならば、郊外をとたび〳〵思ひました。いくらかの庭や、園が家のまはりにあつたなら、自分は好きな草花や、野菜を植えるであらうと考へたばかりでなく、子供等を跣にして遊ばせ、冷たい濕つた土をも踏せることが出來ると思つたのです。殊に薔薇の盆にも近づくと、其の茂つた秋草などに來て鳴く、馬追いや、轡蟲などの音色を愛する念に堪へられなかつたからです。しかし、こんな考へも、郊外に水道のないこと、一方井戸水に關連して、チブスなどに思ひ至り、夜になると蚊が多く、晝は塵で蠅が多いことなどを考へると、一得一失の感じがして、中にも共同井戸の一事が神經を惱まして、郊外へ移る氣も失せてしまふのです。

晝間、私は、二階の窓から、頭を出して、照りはたゝく街の屋根を見渡すたびに、空を立罩めた空氣のどんよりと濁つてゐるのに、氣付かずにゐられません。大人はいゝとして、生れたばかりの赤ん坊や、まだ年のいかない虚弱な子供等に、この空氣を吸はせることを罪を犯すもののやうに痛ましく感じます。都市居住者の子供の死亡率が著るしく上るのは、何を語つてゐるか。

雨の降つた後を限りなく喜ぶのもこれがためです。たとへ都會といつても、これを大自然の上から見下したならば、其の建物の如きは、一點の黑い塊にしか過ぎないであらう。風雨の模樣のある日に空を仰ぐと、灰白色の雲行がいよ〳〵險しく、水の流るゝより其の速かなのを見ることがあります。高い山に登つた者には、この雲行きが山で見たと同じものであることを感ずるにちがひない。都會、田園、山岳などと人間の定めた區域では分れてゐるけれど、一朝風雨の急なる日には、どこゝ差別なく雲と雨とに包まれてしまふ絶大な偉力を持つものは自然であります。

暴風雨の空模樣は、私に、太洋の寂寞、山岳の孤獨とを都會の中にゐてさへ感にさせるのです、そして、此雨後の靑い、傷

み易いうすい硝子などのやうな空の色をこの上なく愛すると同時に、少しの塵埃にも汚されてゐない空氣を何ものにも換へ難い程貴重のものに思ひます。そして、少しでも長く、多く子供の肺臓にこの空氣を送りたいと思ふのであります。このことなどは、都會の陋巷に住む人でなければ同感のし難いものでありませう。

曾て、私は、本誌の納涼欄に高山植物の話をしたことがありましたが、いまだに私はこれを愛し、そして、夏の熱さを忘るのに最もいゝものだと思ふことに變りがないのです。縁日などに出る植木は、手に取つて見るに足るものは殆んど稀でありますが、大久保邊の庭の廣々とした盆栽園に遊んで、山にある時のまゝの姿である檜柏や、楳などの鉢植を靜かに眺める時は、草を見る時にもまして、深山、溪谷が連想されるところから、一種の暗い冷たいなつかしさを感ずるのであります。しかも雲の變幻窮りなく日の光りの陰り易い夏の午後には、思ひがけなく夕立に遇ふことがある。すると、忽ち廣い庭園の數限もない盆栽が雨に濡れて、雫の滴るのがたまらない涼しさの覺えられることがあります。

奇石を愛する心も、人跡の少ない、山奥の溪や、流れを慕ふ心からであります。人工を加へない、山から掘り出された石を、支那燒の水盤に砂をしいて、其の上に石を据え、頭から水を注いで眺めるのを、昔から一種古典的な趣味の如く思はれてゐますが、私には、やはり新しい、盡きざる感興をそゝるのであります。かゝる趣味は、一面貴族的ではあるが、決して、利己的感情から生れたものでなく、これによつて、寧ろ虚榮が幻滅し、すべてが虚無に達する、他の人生の哲學と融合する何ものかゞあることを知ります。

さう言ふと、八月にも入れば、すでに天の川が白う見えて、星の光りが、夜々いくらづつか冴えて行きます。獨り、いつまでも寢ずに起きて夜の空を眺めることがやはり好きです。

「みんな死んでしまふのだ」

から考へたゞけで、言ひ知れぬさびしさと悲しさが身を襲ふのを覺えるのであります。晝間の炎熱は、また感ずべくもないが、どんな煩はしいことも、また利慾、快樂、すべてが空虚に歸する日のことがしみ〴〵と思はれるのであります。

このほか、私は、地圖を見ることに興味を覺えます。外國電報に現はれた地名を地圖の中から探し出して、其處に起りつゝある事件を思ひ、もしくは、北海の孤島や青い、青い、青く染め出された太洋の中から拾ひ出して空想に耽り、次に其れと反對な南洋から、また一つの孤島を見出して、いろ〴〵の空想に

耽り、南北幾千里、人間の生活の相違などを比較し空想することにも深い興味を感じます。これなどが私の消夏法といへば言へるのです。

――七月三十日――

海水浴遭難記

生方敏郎

　長男の光多も、この春から小學校一年生と成つて、毎日元氣よく通學してゐたが、いよ／＼この十六日から夏期休暇と成つた。近所には遊び友達も無し、學校友達はお互ひに家が距つてゐるので交通も出來ない。そこで、止むを得ず、弟や妹どもを對手に家庭で遊んでゐるが、庭は無し、家は狹し、おまけに弟の文多君は、まだ幼稚園の中でも一番小さく、赤ちやんといふ綽名を頂戴してゐる程度であるから、兄さんの目からは餘り子供で對手にならない。その次の妹は食ひしん坊で、朝から晩までお菓子ばかり欲しがつてゐるし、末の弟は乳くさくてお話に成らない。

　光多君も、遊び場所と遊び對手の無いのには、ほとんど閉口してゐるらしく、詮方盡きて、パパさんの書齋を訪れ、まづ讀本の復習をすませ、それから

「パパ。机の隅を貸して、ね」

と私の机の隅で、水繪具を出し繪を描きはじめる。讀本を見て桃太郎さんの犬と猿とを折角描き上げたと思ふ頃、文多君がやつて來て

「兄さん。此處へ鐵橋を架けやう」

と、犬の頭から猿の頭へ太い棒を二本引く。

「パパ。文多ちやん、いけないの」

といふ騷ぎだから、

「あゝ、階下へおいで。パパのお仕事の邪魔に成るから」といふ結果に終る。

　併し、これでは、全く子供が可愛相だ。子供は廣い場所で、好い友達と、思ふ存分遊ばねば、脾肉の嘆に堪えぬであらう。これでは、何處か、山か海かへ轉地せずば成るまい。と思つてゐると、先日、友人の川俣君が來て

「君、しかし、家庭生活の上から、避暑といふことは、何うしても考へものだよ。避暑地にゐる人々を觀察すると、大抵の人間が、皆不良性を帶びて來てゐる。不良　年もあれば、不良靑年もあり、不良老年もあるんだ。だから、矢張東京にゐて、五日に一度位づゝ、朝早く出て夕方歸る程度で、海なり山なりへ

遊びに行く方がいゝ」

と勸めた。

「では、それで、御一緒に子供を連れて鎌倉方面へでも行かうか」

と、いふところまで進んだ。

あいにく、その日頃から、雨が降りだした。二十三日が降つて延びた。二十四日も降り、五日も降り、六日も降つた。

光多君は、川俣君の家へ出かけて行つ　、子供さん達と、照々坊主を十も十五も拵へて、晴天を祈るといふ有樣であるから、我々親達も、つい引かされて、少しの時間でもあれば今度こそ、いよ／＼天氣に成ると思ひ込み、そして又その豫想は屢々裏切られた。

二十六日の朝、小さい地震があつて、午ごろから雨が上つた。空は夜に入つても、まだ曇つてゐたけれども、今度こそ、此まゝ天氣に成るだらうと思つたから、川俣君と打合せする爲めに、私の方から訪れた。

「何うするね」

「明日、出懸けるか。一たん連れて行くと言つてしまつたものだから、子供が毎日待ち切つてゐて仕樣がない。もう此上延期も出來なかんべえ」

などと、話してゐるところへ夕刊が來た。子供達は急いで天氣豫報を見た。

「曇り、後晴れだわ。小父さん行く？」

「行く？　パパ」

私の子供も、昨日から泊り込みで來てゐた。

「行くよ。明日、朝早いぞ」

私は、時間の打ち合はせをして、その晩ビールなぞを飲んで早く寢るつもりだつたが、何歟と用がたまつてゐるので、床に這入つたのは十二時だ、そして五時には、もう起こされてしまつた。

細君は、その晩はほとんど寢る間もなく。支度した。私は朝飯をすませ、いろ／＼御馳走を詰めこんだバスケットを提げ、子供好きの事務員Ａ君は次男の文多を負して出懸け、川俣君の一行と一緒に成り、私の方の都合から鎌倉行きを次回に延ばしたので、千葉方面の海岸を志し、何處で降りるかは行き當りバツタリといふことにして、兩國驛から都を離れた。

子供等は、窓から外を眺めて、まるで籠を放れた小鳥の様に悦んだ。そして囀つた。

「小父さん。私達昨夜ねえ。明日朝起きられる樣につてねえ。寢る時、水を飲んでおしつこしないで寢たのよ。さうしたら、

光多さん、夜中に泣き出して「しつこが出るうつて」泣いてゐるのよ」

と、すみ子さんが言つた。私は

「薬が早くきゝすぎたんだね、けれど、子供でなければ思ひつかない考へだなあ。面白いなあ」

と、川俣君と共に、笑つた。

文多君は、尤も上機嫌で、もうA君にせがんでバスケットの中からミルクチヨコレートを出して頬張り、又幼稚園で教はつた唱歌を唄つた。

「津田沼で下りて、海岸を稲毛まで歩かうか」

と、川俣君が言ふと、子供達は、先達て學校から津田沼へ遠足に來たことがあるので

「あ、さうしませう。それがいゝや」

と、皆悦んだ。

津田沼のステーションから、海岸までは可也あつた。子供達は、案内顔に、小犬のやうに互ひに後前に成りつゝ走つた。時々私達から見失ひ相に成るほど遠く距つた。その中に、踏み切りへ來た。子供達は踏み切りを渡つて、直に左へ曲つたが、私達は踏切番に海へ行く近道を訊いた。すると、踏切番の若い爺は「待つてました」と言はぬばかりに

「この道サずん／＼おいでに成ると、直き海サ出ます。そこにラジユームの温泉もあるし、演藝館もあります」

「游ぐところは有るかね」

と訊くと

「有ります。行つたら、踏切で聞いて來たと言つて下さい。」

「あの今、子供達の行く方は、海へ遠いのかね」

「遠いね。あれは紡績の裏の海サ出られますが、こつちの方が海はいゝですよ」

と、尚ほ丁嚀に繰り返して、道を教へた。

川俣君は大聲を張り上げて

「オイ／＼ッ。こつち／＼」

と、子供達を呼び戻した。

そこを離れると、川俣君は

「あいつ臭いな。頼まれてるな」

と、云つた。私は

「盆暮に付け屆けぐらゐ貰つてるのだらう」

と、云つて、二人で顔を見合はせて笑つた。

間も無く、昔のパノラマ館のやうな演藝館が道の左手に見えた。そして、海水浴場の入口へ來た。軍艦の滿艦飾のやうに、高い柱から綱を張つて外國の國旗が吊されて、景氣を添へてゐ

た。

入口には、日に焼けた顔の、頸から頬へかけてペツタ　白く塗り立てた若い女が二人ゐて、一人に付き二十錢宛の入場料を請求し、鴨綠江節を印刷した小片紙を渡した。

「昨日まで、田の草を取つてゐたのを狩り集めて來たのだらうね。それにしても、鴨綠江節とは、海水浴と何ういふ取合はせかな」

と私達は呟いた。赤前垂の女は、この先に福引があるから、何うか引いていつて下さい、と賴んだ。

道傍の水溜りで、二三人釣りしてゐた。電柱に「福引はあちら」と指さしたビラが貼つてあるのを見て、私達は、それが海邊への順路で、そして同時に福引も序でに引けることと思つて、道しるべの通りに行くと、道は葦の藪に成り、おまけに三又路に分れてゐる。そして、そこには

「寶稻荷は、何方らでせう」

と書いてある。實に、惡い洒落だ。

私達は、早起をして、込んだ電車や汽車に揉まれた上に、ステーションから十五六丁も歩いて來たのだ。お茶一つ飲まず、腰を一度懸けず、目的とする海の顔も見ない前に、わづかの景品の福引ぐらゐに、そんなに矢鱈に引つ張り廻されては、たまつたものではない。これでは、もう福引は餘興でも何でもない。子供たちは、足は勞れ、喉は乾き、その上、葦の藪へ迷ひ込まされたので、もう泣き出し相に成つてしまつた。

漸くのことで廣く海原の見渡たせるところへ出た。そこには、長廊下のやうな、海に向つて横に長い休憩所がある。下は板敷で長い茣蓙が敷いてある。脫衣場と見え、赤前垂の黑顔白粉の女が二人ゐて、サイダー位は備へてある。

私達は、まづ着物を脫いた。寒い位涼しい風が陸の方から吹いて來た。バスケツトを開き辨當のパンやらむすびやら菓子やら果實やらを、取り出した。綠茶と紅茶との這入つた魔法壜を傾けて、皆々咽をうるほした。子供は食物を見ると、歡喜の聲を放つて悅んだ。

お腹が出來ると、子供達は、遠淺の海へ向つて驅け出した。

私も、子供達に續いて、海へ向つて歩いたが、まだ五六歩も運ばない中に、足の蹠にチクチク痛みを感じた。海は、殆んど泥沼の樣で、中一面に淺蜊の死殼があるのだ。泳ぐこと等は迚も出來ない。歩くにも足を切る怖れがある。私は、もう嫌に成つて、薙刀酸漿を一株拾つただけで休憩所へと引上げた。

A君と子供達は、それでも大元氣で、二丁も沖へ出て何か採集してゐた。

川俣君は赤前垂に冗談を云ひ乍ら、薄緣を卷いたのを枕にして、横に成つて風に吹かれてゐた。私も文多を遊ばせつゝ、暫くそこへ寢轉んだ。

私達から少し離れたところに、先刻から四十少し越した位の婦人が一人でポツリ涼んでゐた。私が海から上つて來てみると、休憩所には又一人五十才位の男が殖えてゐて、その婦人と四五尺離れたところでサイダアの壜などを前に並べて、烟草の烟を吹かし乍ら、その婦人と言葉を交へてゐた。私達は此方で、その光景を眺め乍ら

「何うだらう。あんな歳に成つても、女は對手に依つては水を向けるだらうかなあ」

「少くとも、あの樣に一人で海へ來て、恰度釣り合ふ位の異性を發見したら、或程度までは接近するだらうね。理智的には成つてゐるが、老衰してしまつたわけではなからう」

「危險。〳〵。」

と、私達は哄と笑つた。

私は、細君に子供を付けて海へ寄越して置いて、一週に一度位づゝモスクワから通つて來る主人が、避暑地でいろ〳〵氣まづい思ひをするところを、露骨に描寫してある或るロシヤの作家の小說を、思ひ浮べて、默つてしまつた。

その中に、光線は眩ゆいほど明るいのに、雨がぽつ〳〵落ちて來た。

私は、大聲で子供を呼んだ。聲だけでは足りないので、手を叩いて呼んだ。それを聞きつけた女の子達は、又私の聲を取り次いで、更に沖にゐる男の子達を呼んだ。

皆、蟹やら蠣やらを、少しづつ持つて歸つて來たが、多くの者は足を切られてゐた。彼等の脛から下は泥だらけなので、一丁ほど先きの井戸へ洗ひに行つたが、歸りは烈しい雨に濡れつゝ走つて來た。

「小父さん雨止む」

と、秀夫君が訊いた。私は

「止むでせう。こんなに明るいから」

と、言つて、海を見ると、海と空とが一つに成り、銀色に、もや〳〵してゐた。陸地の東北の方に黑い雲の一塊が見えた。皆、休憩所に立ち並んで、雨に飛沫く海上を眺めてゐた。川俣君だけは、横に成つたまゝで、

「一と睡りしてゐる中に雨は止むよ」

と、言つて、眼を塞いだ。

雨はだん〳〵ひどく成つた。しかし、それは不安でもあつたが、面白くもあつた。

しばらくすると、小降りに成つた。先程の婦人は、小さいパラソルをさして、歸つて行つた。彼女と話してゐた爺さんも、それについて歸つた。

その時、何處からか耳の極めて短かい醜い大犬が私達の前へ驅けて來た。そして鼻を鳴らしつゝ去つた。直、二人の海水着に海水帽の青年――一見不良らしいのが、大きな痩せた犬と共に走つて來て、私達の前を驅け拔けて、雨に濡れながら、犬を淺い泥海へ追い入れた。一人が

「ジヤミ。ジヤミ」

と叫ぶと、先刻の耳の短かい犬が驅け出して來た。犬二疋と青年二人は暫く海の中を驅け廻つてから、脫衣所へ這入つて來た。青年は、もう永く海岸へ來てゐるらしく、四肢も顏も念入りに赤黑く日に燒けてゐた。

その中に、また雨が烈しく降り注いで來た。可也近くの空で雷さへ鳴り出した。寒い風も少し陸から吹き寄せて來た。子供達は、しばらく犬を見て紛れてゐたが、風と雷の音とに心細さを感じたと見えて、私達親達の周圍に集つた。

「雨止むかねえ。小父さん」

「止むよ。かう烈しく夕立に成つて來たから、もう直ぐ止むよ。雷怖かない?」

「怖かないさ」

私と男の兒達とは、こんな話をしてゐた。

雷は、やがて止んだが、雨は強く降り續いた。もう降り初めた時から考へると、一時間以上に成る。

青年二人は、犬と共、ござの上に寢轉んで、軍艦マーチか何かの口笛でやつてゐたが、雨が止み相も無いので、又雨の中を、村の方へ驅け出して行つた。

雨は、恰度波に男波女波があるやうに、強雨の中にも、或時は強く成り或時は弱く成つた。雲は荐りに西へ／＼と飛んだ。曇つた空を海が反射する爲めに、四邊は常に極めて明るかつた。

脫衣所の天井は蘆の葉を敷き並べたものであるが、その勾配が緩いから、雨が少し纖細すると、もうポツ／＼洩り出した。併し天井の傾斜の高い方の端にゐれば、漏つては來なかつた。併し、一度激しく雷雨があつてから後は、何處も皆洩り出した。洋傘を用意して來たのは、親子共二人だけであるから、二本の洋傘の下に、親と小さい子供とが這入つた。蘆葺の屋根を漏れて來る水は、洋傘の骨々の端の玉のところから、幾條もの細い瀧と成つて落ちた。

赤前垂の女達は、敷物の長いござを卷いて、片隅へ立て懸け

た。そして、サイダアの箱を置いたまゝ、村の方へ驅け出して行つた。

私達は皆下駄を穿いて、立つてゐるより外はなかつた。文多君は、もう退屈してしまつて、私の洋傘の中へ這入つてはゐなくなつた。雨のビショ〱洩る中を、驅けて歩いた、子供はと見れば、誰も皆ダショ濡れに成り、二年生の秀夫君と光多君とは「寒い。〱」と云つて、青ざめた顔をしてゐた。私は

「何うも、いつ迄待つても霽れ相もない。すつかり、こぢれてしまつた。僕等も村の方へ走つて行かうか」

と言つたが、川俣君は

「もう、少し待ち玉へ。乾度霽れる。こゝまで來て。もう永いことはない。十分か、十五分だ」と答へて、冗談に

「何うだい。女中共歸つちまやがつて、お茶代が助かつたな。サイダアを置いてきやがつたが、この間に飲んでやつたら、奴等共後で吃驚するだらう、なあ」

と笑つた。

併し、雨は、それから、四十分しても一時間しても止まず、小降りにも成らなかつた。何處も皆飛沫と雨とで烟り、遠くの方は見えなくなつた。

子供達は、女中が隅へ立て懸けて行つたござの中へもぐり込み、或はそれを頭へ冠つて、聲を揃へて唱歌を唄ひつゞけた。

文多は、全く濡れ鼠に成つたので、A君が負つてその腹を冷さぬ樣にした、川俣君の口からも、もう冗談は出なくなつた。

「傘が二本しか無いには、困つたなあ」

と、初めて嘆聲を洩らした。

「子供を病氣にした日には、直ぐ五十兩や百兩は、消えてしまう」

と、言つてるところへ、赤い腰卷を腰まで露はして、跣足で、先刻の女中が二人、番傘を半ばすぼめて、サイダアを取りに來た。そして、

「あすこの青い家にラヂウムの湯がわいてゐますよ。あすこまで、おいでれば」

と語つて、文多をそこまで負つて行つてあげませう、とまで言つてくれた。

併し、このドシヤ降りに、出してもやれず、又私が附いて行かねば、泣いて人々を困らせるに極つてゐる。私が躊躇したので、女中達はサイダアの箱を擔いで驅け出した。

それから、私達は、丁度一丁ほど先きの氷店まで子供を連れて移轉するのに、何れだけ苦心したことか知れなかつた。この氷店を足場にして、又降る中を、二人、三人づゝ、二本しかない傘

で、五六丁先きに見える青い家まで移るには、又一方ならぬ苦心を要した。

雨には、前後四時間ほど濡れた。そして、平素なら、たゞでも這入れぬ小便色をしたラジウム湯にひたつて、私達は、大人も子供も、皆、わづかに蘇生の思ひを爲した。

湯には、私達の他に頭の禿げたお爺さんがゐて、

「あなた方も東京から、いらつしやいましたか?、私も、今朝子供らにせがまれて、天氣豫報を當にし、大丈夫と思つて來て、途中から降られて、ひどい目に會ひましたよ。電車が船橋から引返しに成り、千葉から來る電車を待つ間三十分も濡れました。こゝの家ですか?、食物なんか口へは這入りませんよ。魚も東京から持つて來たものですからねえ。それで、ボリ放題。新聞に提灯持ちがしてあるのを信じて來て、バカ〱しい目に會ひました」

とコボして聞かせたので、漸く伸々した氣持に成つてゐた私しは又更に、この先いやな事を經驗せねばならぬかといふ不安に襲はれて、浴場を出た。

全く、喰物は何もなく、小さな卵焼が七十錢、のり卷と卵の壽司が一人前五十錢こいふ値段で、米飯はまだ壁も付かず、建具もなく、疊もなく蓙を敷いただけのもので、勿論床の間に懸軸が一つ見られなかつたが、それでも私達には、避難所であつた。

取り敢へず、子供達の着物をしぼつて、火に乾かした。火鉢が一つしかない、とやらで、女中が

「火鉢をお貸し申したので、帳場で私が叱られました」

と云つて取り戻しに來た。私は樣々に事情を話り懇願したので、代りに七輪を貸してくれたが、間も無く

「お客さまが見えましたから、その七輪が入用に成りました」

と云つて、今度は先刻の火鉢を持つて來て、七輪を持つて行つた。

こんな有樣で、苦心して、漸く、子供達の着物を乾かしてゐる中に、雨が上つた。

歸り途で、十七八の娘を兩腕に抱え、その首のところへ吊る下る樣にして二十四五才の代診先生らしい風采の男が、得意相に歩いてくるのに逢つた。

「あれだ。避暑地へ來て、知つた人が見てゐなければ、皆な、あの通りだ」

と川俣君は嘆息した。

遊覽地の入口の小屋に、黒顏白粉赤前垂の女中達が集つて、私達が通り過ぎると、大きい聲で笑つてゐたが、暫くすると、

「朝鮮で、一番高いは白頭山ヨイショ……」

と、彼等が高らかに、鄙びた聲で、鴨綠江節を唄ふのが、後ろの方に聞こえた。

都會の涼味

臨風生

緣日の盆栽草花、銀座の夜店、其間を往き來るさゝの中形、銀杏返し、翡翠の簪は、夏の涼味を象徴する東京情調であつたが、此の頃のやうに緣日が凋落し、夜店取拂が噂に上るやうになつては、都會の裡で、どこに晩涼を趁ふべきであらうか。

清淺なる水に富んだ京洛の地も飛泉には乏しい。戸無瀨の瀧、音羽の瀧と名にのみ勝れて、其實に副はぬこと甚しい。北齋や廣重などは、目黒不動の瀧、王子名主の瀧などを描いてゐるが、山の遠い武藏野に飛泉のないのは當然である。獨り大阪のみは、其近郊に箕面の飛瀑を有してゐる。細流の自在に、通ずる京洛は、暑い所であるが、涼を水畔に求めて銷夏の具とするに便が多い。水の都なる大阪の水は餘りに工業的であつて、涼み舟を泛べるには適さなくなつた。住吉・濱寺・淡輪・寶塚・箕面・蘆屋・六甲などが大阪人士の汗を洗ふやうになつたのは當然である。しかし千日前・天王寺には歡樂の灯の下に、夏の夜を過さうとする士女が織るが如く集ひに集ふ。

隅田川ももう納涼の場所ではなくなつた。綾瀨に生ひ茂つた蘆荻の跡も消えて、水神の森、木母寺あたりには、煙突から吐き出す煤煙と、軋り合ふ機械の響きとで、行々子の啼く音も聞えずなつた。待乳山の木立も疎になつて、山谷堀が肥料船の蝟集する所となつては、隅田川の名所は江戸の錦繪と物の本とに殘るばかりである。柳島も既に東京の市である。廣重の江戸土產を見るまでもなく、橋本の印しのはいつた小田原提灯を提げながら小梅の土手を業平橋まで夜風に吹かれたことも、奥の植半から赤い提灯に送られながら、御機嫌ようの艶めかしい聲を棧橋に聞き棄てゝ、夜の大江を吾妻橋まで下つたことも、つい近年のことであつたが、隔世の感を起さゞるを得ない。

東京市は舊を破壞することをつとめて、新を建設することを知らぬ。隅田川の美觀を毀へしたが、水を利用することを試みない。外濠は水道の水を切つて涸し、之を利用すれば、水泳場となるべく、納涼場ともなり得るではないか。上野公園を宮内省の手から市に移したなら、不忍池の美化も十分になし得べきである。濱離宮は水の公園としてもよろしく之を普[illegible]すべきである。日比谷公園も男女の密會を恐れるやうでは、今の所納涼場とするとは出來まい。後樂園を砲兵工廠より分離し得るならば、

都人士の爲に好箇納涼場ではないか。富豪貴族は庭園税を責めるよりは、其庭園を公開さすべきが寧ろ賢なる方法であらう。本郷の前田侯爵邸の庭園の如きに、雅趣高尚の涼を湛へて流れる。

第一相互の七階にある露臺に立ちて滿天の星斗を仰ぐ時、一陣の涼風は颯然として渾身に浸み渡るであらう。大内山の茂みは漆よりも黒く、品川沖は星明りに薄く映えてゐる。豆の如き燈火は滿都を點々に粧飾して、其間を馳る電車や自動車やは玩具の如く見える。エレベーターで地上に下りる時、下界はまだ街の中である。カフエー、バーのいづれも、燈火の眩く輝くところでは扇風器がうなりながらに廻轉してゐる。麥酒をあほるもの、曹達水を吸るもの、氷菓子を喫するもの、其間を純白なエプロンつけた給仕女が蝶の舞ふが如くに徂徠する。若い男と對して椅子についた給仕女は蜜よりも甘い言葉を囁いてゐる。帳場の側に疲れたやうに寄りかゝつた同じ仲間は淺草あたりの歌劇の聲色を小聲で眞似てゐる。

自動車が通つたあとを深幌の俥が木挽町の方から出雲橋を過ぎた。橋側の交番所では、白い服つけたお巡りさんが河風に吹かれながら、更け行く空を仰いでゐる。微醉機嫌の大姐が疳走つた高調子で喋舌り乍りながら三十間堀を南へと、廻り燈籠のやうに歩いて行く。

仲店の敷石を踏む足音と人聲とは、潮の去來するやうに響いて、瓢簞池の彼方には活動寫眞館や見世物小屋の灯の光が夜陰の空を焦すばかりに炎を吐いてゐる。十二階下にはぞめきの八木節も聞えて、化生の物の呼聲は艶めかしい。觀音堂はもう閉ざゝれて、階の下には折々手を合せて祈念する人影がちらほら見ゆるばかりだ。堂の背の池のまはりには、噴水から吐き出す涼味を掬さうとてや、人が垣をなしてゐる。ロハ臺の彼方此方には花の醉ひと疲れとを休めんと、轉寢に前後を知らぬ漂泊の人々が横はつてゐる。歡樂の巷の裏には又はかない便りない淋しさが搖曳してゐるではないか。

風鈴の音にも金魚の鉢にも涼しさは溢れるばかりである。苗賣りの聲は初夏の景物であるが、目覺めるばかりに咲き亂れた大輪の朝顔を荷ひ行く朝顔賣りには、朝涼の露氣がしつとりと深い。明け行く空に緑目新しき門邊の青海波の又なき涼しい氣がする。錢湯で暑を洗つて水道の水を小やかな前栽に撒いて、冷やし麥酒に陶然となつた時、岐阜提灯を釣した椽側の下には夕顔の花がほんのりと白い。海畔山間に暑を避けて、一家族七八人が一間に鮨詰とならんよりは、煽風器の下で、冷藏庫から取り出した冷い物を味つたところに、都の涼味も亦棄て難いものであることをしみ〲と思ふ。

何うなる

オノトを毎日絶間なく使つて
十年經つたら何うなる?
買つた時より書きよくなる

オノト萬年筆　無飾金八圓　飾付金九圓以上

オリオン萬年筆　無飾金三圓五十錢　飾付金四圓五十錢

アルビオン萬年筆　飾付金五圓五十錢

萬年筆用アテナインキ　金四十五錢

送料各金拾八錢



東京日本橋通

丸善株式會社

(振替東京五番)

東京神田駿河臺下 (振替東京二八一六番)
大阪東區博勞町 (振替大阪七四[illegible])
京都三條通 (振替大阪一七三番)
横濱辨天町 (振替東京一一八五二番)
福岡上西町 (振替福岡五千番)
仙臺國分町 (振替仙臺一五)

想華

紙上散歩

（斷片十二景）

木村莊八

私は紙上散歩をする。何所へ行く「當て」は別段無いのである。兎に角電車へ乘らうと思ふ……

小川町で、あの急角を車が廻ると、俄かにわあと云ふ人聲のどよめき、ドーン、ドン、太鼓が鳴る、車外を群集が波の樣である。

車はそこで暫時止まつて了つた。乘客が一齊に右窓へ總立ちになつて表を見た。私も見た。――ワツショイ、ワツショイ。チヤリーンと何か鐵棒の音がする。みこしが通るのである。イヤ、そこをもまれつゝ通つてゐる。子供連が揃ひのゆかたでかついで行く。何か旗さしものがひらめいてゐる。大きな團扇であほぐ子がある。手に手に白鉢卷をして腰をからげ、足袋はだしになり、肩にははすに黄色い麻のたすきを吊つてゐる。どよめきへし合ふ。

ワツショイ、ワツショイ。

中に二三人大人がゐる。ぬきん出てその顏が見えるのである。世にも熱心なまぢめな顏をしてゐる。汗だくになつて指揮してゐる。あつちの子供をおさへ、こつちの子をためる。「いけねえ電信た、かはしたかはした、オツと。」ワツショイ、ワツショイ……………

そして、稍十分か二十分かゝつて、一隊はゴソゴソ居所廻りにまはり、細い横町へつめ込み、はいつて行つた。

それから電車が動き出した。

「今年や日本橋がよく出來たぜ」

「さうだ想だ。——火事があつたつてな」

と中僧が吊かはで話してゐた。——「あつた。面白かつた。日中だからな。ピューピュー消防自働車が飛んで來やがつた。——

遠くからカネを鳴らして地團太踏んで駈けつけて來る。怒つた樣である。道の電車も自働車もとまる。人は片わきに立つて立ちすくんで見てゐる。——その一種もの悽く開いた通りの只中を、眞紅の車が何かピカピカ光らせ、ゆれつゝ强引に通る。鐘聲、地響き。暫し止まない。車のうしろから白煙が出てゐる。夜だとそれに悽く赤光がさしかゝる……

そんな話しはしなかつたが。

然し火事の話し手は自體聲が大きく、自づとまはり三四人好奇心を持つて、聞いてゐた。その爲めに上がつてシドロモドロになつた。私は氣の毒になり、そつぽを向いた。

日比谷を今出たと思はれる。

窓外に見馴れた胃腸病院が見える。その門柱に、そこにだけ目立つて眞紅の紙燈籠(?)が吊るしてある。で、外に一臺馬車があつたと思ふ。その他その邊に提灯のやうな何か、あつた樣だ。

チラと私はそれを見た。そして想像した。

誰か長わづらひの人が、今日出るのである。それで祝意にあの飾りがしてある。

彼女は——女に相違ない——再三サジを投げられたが、からく恢復して今日出られることになつた。今頃中でその仕度をしてゐる。髮をくし卷きにして袖をかき合せ、立つてゐるかも知れぬ。身よりの者がいろ／＼、片付けたり何かしたであらう。看護婦が一人白く交つてゐるに相違ない。醫院の助手もゐるに相違ない。それから階段を下りるであらう。

斷へず祝靜を受け、うれしいに違ひない。然し又長かつた病室生活が一種彼女をその思ひ出た、とりとめぬかも知れぬ。
今迄自分のゐたベッドやその他を見ると、懐かしい感がする。
それで然し「病氣」は過去になる。
……然し大分電車はそれから進ざかつたので、私の想像婦人は消へ失せて了つた。
が、又現はれた。
此度は或る二階屋の明け放した窓から。
それはお成門區役所のぢき左どなりで、階下は戸がしまり、階上に明けひろげて廣い裁縫場が出來てゐる。ミシン屋かも知れぬ。――そこの二階に、その他澤山の男女に交つて、彼女はとつぱじでしごとをしてゐる。
丸まげに結つてゐる。
下向いてせつせと縫ふ様が見える。
恐らく内職してゐるのであらう。――彼女は此のそばに夫と住んでゐる。子供はまだ無い様な感じがする。所は芝神明にちがひない氣がする。「神明」のあり得る感じがする。それは山の手線から家の裏が見え、乾しものや、たんすが覗かれる。――あの何軒もの長屋から出て來て、毎日ヒル此所へ通ふのである。夫は區役所か何かへ、別に通つてゐる。
既でに午後五時スギである。
追つ付け「引け」の時刻が間近い。恐らく、區役所裏をぬけて、あの邊で豆腐かひものか何か買つて行くと思ふ。酒は買はないだらう。莢えんだうを少し買ふかも知れない。
早く歸りたいな。
ハハハハハハハハ
私はそこで電車を下りた。
○

下りる時に、――
踏段に一人女がゐた。彼女は新門前へ行くと云つたが、車掌が地名を知らず、然し女のいゝかげん云ふまゝ大門行を切つて渡した。女はそれで下りやうとした。

と、かたへに印半纏の若者がゐた。白く又青く出鱈目に汚れたラシヤ帽をかぶつてゐるが、それがペンキ屋と云ふことを一眼に語る。いきなり、「何！新門前？此所から行けるもんか、芝園橋だ。違つてらい、車掌！」

「もしもし」と車掌が女を呼びとめて、「その乘かへは芝園橋ではないんですか」

「いゝえ……」女はたじろいで「此所でいゝんです。」思ひ出した、とか分つた、とか云つた。

「此所から新門前へ行けるもんか。そりや中門前のまちげえだ。新門前てえのは……」

何とかしきりにしやべつてゐたが、ペンキ屋の言葉は然し電車が出たのでそれきり聞こへず、只手まね身ぶりだけ猶あり〳〵と見えた。しきりに地理の説明をするらしい。目を光らせ、「口角泡を」飛ばし、この大問題をと亢奮の調子で我鳴つてゐる。眞劍な決死の顏つきである。(俺が出なけりや片付かぬ！)彼の智識が、内から爆破して無性に出たがり、彼の目、口を引きつらせる。

車掌は困つてゐる、恐らく。――親切な男！

○

私は愛宕の塔へ登つた。

さつきからそのまゝ日がくれるかと思はれる陰氣なふさいだ空だつたが、五時頃になつて俄かに晴れ、日が輝き、喜々として然し稍騷がしい氣のせく天氣の夕方であつた。

私はめがねを借り、上へ登つた。少し風が出て殊に高い故、それが邪險に當るが中々感じは別種であつた。稍暫くは斜陽があはたゞしくねめ廻してゐたが、いつか目をつぶり、次第に街は暮れ色となつて澤山の尾根が重い鉛色一色になり、みんな結合してチラチラ灯がついてゐる。空はアイ色で非常なものである。濱離宮の方はボーッと層をなして世に

も進んだ灰色に閉ちてゐる。その中にポツンと浮雲がある。見てゐる中に次第に白色が血の氣がさめて、雲の死骸の如く冷たく、息が絶へる。

西の方には又一杯に散らした雲があつて、思ひ切り濃くアイに染まつてゐる。もう低く沈んだ日のそばは濃い紫で、雲の破れ目に黄金でキリキリふち取りがしてある。

地平線には遠い何處かの山がうね〳〵見える。敎會の塔がそこへ尖つて突き出したりしてゐる。

はるかに帝劇が見える方を見ると、非常に遠くかすかにニコライがひくゝ塔だけ出てゐる。そばに仁丹が明滅して光るが、時に恐くない風情である。一體にガヤガヤしながら何だか實は靜かで、愛を感じる。殊に離宮の方は極く靜かである。

いつかその靜けさの眞上へ月が出た。イヤ、さつきからあつたのかも知れぬ、それが初めて見えたのであらう。さすが、「聖デュヌヰエーヴ」の感じがした。小さな高架線電車がチヨロ〳〵見えた。

かなり久しくゐた。然し凉しくなり、寂しくなつた。

塔の諸方に樂がきがしてある。下等なのはなく、多く名と日を組み合せにかき、眞面目である。その一つに「××、心靜かなり」と云ふのがあつたが、實際心靜かであつた。

塔を下りるともう殆んど日がくれて、夜になつてゐた。然し久しく高い所で晝夜の入れかはりを刻々見てゐた爲め、今は日くれなのか、又はもう夜なのか――はつきりしなかつた。もし今いきなり家から出て此處へ來たならたしかに「夜」と思ふだらうと思つたが、どうもその時の僕にはまだ之れが夜とは思へなかつた。電氣や瓦斯はもうかう〳〵と光つてゐるが、西の空にはまだ眞黑な雲が蒼空の下に、かたまつて殘つて見えてゐる。それが區別付いて見える限りは、まだ夜ではない樣な漠たる氣がした。

○

空は暗くなつた。――暗くと云ふ字は當らない。濃く、深く、重く、艷麗に「闇」そのものになつたのである。その量

があつた。そしてぎつしりと蔽ひかぶさり、下界を包んで無くして了ひた想である。その氣を吸ひ込むと熔けて消え想に思ふ。

その下に然し町が兩側から遠見に遙か向ふまで列をして、一種溫氣を揚げ、家々にはキラキラ灯がついて語り合つてゐる。黃褐の灯もあり蒼白い灯もある。灯を一齊につけて闇を追ひ拂はうとかゝつてゐる。まぎらしてゐるのも知れぬ。然し或ひは喜んで迎へてゐるのかも知れない。灯は花の樣に咲き、嬉々として、うれし想である。

私は眞暗なユニテリアン會堂の横町を通つて丁字にぶつかる通りへ來たのだ。

私は遠見を空と一所に、見てゐたが、フト手近かを見ると町は今盛んで活氣に煮え立ち、人は休み、又は出歩き、花火の樣に快活である。――そこに僕のすぐ前に見馴れぬ馬具機械店がある。店の中まで黑い土間になつて何かゴソゴソ在り、三方澁茶の板で張りつめ、奥に階段があつて二階へミシミシ上れ想に出來てゐる。二階は暗く、閉まつてゐる土間の眞中に吊り氣が下がつて、傘がうす白く、その朦朧と照らす燈火の下には職人が二人、將棊をし　ゐる。シヤツにヅボンばきでうづくまり、熱中してゐる。「夜の宿」を思ひ出す。今にもあの階段を奇麗なナタシアが下りて來る？隣りに灯を消した製車工場があつて車輪が何十となく、ザクザク置き並べてあつた。突きさしてある何か危險の物のやうに覗ける。それから八百屋、魚屋、瀨戸物屋があつた。西洋料理屋も目に付いた。八百屋には赤わくを取つた白字の値だんがきが品物に立つてゐて、電燈がいくつもブラブラ動き、かぼちやはドス青く、何か赤く、豐富に感じる。魚屋はキラキラ水光りに輝き、瀨戸物屋にはばかに明るくツヤツヤとして奥まで見透せる。

西洋料理は一種森閑として、落付いてゐる。窓があり、明りが洩れてゐる。食欲を起すがまづいかも知れない。家が黑く小さい。

その眞向ふにずらりと盆提灯を吊る家がある。その家だけ何か祝ひの樣に、いそいそしく、涼しくスダレもある。白衣のおかみさんが家の前に出てゐる。それから暑さうなゴタゴタの藥屋があつて、金色が光り、隣りに氷り屋が點してゐる。明るく。

その他中華料理があつた。小さなチカチカする眼鏡屋があつた。何屋があつた、何屋があつた……「町」が團結してゐた。榮へてゐた。人が止どまり、又は歩き、あつちこつちから至るところに出てゐた。シヤツ一枚で男が腰かけそのまはりに何だか凸凹人數のかたまつてゐるシーンもあつた。殆んど白裝である。パツクの夜から拔け込る。蓋世と云へる下駄、騒音のもの物がする。ガヤガヤ意味わからずに言葉も聞える。笑聲も交る……

──私は朝鮮慶州へ走つた自働車の夜のことをフと思ひ起すが、それは夕闇で、霧が白く地を這ひ、その中を車は矢の樣に進んだ。或る街角でサーツと廻つた。道は立木の間につき、その木の茂みと地物をヘツドライトが浴せ照らしたが、暗中の丸い大きな光りの中にいきなり動いて立つた一つの影を見た。それは人で、白衣で、朝鮮人であつた。フラフラと立つた。そこには朝鮮人が猶何名か路傍に一團となつてアムペラを引いてねてゐた。壺があり、犬が一匹ゐた。──私はあの立ち上つた、それをまともに照らし出して示した外線だけの平たい人影を思ひ出す。

今は人影でなく、それを見るのでなく、即それ自身生きて包んで來る。私を。私は壓倒を受け、個々識別は無くなりあたりから滲され圍まれて町の連合に融け入る思ひである。

私はその町を何歩か或る華やかさで通りぬけたが、やがて一角へ來ると俄かに暗くなり、闇の待伏せにかゝつた如く、寂しくなつた。

その交叉路にはレールが通つて一種冷たく、電車が轟音と倶に通り、忽ち目前を過ぎ去つて了つた。火車の樣にはつきりと然しあはたゞしく感じた。

私は車中に立ち並ぶ明るい一群の人々を見た、が見るとすぐに無くなり、幻影になる。私はうす暗い十字路にポツ然と立つてゐる。にぎやかな町も後ろに一團としてとり殘した。それは私からわづか五六歩だが又何里かある遠い感じがした。でそのまゝに不滅のものゝ樣である。私はふり返らうかと一時思つた。然しそれは多分寂しいに違ひない。それで通りを何かくよる樣に歩いて、金杉橋へぶつかり、──それから上野行電車に乘つた。

○

電車でまつ青な青年を見た。まるで蹠ばかりの冴へた浴衣を着てゐる。それに麦わらが白黄で刺戟する。青い人間そのもので異様である。

その彼の下に、私の革からはすに、荒い棒縞單衣にまるまげの女が繪ハガキを見てゐた。一見外國製つゞき繪のものである。連れのチャン刈りの男とXによりかゝつて話しをしてゐる。——アメリカからのたよりと思ふ。膝に垂れたカードの封皮に The Mountain Park of D…… 云々とゴチックの刷りが見える。二人は船便について話してゐる。そのエハガキが得意らしく見える。深川か淺草の人らしく、その濃い體型がある。彼女の何がアメリカにゐるのか、察しがつかない……。

私はいつか何新聞かのアメリカ號で、アメリカの日本人の肖像寫眞を見た。且談話を少し讀んだことがある。それは恐らく此の人のエハガキの主に似通つて、合はぬ洋服を着、毛を厚ぼつたく分け四角い顏をして、口を辛想に閉ぢてゐる。生活も服の様にバクバクで何しろかせいでためてゐる。$！早くためぬいて歸りたいと思ふ。手紙をかくとそのことを思ふ。

一方それを受けるこのおかみさんの方は「淺草」？から一歩も出たことがなく、區域生活に殉じ、便りはらね〳〵の消印さへも持つ手に不釣合の故に一瞬日常を壊され、「彼」を考へるが今は米國そのものに化して盜がまゝならず、意識のみはりつめ、此所で見てゐることを又味はつて感動してゐる、そんな氣がした。

私は開いたので右側の座席へ腰かけた。

前に若紳士が一人立ちに來て、何か歌つてゐる。六段の譜である。——彼はキチンと黒アルパカを着て白ヅボンをはき、かたい麥帽をかぶつて白靴である。チョビ髭を生やしてゐる。手をだらりと下げ、足をひねつてゐる。その類型の類型さに驚く。郊外に住むに違ひない。家は三間の澤山同じのが並んだその一軒で、サルビアとか何かその種の草花が少々ある。彼がガラリと格子を開けて歸ると髮を分けた妻君がそこまで出迎へる。妻 はお琴をさらつてゐたかも れぬ。スキート、ホーム！

然し私は、叉正面に特殊も特殊、極く性格ある一人の男を見て不思議を感じた。

彼は商人と思ふ。セルインバネスを着て鞄を抱いてゐる。大きく座を占めて、白足袋でふん張り、その首を何か壓されるる如くチリチリと胸元へちゞめて來てはチラリと白眼で天井の廣告を見る。それで一たんピンと首を持ち上げる。と、又いつか知つてか知らずにか落ち込む樣にヂリヂリ胸元へアゴどと下がつて來て、チロリと上眼を使ひ、――その顔のもの凄さ！　廣告を見る。叉は反對窓外を覗き上げる。うぬ！と云ひ想なかまへである。

極く金錢に緣ある職にちがひない。何か彼のズルズル落ちる頭腦には、商法計劃が計算の渦がぐるぐる卷いてゐる。(弗箱の重さで下ちて來るのか？)魂は金か商算かにたしかに食はれてうつろになり意識はあるのかないのか、何しろ首の持ちこたへぬ程度に無心な然し統一した、融け入つた氣分でゐるには相違ない。

此所は明るくうるさい。然し電車がとまつて目的地へ下りると、夜風にうたれて、彼はがつしりと堅つても落ちぬ首つきに變り、ぬけ目なく活動することであらう。――私はその彼が無氣味になつた。が我が「雜想」を意識し、此度はそれが消へた。

○

私は近道をして美校の中の間道を拔けた。

あたりにモヤのたて籠る朦朧とした朧夜である。そこを歩く人を、一種感情が大から下つて蔽ふかに思へる。影繪の如く歩いてゐる。――一雨來るかも知れぬ。煙つて濕氣が感じられる。

女中と思はれる、――二人の女が、コケツトに笑ひ、語りながら、その聲は空氣にひゞき、カラカラ、私の前を歩いて行く。そのあとに一人男が從ふ。飄々朧々として男が從ふ。インバネスを曲げてグナグナに着てゐる。

間道入口の手前に水道がある。

女はその水道に近づき、水を吞まうとした。

ところが一人がかゞんでのむかのまないかに、後からの男がフラフラ近寄つて「アレー」より早く、腰につかまつた。

[illegible]る。[illegible]する。[illegible]

「イヤですよ——、畜生、畜生！」

身をもがく。

「姉チヤン、お逃げよ。酔つぱらひだよ……」

「キヤア」と新規に大聲を立て——それは一種歓喜の叫びかとも聞き取れたが、何しろつかまらぬ一人は駈け出した。飛鳥の様に。

つかまつた女もすりぬけて逃げた。薄闇へ。然し瓦斯燈のポーッとさす中に。二人。イヤ三四。騒ぐ蝙蝠。又はニムフの正體を思はす。影が長くなり、又短かくなる。措き又は離れ、飛び交ひ、逃げてゐる。

「さあ、にがさねえ。」

つかめえるぞ——と男が燈下でよろめき、頑張つた。

私はその場に追つ付いて、立ちどまつた。

「オヤ、お連れか。ヘン、うまくやつてやがる」男はフラリと私へ首を向けて、ガクガク動かし、「兄さん、ナア、いゝ女だ、レコかい。」

私は困つたが

「ハヽヽア——」

何とか私にしきりに云つた、がわからなかつた。——四十出たと思ふ、職人(?)である。グラグラに酔つてゐる。

「危ないよ君、どつちへ行くの？」

「アあつちだ」

「行かう一所に。僕も向ふへ行くんだ」

「ボクボクも行くんだ」と彼が眞似をした。

それから間道を連れになつて歩いた。男は默つてよろよろついて來る。

女は二人かたまつて遠まきに見てゐた。「來ませんか、大丈夫だ怖かない」と云つたが默つてかたまつてゐた。その間に二三間我々が進むと、「來いつてから行かうよ」「醉つぱらひなんか……」云々、二人は話しながらあとへこはごはついて來た。――その間に我々に段々と追ひ付き、ゴソゴソ話し、雁行になり、すらりと私の左りを遠まきにすり拔けたかと思ふと、揃つて

「キヤア――」

カラカラ二人バラバラになつて一散に駈け出した。駈けて駈けぬいた。忽ち間道先きの闇へ見えなくなつた。

私は「なんだ！」笑つて了つた。

が男は？と見ると、小便し想である。そこにモチモチ立ちどまつてゐる。

ふくろの眼の様なオレンヂ燈火が、ボヤけてそのへスうしろにクワツとのぞいてゐる。彼の今宵の變な運のやうに。

私はそれから足早に歩いた。彼はおいて來た。

善光寺坂下でしるこ屋へはいつた。

見ると滿員でモウモウとしてゐるが、私ははじつこへ窮屈にはいつた。

眞中のテーブルに二人男がゐた。

一人は毛を分けて三十五六、小商店の主人と思はれる。連れは店員か子僧かで、鳥打を弄んでゐる。何にも食はず、頰杖ついてゐる。「さうかい、中屋の庄ちやんは死ぬかい、可愛相に。」

「おかみさんも子供ももう國へ返したと」

やり切れないね、と男が云つた。

「や、今晩は！」今歸りか？と彼がいきなり云つたので見ると、十六七の大目玉の小僧が、のれんをくゞつてはいつて來た。

[illegible]

「えゝ。だんなァ毎晩此所にゐるんだね」

「此所は陣屋だ」

何所が全體學校なんだ？と男が聞いた。子僧は區役所だと返事をした。

「區役所で役人が敎へるのか？」

「さうじやない。先生が來るの」

「へえ、」大したものだと男が云つた。

それから「町内」の話しをした。チラと向ふ側から瀬戸物屋のおかみさんが出て來て、いなかを二つあつらへてすぐ歸つて行つた。

「見付かつた！」

男がさう云つてニコニコ、クスクス笑つた。

陣屋か。——

○

……或る上級の中學生を見た。

彼はひさしの扁平な學帽を被つてバンドはゆるくその上にたるさせ。上に小倉の夏服を着て下に薄地の黑ズボンをいてゐる。右肩にクレパネツト上等雨外套を引つかけてゐる。短靴をはいて房に細ひもを結んでゐる。めがねをかけてゐる。口がへの字に結んでゐる。得意氣に。

連れがある。

殆んど同じスタイルの然しブ男である。——並んで吊かはによるさがつてゐる。

ペンぶつちがひの徽章をつけてゐる。

一人をA太郎と名づけ連れをB助と呼ぶ。

B助は恐らくA太郎の居從である。——さう云ふ關係がよく中學にはある。

「なあ、B助」

とA太郎が云つた。電車は帝劇前を走つてゐた。——その窓外のお濠りを見ながら。

「ナントよき眺めでありますなあ」

「…………」

B助は默つてゐた。景しきも見なければ笑ひもせず、およそ世に平氣の平左の顔をしてゐた。——A太郎はそれから又かう云つた。

「プライド13見たか」

B助が「見ねえ」

「つまらえか」

「知らねえ」

私は彼等のつい下にゐた。

が、又彼等の腹中にゐたかも知れぬ。殊に洒々落々のA太郎の腹に。

そこで私には彼の腹から改めて心理が見透せた。

「あいつあ一寸いゝな」

と彼はへの字の唇の奥のところで洒落に思つた。その眼は馬場先門でチラ映じた白パラソルを追つてゐた。——がそれは映じるとすぐに植込みか石がきの影かへかくれて了つた。首はなく、極く遠かつた。

「靴をはいてやがつたな。へへ。」

だが待てよ、えゝと、(彼は人ごみを車掌臺の方へ覗いて)ゐるゐる。フム。右の方がいゝな。左は顔がいゝ。面は拙い。右は様がよく、かなりいゝな。・ラヴしたいな。いゝ眼だ。があのお成門のもよかつたな。日本髮で太つてやがつ

た。――あれでもいゝな。どれでもいゝな、ラヴ出來るといゝな。フム。(又覗いて)然しあいつが矢張り一番だな。笑つてやがる。可愛いゝな。

「オイ」

とB助が云つた。――聲をひくめて

「あの手を見ろよ、變な手だなあ」

「何よ!」

とA太郎は云つたが彼はB助のアゴで指す方に、右わきに吊かはに下がつて丸々とした赤子の樣な白い手を見た。

その手は太つて指が短かく、厚ぼつたくコロコロし想に革にかゝつてゐた。

「女の手ぢやねえか、タチの惡い野郎だ。B助!――(耳に口を當てゝ)――キスして來い!」

クククと笑つた。

「つまらねえ事を云ふな。」

あんな變な手、汚ねえ、と云つた。

その間にA太郎は手の持主を見て見たが、氣に入らなかつた。「パパアだ!」

いつかA太郎の可愛いゝそいゝとした、荷物をかゝへた「ラヴアー」は下りて、見えなくなつた。

彼は手を見ついでにそつちも見たので、ゐないことを知つた。

然し別段動じなかつた。

「下りやがつたナ」

變な車掌が「ヘエ、大手町で。ナニ又明日出來ます。新しいのが。」

彼は然しもう何も忘れてケロリとしてゐた。

○

十年前に戻る。

うすら寒かつたと思はれる。

夜、十二時過ぎてゐる。

然し人出はまだ〳〵盛んで、諸方に一團となり、或る者はかゞりをたき、淡の鐵さく一帶には天理教信者がズラリと並んで、手を一様に振り、叩頭し、祈禱してゐる。さくには高貴の畫像がかけてある。

又拍手前の廣場には火渡りの神道者が一人長髪を亂して、カンテラに光り、ぐるり一杯の人だかりのさ中に突立つてラツランランラン……のりとを上げてゐる。何か竹足しの三叉を立て、その下に火をたいた白紙で豆をいつてゐる。臨に蠟燭を立て、白衣である。聲がつぶれて何を云ふのかわからない。

――かゝへの松植への間に、一人老人が突伏して死んだ様になつてゐる。

諸方砂利の上にも伏して默禱してゐる人々がゐる。――思はずうなづく。人出は砂利の數そのまゝである。犬が亢奮して右往左往、くゞり歩く。

その群集の廣場の中央に、高く、アークラムプの柱が天へ細白く切つ立つてゐる。

星も月も無い。

只人いきれと一種どよめきが怒濤の様に、地面から天へ湧くかと思はれる。

それを上からサツと照らしてゐる。

アークラムプの光りが。

それが明るくなつた。又暗くなつた。又明るくなり、又暗くなつた。

非常に一瞬暗く細くなつた。

――御不例の兆かも知れぬ。

その時刻から[illegible]

[illegible]

わあと期せずして人から聲が起る。

「ムンクの描き想な景しきだな」

と若い畫學生がそれを見て思つた。

彼は羽織を着て、足に皮膚病の白縫帶をしてゐた。

ヨチヨチ砂利道を歩いて馬場先きを出で、西洋館通りを突切つてやがて彼は暗い京橋裏道の市場通りへ來た。

人つ子一人なく、黑く、森閑としてゐた。

前にさつきから一人早足に若い女が歩いてゐた。

彼の曲る方へ先きに彼女も歩き、道には他に人なく、結局彼は彼女をツケる事に成つた。――闇があたりから濃くおひかぶさつて、頭も暗くなり、然し幻燈の樣に前にくつきり、女の姿がある。

それは吸ひよせる。

ツカツカと近づき

「若しや……」

「アノ若しやあなたは――最上澄子さんではありませんでしたか」

「ちがひます！」

と女は鋭く云つて、バタバタ、二三間駈け出し、いきなり横町へ急いで曲がつた。

（イヤハヤ、何だつまらぬ。最上澄子。――誰のこつた―）

あゝ！

よくないいたづらだ。

「いたづら、いたづら、いたづら！」

と云つて、恐縮しつゝ勇み、襦袢も何のその、無性に笑ひつゝ動キしつ喜びつゝトントン跳ねて、采女町まで驅けて歸つた少年がある………

○

その少年が二十になつて、机に向つて朝早く何かしきりに書いてゐる。夢中で。——先づ「肉體」と題を書き、……昨夜の七時からぶつ通し原稿用紙を擴げてゐた。

今五時を打つた。

立ち上つて東の雨戸を開けると喜び切つた光線が流れの様にさして來た。

堪へがたい。——暗い電球の下にゴミだらけになつて、書いてゐた自分の今までの氣持が堪へがたい。

僕は叫ぶ様な氣持で室を飛び出し、洗湯に向つた。

洗つた、洗つた、からだの何所から何所までも

洗つた。——浴場には、私一人である。

私は眞赤になつた全身を細長い鏡に寫して見た。

そしてセザンヌの裸體習作、マテイスの裸體習作を思ひ浮べた。

實に「肉」と云ふ感じにからだが迫つて來る。

からだ全體から眼へ發光線がほとばしる。

僕は自分の柔かさうな股や腹に、更に柔かく脂ぎつたモデルのからだを思ひ當てゝ、その線を探した。

忽ち性慾が勃發して來た、鼠の様に。

僕は湯船へ飛び込んだなり、喜悦して泳ぎまはつた。

全身と頭腦のだるくなる程泳ぎまねつた。

僕は僕が有する高價なる肉を尊重し愛する。
僕の肉だ、僕の肉だ、血に溢れ返り煮へてゐる僕の肉だ！

それから――

お前は今何をしてゐる。
原稿紙に向つて何をしてゐる。
落膽した樣にお前は見える。
弱つてゐる樣にお前は見える。

然し、

俺は勇氣を喚び起した。心底から。
參るな。――字引を引け。ペンを執れ！
一枚金になる原稿用紙――
それから俺は、いろ〳〵必要をしぼり取る生活の波を感取する。
少しも不快ではない。
神聖である。
勇敢にかけ。

下らない譯をやつてゐるナと思ふ暇にも、仕事を組伏せ！

○

やがて六月になると――おゝ、不思議な八年前！　彼は下宿の四疊半で午前一時頃、ガチガチGペンで左の日記を書いた。

○今日程ぢりぢりした日を僕は知らない。既でに起床が僕をヂリヂリさせて了つた。十一時に起きたのだ。僕には今澤山に仕事がある。めざましい程仕事がある。僕の冒頭だけを書きかけた原稿はもう五種程になつてゐる。夫等の凡てを此の十五日内に片付けねばならない。かなり奮闘しなければならない。

で、起きるなり机に向つた。

さうすると既でに書き了へた原稿がどうも氣になつて來た。夫を封筒から又出し、讀み返して見ると、かなり直したい個所が出來て來た。それを訂正したり、讀んだりしてゐる中に、小さい女中が飯はどうだと云つて來た。僕は飯をすましてから湯へはいつて、それから仕事をどれか片付けて了はうと心がけ「すぐ食ふ」と彼女に返事をした。そして兎に角それ迄に、原稿の訂正をして了はうと思つた。

それをやつてゐる中、飯が來た。

――そこ迄はすつかり豫定通りすまして、湯へ行きがけに投函し、浴槽につかつて、かなり清涼な氣分とからだを恢復して來た。

僕はその時自分を祝した。

仕事にとりかゝる前に新聞を見るのが非常にうれしく考へられた。そして新聞を讀んで了つて、仕事にかゝらうとするところへ、Kがはいつて來た。――夫は以前に電話がかゝつてゐたからさ程不快でも苦痛でもなかつたが。

Kと話してゐる中にドンが鳴つた。時計が五分おくれてゐると思つた。Kは其話の中に、××雑誌に連載する様な藝かの藝術論はないかしらと云つた。言下に、僕はロダンの藝術論があると答へて、「それは丸善に今來てゐる」然し高い

から僕には買へないと斷つた。Kが買ふと云ふだらうと思つた。「では半分僕が出すから」とKが云つた。その時僕は、すぐ次ぎの樣に彼に云ふのが必然だつたし又今日の豫定の樣に思へた。「ではすぐ丸善へ行かう。大急ぎで。」そして歸りに釆女町へ寄らう、と。

Kはそれに應じた。

電車にのりながら、僕はロダンが讀めるんだなと思つた。そして嬉しかつた。それからロダンのことを少し考へた。然しその考へはまとまらずに、「今日夕方迄に歸つて、十二時位ひまでうんとやらう」と思つてゐた。その時もう二時をすぎてゐた。

丸善には彼之大分長くゐた。

僕はやきもきしてゐた。早く釆女町の夕飯をすまして、家へ歸りたい、そして自分の辟い時間を得たいと思つた。丸善を出た時はホッとした。僕はRODIN: ARTと、モデルのことの書いてある雜誌「ロンドン」をかゝへて歩道を早足に歩いた。Kは「××雜誌は殆んど君だね」と笑ひながら云つた。僕は皮肉を云はれた樣に感じた。然しKは何氣なく、寧ろ同情で云つたと思つた。一寸不快だつたが、何でもなかつた。

それから釆女町で夕飯を食つてゐる間、僕の心は躍りつゞけた。もうぢき一切を片付けられる心と、忙しいが自分は今無駄にはしてゐないと云ふ心との結合である。――かなり時間がかゝつた。Kはしきりに歌舞伎座のことを　留にしてゐた。僕は然し初め、到底行く暇はないと思つた。然し狂言が何だか聞きたくなつた。母に聞くと、狂言は知らないが、六代目がびつこをやつてまるで六代目ではない樣に見えると快活に話した。僕には家庭の溫、が通じた。それから非常にそれが見たくなつた。結局僕から、「一幕行かう」と云ひ出した。飛ぶ樣に家を出て歌舞伎座へはいつた。道では等はロダンの空箱をSGに送るいたづらをした。それを出す切那、Sは今頃創作でもやつてゐはしないかしらと思ふと、又ヂリヂリした。然し歌舞伎座、殊に六代目のびつこがどうしても見たかつた。

階段を殆んど全速力で上つた

丁度所謂ひつこの出る幕であつた。

勘彌と六代目の白や、變なラヴなどが猛烈に僕を海へ深くした。僕はあの芝居を見ながら自分の氣持を引き出してゐた。そして六代目のひつこには反感を持つたり、好意を持つたりした。

一幕終つた。

如は淨瑠璃であつた。——Kは歸りかけたが、僕は歸る氣になれなかつた。幕合に、高土間にゐるぬける程白いイキな女を見つめながら、彼女の容想をしてゐた。あいつともラヴが出來るか如何かと思つた。或る瞬間、フトその女がこつちを向いたが、何か俺の思ひを感じたなと思つた。

その時僕の理想世界にアウガスタス、ジョーンとゴヤが顏を出した。シラノ、ド、ベルジュラツクとクレチヤンを一所にした樣な奴も顏を出した。木がはいつた。幕が開いた。山嶽に揃ひの上下を着てしたかたの奴がズラリと並んだ。派手に。僕はあすこへ馳け上つて、いきなりプランコオ、ボスネツトの白をしやべりたく痛切に感じた。

踊りは進むにつれて僕の心とインディフエレレンスになつた。猛烈に心底からチリチリ情熱になつて來た。人をかきわけてすぐ歸りたくなつた。然し僕の心中の或る奴はしきりに段四郎のおどりを待つてゐた。

僕は内にも外にも自分が變つたことを突然意識した。やつつける！と云ふ心がフト起つて來た。たしかな仕事を。——僕に僕の體をはつきり見た。快感が内に起つた。

何時の間にか高の女は返つて了つた。幕も終りに近づいた。僕はKをうながして芝居を出た。既でに十一時であつた。僕は時間のないことを痛感した。ぐんぐん歩いて釆女町へ寄り、Kと門口で分れてから、少し有つた用事を大急ぎにすまして、電車へ乘つた。

母は二回くれた。祖母がやくもを一つ買つてくれた。寂しくて弱つた。

僕は歸つて室へはいると、かなりな疲勞に捕はれた。且寂しい。とても日記をかゝずには此の一日が過されない。それでここまで書いたのである。

○僕には今、まだ今日中に何か一つ仕事を片付ける意志が動いてゐる。十分位ひでロダンでもグレーフエでも譯せ想に思へる。もう一時である……

それで切れてゐる。

彼は布團を出して引き、電燈を消して、一種力ぬけして眠つたこと丶思はれる。

「彼」の姿よ、健在なれ。

○

何でも夏のことで、「彼」はその頃まだ小さく、十五か六と思はれる、――子供室にねそべつてひるねしてゐた。すると母がわきへ小さな弟を抱いて來て、ションボリ座り、つゞいて祖母が何だか氣色ばんで、すりよつて來て、座つた。――彼は目がさめてゐたが、起きられなくなつた。

すると祖母と母とがかなり眞面目に、話しを初めた。ひく丶。

「何だつてお前さん、あんな事を云ふの」

「だつて云ひたくもなるさ」

「あたしが間に立つて困る」

「それはお前さんの勝手ぢやないか。」

暫く默つて、

「――あたしが矢島へゆくと云つた時にゆかせてくれ丶ば、こんなことはないのだ」

「それは違ふだらう！」祖母は無氣になつて、「矢島はあゝ云ふわけだしよしやお前がのぞんだとしてもさ、無い緣はあたしにどうとも出來やしないぢやないか。私がこつちへお前を引いた樣に今更思ふのはそれは、グチだ。」

「グチかしら」

「グチだともさ。死んだ子の歳を數へる樣なものだ。」

祖母は話を切つて、

「子供のことをお考へ、え？あたしだつて、お前では散々苦勞をしたのだ。苦勞が足りないからついグチが出る。」

「あたしだつて之れで苦勞は並よりしてゐる」

それから母は

「イヤだ、イヤだ！」

と陰鬱に云つた。

彼は「話」が怖くなつた。

彼はそのことをそつと「作文」に書いた。然し誰にも見せなかつた。――わからなく、思ふと情けなくなる。が、何かあつた、大變なことが。それだけはわかつた。それが辛かつた。我が生れぬ前に。あの淨い母に。

母を汚されたかに、幻滅に感じた。

彼は寂しく、シクシク泣きたい……

恐らく、母と祖母との人生にも二度とはなかつた、眞摯な會話を聞いたのも知れない。

「フム、あのことか」と彼――青年學生が云つた。「あれはつまりその聞いた「俺」が餘り子供でいたいけなまでさ。ナニ、人生では當り前だ。家常茶飯だ。それが人生だ。母が汚れる？――誇張するな。それは容易いが、眞相には遠い。俺はあ

の時、人生に撃たれた。その無情さに。イヤ、眞理にと云ふか。眞理には無情なところがある。人生以上な。

ついふし穴をのぞいたからだ。

さう云ふ機會は度々ある。子供には子供で。大人には大人で。只あの俺の場合には、俺がチビのくせに少しませかゝつてゐたのだな。ふし穴から見方がちつと手荒く、高すぎた。從つて風の度も強く寒く來たわけか。あの時のセンティメントでは受けこたへかねたよ。――生意氣な子供だ。會話も酷だが。へへ。

さうさ、俺は未だにあれが何のことか、その背景は丸で識らない。俺の居ぬ前の前世界の事件は。――恐らく何かしら「事件」があつた。小さからぬことが。或ひはこの俺は世になかつたかも知れぬ不思議なリズム？――だがさう考へるから間違ふのさ。一種のエゴイズムだ――ロマンティックな。一種メソメソとした。――何の「俺」が世の中心なものか。

だが厳たる公明の事實はだ、俺がかくゐる。それは神秘である。世に一つしかなく、が有ることは確として「在る。」我が「有」である。神にも動かせない。（それがエゴイズムならエゴイズムこそ公道だ。）

この神秘故に、過去は安らかにねむる。情想よ、過去の墓場を發くな、だ――

リズムは世に縦横にある筈である。運命へ人情の着せる色糸のアヤだ。所詮厳たる無色には如かない、――運命の。がその無容のアヤを思つて、あゝもあつたらう、かうもあつたらう、と來し方を思案するのだね。神様がさう作つたのかしらん。一種情けに。人生をおもちやにさせて下さる。尤も暇でもあるだらうが。

「かくあらうと思へかくあらうと！」（俺の運命は俺が創る！）とまともに思つた。

それから彼は昂然として加へた。

「運命は神も人も誰も知らず、世に天才がチラと觀じて、あとは時がテキパキ片付けるだけだ。墓へ。明瞭である。フム。」一寸頭をふり、「然し何しろ俺は子供だつたので悲哀を感じたよ。リズムを想つてね。（僕　生れないかも知れなかつたのか）と思つた、（何だつまらない！）と。へへ。勝手な情だ。人生とはよどれぬ、有り得る神の様な、淡素な時には

たしかに「薔薇を敷いた道」で、「十字架」となる無垢な思ひの麗らかな可憐な、鳥の様な少年、まあ、さぞ寂しかつたことはそれはたしかでいぢらしいが。」

彼もそしてフツと寂しくなつた。が一蹴した。(人生が寂しいのは風が寒いと同じことだ。だから生きる。)當然だと思ひ、晴朗に感じた。

「俺には十字架があるのだ。作家だからな。」(まかりまちがへば時にゴミためへ掃かれるばかりだ。)

○

六疊一間に親子が住んでゐた。

母をCと云ひ、娘をDと云ふ。Cは蒼い顔をしてゐる。Dは肥つて健全である。D子がミシンを踏んで二人生活してゐる。神はどう云ふおぼしめしか、此の二人とも揃つて笑ひ上戸で、雄辯家で斷へず境涯を樂天してゐる。

ハハハヘヘヘヘ……

「あたしはね、奥さん。近頃キナコで御飯をたべるのですよ。あれを御飯にかけて。ホホ、うまくないの。ホホホホやせますわ。」

「朝は六時に起きます。D子がそれからミツワのシヤボン箱を日課に貼るのです。それがねえ奥様、(彼女は腹をかゝへて)、問屋から持つて來る時には一枚紙だから大して荷でもないのですけれど、貼ると、(苦しく笑ひ)、ふくらむでせう。室一杯、室一杯、箱だらけ、ハハハハヘホホホホ……」

涙を流す。

「……それから私が御飯をこさへて、二人で食べます。D子がね。肥つてゐませう、(笑ひ)、澤山食べてね、(笑ひ)、御飯をよそつてはキナコをかけて食べ、御飯をよそつてはキナコをかけて食べ、(絶へ入り想に笑ひ)、おゝまづいですつて、ハハハハハホホホ……」

「そのキナコをねえ、奥様——」

私　妻は背中を平手でなぐられた。

「夜中に鼠が食べますの！」

——(完)——

親鸞の出家

山中峯太郎

うすい白麻の蒲團を、圓窓の下に長く敷かして、親鸞は、すでに三日三夜のあひだ、たゞ寢てばかりゐた。

紙障子をとりはづしてある圓窓の、すぐそとに、低い簷の板庇が、斜めにさし出てゐて、八月の初旬の耀かしい直射光に蒸しかへされてゐる庭のいきれが、庇のはしを甞めるやうにユラ／＼と濃く騰つてゐる。暑さと眩しさとに親鸞は瞼をふるはせて、簷の蔭の暗い方を見あげた。古い藁のはしが幾すぢも、ところ／＼に長く垂れさがり、渇いた灰色の埃にまみれて、あやうく落ち切れさうになつてゐる。そのうちの二三本かある最も長いのが、蜘蛛の大きな新しい巣の網を、あまねく斜めにかけられてゐるために、ホソ／＼とわづかにたもち繋がれてゐて、そこの上に斜めに傾いてゐる簷下の細い丸竹の列は、どれも鈍く黒ずんでゐた。その丸竹の古い色に、親鸞はヂッと深く眺め入つた。

……二十年になつたからな……

顔をまはして、枕もとの疊の上から、古くよごれてゐる濡れ手拭ひをとりあげ、それを折りなほしながら、額のうへに滲み出てゐる汗を鼻さきへかけて徐かに拭きおろしたときに、――二十年まへの追憶が、親鸞の胸のうへに、やはらかく流れてきた。さうして、瘦せてゐる隆い頰骨の兩方の上を、手拭ひで撫でつゝ徐かに仰むけになると、脛のあたりを組みあはしてゐた兩足のさきを、まつすぐに蒲團の端の方へ伸ばしながら、たるさうに欠伸を吐いた。

……妻の朝女が、まだ二十七であつた。そのときはまだ瑞々しい肌をしてゐた乳房のさきに、生ましたばかりの昌女が、虫のやうにすがりついてゐた。この土地　稲田の城主の九郎昭重が、みづから大工たちに下知し　この草庵　黒木つくりに造作させ、親鸞の親子三人を、ここへ招き迎へて、さうして翌年には、またも、善鸞が此の家のなかに生まれてきた。——二十年……

枕もとへ落すやうに濡れ手拭ひをおき、親鸞は右腕を斜めに伸ばして、左手でその上を長く撫でながら、自分の少し浅黒い肌の色あひを眺めた。

……いつのまにできたのであらう……

黒みがかつた茶色の小さな斑點が、三つ、五つ、六つ、肌のうへに、まばらに散つてゐた。同時に「六十」との齢の數が、親鸞自身の現在に、はつきりと刻みつけるられるやうに意識せられた。

……さうぢやよ、末の彌女が、はやもう十一になるからな、六人めが十一に……

腕をおろして、兩手の指を柔かに組みあはし、臍の上のあたりにそつとのせると、親鸞は、かすに息を吐きながら、左右の瞼のうへに、ものうい重みを感じた。

……彌女の下が、ふしぎに産きないな、朝女は四十七、まだ……

と、おもひついてゐるうちに、

——汝等、臭屍を抱き、臥する勿れ、種々の不淨を假りに人と名づく。重病を得れば箭の體に入るが如し。身の苦痛集まるに、安んぞ眠るべけんや。——

「中夜偈」のうちの一節が、親鸞の記憶のうちから抜き取るやうに引出されてきた。それにつづいてまた直ぐに「作

要集」のうちの

——當に知るべし、草庵に目を瞑はすの間は、便ちこれ蓮臺に跏を結ぶの程なるを。即ち彌陀佛の後に從ひ、菩薩衆の中にあり、一念の頃に西方極樂世界に生ずることを得ん——

の一節が、なめらかな數珠を操るやうに、親鸞の裏から唇に柔かく湧いてきた。

「菩薩衆の中にあり……」

再び唇のうちに繰りかへして、親鸞は眼をとぢた。同時に、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……」

ほがらかな聲が、親鸞の唇を強く動かしはじめたときに、誰れかゞ、次ぎの間の敷居のそばに來て、しづかに座つたやうな氣はひが、親鸞に感じられた。さうして、そこに

「御氣分はいかゞにゐらせられまするか」

次女の明信女の聲が、さたがらに控えがちに、氣づかはしさうに小さく聞こえた。

親鸞は唇をふるはしながら默つて、かすかに眉をひそめた。

「お腰を、うたせていたゞきたうて、明信がまゐりました」

と言ふ娘の聲のうちに、やはらかに甘えごゝちを含むでゐるのを、親鸞は唇を噤むで聞きながら默つてゐた。

「お膳じものも召させたまはず、いつものやうにお腰やお膝も、うたさせていたゞきませず、みな／＼が殊のほか、きづうお案じ申しあげてをりまする」

うらわかい女の、まじめに、うつたへるやうな聲がつゞいてゐるのを、親鸞は眼をとぢたまゝ更に聞きながら、さう

して、なほ默つてゐた。

「たゞ御風氣とおほせられ、さればとて御看病の者を、ちかうよせたまふ御事もなうて……」

聲が怨じかけるやうな響きを帶びてきたときに、親鸞は、ふと眼をみひらいて、

「明信や、そなたは、いくつになつたかな」

と、唾液がねばつてゐる喉の奥から、濁つた聲をだして、不意にたづねた。

父のあまりに想ひがけない問ひをうけて、明信女は、ふと聲を呑み、今まで親鸞の顔の上を眺めてゐた自分の視線をすぐ近くの疊の上に、おもはず落すのといつしよに、母に肖た白い淋い面を、かすかにほてらして、ちつとうつむいた。

さうして、親鸞はすぐに

「別にな、なにといふこともない。用があらば呼んで來てもらはうほどに……、さしたることではない」

と言ひつゝ眉のあひだに、また皺をよせてゐた、言つてしまふと、やがて、また眼をとぢた。

明信女が、とりつきやうもなく寂しさうに腕をおこし、しづかに立ちあがつて次の間へ行つたのを、親鸞は胸のうちに辿りながら、

……善鸞の二つ下ぢやから、十八になつてゐる。……

明信女の齡(とし)を、ふと想ひついた。

……十八……

さうして親鸞の胸に、三十年まへの、臈たけて美しかつた玉日姫のおもかげが、ゆくりなくも、よみがへつてきた。九條前(さきの)關白の兼實公の息女玉日姫と、五條西洞院の別殿の奥に、夫(をつと)となり妻となり、初めて異性のにほひに觸れたとき

の、その新妻の玉日姫は、その時に十八であつた。――かんばしい處女の胸を、初めてひらいたときの新鮮ないのちの感じが、おもひがけなく親鸞の胸を現前に搖蕩と動かしたので、親鸞は眉をのばして眼をあけた。

……三十年たつた……

三十年の時の流れを、眼の前に一條に展ばして、その過程の上に綴られてゐる自分の流轉の、あるひは濃い或ひは淡い足跡を、親鸞は讀みなほさうとして胸を沈めた。しかし、十八歳の黑髮の長い「玉日」のにほひが、さらに活き〲と鮮かに、親鸞の胸を爭ひがたく動かしつゞけ、その芳醇な印象は、いつも想ふたびごとに眞しくて、時の隔ては、そこに何の力もなかつた。さうして、追憶の緒は、すぐに「玉日」のうへに結ぼれついた。

……三月の十六日であつた。卯の時、晩春のあかつきであつた。自分は朽葉色の俗衣を着てゐた。いよ〲輿に乘つたとき、白木の門の柱の前に玉日が、その左に範意が手をひかれて、涙につかれてゐる玉日の黑い瞳が、かなしみに凝りきつて自分を視つめつゞけてゐた。越後へ流罪のかしまだちの朝、……玉日が二十二、あつた。範意が四つであつた。

二十五年まへの、……あれが二人への生別 あつた……

おもはず視線が動いて、黑く煤けてゐる天井のすみの方に、親鸞は瞳を凝らした。そこに哀しみに疼いてゐる玉日姫の別かれたときの蒼白い面が、記憶の底から泳ひ出て親鸞の幻に映つた。

……範意は……

四つなつてゐた小さな範意の、あどけない顔を、さがしはじめようとしたときに、親鸞は激しく眉をしかめた。

……かうも執念に愛着が强いのか、この親鸞は……

あらい跫音が、次ぎの間に俄かに聞こえた。その疊を踏みしめる粗い響きは、善鸞であることが、すぐに親鸞に知ら

れた。さうして、親鸞が脇がへりをうち、横に身をまはしたときに、善鸞、敷居を跨いで入つてくると此處の間の方に直ぐに坐つた。父の脇がへりをうつた氣はひが、さながらに作爲らしく鋭く強かつたのを、善鸞は坐りながら直感した。さうして、

『御加減は、今日あたり、いかゞにいらせられまするか』

すべてに烈しくはたらきかける燃えるやうな生來の氣象の、そのまゝが含まれてゐる善鸞の強い聲を、親鸞は脊なかの方に聞きながら、なほ深く眉をしかめて瞼を細くあけてゐた。そこの床の間のはしに、屑のやうな反古紙が、堆たかく積まれてゐるのを、親鸞は見るともなく眼の直ぐ前に眺めた。五十二の年に、やうやく草稿ばかりが先づ作られた「顯淨土眞實教行證文類」の六卷の、それには五十五種の經典から思ふがまゝに引用し抜萃し、最初に手を着けはじめてから十數年になりつゝ未だ完成はしてゐない、親鸞自身が氣に隨ふて氣分のむいた折りごとに書き聚めてきた自由な努力の跡を、またその中には、獨りのみの悦びと涙との、有りし自分の感激をも含むでゐる、ありのまゝの手記を、親鸞は更に今、はじめて新しいものを視るやうに意識しはじめた。

『なにごとよりも、まづ父上の御自愛をのみ、切に願はしう存じまする。まことにこの淨土他力門の興廢の大事は、ひとへに父上御一人の御肩のうへに――』

善鸞の言が、ふと斷れた。親鸞は「顯淨土教行證文類」を徐かに眺めつゝ漸く伸びかけてゐた眉のあひだの皺を、また狹くよせながら、善鸞の言のつゞきに、わづかに注意しはじめた。父が自分の言を聞いてはゐないらしいのを、すぐに最初に氣づいた善鸞は瞳を強めて、父の白髮まじりの毛が少し生えかけてゐる後頭を視つめた。言をきつて、きびしく引きしめた唇を、またすぐ鋭く内から衝かれるやうに、

「昨日も申しあげまして、御意のほどを伺ひまゐらしゝ顯智房と念信房とより願ひのこと、なにとぞ父上よりの御下知をたまはりたう、善鸞もひたすらお願ひ申しあげまする。二人よりの申し狀、今日は是非ともお聞きとどけあそばしまするやう、なにとぞ」

と言ひつゝ、なにか是れと捕捉しがたい膜のやうな隔てが、父と自分とのあひだに常に實在する、いつもと同じ感じを、またこのときにも善鸞は意識した。

「あの如來堂と太子堂のことかな」

親鸞は、眉をよせたまゝ、しづかに言ひ、そのまゝ背なかを善鸞に見せてゐた。

「さやうにござりまする。それと木部の毘沙門堂をも、おなじく改築の御下知あそばしては、いかゞにございまするか。たゞいまとなりましては、當流の興隆のいちじるしきこと、まさしく其の氣運にむかひをりまする。この稻田を中心といたしまして、下總、下野より、奧州の方にまで、父上の御敎化が、念佛稱名の聲々とともに、しだいに波をうつごとく、日に〳〵、ひろまり行きまする。されば高田の如來堂、桑子の太子堂に、木部の毘沙門堂のごときは、なにとか伽藍を新しう建立あそばしまして、あはれ念佛の道場のために、なほ他宗他門のものよりも、ひときは宏壯なものにいたしたう、たゞ〳〵當流の繁盛がためにと、顯智房も、念信房も、しきりに私へ談合いたされまする、母上もまた、この談合を、いたくおよろこびにてございまする。なにとぞ父上よりのおゆるしを願はしう、みな〳〵が、ひとへに擧つて望みをりますぞ」

つよい氣勢をこめて、よどみなく言ひつゞけてきた善鸞は、父の、ほつそりとした頰のこけてゐる顏には似あはない、兩肩の骨ぶしの太く盛りあがつてゐるのを眺めながら、さうして、父の前途の長命をひとに聯想しながら、更に言

ひつゞけようとしたときに、

『さあ、今のまゝにては、御念佛はひろませたまはらぬかな……』

獨言のやうに親鸞が、小さな聲で言つた。

『されば路のへの小やかな廢れ辻堂のごとき只今のところにては、なにとしても、このうへの人數を加へまするこ とは所詮かなひませぬ』

と、善鸞は高い聲に言ひきつた。

『さうかな』

とのみ呟くやうに言つて、親鸞は眉をよせたまゝ、また眼をとぢた。

善鸞も、そのまゝ默つて、唇を斜に曲げた。『さうかな』父 この一言を呟くごとに、父と自分とのあひだに、いつも遍く懸かつてゐる何等かの名づけがたい隔膜が、なほ更に厚く濃く善鸞に感じられるのであつた。おも苦るしい沈默が黒い幕のやうに、父と子とのあひだに横から閉ぢられてくるのを、善鸞は、まざ〱と眼に見るやうに今も意識した。

さうして、膝がしらをあげて立ちあがらうとして、

『さすれば、おゆるしはございませぬと承知いたしまして、——』

今までの言を結びとめるやうな氣もちになつて、善鸞は言つてみた。親鸞は默つてゐた。なほかさねて善鸞が、

『たゞいまのところ、御親近の人々が、七十三人もゐらせられまする。今後とても、顯智房と念信房とのみにかぎりませぬ爾餘の人々より、かならず同じことを願ひ出ませう折にも、かまへておゆるしはございませぬか』

おもはず聲が高くなつたのに氣づいて、善鸞は、尤畜しつゝ面を稍ほ低くした。

『ゆるすも、ゆるさぬも、親鸞に懸念なく、おの〱がたの分別のまゝに成されればよいものを。なにごとを許し、なにごとを許さぬと、親鸞が下知しようぞ。』

父の毅然とした剛い聲を、善鸞は聞くのと同時に、すつと立ちあがつた。なにとしても自分とは殆ど別異の世界に獨りで住むでゐる父であることを、善鸞は今更のやうに深く胸に刻みつけつゝ、父の背なかを、しみ〲と瞰おろした。さうして、寂しい鬱憤を、そこに感じつゝ畳を大跨に踏みしめて、敷居をまたぎ越した。新しい淨土他力門の弘通を、ます〱盛にならしめて、津々浦々にまで、如來の慈光を洽く被らしめ、父が淨土へ遷跡の後は、その第二世として、大きな敎化を綜括すべき中心に立ちたい望みが、それは既に當爲の事實として必ず現はれてくるべきものに、若い善鸞の胸に常に領かれつゝ餘ほど前から芽生えてゐた。

善鸞の畳さはりのあらい足音が、次ぎの間に消えてゆくのを、親鸞は、枕の上に密着してゐる耳のしたに、ぢつと聞いてゐた。さうして、眉のあひだに、なほ深い縱皺を幾すぢもあつめた。

……若いものに、なにの無理があらう。まして烈しい氣象に生まれついてゐる、あれの望みとしてみれば、もつともなこと……、しかし、かうした善鸞の今後をあやまらせるものこそは、この父の親鸞でなくて、誰れ人かあらうか。こゝろにもなく、おほくの、おびたゞしい御同朋たちより、みだりに人師と仰がれて、この親鸞こそすでに、名聞をねがふてもゐる恐ろしさ……、これあればこそ、善鸞にも染みついて……

刺されるやうな痛さに胸をうたれて、親鸞は眼をひらいた。深く沈むでゐる瞳が、そのまゝ鋭く凝つてゐた。

しばらくして兩腕をあげて、胸の上に深くこまぬきつゝ、親鸞は仰むけに強く寢がへりをうつた。

……たゞに善鸞ばかりではない。目女にしても、明信女にしても、なほ有房も、嵯峨女も、彌女も、しかも姑の覺女

までもが……

六人の子女と、その母との、七人の顔が、つぎに〳〵と断えまなく現はれて、親鸞のすぐ前に、たちまち並んだ。そのすぐ後に、源誓、源海、明光、了源、専海、了海などの、六人の老僧が、つゝましく黒衣の襟をあはして、各自の半身を浮かせるやうにし一時に並んで現はれた。それにつゞいて、その両側に、かしこに、こゝに、一人づゝ、二人づゝ、あるひは同時に三人づゝなどが、スク〳〵と下から立ちあがるやうに、随所に前後して瞬くひまに、現はれ、室の中が親鸞自身に師事してゐるそれらの人々の顔と上半身とによつて忽ち埋められた

……おゝこれほど多く……、されば、これほどの人々を、この親鸞があやまるのか……

拱いてゐる両腕を解きはなすや否や、親鸞は胸のうへに合掌した。さうして、今までの幻が影もなく其の刹那に一時に消えてしまつたあとに、自分の背なかいっぱいに、胸から腹へかけても、しつとりと殆ど全身に汗が湧き出てゐるのを覚えて、しづかに左右の掌を離すと、右手を腰のそばにつき、それを力に、胸を斜めに捩るやうにして起きあがつた、額のうへにも、おほきな汗粒が綴られてゐた。かすかな嘆息を、長く吐きだしながら、両方の膝がしらを立て、その上に肘を乗せて、両手の中に親鸞は顔を埋めた。圓窓からの柔かな暑い風が、低く曲がつてゐる背なかゝら肩の上にさはつていつた。親鸞は再び嘆息をついた。

……あのときこそ、まことによい日ぐらしであつた……

唇にだして呟きたいやうに、親鸞は、烈しい追憶に忽ちそゝられて、汗にまみれてゐる顔を、なほ深く両手の中に埋めた。

……山の裾の、十歩にもたらぬ小狭い地面であつた。柱は皮も削つてない赤い松の樹であつた。茅に粗く葺いた低

屋根の下に、壁はなく、まはりは薦を垂れたばかりであつた。師のとほりの柴の庵の、めぐりを堀りまはし土を燥かして、……ことに夜の、小さな短檠の燈の下の讀書こそ、わけても心ゆくばかり愉しいかぎりのものであつた。後の山の叢林の風の音、梟の啼く聲、獣の叫びごゑ、そして夜もすがら筧の水の、清くせゝらぎ流れておちる澄んだ高い響が、胸に深く更に深く透きとほり、眼は聖經の上に曝らされ、尊い佛語と信心とが一つに統べられて思はず膝をたゝきつゝ法悦の聲をあげた深い感激に、とめどなく充たされる夜な夜なに、しかも常侍のものは、蓮位房のみ一人であつた。土地にて、ゆくりなくも出來た御同朋とても、覺善房のみ一人であつた。そのほかには誰れもなかつた。髪も生えるまゝに自然にのびて禿のやうになつてゐた。そして……

越後の國府の配所にすごした五年のあひだの生活が、親鸞の胸に烈しい慕はしさと共に鮮かに追懐された。

……寒暑の苦るしさ、ものゝ乏しさはあつたけれども、玉日、範意、また師の御房をしのびまゐらする侘びしさもありはしたが、それだけになほ、この胸のうちに、まざりものは遂に無かつた。生まれながらの烈しい強い人戀ひのこゝろさへも忘れてゐたほどまでに、この親鸞の生まれつきそのまゝの日ぐらしであつたのに、確かに相違なかつた。さうちや、あのすが〳〵しい五年の煩ひなき絶縁の境涯が、しかし、またこの老餘の生涯に、いつの日に有らうか……

頭をあげた親鸞は、兩手をかへして其の皺ばむでゐる赤黒い手甲の膚を眺めた。蒼く黝い靜脈が、うね〳〵と皮の直ぐ下に匍ひ、破れた網のやうになつて流れてゐるのを、ちつと親鸞は視つめつゝ、幾度か兩方の指を強く伸ばしたり屈曲させたりしつゞけた。

……六十、……今後いつまで……

弱い氣もちに襲はれて、兩手を膝の兩側におろしながら、親鸞はうつむいた。末の十一になつてゐる娘女の、いたい

けに笑つてゐる顔が、親鸞の眼の下に、一人で現はれた。親鸞はそれを徐かに柔かく拂ひのけた。十二になつてゐる嵯峨女が、十四になつてゐる有房が、十八の眇信女が、つぎ〳〵にまた現はれかけるのを、親鸞は壓さへつけるやうにして胸の外へ強く流した。同時に、二十になつてゐる善鸞が、拂ふひまもなく強く現はれ、烈しく親鸞を正面から視つめた。親鸞は、自分を、同時に善鸞を、一氣に叱咤するやうに胸を勵まして、善鸞の顔を激しく拭ひ消した。そこに、二十一の昌女と妻の朝女とが二人して直ぐに現はれた。朝女の初老をすぎてゐる顔を、親鸞は我れにもなく暫く眺めた。

……後の妻……そして、二十年を一つ屋根の下に暮らし、まだ何としても互ひに一つにはなつてゐぬ人間といふものどうしの致しかたなき疎ましさ、それもまた、この親鸞の何に、誰れをも人を嫌ひ、しかもなほ、さればとて名聞利養にとられてゐるより起きる、初老の女の煩惱と愛着であるものを、朝女よ、そなたの亡ゆく禍ひのすべてはこの親鸞が因をつくり……

いつのまにか昌女の、あでやかな顔が消えてゐた。ほそい眉に神經のするどさを見せてゐる朝女ひとりが、瞼をふせて默つて何ごとかを念じてゐるのを、親鸞は幻に見た。その朝女の黄いろい額のうへに、二すぢの淺い皺が横に長く流れてゐるのが、まざ〳〵と見えるや否や、その顔を一時に強く拂ひのけて、自分の顔を鋭くあげるのと同時に、親鸞は蒲團の上に忽ち激しく立ちあがつた。新しい白麻の布地が、足の裏に、すが〳〵しく感じられると、すぐに疊のうへに一踏室に出た。

新しい純直な切なく燃えるやうな力が、自身の裡に、今はじめて掘りあてた泉のやうに迸るのを感じつゝ、親鸞は瞳を輝かして、室の周圍を徐かに見まはした。婦人的激情と、なほ烈しい自己厭忌とに襲はれて、濃い眉を上下に強く動かしつゞけてゐるうちに、すぐに晴れ〳〵とした輝かしい表情に移つていつた。さうして、徐かに合掌しつゝ、稱名し

つゝ、その唇のふちに、にこやかな笑ひをたゝへはじめた。

……この親鸞には、六十になつて、はじめて、ほんたうに出家ができさうぢやな……

親鸞の瞳が、ひときは聖く輝いた。

このつぎの日の朝、親鸞は、稲田の草庵を出て、再び歸つてこなかつた。

時論

軍備縮小會議に就いて

法學博士 吉野作造

軍備縮小を問題とする國際會議は愈々華盛頓に於て開かるゝ事になるらしい。特に此會議が我國にとつて重大な意義を有するのは、併せて太平洋並びに極東に關する問題もが討議さるゝと云ふ點である。由來我國の對外政策は吾人の屢々本誌に於て指摘した如く甚だ曖昧なものであつた。今や厭でも應でも之れを明白に決定せねばならぬ場合となつた。或人は之を以て帝國の一大危機だと云ふ。併し考へやうに依つては、帝國の本當の進歩開發を導き出すべき絶好の轉機であるとも云へる。此の會議夫れ自身は、日本の將來を禍するとも福するとも定まつて居るのではない。寧ろ政治家の技倆如何に依つて吉凶禍福が定まるのである。そこで我々國民にとつて差當り重大なる問題は、此大切なる時機に際して政府當局が如何なる態度を以て此會議に臨まんとするかと云ふ點である。

米國が軍備縮小の國際會議を提唱すべき事は、今年の春以來略々豫想された事であつた。されば今年の議會に於ても、誰れやらが政府に向つて此問題に對する態度を質問した者があつたが、原總理大臣の答辯は未だ正式に何とも云つて來た問題でないから考へても居ないが、未だ研究する必要もないと云ふのであつた。愈々具體的の問題となるまで研究をもしないと云ふのだから、今日愈々具體的の問題となつても、恐らく臨機應變の處置を執らうと云ふ位に輕く考へて居るのではあるまいか。併し原總理大臣の一場の答辯を以て、政府の本當の態度を推測するのは誤であるかも知れない。何故ならば人の質問に對して好んで木で鼻を括つたやうな答辯をするのは、原總理大臣の癖だからである。あれ程の人だから斯う云ふ大事な問題に就いては多少の經綸はあるだらう。只其の人と爲りが不當に秘密を好むと云ふ所から、外部の我々に明知せられないのを遺憾とする者である。

依つて我々は轉じて社會の有力な階級の此問題に對する態度

を觀よう。之れ等の意見は亦政府の政策決定の上に著るしい影響を有するものであるし、政府も亦殊に外交上の問題に就いては、右顧左眄世上の思惑に顧慮する事多いから、之れ等の世上の議論を觀察する事は亦政府の態度を推定するの材料にもなる。斯う云ふ考へから昨今の新聞紙上に現はるゝ種々の人の意見を綜合して見ると、二種の見解があるやうだ。一は米國提唱の眞意を惡意に解釋するもので、他は其反對に善意に解釋するか、又は少くとも虚心坦懷、毫も先入の偏見なく此會議に臨むべしとする見解である。

亞米利加が軍備縮小の問題に兼ねて、太平洋並びに極東問題をも併せ議すべきを提唱した眞意は、ヤツプ問題等の如き日米間の單獨交渉で達し能はざりし目的を、此新らしい會議で遂せんとするのだと云ひ、又此會議で多數の力を借り日本の鼻先きをへし折る積りだと見、又斯くして日支兩國を離間し、東亞に於ける其政治的並びに經濟的野心を充さんとするのだなどと云ふ者がある。斯かゝる見解の誤りである事は、我々の從來の立場を諒解せらるゝ讀者諸君には甚だ明白の事であらうと思はれるから、故に管々しく辯明はせぬ。今日の國際關係に流るゝ思想の大勢に通ずる者から見れば、こんな淺薄な動機で、こんな大袈裟な會合が開催さるゝ道理がない。假令んば誤つてこんな淺薄な動機で國際會議が開かれたとしても、それなら此會議で日本の立場と利害を辯明擁護する事は一擧手一投足の勞に過ぎない。此度の會議は斯う云ふ卑劣な米國の魂膽に出づるのだから、我國は大いに危險に瀕して居るなどと云ふ理屈が分らない。我國の運命に大關係あるのは、此度の會議が眞面目の動機から起つたからである。不眞面目の會合なら之れを一擧に蹴飛ばす事も出來る。

尤も此度の會合に於て淺薄なる動機が全く働かないと云ふのではない。從つて愈々會合となつた曉、さう云ふ不純な動機がチョイ、チョイ頭を擡げる事もあるだらう。併しながら察する所彼等は決して之れを公然露骨に主張する程蠻勇ヲ逞しうするものでない。腹では何う考へて居ても表面は矢張り何處までも世界全體の平和幸福と云ふ事を標目とするであらう。故に我々も亦何處までも此標目を武器として堂々として進むならば、恰も王師の向ふ所敵なきが如く、容易に隱れたる不純の目的を打碎く事が出來る。故に提唱者の眞の動機が不純だと云ふなら不純でも構はない。我々が何處までも順にとつて進み、容易に彼等を押へる事は出來る。加之今日世界の人々が此會議に多少の望を懸け、又陰に陽に之れを聲援して居るのは、其表面執る所の目標が善且つ美なるが爲である。隱れたる所謂不純の魂膽を

後援して居るのではない。世界の民衆は欺くべからず、假令如何に巧妙に活動しても不純な動機は到底民衆の法廷に道徳的勝利を占むる事は出來ない。尤も會議の席上では種々の議論が戰はれ、種々の利害が爭はれて理想的な決定を見る事は出來ないかも知れない。此限りに於て我々も亦或點までは理想の要求を犠牲にして現實に妥協すると云ふ事になるかも知れない。それにしても結局に於ける道徳的勝利は其公明正大なる平和的立場に歸すべきは殆んど云ふを俟たない所だ。綱目の點に就いてはいろ／＼計量すべき點はあらう。けれども大體如何なる覺悟を以て此會合に臨むべきやの大綱は初めより明白であると信ずる。

會議を支配する思想の如何なるものなるかが明かになつたとすれば、會議に日本を代表すべき使臣選定の方針は自ら之に由つて定まらなければならない。偖て方針が定まつても誰を遣るかといふ具體的の問題になれば、我々は國民と共に大いに惑はざるを得ないのである。

英吉利ではロイド・ヂョーヂが行く、ことによるとカーゾン卿も同伴するかも知れない、佛蘭西からもブリヤンが行くと云ふ。そこで日本では原首相と内田外相と二氏を遣るといふ議論があるが、斯ういふ形式論には全然感服が出來ない。外國君主の戴冠式に參列すると云つたやうな、直接政治上の意味の無い會合なら、向ふが總理大臣を出すに對して我からも總理大臣を出すと云ふに相當の理由はあるが、今度のは現に各國家の將來の運命を決する重大な會合だから、人選は一に其の人の能力によつて定められなければならない。ロイド・ヂョーヂの出るのは單に首相だからではない。ブリヤンの出るのは能力が認められて居るからであらう。能力が有るから大臣に成つて居る。從つて會議に出掛けると云ふのであるが、我が原首相の如きは、日本のやうな奇妙な政界に於いてこそ之を泳ぎ廻る若干の能力が認められて居れ、到底世界の檜舞臺に出て世界的問題を討論するの柄ではないからだ。能力は有るかも知れないが、之を推定すべき證據を伴つて示した事が無い、從來の言論行動を見ても、かういふ方向にはまるで了解の無い人のやうに國民は認めて居る。凡て總理大臣を出すと云ふ事は規則で定まつたとしても、我々は何かの理由を捜し出して原首相を出して世界の物笑ひと成る事だけは避けたい。

内田外相については多く其の人について知る所なきが故に玆に之を論じないが、唯人選の方針につき一言して置きたいのは、國際儀禮法則其他いろいろの技術的智識に通曉するを要するは

勿論ながら、更にかゝる會合の指導的精神として、深く今日の時勢の内面に動いて居る思想に通ずる者を選ばねばならぬといふことである。從來のやうに無理にも安い金で澤山の物を買つて來るとか、是が非でも我が主張を少しでも餘計に通して來るとか、さういふ押の強い事を以つて全權使臣の要件とした時代の頭を以つて此問題を取扱ふてはならない。

右述べたやうな要件に適合する人物があるか否かは一つの問題であるが、よしあるとしてもさういふ人物が果して其選に當るかを考へて見ると甚だ心細い。かゝる人材の其の選に當らんことは我々の切なる希望である。けれども實際の形勢を云へば我々國民の希望は恐らく顧みられないであらう。さうすれば切めて我々の希望するやうな人材を正式の使臣以外の列に加へて會議地に派遣したいと考へる。先年の巴里講和會議にも正式の使臣以外にいろいろの人が行つた。其成績については今玆に批評する限りではないが、切めて是等の人々の中にもつと世界の大勢に通ずる者があつたたら、日本國民の眞の立場を紹介するに餘程都合が好かつたらうと思ふ。

かういふ見地から予輩は政府當局に向つて華盛頓に派遣する一行の中には、是非思想家を加へて貰ひたい。而かも各種の思想家を加へて貰ひたい事を希望する。各種のと云ふ意味は政府の好む所に偏せざるを意味するのである。日本として豫め意見を一定しよう。其一定したる意見に調子を合せないやうな考の者は除外するといふやうなことになつたら、其時は必ず日本の外交の失敗する時である事を知らねばならぬ。一言にして之を云へば、我々は誰が派遣されるにしろ、使臣の言動は會議の大勢と、例によつて調子が合ふまいと想像する。それだけ之と反對の思想を會議の内外に紹介して置くことが、日本に取つて極めて必要であると考へる。當局は或は之を以つて日本の不爲めと考へるかも知れない。然し此考が巴里講和會議の失敗を見た主たる原因なるを思ふ時、我々は切に反對思想の表明を許すの雅量を示されんことを希望せざるを得ない。

世界の平和と幸福とをいやが上にも增進せんとする希望が今度の會議を促した、少くとも今度の會議の成功を祈つて居るとすれば、我々は出來るだけ此希望を實現の方向に此會議を利導しなければならない。換言すれば世界の平和と幸福とを促進すべき方法を講ずる絕好の機會として十分に之を利用するの態度に出でたい。若し我々が眞に世界の平和と幸福とに熱心であるなら、發企したのは亞米利加であるけれども、我々からいろいろ問題を提供して然るべきだ。故に我々は米國の提唱に接するや

日本としては一も二もなく之に應諾の返事を與ふべきであつたと考へる。此點に於て太平洋及び極東問題の意味とか範圍とかを問ひ返したと云ふ事は、或る意味に於て大いなる失態だと考へる。何となれば好い事をやらうと云ふのに、問題の範圍と種類とを制限する必要は無いからである。

裁判所で物を爭ふやうに、一つ一つ爭點を理窟で埋めようといふのなら、問題の範圍を出來るだけ制限するのが便利な。然し之れでは懸案の部分的解決といふことは出來るが、世界の平和と幸福とを根本的に促進せんとする大希望とは調子の合はないものである。日本政府の質問の主意は何ういふ所にあつたのか分らぬが、少くとも外見上之によつて日本の政治家の思想的調子が如何にも低劣を極めて居るといふ感を世界の各方面に起さしめたことだけは疑を容れない。寔に殘念な事た。

大體の理窟から云つても、問題を如何なる範圍に限るべきやは皆集まつた上で極める筈のことである。此點は米國の回答として傳へられて居る說の通りである。よしんば米國で問題の範圍を限るとしても、我々は之に拘束されねばならぬ理由はない。眞に世界の平和と幸福との爲めに必要だと信ずるなら、彼の意に反して討議の範圍を擴張して差支へない。又利害の打算より云つても、出來るだけ廣い範圍に當つて國際紛議の種をどん／＼取扱つて行くといふのが、日本の立場としても得策だ。根本的の財政の整理をすると云ふ場合に、今度返すべき借金は何の口かと訊くのはまるで相談の趣意を了解しない態度ではないか。

前項の問題と關聯して、世上には次のやうな俗說が行はれて居る。今度の會議には山東問題やヤツプ問題は當然除外さるべきである。なぜなれば既定の問題であつて更に之を再議に附するのは、國際信義の上から許すべからざることであるからであると。山東問題とヤツプ問題とを除外するのが善いか惡いか、之は自ら別問題である。よし之を除外すべしとするも、其理由を茲に求むるのは宜しくない、少くとも再議に附するのは國際信義に反するといふ理窟を引合ひに出すは滑稽である。一遍定めたことを後に至つて變改するといふ事は勿論惡い。併し乍ら變改にも二つの場合がある。我が儘から改をするのは無論許すべからざることであるが、前の決定の根柢に重大なる誤謬あることが双方に理解せられて、其上で再議に附するといふ事は、寧ろ不正なる狀態を正しきに引直すことであつて、喜ぶべき理由こそあれ毫も之を咎むべき筋は無いのである。山東問題やヤツプ問題の再議が果して此型に入るや否やは事實を調べた上でなければ分らないが、兎に角前の決定の誤謬を理由として再議を

求め來る以上、一應之に耳を傾けるのは當然の事である。少くとも主義として或る種の再議要求に之を認めなければならない。一概に之を國際信義に反すると云ふのは餘り輕卒な妄斷と云はなければならない。

之を要するに今度の會合については、事柄の重大なる爲めにや、日本に對する關係の極めて緊密なるの結果にや、之に對する國民の議論は多少狼狽氣味に見える。會議の結果は局部的に見れば、或は日本に取つて損にならぬとも限らない。然し世界の平和と幸福との熱烈なる欲求に推されて此處まで來たからには。過去の小利小欲に未練を殘さず、正々堂々の陣を張つて自發的に活躍する所あつて欲しい。新聞等に觀ると多くの意見が概して消極的受動的なるは、我々の甚だ快しとせざる所である。

小題小言四則

◉**石井・ランシング協約と太平洋會議**　今度の太平洋會議で石井・ランシング協約も問題になるだらうといふ說がある。否、亞米利加邊には初めから此協約の無効を說く議論すらあるとの事だ。協約の無効を說く議論は餘りに亂暴だが、此協約を根底とする議論の恐らく通用せざるべきことは疑を容れない。此等の點については他日尙ほ評論する積りであるが、玆に特に讀者の注意を乞ひたい一事は、條約の文面の解釋の結果がかうなると云ふやうな議論は、昨今の世界において著るしく無力になつたと云ふ事である。例へば米國がヤツプ島問題を云々する、それに對して我國には此條約は既に定まつたではないかと云ふ。山東問題について支那が何かを云ふ、すると我國はまた之は條約で已に定まつたでにないかと云ふ。其外かくかくではこれこれの不便があると想へて來ると、不便があらうが條約で極めたことだから致し方が無いと云ふのが、問題解決の從來の遣り方であつた。ところが昨今は條約の定めが何うであらうがそんな事には頓着なく、直ちに事物直接の關係に立入つて其便不便を見る。條約で何んなに堅く約束したことでも、それが實際に不便であり不都合なことであればどん〳〵之を改良して行かうと云ふのが昨今に通有の思想である。最後の權威は事柄其自身の正不正である。條約の取極めを唯一の金科玉條とするのは馬鹿げた事だとされて來た。今度の會議でも日本に關するいろいろの事が問題になるであらうが、之に對して若し日

本側が條約の取定めなどを盾として抗辯するならば、それは以つての外の謬りだ、世界の平和、東洋の幸福と云ふ實質的の立場から其の必要を說くのでなければ日本の主張は支持されない。よし理窟を捏ねて一時の勝利を得たとしても、消極的同情は恐らく我を離れるであらう。

◎法の權威より事實の權威へ

事實上の便不便が最後の權威を揮ふやうになつたと云ふ昨今の形勢は、內外の法律問題の取扱ひについても云へる。例へば治安警察法第ト四條を取つて見るに、之に由つて勞働運動を壓迫するのは百害あつて一利ない。而かも此箇條は今日盛んに警察官憲の利用する所となつて居る。試みに之を警察官に詰つて、本條の適用は寧ろ社會の平和を害せざるやと問ふて見るに、法の成條は之を執行せざるべからずと云ふ。法の定めた事は何處までも之を強行しなければならない、法的秩序の維持は社會の安全を保つ根軸であると。斯くて法の成條を強行するに急にして、其爲めに社會の平安が何れだけ傷けらるゝかを顧ないのが從來の遣り方であつた。元來法は事實の要求に基いて生れた一種の社會的規範であるけれども、今日のやうに變革の時勢に於いては、過去の法律は固より現代に對する妥當性を失ふものである。即ち法律は改正せらるゝを要するのであるが、其改正を見すものは即ち法的秩序の現實の時勢に妥當せざる事の說明でなければならない。法的秩序が實際の事實に適合せざる事がやがて法律に對する叛逆といふ現象となつて顯はれる。こゝに於いて現存の法律以外に新たなる正義を發見乃至確立せんとする一種の社會的運動が起るものであつて、而かも之が法の秩序の中にも起つて來るのを我々は見る。要するにかういふ時勢に於いては法律の文面のぎごちなき解釋を其儘社會に強行するといふ事は愼しむべき事だ。日本の政治家法律家は兎角形式的解釋に拘泥するの通弊がある。舊い條約を盾に取つて國際會議に臨むと同じく、法律の規定を徹頭徹尾强請して事實上の便不便を顧慮せざるは、甚だしく時勢に盲なる者と云はなければならない。

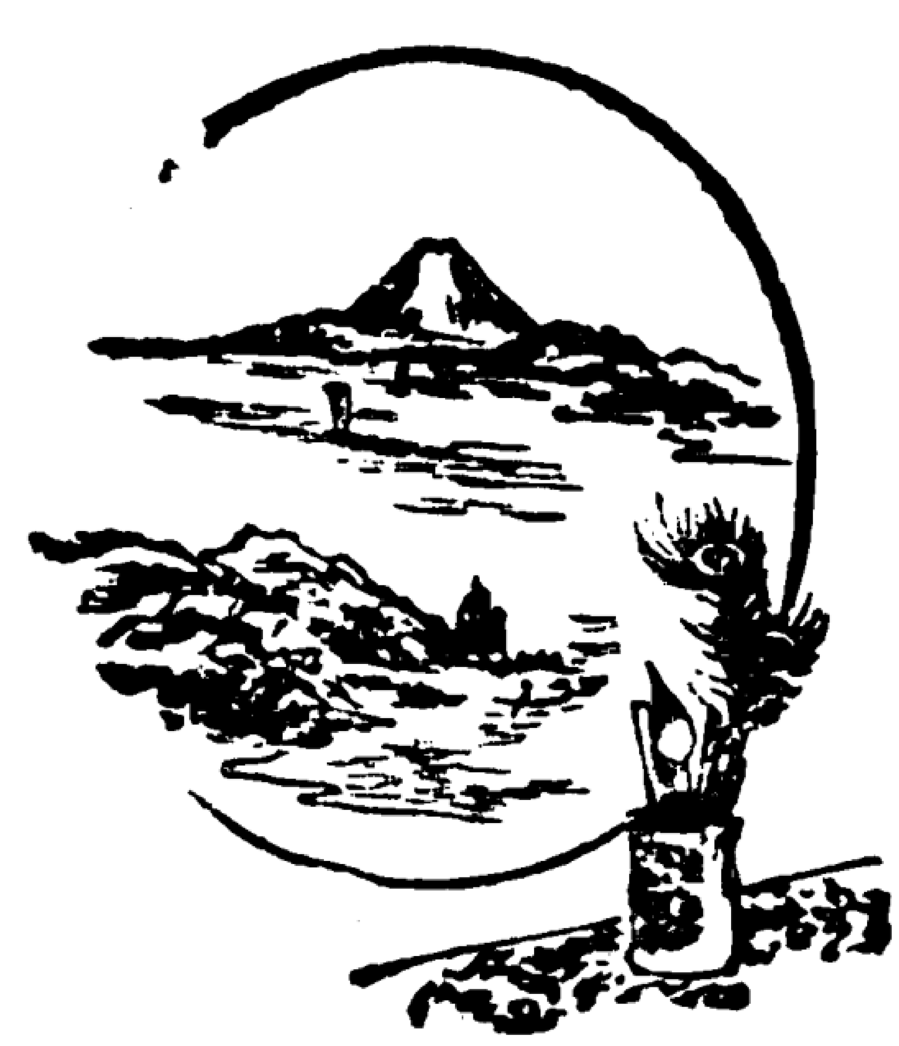
◎勞働運動に對する官憲の態度

勞働運動に對する官憲の態度が徒らに法的秩序の強行に偏して、實際の便不便を顧さるの弊ある事は右述べた通りであるが、更に一歩を進めて當局の態度が法的秩序の維持に口實を藉りて、不當に勞働者側を迫害するものだといふ考を抱かしむるは甚だ憂ふべき現象だと云はなければならない。當局の眞意をこゝまで邪推するのは不當かも知れない。併し乍ら最近の勞働爭議に於ける當局の態度を局外から觀て居ると斯く疑はるゝも致し方がないといふ傾向は確かにあると思はれる。今度神戶のストライキに於

いて勞働者のやつた工場管理の宣言の如き、名は工場管理だけれども、西洋のそれとは大いに其趣きを異にする、至つて穩健な極めて公明正大な措置であつたと思ふのに、官憲が如何にかして之を處置するの理由を發見せんとして居るやうに見えるのは、我々の甚だ遺憾とする所である。斯くの如きは理に於いて大いに謬つて居るのみならず、勞働政策としても甚だ當を失つて居ると思ふ。近頃勞働階級の大勢を見ると、實に憂ふべき危機に瀕して居る。といふよりも日本の勞働運動が正しい道を執るか否かの分岐點に際會して居る。この時に當つて當局の一擧一動は最もデリケイトな影響を及ぼすものであるのに、勞働運動としいへば、玉石同架、一概に之れを不逞視して良きも惡きも押並べて窮地に陷れるのは、果して社會の爲めに計つて忠なる所以であらうか。我々は當局に向つても少し勞働界の實情に通ぜられんことを希望せざるを得ない。そして徒らに法の成文を適用することを止めて、眞の社會の平安なる進歩の爲めには何うするのがよいかを深切に考へて貰ひたい。

◉**陸榮廷の失脚**　七月下旬陸榮廷失脚の報は如何に支那軍閥が外見の隆盛に似ず、其の根柢の薄弱なるものなるかを示すものである。廣西が廣東と事を構ふるや、地によつて勝負の數は分れて居るが、大勢に於て陸の勢力は隆盛であつた。欽廉二州を陷れるに及んで、陸遂に廣東を驅逐すべしとさへ思はれたのに、突如、沈鴻英の裏切りによつて脆くも失脚したのは平素支那の事情に注意を拂らなかつた我々に取つてさへ意外の現象であつた。況んや彼は奉天の張作霖と共に支那の南北に於ける二大勢力家たりしに於てをや。之れより先き武昌の王占元も殆どその勢力を失つた。軍閥の殘黨にして今日猶ほ命を保つ者に張作霖の外、曹錕があるが、之れとても果して何時までその勢力を維持し得るや分らない。斯くして支那も段々舊式政治家の手から解放されて行く。各省は先づ一旦自主自立の國となり、之れ等が軈て自發的に聯合するの時があるだらうと云ふ觀測は段々實現に近づいて來るやうだ。支那の今日は幕末の日本のやうなものだ。薩長の事を江戸に聽いても分らないと同じ樣に、北京政府は決して支那の中央政府ではない。この意味に於て先般さる英人は支那中央政府承認取消論を説へたものがあるが尤の議論だ。斯くて各省は益々中央に離れて行く。北京を中心として今猶支那を統一せんとする高橋藏相の議論の如きはとんでもない盲斷である。併しながら支那を斯くして益々離散するものとのみ觀るのは過りであらう。今や各省には自治的精神大いに起り、各々憲法制定に急いで居る。即ち各省夫れ／＼内政の整理に腐心して居るを語るもので、その上に軈て本當の統一は

出來るであらう。革命後十有餘年の混亂は眞面目な自治運動に由つて初めて統一整頓の曙光を見んとして居る。十有餘年の歳月は長いやうだけれども、之を佛蘭西革命に比し又は米國の獨立戰爭に比しても、決して特に長くはない。殊に支那のやうな老大な國家が一度び非常の變革に逢へば十年二十年の混亂を經るのは當然である。若し吾人の豫想するが如く、昨今の形勢が本當に整頓して居る端緒をなすものであるなら、我々は寧ろその恢復の早きに驚かざるを得ない。從つて又我々は隣邦の友人を以て徒に紛亂を好む者とするの觀察を改めなければならない。寧ろ彼等の自ら治むるの能力の非凡なるに鑒みて私かに自ら警しむる處がなければならないと考へる。



中央公論

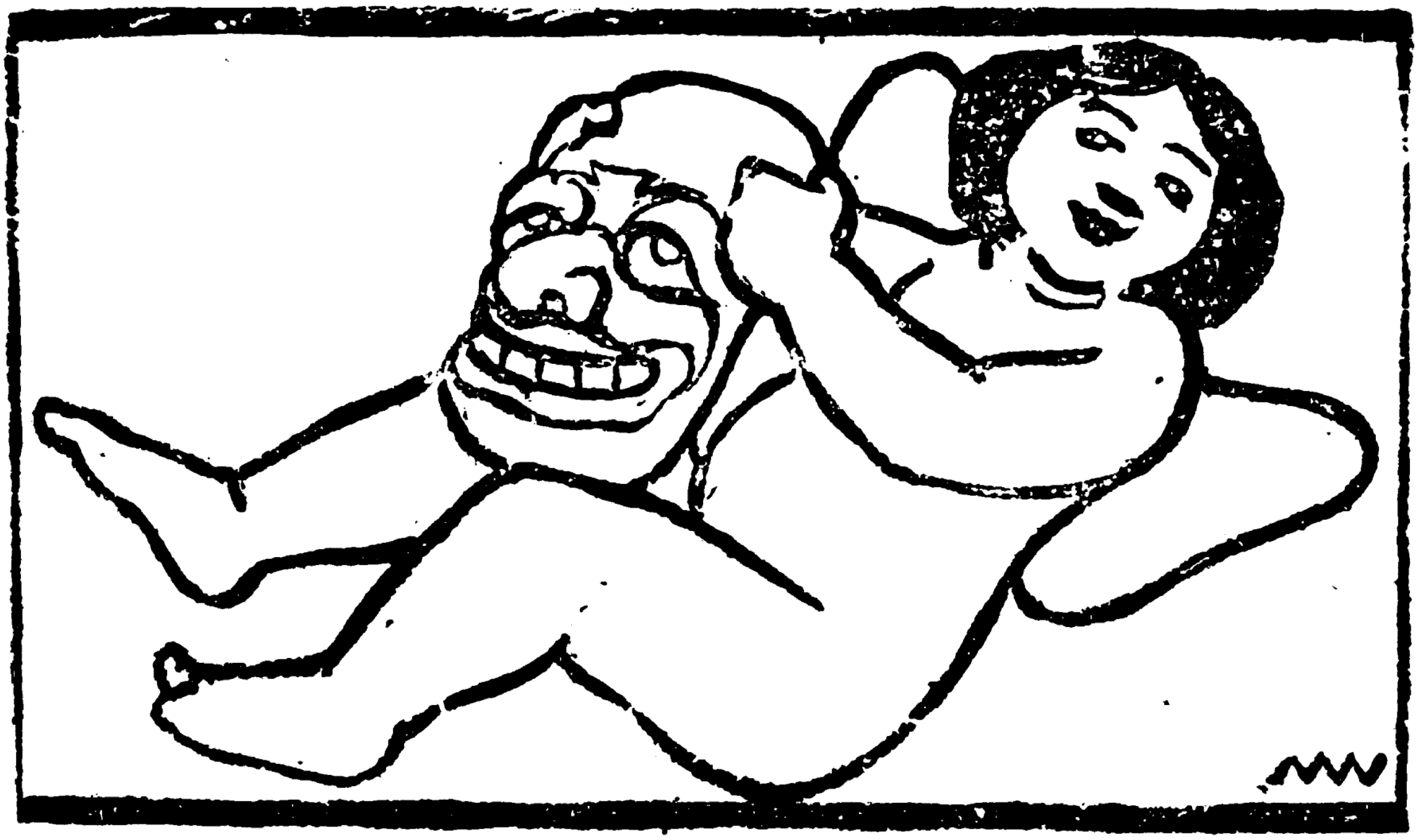
九月一日發賣

全篇皆現代屈指の政論家・思想家・名文家の手に成り

四百號記念號

創作十數篇は悉く文壇第一流作家の名篇傑作なり

三倍號以上の大册



ある迷宮の舞踏者

塚原健二郎

或友への手紙

G君、僕が君の住む街を去つて今や二度目の春が廻つて來ようとしてゐる。あれから……千九百十九年四月十二日の朝、君や、それからTやYドクトルや新聞社のO君やに送られて、亮平の一家と共に日向に旅立つてから……氣が向くと、可成多辯になれる性質(たち)の僕もすつかり默り込んで了つて、どんなに君達が僕の胸の扉をノツクして、もう一度君達の群へ引き戻さうと努めても頑にも僕は凝乎と押しだまつて、鎖した胸の扉を開かうとはしなかつた。別けてもYドクトルからは不可解な僕の沈默に對して、可成り劇しい批難の手紙をも受け取つた。實際僕にしても時として、此の長い／＼沈默が非常に苦しく、又無精に寂しいものに思はれて、一思ひに君達の住むあの山の上の街に飛歸つて、君達の手を取つて話かけたい衝動に驅られたことも幾度だつたらう……其度、僕はともすれば陥ちようとする此センチメンタルな氣持から、じつと自分を、凡てのものを傍觀者の冷めたい眼で見ようとする現在の自分にまで、引き上げ、引き

上げして來たのだ。何故なら……それは一を知つて貰ふために十の誤解を招くやうな結果を作ることを恐れたから。實際君達に別れてから今日までの僕の經驗した心の記錄は一朝一夕で知つて貰ふには餘りにも傷しく、餘りにも複雜なものであつたのだ。……それにしてもあれから二年後の今日の僕の境遇は何と云ふ恐しい變化だらう、あの頃、君達に自由な拘束のない境涯を羨やまれたやうな僕は、今では尠くとも人、二人の肉體を支へて行かなければならない境遇に置かれてゐるのだ。そして其一人は僕がかう云つたら、朧氣ながら君たちが其の記憶の底から、あゝあれだなと其の名を呼び起し得ると信じられる千鶴子と、そして僕と千鶴子との間に生れた一子亮一であることは今更ら僕の言を待つ迄もなからう。

Ｇ君、此作に書きつけた心のあとは決して單なる生活の記錄ではない。最初の結婚者の、苦惱と、日向時代に於る内面生活の偽らざる僕の告白だ。或は懺悔とも言ひ得る……此作に依つて、今日まで君達が僕の上に描いてゐた幻影は、或は破れるかもしれない……だが現在の僕は、その幻滅を恐れて此筆を曲げるほど怯懦な人間では有り得ないのだ。たとへその後に曝け出された僕の眞の姿がどれほど醜くあらうとも、今、被いでゐる一枚の衣を破り捨てずにはゐられないのだ。――……

（一）

「眤つと瞶めてゐたものが、ぐわら〳〵に崩れ落ちて來たやうな結果だつた」と、哲郎は此頃の癖のやうになつてゐる此言葉を又しても心の裡に繰返した。そして彼は思はずギヨツとして自分と隣り合つて膝を卸してゐる妻の顏を覗くやうにした。恰も心の奥深く祕密を藏してゐるものが周圍の人の存在を忘れて口にしてはならないことを、獨言つた刹那

のやうな、狼狽と愕とを以つて——。が此時妻は窓から滑り込んで來る薄濁つた斜光の中に、適度の肉體の動搖に身を任せて、うつら〳〵と心地よげな假睡に墮ちてゐるのだつた。白粉氣のない、彼女のつや消の顏は、黄ばんで何處か薄汚ない老婆の顏を思ひ起させるものがあつた。彼女は明らかに疲勞してゐるのだつた。窓外の青い稻田を吹き渡つて來る熱氣を含んだ風は、微かに彼女の後れ毛を嬲つて、乘客の疎らな室内を突切つて次の室へ流れて行つた。汽車は今彼夫妻が辿り慕つて行かうとする、彼等に取つて友人であり、同時に恩人でもある闊村の轉地先の青島驛に三つ程手前のS驛を通過した處だつた。其時まで——千九百十九年四月十六日の朝、哲郎が初めて闊村と共に日向國兒湯郡木城村石河内字城の土地に足を下ろして以來僅か百日餘りの間に——彼が長い歳月の間、眤つと眺めてゐたものが——事業も戀も何もかもがぐわら〳〵に崩れ落ちて來たのだつた。「城」、彼の關係してゐる理想團新しき村の所在地である其の土地を、最初に此仕事の先達であるM氏が、闊村を初め二三の同志と共に、其頃其處から僅か離れた僻村の小學教師であつた同志の一人に案内されて見に來たのは、去年の夏から秋へ移らうとする頃であつた。其處は九州鐵道の支線の終點から七里近くも、深く分け入つた嶮しい山と山との斷ち割つた底のやうな僻地で、本村の北部の山裾を洗つて流れ下る小丸川の清流にU字型に圍繞された、二段に這ひ上つた丘が、彼等が最初の理想の鍬を下ろすために買ひ取つた土地であつた。土着の人の城と呼んで居る其一小區域には、二段餘りの捨てられたやうな荒蕪地があつた。彼等は其丘の中央と思はれる邊りに、先づ單獨青年の共同住宅を建てることにした。哲郎が郷里の方で初めて、闊村を知つたのは、彼が此土地を選定する爲の長旅を了つて、希望に燃えて其郷里の家に引返して間もない頃であつた。

哲郎の前に千鶴子——現在彼の傍にゐる妻——の存在が明瞭に影を落して來たのも彼が闊村を知つた前後からであつた。見樣によつては哲郎が闊村から、其交友の最初の紀念に贈られたものが千鶴子だとも言ひ得るのであつた。それほど闊

村は經驗のない哲郎の爲に骨を折つて呉れた。最初に千鶴子の實姉と叔母とを彼の爲めに說いて、哲郎が村へ移つて來る一月前程に二人の婚約を承諾させたのも園村であつた。彼等が移つて來た當時は、まだ城の共同住宅が建て終らない頃で、その頃獨身であつた哲郎は、本村の區長の持家を借りて合宿所にしてゐた同志の青年達と共にその二階に住んでゐた。園村の一家は――彼は婦人との間に生れた二人の子女と、十一になる實兄の男の子とを預つてゐた――其處から僅か離れたM氏の住居の裏二階の一間に落着いた。狹い室の中にトランクや、寢具や、油罐の類や、がゴタ〳〵に積み重ねられてあつた。それは園村夫婦の八ケ年に亘る教員生活の追憶の伴ふものであつた。城の畑には麥が青く伸びてゐた。豌や茄子の苗がスイ〳〵と芽を吹いてゐる頃であつた。每朝炊事當番の打鳴らす鐘の音に合宿所の階下の一間に集つて、質素な朝飯を濟ますと、その日の仕事に取りかゝる爲に、青年達は揃つて城へ出かけて行つた。本村から城へ行くには田畑の間の小徑をぬけて、小丸川を船で渡つて其處から急坂を攀じらなければならなかつた。木流し、開墾、荷運び、耕作といふやうに、仕事は各自に選ぶことになつてゐた。哲郎は園村と共に、其處からは山路三里手前に在る高城まで每日のやうに、郷里の方から持つて來た荷物を、鹽結びを提げて取りに出かけたりした。此處に集つてゐる青年の多くは洋書に熱中した。でなければ創作をした。園村も永い間捨てゝあつた畫筆に親しむとの出來るのを限りなく喜んだ。哲郎は日課のやうに東京にゐる千鶴子へ宛てゝ手紙を書いた。實際……千哩近く距つてゐる二人の連鎖を證明するものは手紙より外に何もなかつたから……で彼は、每朝十時頃……高城から其日の郵便物を運んで來る老人の姿が向ふの山道に現れるのを、燒きつくやうな思ひで憧れてゐるのであつた。

村――とは言へ、彼の關係してゐる團體の上に冠せられた名稱は、決して在來の意味でのそれではなかつた。相互扶助を目的とする純然たる愛を基調とした共產主義の一團である此集りは、村と云ふよりは一戶の家と云ふ感じがするので

あつた。主權者をもたない一戸の家、其處に住んでゐる各自が極度にエゴイストをのさばらしたとしたら、全然此團體の存在はなり立ないのが自然ではないか。が實際の事情はそれ以上惡化した複雜なものであつた。何故なら、主權者を所有すべき筈のない此團體は、何時の間にか——或は初からといつた方が適切であるかもしれない——一人の主權者を所有してゐた。その人の名をM氏と言つた。……住民の間には先生と言ふ尊稱さへ用ひられてゐた。M氏は、別けてもM氏自分と身心共に一個の結れた存在であると宣言してゐる貞子夫人は、呪ひや、祭りや、偏愛や、猜疑やを他人に抱いては不可ないといふ其所説を裏切らないほど洗練された人格の所有者ではなかつた。例へば各自が同等の權利と、義務とを持つことを理想とする此集團ではあるが財政でも住民の移住に關することでも、住宅のことでも其大部分はM氏の意志に依つて左右されてゐるのであつた。又一面から考へて見ると社會的地位、二種會員——是は村の外にあつて、村の思想通りに生活し、餘裕があれば村に喜捨する人——の信頼は、三十名近い他の住民全部よりも、M氏一人に集つてゐるのであつたから、さうなるのが自然でもあつた。哲郎が移つて來ると殆ど同時に村の住民の間にある動搖が惹起つた。其原因が、磨き上げられてゐない個性と個性とのかち合ひにあることは否めない事實であるが、其影に此M氏の偏愛、專政、がなかつたとしたら問題はかうまでこんがらがるのではなかつた。併も又M氏には藝術家に特有の極度に高いプライトと、其夫人に對する愛には何處か盲目的なものがあつたから。だがM氏の藝術を熱愛する哲郎は、其生れ出る母體の或程度の、其所説を裏切る人間的な矛盾や、時として閃めくそのエゴイスチックな性格にも氏が藝術家であるが故に、より親しさと懷しさとを見出すことの能きるほどの餘裕ある心を持つて接しうるのであつた。で其動搖のきつかけともいふべき事件の起つたのは、その頃上京中だつたM氏の留守の間に於てゞあつた。住民の一人が、自分の創作力を削ぐといふ理由の許に、二人の子供さへある妻を、其北國の方の郷里へ歸したのだつた。そして其住民といふの

が、東京時代にM氏の家に書生をしてゐた村瀬であつた。普通の社會ならば何んでもない此事件が、各自に同等の權利と幸福とを享受しうることを理想とする村にあつては、決して輕々しく葬り去らるべき事件ではなかつた。村に於ける婦人の地位が、長い間の傳統と、習慣とに因つて虐げられ切つた普通の社會のそれから何れ程も超脫したものでないといふことを證據立てるやうな此事件は、單に自分の創作力を削ぐからといふ理由の許に、其妻子を鄕里へ、併も、住民に何等の相談さへもなしに追ひ返したといふ事實は、年長者別けても日頃から村に於ける婦人の地位といふ一點に留意してゐた西岡や、村上に取つては重大な意味を以つて迫つて來た。自分の幸福の前に、他人の幸福を蹂躪つて、省みようとしない、恐ろしい利己主義者の追放案が西岡を初め、五六人の年長者の間に建議された。だが村瀬と、M氏との過去に於ける師弟としての關係が現在に迄生きて働いてゐた。其處にはM氏及び、貞子夫人といふ後立が嚴然と控へてゐた。恰度此の時であつた――M氏が新たな移住民の中に河野を加へて歸村したのは。M氏が村から出る最初の天才として、又自分の思想の唯一の繼承者としての期待をさへかけてである。漸う去年中學を出たばかりの年少な河野を此M氏の過信が何れほど膨したか、そして又河野は微温的な性格の所有者ではなく、熱情家であると同時に積極的な野心家であつたから、彼の極端な征服慾は、自分が天才であるといふ丈けで凡ての住民に尊敬をさへ強ゐないではゐられなかつた。「天才の吾儘は或程度迄は許さなくては」かうしたM氏の默許が已惚れの強い廿歲の靑年をいやが上に增長させたのは言ふまでもない。かうした河野が此動搖の最中に現はれたことは、火に油を注ぎかけたやうなものであつた。何故なら、河野と、村瀬とは東京時代からの親しい友人であつたから。俄に村瀬は優勢になつた。事件はこんがらがつた。結果として位置は覆へされた。追放者は被追放者の位置に立たなければならなかつた。其爲めに村では每日のやうに、其頃未完成のまゝ引移つて住んでゐた城の共同住宅の一間で集りが催された。哲郎は園村と共に勿論、たとへ全部的にで

なかつたとしても、村上や西岡の考へに結びついてゐた。そして此動搖が一段落をつげたと思つた時は、西岡を初め五六人の住民が相前後して、彼等自身の手で建てた、共同住宅や、種を下ろした麥の青く成長してゐる畑やを捨てゝ村を去つてゐた。村の思想を生かすことは時と場所とを選ばない、然し僕達は此土地に於てこの仕事を完成させることに特別の意味があるのではあるまいか、例へば卒の思想に反對したやうな批評家に對してでも、かう言つて圓村や、哲郎は親しい友を引き止め引き止めしたのであつたが。此動搖の結果として、彼等の得た唯一の教訓は、此村の住民の重要なる資格としては、忠實なる働き手であるよりは、M氏の追隨者であると同時に、貞子夫人の寵兒であらねばならぬといふことであつた。此考へに打ちつかつて最も大きな驚愕に打たれたのは圓村であつた。彼は自分の提供した——彼は郷里のS平野にあつた傳來の土地と家屋とを金に換へて此事業に無條件で提供してゐた——金に因つて共基調であるべき管の愛が抜けらせて形式だけ殘つてゐる共產主義といふ名の許に、漫然徒食してゐる幾人もの遊惰な青年を共處に見たと思つた時、彼はもう脱れることの能きない陷穽に陷込んでゐたのであつた。が自分の提供した財產……それあるが故に現在の生活が間違つたものであると自覺してゐ乍ら、此處に止つてゐるほど彼は功利的な人間ではなかつた……惡を惡と知つて、共仲間に加つてゐることは、自分を墮落させることであるばかりではなく、惡を助長させることだ……引いては村の經濟上の保護者である二種會員に對して申し譯ない……村を出よう……彼はかう心に誓つた。そして又氣持の上から言つても、親しい五六人の住民の去つた村に、宗教的な空氣の稀薄な村に、尊敬することの能きない主權者を戴いて生活して行くことは堪らないことに違ひなかつた。そして此仕事に、たとへ過渡期である現在は多少の紊亂や、動搖は免れ得ないとしても、將來が謎であるならば……彼は全然絕望するやうなことはなかつたであらうが、現在が零である以上、如何に多くの零を積み重ねても、零は永久に零であらねばならぬことを、彼は知つてゐた。五人の家族を

抱いて此危機に打ちつかつた國村の過度の心勞は、肋膜を再發させた。哲郎は此病友に對して自分の爲すべき道を知らなかつた……それほど彼は狼狽した。

哲郎が成る日畑に働いてゐると、住民の一人が傍に來てこんなことを言つた。

「今日は君、國村さんが村を出るつてひどく昂奮してね、それから牧も、僕も皆集つたんだが、國村さんを鎭めるつもりでとう〳〵皆泣き出した。漸う先生が來て鎭めてね、……それでも國村さんは君にだけは知らせないで欲しいと言つたつけ」此話を聞いて哲郎は悲痛な心持を經驗した。自分にさうした傷ましい場面を見せまいとする國村の心遣ひにも泪ぐんだ。彼は鍬を其處に投り出して直に國村の家に駈けつけたのだつた。國村は其時褥の上で何か書き物をしてゐたが、哲郎を見ると、

「君は如何するな、いよ〳〵不可なければ、僕は最後の手段を取らうと思ふ。僕はもう決心してゐる。今日M縣の職員錄を借りて見たんだが、此處はどうも敎員の口は安いわな。さうかといつてSへも歸れないじやないかね君……」周圍の一切の反對を斥けて鄕里にあつた凡ての所有物をも此仕事に投げ出して、「四月からは何も彼も新しくなる」といつて子供のやうに喜んでゐた國村、食へなかつたら木の芽を嚙つてもやらうと迄意氣込んでゐたやうな國村ではないか、併も精神的に傷を受けたばかりでなく、健康をも害ねて褥の上にゐるやうな國村の口からかうした決心を聽いて哲郎はとう〳〵國村の手を取つて泣き出して了つた。

「僕は君、村へ來て善いことは一つも覺えない、覺えたことは人を疑ふことだけだ……あゝ僕は鄕里時代から見ると確かに墮落した……」國村はかういつて頭を抑へた。

「全く君にに申しわけない、僕がゐなかつたらこんな處へ來ずとも濟んだのに……」其時國村はかう續けて、字義通りの

愛の村を眼の前に描いて、日毎に近づいて來る村に立つ日を數へてゐた當時の、二人の生活を想ひ浮べるやうに言つた。

「あゝ全く夢のやうな氣がするな」園村はかう言つて枕に顔を深く埋めた。其時二番目の子供を懷妊してゐた園村の妻君は、

「貴方、また昂奮なすつちや、」から良人を窘めるやうに言つて、チロリと哲郎に視線を放げた。

「淺香さんも、園村を昂奮させないやうにして下さい」

「千鶴子には、今日とう〳〵來るなと言つてやつた。村は待合ではないから、僕が千鶴子を呼ぶことに反對するつて若い連中が言つたさうだ……僕はそんな奴等と、千鶴子を一緒に住ませる譯には行かない」其時、哲郎は許嫁のことを言ひ惜さうに言つた。

「夫婦が一緒にゐる處が、待合なら此地上の家庭は皆待合だ……馬鹿な奴等だ……考へなしにはあきれる……併し千鶴子さんを呼ぶのは少時見合せた方が可い」と園村も應じた。

「ほんとに何も知らないでこんな處へ來たら千鶴子さんがお氣の毒ですわ」細君も女らしい同感を示した。

とにかく體のためにも、此動搖を避けるためにも一先づ、海岸に轉地した方が可いといふ園村のことを心配する一部の人の輿論で彼は六月の初旬に一家を提げて其處から廿里近く距つた青島の海岸に移つたのであつた。其時は哲郎も此病友の一家を送つて來て、その轉地先きの家で二泊ばかりして村に歸つた。年長者の中で一人殘つた牧と共に哲郎は村に止つた。其頃から彼の憂欝は極端に度を增した。が彼の憂欝は近く逢へるべき筈の千鶴子が來なくなつたといふ理由だけであつたらうか……、がそれから凡そ一ケ月後に殆ど狂炎と言ひ得るほどの彼の思慕を盛つた手紙を受け取つて、可成り猛烈な周圍の反對を拂ひのけて、彼の許へ走つて來た千鶴子が村に着く前後、即ち彼の結婚の前後に於ける憂欝

は、もう一層度を高めてゐたのだつた。彼はその當時、丁度千鶴子が東京を立つて一日目の汽車の中にゐると思はれる頃感想を書きつける手帳に次のやうな一節を書きつけた。

「とう／＼やつて來た……永い間自分の恐れてゐたものが……。そして自分の待つてゐたものが……。自分は逃げなくてはならない……だがそれは怯懦ではないか。自分の招いたものが、當然來るべきものが來るのだ……。さうだ最後の玉手箱が……。いや自分はその箱の蓋に手を觸れる資格をも持てゐないのだ、何に運命が許してゐる……馬鹿なつ……若しさうとしたら運命の神めが、此頃の日でり續きで少し頭のなかが弛るんでゐるのかもしれない……あゝ何といふ恐ろしいことだ、だが又何といふ悦しいことだ、……獨りの女が、千鶴子が今は完全に自分のものになり切るのだ……千鶴子……最後に上野の山で別れてからもう三月餘りになる……心持伏目勝ちに相手を見上げる時の嬌羞を含んだあの眼も、吸はれたいもゝのやうにつき出てゐる厚い下唇も、ぽつちやりと處女らしく肉の張り切つてゐるあの柔い手も、おゝ……自分はどんなに別れてから百日餘りの月日を待つてゐたらう……此の山の中に移つてからは……二人の間の連鎖を證明するものは、一日に一度、それも正午頃……此村を訪れる郵便脚夫の置いて行く郵便物の束の中に見出される千鶴子の手紙より外に何もないのだ……三日も彼女の手紙がこない時自分の憂欝は救はれ難いものになつて行く……それほどの千鶴子が……今見晴しのいゝ瀨戸內海の沿岸を西に向つて疾驅してゐるのだ……明日の午後……自分は極めて順序よく彼女を妻驛に迎へることが能きるのではないか、今に至つて自分は何故に思ひ惱んでゐるのか、何故に能きるものなら彼女を載せて疾驅してゐる列車を其まゝ途中で阻止するか、若くは逆に東に向つて疾驅することを望んでゐるのか……それが果して未熟の青年の何人もが抱くであらう結婚といふ未知の世界に對する恐怖と、同程度のものであらうか……だが自分は是以上鋭く自分を凝視めることを止めやう――。自分が凡てのものゝ上を虛僞の衣で被ふことが可能であつ

としても、たゞ一つ自分の良心の姿を被ふことが出來ない以上——自分の苦悶は永久に滅することはないのだ……さうだ自分は彼女を……千鶴子を愛してはゐない……おゝ僅かに之だけ書きつけた丈で何といふ安易な氣分を覺えることだらう……本當に自分は何といふ怯懦な人間だらう、たゞそれだけのことをすら公然と口にすることが能きないのではないか……だが愛してはゐない……と言ひ切ることが此場合の自分の眞實の聲であらうか……如何に怯懦な自分とは言へ、如何に異性に對して獸の如く、餓えたる自分であるとは言へ、それが動かすことの出來ない良心の聲であるとしたら何うしてそれを宣言し堂々と彼女との婚約を取り消すことの能きない理由があらう。併も自分は一瞬の間と雖も彼女を忘れたことがなく、凡ての憧憬、凡ての悲みの上に彼女を關連させて考へるやうな自分ではないか……。殆ど自分の存在の一切は彼女に依つて動いてゐるのではないか……彼女の一顰一笑は直ちに自分にとつて一喜一憂の因をなすものではないか……」次に「S子……かう名を呼んだだけでも自分の情熱は、七年前にあの火山の麓で經驗したそれと少しも變らないほど高く胸の裡にこみ上げて來るのを感ずる、凡てのものが萎び切り、冷え切つて了つたやうな自分の心の奥底に、これほどの高い情熱が潜んでゐようとは……所詮は思ひあきらめねばならない自分の戀ではある……。そして戀といふには餘りにも遠い昔の日の淡い追憶でもある。S子……實際自分はお前に及ぶ瞬間程、高い情熱を自分が曾つて他の如何なる女性に對して覺えことがあつたらうか……S子……かつてはお前の放げつけた失戀の盃を、足下に蹂躪つたやうな自分は、其時、心の裡でお前に立てた誓言を今、破らうとしてゐるのだ。だが、形の上で自分がお前から解放されると同時に「初戀」といふあの魔女のやうに美しい執拗な幻影から脱れうるとしたら如何なに幸福だらう……」

村へ配達される電報は、別種配達と指定しない限り毎日十時頃村を訪れる郵便配達に依つて運ばれるのであつたから……其日哲郎が、千鶴子の門司からの打電を受けに取つたのは十時近い頃であつた。で彼女の待つてゐる筈の園村の轉

地先の家に哲郎が駈けつけたのは夜の九時過ぎであつた。表の坂を上り切ると、園村の座敷の縁に涼んでゐる黒い人影が哲郎の目に映つた。

「よう」彼は帽子を取つて聲をかけた。

「おゝ來た〳〵大元氣だね」園村が叫んだ。椽に近づくと三月前に上野驛で別れた時よりぐつと肉體の良くなつた千鶴子の笑顔が其處に見出された。翌朝、青島の海岸を哲郎は千鶴子を伴つて歩いた。二人は砂の上に字を書き乍ら一時間近く語つたのであつた。其日九時幾分かに哲郎夫妻は園村に送られて青島を立つた。窓外には青田が續いた。終點の妻驛へ下車したのは十二時であつた。驛には住民のKとOとが迎へに來てゐた。哲郎は千鶴子を紹介した。チツキを取つて驛前の運送店に托した。手荷物はKが背負つた。町を拔けて五丁ほど行くと、S川の渡船に出る、河岸で船を待つてゐる間に、Kが肌脱になつて體を拭いたりした。船に乘つた。船頭は千鶴子の姿をまじ〳〵と眺めて、又來たなといふ表情をした（此邊の人は村の者が、自分達と、かけ離れた服裝で、此道を通行する毎に、「新村の者や」かう云つて瞳を瞠るのであつた）渡船を捨てると少し坂道になつて、三丁ほど行くと急坂になる、足の早いKやOに哲郎夫妻は少し遅れて坂を上つた。千鶴子は都會の女らしいゴム底の空氣草履を穿いてゐるので幾度か足を滑らした。哲郎は漸う千鶴子の手を執つてやつて上り切つた。其處から高城迄の道は村へ行く山路のうちで最も平坦な個所である。道の右側に立つてゐる松の樹が強烈な眞夏の太陽を遮ぎつて涼しい影を作つてゐた。草苺の赤黑く熟れたのが摘み殘されてゐる藪陰で羽を摺り減らしたキスがダルた吟聲をつゞけてゐる、起伏の緩やかな大草原が道の兩側に見渡される、陸軍の馬糧所だ。大規模な孤兒院のある茶臼原はそれと隣接してゐる、孤兒院の入口には葉櫻が自然のアーチを作つてゐる。哲郎夫妻と、K達との距離は餘程遠のいてゐた。前にも後にも人影はない……かう思ふと彼は急に、「千鶴子……」かう呼びかけたい

衝動を感じた。そして彼は、此間書きつけた感想の一節は、古い幻影を追ふ自分の誇張した心の影だとこゝへ思つた。矢張り自分は千鶴子を得てゐることに因つて滿足なのだと思つた。

「千鶴子、とう／＼こんな處まで來て了つたね……歩けるかい……」彼はかう言つて彼女を勞はるやうに見返つた。

「えゝ歩けてよ……だけど隨分山の奥ね、村はあの山の邊りなの……」彼女はかう言つて、其白い顔から、鼻の邊りへにじんでゐる玉のやうな汗を拭ひ乍ら、奥を指いてゐる遠い山脈の、濃い鉛紫の油繪具を一刷毛なすりつけたやうなある一點を指摘した。

「さうだあの山蔭だ……」彼は、かう言つて眤つと彼女の瞳を見てそれから際立つて下瞼の厚く見えるその目を見た。

F旅館へついた時、KもOも哲郎夫妻を待ちかねてゐた。其處で夕飯を喰つて六時少し前に再び村へ向けて發つた。此處からの道は嶮路だ。夜は迫つて、夕闇の底に谷水の音だけが聞えて來る。それが四邊の靜寂にとけ入つて、何か、から奇異な迷宮へでも誘はれて行く途中のやうな神秘的な感じを抱かせられるのだつた。Kが道端の百姓家から明松を貰つて來た。眞紅な焔が濃い闇をペロ／＼となめる。黒く立ち上る油煙の匂が四邊に漂つた。夏の蟲が灯を慕つて來てはヂーと焼ける。哲郎は灯に後れまいと努めながら、一方疲れ切つてゐる千鶴子の手を取つて引きずるやうにして歩いた。暫くすると先に立つてゐたKが、突然「村の灯が見える」と叫んだ。哲郎は千鶴子にそれを指點して、闇の中にポツツリと見える紅い灯が城の共同住宅で、其處から右へよつて點々と散ばつてゐる灯が、M氏の住居のある本村であることを説明した。十時近くにM氏の家についた。M氏も貞子夫人も皆な喜んで哲郎夫妻を迎へた。茶を呑んだり、千鶴子が東京から持つて來た菓子を喰つたりした。其夜、哲郎夫妻は園村の使つてゐた二階で一夜を明かすことにした。蛙が戸外で喧しく啼いてゐた。哲郎夫妻にとつて妙に寢苦しい一夜であつた。千鶴子の憂鬱は其夜から初まつたのだ。

——と哲郎は其後幾度か心のうちに繰返した。とは云へ哲郎に取つても其一夜ほど悩しい心の闘ひを經驗したことは曾つてないのであつた。實際千鶴子ばかりではない、哲郎自身の憂欝も其夜から初つたのだ。

「恐ろしい瞬間が過ぎたのだ、凡てが終つたのだ……靈と靈と、肉と肉とが今は完全に結合したのだ……若しさういふことが僞らざる良心の聲であり、あの恐ろしい一夜を呼ぶに、それが單なる詩的形容でないとしたら……決つしてあの瞬間は恐ろしい瞬間ではなく、最も祝福されたゝ瞬間であるべき筈だ。自分の此恐怖と、自責とは、彼女が汚れざる處女であり、自分が既に呪はれたる肉體の所有者であつたといふことに對する良心の苦痛だけだらうか。窓下の水田で鳴く蛙の聲がいやに枕について眠れない夜だつた。眞夜中にフト眼を覺した時、おゝ生れて初めて自分はあれほど近く、肉付の好い、柔い曲線の波打つてゐる彼女の、否處女の、併も薄い夏の着物に包まれた宛ら妖精のやうに魅力ある肉體をまじ／＼と見たのではないか……彼女は寢返り打つた。そして柔かな指頭が自分の胸の邊りに觸れた。あの瞬間……果して自分は全血管を狂ひ廻る洪水のやうな情慾を抑制することが能きなかつたといふのか。巨大な濤と濤とが高く相打ちつかつた瞬間のやうに二人の情熱が燃え上る其頂點に達し切つて其處に靈肉一致の境地を見出したといふのか……否、否、ほんとうに自分の爲たことは何んといふ愧づべき下劣な行爲であつたらう……男が其相手の女を繫いで置く唯一の手段として、女の、併も千鶴子の如き處女である場合は……其最後のものを奪ふことによつて完全に相手を囚とすることが能きるのだ……かうした惡魔的な約束の下に、弱い弱い哀れな性慾の捕虜の假面を被つて、とう／＼彼女の奥深く藏されてゐた最後のものを……玉手箱の蓋を刎ねのけたのだ……。」その朝、彼は例の手帳にかう記したが、その時階下から階段を上つて來る千鶴子の足音を聽くと周章てゝ前日の分と共に破り捨てた。

翌日、哲郎夫妻はM氏の住宅の眞向ひの百姓家を借りて、新居とした。天井のない汚ない座敷であつた。二間きりな

い家で彼等の居間の次の室は、此家の一家のものが使つてゐた。加之襖がなかつたので、白い紙を間に張つて、境の仕切とした。それから哲郎は千鶴子を城へ伴つて皆に紹介した。千鶴子は女の住民と共にお炊事や、洗濯や、針仕事をしなければならなかつた。だが彼女は極めて平凡な女であつた……そして村に移つて來た理由も、他の單獨の女の住民のやうに自發的に、村の思想に共鳴したが故にといふのではなかつた。彼女はただ哲郎の婚約の女であるが故に來たのであつた、其處に彼女が村の住民としての不自然があつた。家庭的な温かみのない、村の空氣は彼女を極度に淋しがらせた。若い女の描いた愛の王國の幻影は一たまりもなく吹き飛ばされた。そして又現在の村に取つて異端の徒である哲郎の妻である彼女が他の住民からあらゆる意味に於て迫害を受けたのは當然である。併も脆弱な肉體の所有者である彼女は、過度の勞働と、濕潤な土地との爲に肋膜を再發した。哲郎は自分の結婚生活の最初の一頁から呪はれたものであることを知つた。其爲に彼は、園村と同じい運命を背負つて、妻と共に青島の海岸に立たなければならなかつた。彼夫妻は途中の高城で一泊した。

列車は、海岸の防風林に添つてひた走つた。哲郎は其地點が、目的の青島ステーションに間近く迫つてゐることを幾度かの往復によつて知つてゐた。松の樹間を透して白い波の捲き返してゐるのが活動のフヰルムのやうに隱見した。彼は妻を揺り起した。間もなく、列車は驛に滑り込んだ——その時、二三日前から園村の家へ遊びに來てゐた村の住民の一人である仙子が、大きな海水帽を被つて、集札口に彼等を待つてゐた。仙子は、此間の動揺の大波に、當然さらはれて行くべきものが何かのはづみで、一人切波の引いた後に取り殘されたやうな婦人であつた。

「随分待つてゐたのよ……千鶴子さんの體は何う、もう〳〵大變だ……時子さんに苛められて……」かう云ふ仙子は何

かかう倚りかゝるものがなくてはゐられないといふやうに見えた。内輪に物をして行かうとする園村の細君と、何處へ行くにもペンネーム以外に用ひたことのないやうな仙子とは自ら相容れない多くの點を持つてゐた。

此漁師町の中でも、少し小高い位置に在る園村の家に彼等が着いた頃は、細君は子供を相手に夕餉の仕度をしてゐる處であつた。園村は近くの理髪店へ行つてゐて留守であつた。海から吹いて來る風を肌に入れながら、哲郎夫妻が打ちくつろいでゐる處へ裏口から園村が陽にやけた顏をひよつこり現はした。

「淳さん……」哲郎はかう云つて體を振はせて園村の前に立つた。彼は別れてから半月餘りの時日の間に經驗した自分のいたましい心の状態が、一時に蘇へつて來たといふやうに見えた。

「もう大丈夫だ……此處まで來れば……」かういつて、園村も其處へ安坐をかいた。話は村の事の方へ移つて行つた。

「貞子さんが隨分ひどいことを云つてゐる。園村さんは矢張り田舍の小學校にゐる人だ……今のうちに早くSの方の土地を買ひ戻したらなんて千鶴子に言つたさうだ……」哲郎がM夫人の此の話をもち出した時、

「馬鹿な、馬鹿な奴だ……」園村は急に昂奮して

「淺香君……」かういつて哲郎の體を抱かうとした。殆どそれと同時に、

「淳さん……」哲郎が叫んだ。そして次の瞬間に二人は結ばれたやうに抱き合つて其處に打倒れた。女達はおど／＼する。二人の慟哭する聲に、園村の細君は驚いて走りよつた。

「まあ何ですかあなた……淺香さんも……」かう言つて妻君は二人を引離した。

夕食を喰つてゐる時に、

「淺香君達の好い家がありさうだ、床やの女将さんの親戚ださうだが」と園村は思ひ出したやうに言つた。
「兎に角千鶴さんも明日もう一度M市へ行つて病院で診て貰つた方が可い、藥が終つたから僕も一緒に行かう――」と園村はつけたした。
次の日の朝園村と千鶴子とはM市へ出かけて行つた。
夕方二人は元氣よく歸つて來た。千鶴子の病氣は、肋膜と肺尖を僅かに冒されてゐるといふことであつた。翌日仙子は誰れも味方のない村へ向けて立つて行つた。
午後哲郎夫妻は近くの理髮やが周旋してくれるといふ家に園村に伴はれて行つて見た。園村の家からはよほど離れた純然たる漁師町で二階を開けると、直ぐ眼下に海を控へてゐることがひどく哲郎夫妻を喜ばせた。明日引移りたい、かう此家の主婦に云ひ置いて其處から彼等は連れだつて青島へ廻つた。

（二）

哲郎が夕暮の濱の散歩から歸つて、裏口へ姿を現した時、妻の千鶴子は、
「あなた大變よ……」二階の欄から待ち兼ねたやうに聲をかけて早くといふ表情をした。
「何んだい――」彼は笑顏で答へて、白い經木眞田の海水帽を其處の簀の上にぬぎ捨てたまゝ、薄暗い土間から上れるやうになつてゐる二階の段梯子を上つた。と其處にはもう一通の手紙を持つた千鶴子が上つて來る彼を待つてゐるのだつた。
「仙子さんがたう／＼村を出されたんですつて、多津さんも一緒に」といふ妻の手から彼はひつたくるやうにして、海

に向いた方の欄に依つて其手紙を展げた。手紙は昨日の朝村へ向けて立つて行つた仙子のであつた。非常に周章て書きつけたものと見えて、紙も手帳の引き千切つたものに最初の五六行は鉛筆で後は筆でつゞけてあつた。昨日途中の高城のF旅館まで來て見ると村から皆の代理で田島が來てゐて、仙子とそしてもう一人の女の住民である多津子に村を出て欲しいといふことを宣言したといふのであつた。理由は二人の女の村にゐることは村を毒することになるといふ至極簡單なもので、條件として、辯解は一切受け入れないといふ可成り手嚴しいものであつたといふのだ。哲郎は此手紙を讀み終つて、

「一寸困つたことになつたね」と獨り言のやうに言つて、もう一度其手紙を妻の手に渡した。實際此場合仙子が村を出されたことにも相當に同情は拂ふことを惜まなかつたし、又、村の人達の專橫に對しても腹立を感じたのであつたが、それよりも仙子が愛人のゐる支那へ――彼女の愛人の宮津は、此間の動搖の犧牲者の一人として、村を去つて支那へ渡つてゐた――發つ迄で、其便船を待つ間彼の許に止りたいといふ意志を其手紙に仄めかしてあつたので、當面の問題として、其處置に窮したのであつた。何故なら、彼が妻の千鶴子を伴つて此海岸に轉地してゐるとは云へ、入費や、其他どんな微細なことに亘つて迄も、一切のことは園村に任せ切つてあるのであつたから――。加之彼に取つて最も困難な問題は、園村と、別けても園村の妻君とは孰づれも厚意を持ち合つてゐないことであつた。

「こんなことにならなければ可いがとは思つてゐたが、村の奴等も隨分思ひ切つたことをしたものだね、それに仙子さんは昨日あんなはがきを吳れたのに――」彼は其時、仙子が途中の妻驛から出した元氣の好いはがきのことを思ひ出して言つた。

「ほんとね……」と彼の妻も寂しさうに應じた。

「でも來ると好いわ。園村さんだつてそんな分らないことおつしやりはしないでしよ」、

「でも來る迄は園村には言はずに置かう」彼はかう言つて、其時海から來る風が肌に冷めたく感じられたので、

「千鶴子風に中ると悪いよ、中へお入り」かう妻を促がして自分も欄から離れた。

四疊に六疊の間の襖を取外した此漁師の家の二階は哲郎夫妻が此地上で初めて見出した王國であつた。漁家の間の小徑をぬけると、濱に出られるやうな位置にある其二階からは、遠く水平線の彼方迄無限大に擴つてゐる日向灘が一眸の裡に收められる。晴れた日には水平線の彼方を四國通ひの蒸汽船の通るのが、模糊として海面を罩むる水蒸氣を透して、チョツピリとした黑い點のやうに指點された。海から吹き上げて來る潮風は自由に彼の室を吹き通した。窓下の屋根の上に青い玉をつけた隣家の柑橘が枝を伸してゐた。彼は昨日園村の家から移つて來ると同時に、入江に面した奥の四疊には村から持つて來た荷物を置いて、海に臨んだ六疊に千鶴子の褥を取つてやつたのであつた。床の花瓶には、階下の主婦が何處からか青い葉蘭を折つて來て投げ込んで呉れたりした。主婦と云ふのはもう五十に手の屆かうとする氣の置けない感じの好い老婆で、良人は六年程前に三人の子供と一緒に漁に出たまゝ歸らなくなつて、今は大阪邊の紡績工場に行つてゐる孫娘を唯一つの力にして生きてゐるやうな寂しい境涯の人であつた。

「あなた何處まで行つていらしつて、青島へ？」此時褥の上に歸つた千鶴子が、枕の下から檢溫器を取つて、腋の下に狹みながら、哲郎の顏を覗くやうにして言つた。

「島までは行かずに海水浴場の方へ廻つて見た。避暑の人が隨分ふえたね、お前も行つて見るとよかつた」彼はかう言つて、今見て來た海水服を着た若い娘の遠淺を刎ね廻つてゐる活き〳〵した姿なぞを眼の前に描きながら、濱の散步なぞにどんなに誘つても、何時も憶劫さうに後込むやうな彼女をつまらなそうに眺めた。

「熱がないわ……今日は大へん好いのよ」彼女はから良人の氣を引き立てるやうに言つて、檢温器を振つてサックの中に收めた。が急に思ひ出したやうに、

「先刻、此間の方ね、ほら靑島でビロー樹を描いてゐた方、あの方が、もう一人の方と一緒に見えてよ」

から言つた妻の顏に、哲郞は何んとなく輝かしい光を見たやうに思つた、と急に彼の心は暗く沈んだ。

「それから如何した」彼はいら〳〵した調子で言つて、險しい視線を妻の上に放げたのであつた。

「散歩に出たつて申し上げてよ、そしたら晩に伺ひます、御主人に宜敷しくつて言つて歸つて行つたわ」

「さうか……」哲郞は吐き出すやうに言つて、昨日靑島で逢つた善良さうな靑年畫家の姿を胸の裡に描きながら椽の方へ出た。

妻は險しい彼の視線に打ち突かると、すねたように椽の上に仰向けに倒れて眼を閉じた。重苦しい沈默が暫時の間室の裡を領した。

もう多くの漁夫が夜漁に出かける頃で、直ぐ向ふの防波堤の邊に漁船が一艘滑るやうに現はれたと思ふと、續いて又一艘、二艘、三艘……眞靑な海の中に、果ては無數に散ばるのであつた。沖合に出ると何の船も定つて帆を一杯にひろげる。風を孕んだ帆船は遠く白濱の岬の邊に姿を消し去るのであつた。哲郞は暫くの間默つて海の光景を眺め續けてゐた。哲郞はからした、偏狹な自分の心からともすれば驅られる根柢のない嫉妬から、愛するものを苦しめ、寂しくさせるといふことは結婚前に少しも想像することの出來ないことであつた。そればかりではない曾つては夜街の散歩の折など、話し聞かされて、耳障りよく響いたやうな彼女の初戀の經驗や、其他、今まで少しも氣付かずにゐた彼女の過去が不思議に心にかゝつて、フトしたきつかけから終日氣不味い思ひに過ごすやうなことも珍らしくないのであつた。彼は

かうした心の推移を、自分の爲に遠く走つて來たやうな彼女に對する、自分の愛の動揺、若くは傷しい幻滅と思ふことは能きないのであつた。能きないばかりではなく、彼は妻に對する愛着が今は動かすことの能きないほど心の底深く喰ひ入つてゐることを思つた。

「何んといふ傷しいことだらう」折郎はかう思つて妻に眼を落した。一頃から見ると肉付のよかつた其頬や、肩の邊がげつそりと肉の落ちてゐるのが彼の眼にいたいたしく映つた。

「ひどく痩せ衰へたものだ」折郎はかう思ふと、近よつて妻を抱きメてやりたい衝動を感じた。

其時電燈が灯いた。隣家の漁家の夕餉の匂ひに交つて潮の香がなつかしく彼の嗅覺を衝いた。彼は欄を離れた。

「千鶴子電氣が來たよ」折郎はかう勞はるやうに妻を呼びかけた。妻は無言のまゝ椅を離れて、夕餉の用意をする爲に汚れた茶椀や、鍋の類を提げて階下へ下りて行つた。

夜に入ると強い風が出た。夕飯後折郎は妻の爲に蚊帳を釣つてやつて、暫時の間蚊帳の外で讀書をしてゐた。高い波の音がメ切つた雨戸を透して響いて來た。妻はスヤ〱と眠つた。折郎は讀書に疲れた頭を冷やすために、椽に出て雨戸を繰つた。海の恐ろしく荒れ狂つてゐるのが濃い闇の中に感じられた。汀を洗つては去る波の音に折郎は暫と聽き入つた。少時して彼は室の中へ引返して電燈のスヰツチを捻つた。彼は何がなし此物凄い外景の前に立つて自分の身をもつと暗い處に置きたかつたのであつた。と此時、彼の眼に、今迄少しも氣付かずにゐた海の彼方に、無數の漁火が點々として散ばつてゐるのが映じた。此見馴れない光景は折郎の好奇心を強く唆つたのであつた。彼は妻を起す爲に室の中を見た。暗黒の中に妻の寢苦しさうに、白い腕を露に投げ出してゐるのを認めた。

「千鶴子――」哲郎は妻に對してある嫌惡を感じて二度ばかり呼びかけて見た。妻は眠た氣に答へたが起きようとはしなかつた。

「千鶴子起きて海をごらん……おい」彼は心持聲を高くして呼んだ。妻は起き上つた。

「暗いじやありませんか」彼女はかう言つて電燈のスイッチを捻らうとした。

「お止し」哲郎はそれを止めて、

「まあ、其まゝ海をごらん…綺麗だから」かう言つて妻に遙かなる漁火を指示した。彼女は欄に近倚つた。そして哲郎の指示す海の一角を見た。

「こんな晩に大變ね」彼女は凄慘な海の光景に怯びえるやうに哲郎に摺り寄つた。

「淺香さん……もうお寢みになりましたか」此時、表の通りでかう呼びかけるものがあつた。

「いや、まだ……何方ですか」哲郎はかう言つて、そのまゝ入江に面した四疊の雨戸を繰つた。軒下の車井戸の傍に三つの黑い影が認められた。

「昨日は失禮しました。松木です」哲郎は其四國訛りによつて、昨日島で逢つた青年文士と、其友の畫家だといふことを知つた。

「どうぞお上り」かう言つて、哲郎は妻に電燈をつけることを命じた。

「もうお寢みぢやなかつたんですか……」電燈の消えてゐる室の中を見上げて、青年文士は氣の毒さうに言つた。暫らく彼等は其處に躊躇つてゐた。

千鶴子は六疊に引返して、スイッチを捻つた。そして彼女が蚊帳を外して稼を形付け終つた所へ、松木と青年畫家とも

う一人の青年が梯子段を上つて來た。

「トラピストにゐた水野君です。昨日村へ遊びに行つて歸りによつて呉れたので…」坐に付いた時、松木はかう言つて一緒に來た青年を哲郎に紹介した。

哲郎は顔の蒼白い、沈んだ調子の青年を其處に見た。

「村へそうですか、幾日お泊りでしたか？」

「えゝ、一晩ぎりです、恰度廣島へ歸る飛田さんといふ女の方と一緒に山を下りました」、青年は兩手で頭を抑へるやうな恰好をしながら答へた。

「あゝそんな方が村にゐらつしやいましたか」此時茶を入れる爲に階下へ行かうとした千鶴子が立ち止つて訊いた。

「長くゐるつもりで來たんだそうですが、一日ゐたらもう嫌になつたなんて、面白い人でした。村へ來る旅費を作る爲に衣服をみな賣拂つて、持物はホイットマンの詩集一冊よりないんだそうです、」

「村へ來る人は、却々女の人の方が勇氣がありますよ、高城で女の人にお逢ひになりませんでしたか」哲郎が訊いた。

「多津子さんといふ方と、もう一人の女の方にお逢ひしました。私は村から歸る時、赤く色付いた草鬼灯、その中にさへ皮を裂いてみると蝕まれた醜くい實がある…人生とはこんなものだといつた人がありますが、そんな比喩がほんとうに解つたやうな氣がしましたよ」青年は沈痛な調子でこんなことを言つた。哲郎は妙に笑へない氣がした。青年畫家は柱に背を凭せて其處に置いてあつた哲郎の讀みかけの諸國物語の頁を繰つた。此時千鶴子が茶道具を運んで來た。見れば盆の上に水に漬けた梨が載せてある。哲郎は不快そうに顔を顰めた。彼は、自分の妻は氣が利かない……ぼんやり育ちだ……かう思つて彼女の自分に對する注意の足らない多くの點を許してゐるのであつた。さうした彼女が、併も病氣で稍

の上にゐたやうな彼女が、客が來る、直に果物を買ひ調へて、加之、それを水に漬けて勸める……彼女がこんなデリケートな技巧の持主であるといふことは想像することも能きないことであつた。いや女は多くの場合、微細な點に迄注意が届くのだ。別けてもそれが相手が男である場合は……さうだ妻の自分に對する注意の不足は愛の稀薄に原因してゐるのだ、たゞ氣が利かないといつて宥すべきことではない……彼はかう邪推する——哲郎の性質としてかうなると其場の何も彼もに興味を失つて了ふのであつた。松木は梨を喰ひながら元氣よく話す。彼は自ら性の研究者と名乘る男で、

「君、此處の女は早熟ですよ、第一あの乳をごらんなさい、十五六でも隨分大きいですな」

「成程、松木君の觀方は性の研究者らしい」水野といふ青年がまぜ返した。

「だから君の身許を警察で訊きに來たりするんだ、」青年畫家が口を挾んだ。

「淺香さん達は硬派で、僕は軟派だ……」松木は愉快さうに笑つた。哲郎はひどく神經質になつた。絶へず妻の視線を追つた。妻は珍らしく快活になつてゐた。

「先刻、電氣を消して海の方を見てゐたんですの、漁火がそりや綺麗ですわ、もう一度消して見ませうか」かう言つて彼女は立つて電燈を消さうとした。

「お止し……馬鹿ッ」哲郎は噛みつくやうに叫んだ。妻は元の坐に返つた。哲郎は露骨に妻を睨んだ。皆は沈默に陷ちた。

暫時して青年達は歸りかけた。

「これから何方へお出ですか……」其時哲郎は水野といふ青年に訊ねたのであつた。

「もう人間の住み家を訪ねることは倦きました。今度は鬼の住み家でも訪ねませう」かう言つて青年は苦笑した。哲郎

は此時、折角自分を訪ねて來た靑年に對して、自分の偏狹な心からひどく氣不味ひ思ひをさせたことを悔いた。彼は引つ返して讀みかけの諸國物語を取つて來て、

「此の中にトルストイのパーテル・セルギュスといふのがあります、お暇な時お讀みなすつて下さい」彼はかういつてそれを靑年に渡した。

客を送り出した二人は室に引返して、妙に白けた顏を其處で合せた。

「お前は却々氣が利くね……」哲郎は、言ひ出さうか、言ひ出さずに置かうかと少時躊躇つた後、實際かう言つた後に二人が經驗する不快な感情がどんなものかを充分知り切つてゐたのであつたが、とう〳〵彼は皮肉らしく言つた。

妻は答へなかつた。

「梨はあゝして水に漬けて食べる方が美味いね」

哲郎はかうあさ笑ふやうに言つた。

妻は依然として答へなかつた。

「お前には、あゝいふやうに髮を長くした畫家か何かゞ好いんだらう」彼は執拗に彼女の神經に觸れようとした。

「なんですつて、だけどあなたは嫌やな性質ね」妻はムツトした。そして立上つてさつさと獨りで蚊帳を釣つて、褥を敷き初めた。哲郎はそれを手傳はうとはしなかつた。

其夜、夫婦は別々な心を抱いて一つの褥の上に寢た。

海は恐ろしく吼えた。

(三)

次の朝、海は美しく凪いだ。折郎が眼を覺した時、妻は蚊帳を離れて階下で朝飯の用意をしてゐた。折郎は蚊帳を脱けて蚊帳を外した。椽に出て雨戸を繰つた。終日の烈しい暑熱を思はせるやうな陽の光りは海の面に溢れた。魚の腹か何かのやうに無數の波の碎片がピカリ〱と打ち返してゐる。水蒸氣を透してこんもりとした青島がまるで浮島のやうに眺められるのであつた。渚には打ち上げられた流木を拾ふ漁夫の子が散ばつてゐた。夜漁から歸る漁船が入江をさして無數に走つて來る。折郎は幸福さうに朝の空氣を吸つてそれから階下へ下りた。コンロの下を煽いでゐる妻の姿が其處に見出された。彼は齒ブラシを使ひ乍ら表の井戸の前に立つた。入江の岸に漁夫の女將さん達が際限もなく喋り立てゝゐる。向ふの漁市場の邊は半裸體の漁夫や漁商人の群が入り亂れて何となく殺氣立つてゐる。

折郎夫妻が朝飯を喰つてゐる處へ其頃鹿兒島の方へ目的のない旅に出てゐた牧の消息を持つて岡村が上つて來た。

「牧君から昨夜電報が來てな、金を送れつて言つて來た。卅圓も送つて置かうと思ふんだが……君の方に十圓位あるかな」、かう言つて岡村は椽の方へ行つた。

「買物の殘りがその位ありますわ……」千鶴子が答へた。

「昨夜は海が荒れて、どうしたたな」

「波の音が隨分高かつた、それに少し喧嘩してね眠らなかつたもんだから……」かう折郎が笑顔で言つた。

「又淺香君が頭痛を始めたんだらう……」

「ほんとに詰めてばつかり居ますのよ……」千鶴子が訴へるやうに言つた。二人に茶を汲んで、渚へ釣に行くことにし

た。哲郎は階下の主婦から、釣竿と、笊とをかりた。行きがけに園村の家へ寄つた。園村も釣道具を用意した。それから、局へ寄つて牧の許へ電報爲替を組んだ。其處を出て入江に添つた魚市場の横から折れて折生迫ステーションの前に出た。濱へ出る道は、線路に添つて暫らく行くと、左へ畑の間を自から下つて行くやうに導かれてゐる。防波堤は左の方へ長く突出してゐてそこから右の方へ遠く、光澤の好い貝殼の砕片が無數に敷詰めてゐる上を行く、同じい大きなつば廣の經木の帽子を被つた三人の影がくつきりと其處に、印せられた。潮の退いた後で、岩層と岩層の間に溜つた潮水の中にヌラ〳〵と這ふ海草や、岩に吸ひついてゐる宿かりの間をスイ〳〵と泳ぎ廻つてゐる雜魚や、足音に驚いて岩隠に隠れる蟹を山國に生れた千鶴子は珍奇なものでも發見したやうに騒ぎ立てる。そのうちに先きに立つてゐた園村は、向ふの岩の間に蹲つた。近づいて見ると宿かりの殼を石で打ちつぶして中から、三分位の蟲を引き出してそれを針の先につけて水の中に垂れてゐるのだ。餌が雜魚の頭の先きに垂れ下ると、瞬間、つり針は雜魚の口にひつかゝかる。園村は手早く引き上げて、それを笊の中に入れるのだ。千鶴子は手を叩いて喜ぶ。それから、哲郎と千鶴子も離れ〳〵に水溜りに餌を垂れて三人は暫らく、雜魚釣りに時を費ひやした。それから向ふの岩の上に行つて、三人は、又同じように つり針を垂れた。恐ろしく捲返し押しよせて來る波は足許の岩石に打ちつかつて白い無數の飛沫は、岩の上にまで飛散するのだ。

「淳さん……僕にはもう駄目だ……釣れない」から言つて、哲郎は其處に釣竿を投げだして、遙か離れた岩の上で糸を垂れてゐる千鶴子と園村とを顧みた。此時、既に園村は銀さめと云ふ寸餘の魚を五六匹も釣つた後であつた。

「淺香君は下手だな、どんな餌のつけ方をしてゐるか、見せ給へ」から言つて笑ひながら、哲郎に近づいて來た園村は哲郎の投げ出した釣針に目を付けると、とう〳〵笑ひ出して了つた。

「淺香君の感じを出してゐるな、どうして釣れるもんか、君、魚の口より大きた餌をつけてゐるんだもの」かう言はれると、初めて哲郎も氣がついた。彼は先刻釣つた小指大の雜魚を三つほどに引き裂いてそれを釣針の先きにつけて置いたのであつた。

「あなたは下手ね、私でさへもう三つ釣つたのに……」かう云つて千鶴子も其處へ集つて來た。

正午近い頃三人は磯から歸りかけた。停車場の近くへ來ると向ふから岡村の畑のH少年が岡村の下の兒を連れて來るのに出會した。

「今淺香さんの所へ電報が來て、それを届けに來たのだ」と云ふ、哲郎は少年の手からそれを受け取つて直に封を切つた「アスヒルタツ、イヘシラヌ、ムカヒタノム」かうした電文を讀んで彼はそれが仙子と多津子との打電したものであることを知つた。

「何處からなの……」千鶴子はかういつて、哲郎の手から電報用紙を受け取らうとした。

「何處でも可い……」哲郎は突慳貪に言つた。そして彼は次の瞬間に強い悔に囚はれた。彼は岡村に見せようかと思つた。彼は迷つた。見せるならば順序として、昨日の仙子の手紙のことから言はなければならない。今朝から今までに語るべき機會は幾らもあつた。それだのに彼は岡村にそのことに就いて一言も言ひ出さうとはしなかつたのだ……併も今まで何一つ隱し立てをしたことのないやうな岡村に……僅か一つの虚僞が、幾つもの虚僞を生んで行くばかりでなく、二人の友情の破綻をも招くようなことがあつたら……彼はかう思ふと其電報のことに就いて寧ろ岡村の方から自分に質問して與れることをさへ望んだ。が岡村はそのことにまるで氣遣かないかのやうに別なことに話題を持つて行つた。哲郎は遂ひに言出すべき機會を失つた。それで彼は妙にそぐのはない心持になつた。魚市場の前迄來ると、漁

夫の細君や、娘や、子供や、若者やが其處に、一杯に入り亂れてゐた。船卸しだ。潮の退いた入江の中に萬艦飾を施した一艘の貨物船が全船體を現してゐる。船の上には禮服を着けた紳士が赤い顔をして頻りに何事かの指圖をしてゐる、と半裸體の一人の男が大きな叺の中からマッチ箱大の紅白の餅をつかみ出して岸に群つた群衆を目がけて放げつけるのだつた。と彼等は押し合ひ、へし合ひして拾はうとする。子供は泣き喚く、怒る、蹴る、忽ち修羅場を演出する。そして最後には紙に包んだ通貨を水中に投げ込むだ。と漁夫の子供達は巧妙に水中を潜つてそれを拾ひ上げる。船の上では潮水を吸み上げては、相手に打ちまけるのだ。中には相手を着物のまゝ入江の中へ投げ込まうとするやうな亂暴な手合もある。三人は此の珍らしい光景を暫時眺めてゐた。子供のやうに喜んでゐる岡村と千鶴子との愉快さうな顔を見てゐると、かうしたことに餘り興味を引かれない性質の折郎の心も自然と綻びた。折郎夫妻は角の床屋の前で岡村に別れた。

「電報は仙子さんからでしよ」二人になると妻は折郎に聞いた。

「さうだ……」彼は素氣なく答へて先刻の電報を妻に渡した。

翌日の夕方折郎は一人で青島のステーションに出かけた。妻は氣が進まないと言つて家に殘つた。折郎の住居に青島ステーションよりは折生迫の驛の方が遙かに近いのであつたが青島ステーションの方が大きくもあり、それに濱づたひに行ける途中の風光が、非常に優れてゐるので岡村も折郎も大概は此驛から汽車の便を取ることにしてゐた。外から訪れる人も遊覽地である有名な青島驛に下車する人が多かつた。濱傳ひに砂を踏んで行くと、足下を洗つては去る波の眞に貝殻や、藻草や、小蟲やが無數に線を描いて殘されて行く。折郎は濱から松並木へ抜けて、其處からステーションの前

に出た。名物の餅を賣る家が、二三軒、軒を並べてゐる。彼は着車時間に間があつたので暫らく驛庭の猿を入れて置く金網の前に立つてゐた。其處には五六匹の猿が枝から、枝へ飛び移つてゐる。網の外から食ひものを投げ込んでやると猿は巧に兩手でそれを口に持つて行く。彼は自分がまだ村にゐる頃、隣村から習つたはやり歌の中に、「Hステーションで猿を見てゐると、其處へM市から自動車が來て、白首が三つと、一人の男が中から出て來た。そしてH旅館に入つた。猿の顏より餘程下等な顏をしてゐると思つた。こんな事が書かれてあつたのを思ひ出して擽つたい氣持になつた。

汽車が來た。つば廣を被つた仙子が車窓から覗いてゐた。背の低い多津　が其後からハンカチを振つた。大きな包を抱いた女達は疲れたやうな顏をして集札口へ現はれた。

チツキに出したものはそのまゝ驛に預けて二人の抱いて來た大概の荷物は哲郎が背負つてやつた。それから彼は濱へ出て、砂の上を踏んで二人を自分の假住居の方へ導いた。二人の穿いてゐる紅のさめた緒のすがつた杉の下駄と、はでな浴衣の不調和な格好が途中の人の瞳をみはらせた。千鶴子は階下で夕餉の仕度をしてゐた。

「東京のお客さんだ……」階下の主婦はかう言つて、二人の女客に對して言葉使ひまで改めた。井戸で砂の付いた足を洗つて、女達は二階へ上つて來た。

「好い二階ね」多津子はかう言つて欄へ出た。

「素敵じやないの」仙子もそれに應じた。其處へ千鶴子が上つて來た。

「どうして、仙子さん……城へ行つてみたの」千鶴子が聞いた。

「城で一晩泊つて荷物をすつかり纒めて來たわ、私が村にゐると、若い青年を毒するんだつて……それが私を追ん出

す理由だつて言ふのよ、多津子さんと二人で笑ひ出しちやつたわ……」

「村には皆仙子さんに毒されるやうな、腰抜けだけが殘つてゐるんだらう……」折郎が云つた。

「よく解つてゐるわ、先生が狡猾いのよ。先の事件は、河野さんに全部塗りつけて、今度の事は田島さんにやらせてゐるのよ」多津子が言つた。

「田島か、あいつまだ村に居るの？馬鹿な奴だ」折郎は村から十二三里離れた小學校に籍をおいて、いつも休暇の間は村へ來て遊んでゐる敎員臭ひ田島の姿を思ひ浮べた。

「今度は田島さんが大得意でせうよ、何にしろ私たち二人を追ん出す役を勤めたんだから……」仙子が口を狹んだ。

「飛田さんが言つてたわ、仙子さんが城を立つた後で、貞子さんが鹽を撒けつて言つてたんだつて……」多津子が言つた。

「其時先生は如何してゐたつて？……」折郎は憤然とした。

「默つて笑つてゐらつしつたんだつて隨分だわね」多津子が答へた。

「仙子さんは矢張り支那へ行く氣、宮津君から返事が來た？……」折郎が訊いた。

「まだ來ないわ……でも大丈夫よ……宮津は待つててよ……」仙子は強い確信をもつて言つた。

「どうかな……宮津君自身がまだ友人の家に食客をしてゐるらしいが……」

「仙子さん」折郎は一寸言葉を切つて、

「一度國へ歸る事にしたら…… 其方が僕は可いと思ふな……」かう云ふ事が東北の方の郷里に自分を愛し切つてゐる良人と、五つになる男の子とを殘して、村へ移つて來た仙子に取つてどんなに耐へ難い苦痛であるか彼はそれを知らないではない。併し少數の婦人より持たない村の住民の間に[illegible]る無節操なラブの極めて危險の伴ふものであり、そして

又、宮津と仙子との性格は相容れない兩極端の對照を、なしてゐることを知つてゐる。彼はかう續けないわけには行かなかつた。

「淺香さんはそんなことが私に出來ると思つて、やつぱりあんたにも私の氣持が解つてゐないんだわ………」仙子はかう言つて、哲郎を輕侮するやうな目をした。

「そりや、仙子さんが宮津の人格に絕對の信賴を持つことが能きれば……僕は何も言ふことはない。然し」彼は後をつゞけやうとしたが急に口を噤ぐんだ。宮津が支那へ立つ時、高城から妻驛への馬車の中で「まだ僕だつて若いんだもの、二度や、三度は新しい戀もして見たいじやないか」かう言つた言葉を思ひ出して、さうした宮津をまるで清敎徒のやうに理想化して見てゐる仙子の幻影を搔き破ることは哲郎は餘りに傷しいことだと思つた。

其晩哲郎夫妻は女達に留守を賴んで、岡村の家に行つた。そして彼が夕方二人の女客の來た事を幾度かためらつた後ち言ひ憎さうに言ひ出した時、岡村はもうとつくに其ことを知つてゐた。

「昨日Mさんから手紙が來た。近いうちに此方へ來たいなんて言つて來たつけ」いつになく岡村はひどく不機嫌な顏付をしてゐた。哲郎は默つてゐた。

「淺香さんもお一人の時と違つてそう仙子さんを見て上げるわけにも行かないし………本當に大變ですわね……」かう言つて岡村の細君はヂロリと哲郎から千鶴子へ視線を放げた。長い間敎員生活をしてゐた此人の言葉には時折り冷めたくピリツと來るものがあつた。

「支那へ行くつて言つてゐますが、何にしろ旅費が來ないもんですからね」哲郎は漸う是だけ言つた。

「實は淺香君に早くから言はうと思つてゐたんだが……僕は君に山氣のあるのは不快だな………」關村はかう言つて、眞面目に哲郎を見詰めた。彼の目は、大きくぎろりと光つた。哲郎は尚默つてゐた。

「それでわからなければ、君が僕を動かして、つまりだしに使つて何かしやうと言ふやうな………」此言葉は可成哲郎の神經に觸れた。併し彼は只言葉だけが神經に觸れたのみで關村が言はうとする言葉の意味が分明りと吞み込めなかつた。……で彼は關村の次の言葉を待つた。千鶴子は彼の傍に小さく蹲つた。

「僕は體の具合で、それもMさんが來て話した上でだが、村へ歸らうと思ふのだ。此間、君達が來た時、餘り村の事に就いていろんなことを聞いたりしたんで、少し決心が鈍つたが、又決心をしなほした。今日時子にも決心させた。君も之れ以上僕の存在に依つて、動くといふやうなことをしないで吳れ給へ」、關村は昂奮した時の彼の癖である唇をピク〳〵させて言つた。

「人と人との交渉は大概の場合相對的のものだ、併も二人の友人が同じやうな境遇に置かれた場合、相手の存在に依つて動くことがそう不自然なことであらうか。僕が村のことに就いて、いろんな事を言つた。それが自分の爲めに君を動かさうとしたのだと言ふのか、馬鹿な、僕は少くなくとも、パンの爲めに村に止まつてゐるやうな人間ではない。僕は藝術家だ、君を動かして自分の生活の安定を得ようとするやうな仕事師ではない、君が、別けても君の細君が、貞子夫人と同棲することに微塵ほどの可能を僕は認めることは出來ないのだ……人を信じ易い君の性質としては、あの吉井の手紙の上丈けの甘言に釣られて、急に村に歸へる氣になつてゐるのを僕は責めやうとは思はない…… がたとへ村へ歸つた所で君は再び曾つて經驗したと同樣な、もしくは、それ以上の傷ましい經驗を甞めなくてはならないのだ…… 僕にはそれが、判り過ぎるほど判つてゐるのだ。君はもう一度歸つて僕の言葉の本當さを知るが可い……」哲郎は其時から言つ

て岡村の前で唾吐きたい衝動に驅られたが、郷里時代の岡村を知つてゐる彼は、岡村のかうした偏狹やひがみはつまりは村の空氣と、病氣とが禍ひしたのだ……次の瞬間から思ふと彼は此病友がひどく憐れなものに見えた。

「時子さんが村に止まる決心さへ能きたら僕は何も言ふことはない」折郎は言つた。

「それに千鶴さんが來た時だつて、もう一晩位僕の處で遊んで、皆で紀念の寫眞でも撮つて、村へ行つたらと思つてゐたのに、君は翌日ぐんぐん引張つて行つて了ふのだもの」かう言ふ岡村の言葉を細君が引取つて、

「ほんとうにあの時は、岡村は淋しがつてゐましたわ、何んだか、かう暴風の後のやうな氣がするなんて」

折郎は自分が村の住民に對して、自分の愛する者と、幾日も岡村の家で無爲な日を送ることが濟まないことに思はれたので僅か一泊して村へ歸つて行つたことが、それほど迄に岡村を淋しくさせたのかと思ふと、彼は無意識の裡に他人に働き掛ける力の恐しさを今更のやうに感じた。

「岡村は矢張り僕を愛してゐるのだ。そして僕達が一緒になる日を、まるで自分の子供の結婚を眺める母親のやうな濁らない氣持で待ち樂しんでゐたのだ」折郎はかう思ふと矢張り他の友人に感じられない厚い友情を岡村に感じた。

「淳さん、とにかく僕はいろんな意味で欠點の多い人間だ、他人から指摘されると、どんな醜い分子でも自分の裡にあるのに驚く、併し共　點は淳さんとの友情に馴れて、鬪々しくなつたとか、今迄猫を被つてゐたとかいふやうに取らないで下さい。缺點は初めから持つてゐたんです。淳さんが今迄それを氣付かずにゐたんです」

「いや君が鬪々しいなんて、そんなことを僕は思つてはしない。たゞ僕の性質として、親しくなれば、なるほど相手の缺點を矯めたくなる」かう言つた岡村はもう毎ものやうに打ち解けた態度に返つてゐた。それから仙子の事に就いては岡村からも宮津の許へ至急手紙を遣る事にして、返事の來る迄とにかく折郎の家に置くと云ふことに定めて折郎夫妻は

園村の家を辭した。入江に添つた通りに出ると千鶴子は哲郎にピツタリと倚り添つた。

「私なんだか寂しくなつてよ……」かう言つて千鶴子は相手の顔を見上げた。

「何うして？　淳さんが僕を苛めたからかい」哲郎は笑ひながら言つた。

「私、今夜はほんとうに二人ぎりだつて氣がしたのよ」千鶴子はかう言つて、良人の手を強く握つた。

「恐ろしくセンチメンタルになつたね……」かう言つた哲郎も妻の手を解かうとはしなかつた。

家の表に來ると階下で涼んでゐた主婦がお客さんは海へ行きなはつた……と告げた。二人は其まゝ、渚へ出た。月の無い晩であつた。闇の中に波は靜かだつた。渚に近づくと暗い波の中から女達の囁きが聞えた。

「千鶴子さん……」多津子の聲である。

「えゝ」千鶴子が答へた。油のやうにとろりとした低い波の中に戲れるやうに白い脛を放げ出してゐる二人の女の柔かさうな肉體が闇の中に朧ろな輪郭を描いて影繪のやうに認められた。

「千鶴子さんもお入んなさいな……そりや好い氣持よ！」

其時波打際に突立つてゐた千鶴子は、手を押して今さして來た波の上を、じやれるやうに二三度叩いてゐたがそのまゝ入らうとはしなかつた。

暫らくして女達は上つて來て、砂の上に脱ぎ捨てゝあつた浴衣を着た。四人は家の方へ引返した。

(四)

半病人のやうに憔悴した牧が鹿兒島の方の旅から歸つて來たのは女達の來た翌日の夕方であつた。永く世話になつて

ゐることを喜ばない哲郎の許にゐて、宮津から金の出來る迄內地で待つてゐて慾しいといふ電報を受け取つて困じ果てゝゐた仙子は、牧の來訪を唯一の救ひの手の如くに喜んだ。此晩は妙に蒸暑かつたので、椽の雨戶を全部開け放して、海から來る風に肌をなぶらせながら遲くまで語つた。牧の泊つた溫泉宿では、金が無くなつてから二日ばかは朝一度きりより飯を運んで來なかつたと云ふことや、關村の許から金の屆いた時は袂の中に七錢殘つてゐた金で判木を買つて、海岸の砂の上に寢轉んで、姓を刻んで漸う爲替を受け取つたといふやうな、短い旅で得た種々な經驗も牧が語つたりした。

話題は最後に仙子の上に移つて行つた。とにかくどれほど耐へ難い忍從であつても、鄉里の親の許へ歸るのが仙子に取つて最も安全な道ではあるまいか……と言ふ考へは哲郎も牧も一致してゐた。が此事を皆で勸めた時はとう／＼仙子は泣き出して了つた。

「あゝ日向灘へでも飛び込むより外に道がないわ！」仙子はヒステリックな調子でこんなことを言つた。

其夜五人は狹い蚊帳の中で簡單な雜魚寢をした。仙子の歔欷の聲が夜の更くるまで聞えた。翌朝牧は床を離れると出かけて行つた。千鶴子と多津子は階下へ下りて朝飯の仕度に掛つた。仙子は宮津へ宛てた手紙を書く爲めに椽の近くへ行つて紙を展げた。哲郎は魚市場の方を歩いて、鰺を二つほど提げて歸つて來た。皆が朝飯の箸を取らうとする處へ牧も歸つて來た。

「仙子さんは支那へ發つさ……今朝淳さんの處へ行つて十圓貰つて來た。それに僕の旅費の餘りが十圓あるから是れで靑島まで儉約したら大丈夫行ける――」かう言つて牧は手摑みにしてゐた紙幣を仙子の前に置いた。かうなると、流がに仙子も、皆と別れて獨り異鄉の旅へ上ることに妙に淋しい賴りないやうな思ひがするのであつた。

「さゝ船の便はどうかしら……」氣遣はしさうに仙子が言つた。

「大丈夫だ、門司を發つ××丸つて言ふのが明日の午後一時だから今日二番で立てば間にあふ。淳さんとこの新聞を見て來た。」牧は仙子を急き立てるやうな調子で言つた。どうせ支那へ行く決心なら一日も早い方が可い、かういつて折郎や多津子も牧の言葉に贊成した。朝食を濟ますと仙子も取り散らした荷物を纏め始めた。成可く荷を少なくすると言ふ目的のために、冬の着物は大方折郎の許に預けた。それから折郎の爲めに二三冊の愛讀の書と、彼女が郷里の方の書齋にかけておいたポーランドの婦人畫家の自畫像とを記念に殘した。多津子は友のために、梅干しをあんにした握飯を作つた。千鶴子は買物の殘りの二圓足らずの端錢をも仙子の旅費のうちに加へた。彼女の旅はそれほど貧しい旅であつた。仙子は北朝の九時幾分の汽車で青島驛から遠い異國の旅へ上つた。折郎は牧や女達と共に濱傳ひにステーションへ送つて行つた。何か危險なものに近よつて行かうとする友の運命に強ゐて目をつぶらうとする自分の性情に對して深い責めを覺えながら……。

N市に在る姉の許へ多津子が旅立つたのはそれから二日の後であつた。女達を送り出した後の折郎の住居はまた以前の靜かな動搖のない生活に歸つた。とは言へ女客の爲めに紛らはされてゐたやうな千鶴子の寂寥も再び以前の狀態に返つた。一先づ、園村の家に落着くことに成つた牧は折郎の家をも毎日のやうに訪れた。

或晩、牧と折郎夫妻は濱傳へに海水浴場の方へ歩いて行つた。或砂山の上に來た時、三人は砂の上に同じやうに足を投げ出した。五日位の月が松の梢にあつた。牧と千鶴子は讃美歌二百十六番を唄ひ初めた。折郎は其晩妙に沈んでゐた。少時して

「Mさんが今度の休みに來るさうだ！」牧が言つた。

「貞子さんも一諸だらう……逢ひたくないな」と折郎が言つた。

「あゝ無論さうだらう」牧が答へた。

「関村さんはMさんに相談した結果で村へ歸るんでせう。牧さんはどうなさるの」千鶴子が訊いた。

「村へも歸りたくないが、然し「シャバ」(村以外の場所)に住むのは今度の旅で懲り〳〵した……」牧は投げ出すように言つた。三人はまた歩き出した。哲郎は此時浴衣の袂に手を突つこんだ……彼は自分の指が一つのものに觸れたことを感じた。彼は態と渚の近くを歩いて行つた。そして其一つのものを……一通の手紙を……袂から取り出して妻の目に觸れないように、細く引き千切つて悉く海の中に投げ捨てた。牧は濱から其まゝ関村の家へ歸つて行つた。哲郎夫婦は二階へ上つた。

「あなたさつき海の中へ何を捨てゝ…」坐に就いた時千鶴子が笑ひながら言つた。

「捨てたつて……知らない……」哲郎が答へた。

「駄目よ。……高村さんとか言ふお友達のお手紙でしよ……あの中に何が書いてあつたか、私ちやんと知つてゝよ…」

「……」

「寂しいでせう……S子さんが結婚なすつて」

「お前は手紙を見たね」哲郎は嶮しい目を妻に放げた。「しかし僕は寂しくもなんでもない……そしてあの手紙を海へ捨てたのは、お前に隠すためでもない。たゞS子がデブ〳〵太つた商人の妻になつた……と言ふことが不愉快だつた。あの手紙は僕自身見たくなかつたのだ……」實際彼は三年ほど前に自分の旅へ上ることの動因をなしたようなS子の幻影を掻き破られたやうな不快を其手紙から受けたのであつた。

「止してくれ……下らない……」から、何か其後を續けようとした妻の言葉を遮ぎつた。然し妻は執拗に哲郎を責めた。

「村でもあなたは仙子さんと大分評判になつたでしよ……」千鶴子がかう言つた時、とう〳〵折郎の感情は爆發した。

「他人の噂の方がお前には僕の人格より信じられると言ふのだね、そんな信仰の薄いやつは僕から去つてくれ……第一お前は僕の過去を責むる資格があると言ふのか……」妻は默つてゐた。

「三月上京した時お前は、僕にY子さんと結婚してくれ……自分は苦しくとも哀れな友のために犧牲になる……といつたのを憶へてゐるでせう……それがお前が僕を去るための方便だと云ふことを知らない僕だと思つてゐるのか……」折郎は其當時に經驗したやうな不快が新しく湧き上つて來たのを感じた。

「でもあの時は稲井の從兄さんが船から歸つて……」折郎は妻の言葉の終らないうちに

「それがどうしたんだ……其男と結婚するつもりだつたと言ふのか……それで賣れ殘つて僕の處へ來たといふのか、汚たない……娼婦や藝者でも、もつと良心がある」折郎は病的な怒りに驅られて、毒々しく罵つた。

「じや、私どうすれば可いの、私のやうな罪の深かい人間はあなたにかうして一生苦められなくてはならないの、きつと貴方は私を苦しめることに快感を感じてゐらつしやるのよ……そんなに苦しめて苦しめぬくより一層一思ひに殺して下さい……ね、きつと私が此世から消へて了ふことを望んでゐらつしやるんでせう……」千鶴子は意地惡く拗ねた。

「又始まつた……お前は謝罪つたらどうだ……」かうした場合自分の言葉だけを楯にとつて、執拗に反抗して來る妻の偏狹な性質に懲りてゐる折郎は稍言葉を柔げた。

「あなたは、私が娼婦だつて仰言つたのね……お覺へてゐらつしやい……」妻はこう言つて憎々しく折郎を睨んで立ち上つた。折郎は其時妻が海の方に視線を投げたのを見た。彼は、海へ行くなと思つた。

「何處へ行くんだ」と彼は訊いた。

「私自分で自分の罪を捨てゝ來るのよ……」―妻は冷やかに答へた。哲郎は強いて平靜を裝つて、妻の階下へ下りて行くのを見送つた。彼は耳を欹てた。下駄を穿く音と裏口の戸障子を開ける音とをはつきりと聞いた。妻は外へ出て行つた。併し濱へ出る小路は、彼女の姿を二階から認め得るほど明るくはなかつた。哲郎はひどく氣になつて來た。如何することも出來ない妻の過去を責めたことを限りなく淺ましいことに思つた。それと同時に妻は、死にはしないだらうかと云ふ不安が殆ど病的に募つて來た。彼は眠つとしてゐられなかつた。階下へ降りて、暗い小路を海へ拔けた。妻はきつと濱水浴場の方へ行つたのだと思つた。彼は渚に添つて歩いた。其うちに恐しく不安になつた。追ひ詰めなくては、危險だと思つた。彼は裾を捲つて下駄を脱いだ。そして砂の上を駈け始めた。波は心地よく彼の足を めた。濱には芥を燒く火が赤く燃え上つてゐた。海水浴客の泊つてゐる旅館の二階には人の涼んでゐる影が見えた。渚に蹲つてゐる白い影を見出す毎に彼は胸を躍らせて近づいて見た。浴衣姿の若い男女が涼んでゐたりした。彼はとうとう海水浴場の前まで來た。妻は見えなかつた。潮の加減で意外な處に岩が突き出てゐた。彼は、二度ばかり躓き倒れた。時間から見て妻は是より先きに行つたとは考へられなかつた。潮はぐつと退いてゐた。廢船や流木の影をも仔細に近づいて見た。彼は疲れた。丁度さつき牧と三人で休んだ砂山の上に來た。彼は突きのめされたやうに體を放げ出した。彼は今日まで自分の結婚生活を脅やかしてゐたS子が、初戀の幻影が今は完全に消えて行つたことを思つた。そしてそれは自分と千鶴子との同棲生活をいよいよ動じ難いものとする爲に運命が放げ與へた此上もなき吉兆ではないか。それだのに自分の不徹底から其一つの事實を被ひ、隱さうとした爲に……二人のいさかひの原因を作つたことを思つた……だがそれだけであつたら……續いて彼は、自分の多くの感情の裡で嫉妬ほど醜く又救はれ難いものはないと思つた。お互に愛しきり、信じきつてゐるものが一緒に生活してゐる……それだのに自分の病的な嫉妬は彼女ばかりではない、自分自身をさへ苦しめ

苛んでゐる。哲郎は自分が此數ケ月間、何もかもに失望し、妙に懷疑的な傾向を帶びてゐたことを思出ひした。彼は唯一の希望を結婚と、言ふ未知の世界に置いた……そして其希望が今は完全に裏切られたことに思ひ到つた。哲郎は立ち上つた。松の枝葉の上に掛つた月光を浴びて、あたりの風物は、恐しい影を砂の上に落した。彼はもう一度防波堤の方へ引返してみようと思つて歩き出した。此時神經にも近い彼の頭を千鶴子は海へ飲つて死んだといふ豫感が殆ど一定の事實でもあるかの如く掠めた。彼は、このまゝ何處か誰も知つた人のない島國へでも姿を隱さうかと思つた。家の裏まで來た時、彼は自分の二階を見上げた。電燈が灯つてゐるぎりで人影は見えなかつた。彼は防波堤の上に這ひ上つた。彼は其尖端まで行つた。物凄く捲き返してゐる波が足下の石垣に碎けた。彼は寂寥のどん底につき落された。彼は力なく海の方に向つて

「おうい……」と三度ほど呼んだ。……對岸の折生迫ステーションの近くに灯つてゐるシグナルの赤いたゞれたやうな灯が物寂しく防波堤の上を照らした。哲郎が家の裏迄引き返して來た時、溜へ出る小路の流木の傍に二人の白い影の佇んでゐるのを發見した。それと同時に……あなたと言ふ聲と、先生と言ふ聲とを聞いた。

「何處へ行つて來たの、心配してさつきから探してゐるのよ……」千鶴子はかういつて蒼白い良人の顏を覗くやうにして手を取つた。

「奥さんがいらう心配しなさつて……」背後に立つてゐた階下の主婦が言つた。哲郎は妙に力が拔けた。

「一寸散歩して來た。」彼は二人のいさかいを他人に知られたことに不快を覺えて、素氣なく言つた。

「此處の波際に踞んでゐたのよ、分らなくつて？」妻は濟まないと言ふ表情をした。

「知らない」哲郎は答へて、先きに立つて家へ引き返した。表の井戸で足を洗つて二階に上つた。妻も背後から上つて

來た。二人は坐についてもだまりあつてゐた。妻は泣き出さうな眼を膝の上に落した。

「僕がどんな心持で海岸を歩いてゐたか恐らくお前には想像も出來ないだらう。僕は海水浴場の邊まで狂人のやうになつてお前を探して來たのだよ……」折郎は不機嫌を露骨に表して是だけ言つた。妻は默つて俯いてゐた。暫らくして妻は

「ごめんなさい」と言つて泣き出した。

「千鶴子……僕はお前を愛してゐるのだ……信じてくれ……ね、もう是れ以上苦しめないでくれ……」折郎は脆弱な妻を抱きかゝへるやうにして言つた。

次の瞬間に、折郎の唇は妻の唇の上にあつた。

（三）

M氏の來た日は今年になつて始めてと思はれるほど烈しい暑さの日であつた。さま〴〵た動揺の中を經て來た人であるにも拘らずM氏は常のやうに緊張した表情をしてゐた。折郎は此人の前に立つ時、何時もから非常に懐しい光のやうなものが、その體から流れでて自然と其温い光りに包まれて了ふといつたやうな感じを受けるのは、彼がM氏の東京の麹町に在る書齋で初めて會見した時と今も少しも變らなかつた。M氏は、貞子夫人と、田島とを伴れてゐた。園村の家を訪ねて歸りに折郎の假住居の様を見て、濱傳へに青島を廻つて午後ステーション近くのH旅館で休んだ……。其頃めき〳〵健康を取返して來た園村も、牧と共に此旅館の海に面し座敷に集つて來た。女中が果物や、菓子を運んで來た。此日は誰れも彼れもが打ちとけて、心持の好ゝ集りであつた。村の連中へ記念の寄せ書きをしたりした。奇異に村の動

婚の事に就いては一言も話題に上らなかつた。併し哲郎は別れる時Ｍ氏にこんなことを言つた。

「僕は正しいもの〻味方でありたいと何時も思つてゐます。然し大概の爭ひの場合、何方が正しいか不正か、判らないことが多いので困ります。それにどんな爭ひでも一方のみが絕對的に正義でありうることがあるでせうか。……僕はかうした場合何うしても弱者の味方でありたいと思つてゐます。それに之れは僕の性格からでせうが、たとへば惡い人だと思つてゐても、其人が敗者の位置にゐると其人に味方をしたくなります」哲郎はそれとなく此間の女達のことを仄めかしたのであつた。

「僕はそんなことはない。愈々つて場合は非常に強くなれる性質だ。僕のマザーがお前は私が自殺しようとする場合でも止めないで見てゐられる性質だ……なんて毎つも言つてゐた。」Ｍ氏が笑ひ乍ら答へた。

卄月の廿八日が村の祝日で、それ迄に園村と、牧とは此處を引き上げることをＭ氏と約した。

支那へ發つた仙子からは、今は何もかもを宮津に任せきつてゐる。凡ての運命を宮津と共に荷つて生きて行く、村を去つた不幸は却つてより近く神に召される道程だつた……といふやうな手紙がとゞいた。

村の祝日の五日前の廿三日の朝園村の一家と牧とは青島を發つた。

「今は村の過渡期だ……惡魔の試みだ……村を活かす人は馬でなく、牛、利口でなく馬鹿だと思ふな。さうだ僕は村の馬鹿だ」かうした決意を洩らして、引き上げて行く園村の胸を、長い漂泊の旅を了つて故郷へ歸つて行く人のやうな喜びが一杯に充たした。牧は依然として淋しい人であつた。

（六）

哲郎は海岸に妻と共に殘つた。妻の憂欝はともすれば狂的な發作をも伴ふやうになつた。殊に天候の不良な日や哲郎といさかいの後などは、定つて此發作を起すのであつた。そして又妻はひどく臆病になつた。絕へず何ものかに脅やかされてゐるのであつた。凡ての物體が彼女には脅威であるやうに見えた。或夜は裏の山の上に白い雲の湧いてゐるのを見て、恐ろしい大入道が自分を追かけて來るといつて怯へたり、或時は、電燈の光の屆かない室の隅の障子の破れた紙片が夜風に顫へるのを見て、……白い氣味の惡い物體が動いてゐると言つて怯えたりした。かうした錯覺や風の雨戶を搖する音に驚いたり、電燈を慕つて飛んで來る甲蟲や蛾に振るへ上つたりするやうな妻にた哲郎はひどく腹立ちを感ずるのであつた。其夜は月の美しい夜であつた。妻は夕飯後心良い假睡に落ちた。哲郎は障子を開け放つて、椽に出て讀書を始めた。此時彼は、床の隅に卷いてある仙子の置土産の肖像畫を認めた。彼は急いでそれを取り出し、床の壁にピンで止めた。ポーランド伯爵夫人の描いた自畫像だ 仙子は言つた。けれど、其畫像は處女らしい內の美が目づと畫面に現はれてゐるといやふうな輝きを持つてゐた。哲郎は此畫を始めて見た時、初々の女の顏を突嗟の間に連想した。それで彼はS子によく似てゐると其時極めて輕 意味で口走つたのであつた。此時妻はポツカリ睡から醒めた。そして彼女は明らかに此繪を見たのであつた。

「あゝ恐い……」彼女は體の上にかけてゐた毛布に顏を埋めた。

「取つて下さい……ねあなた、誰か睨んでゐるのよう私を……」哲郎は馬鹿らしさ 肚を立てた。

「まるで三か四ツの小供だね……」哲郎は怒鳴つた。併し彼女はしつこくそれを取り外づすことを要求した。

「五月蠅い奴だ……」彼は仕方なしに立つて行つて壁の繪を荒々しく取外した。

濱は今が避暑客の集る一點であつた。時としてかなり外れの方にある哲郎の二階の裏の邊りへも、見馴れない避暑客が三四人づつ連れ立つて來るやうなこともあつた。村へ歸つた岡村からは「非常に落ちついた生活をしてゐる。大木の影……そんな氣がはつきりする」と言ふやうな手紙が屆いた。が哲郎はそれを信じなかつた。哲郎は此頃から未完成のまゝ長い間胸の底に秘て置いたやうな仕事にかゝつた。仕事は彼が千鶴子を知る以前の言はば彼に取つて暗黒時代の記とも云ふ可きものであつた。彼は天氣の好い日には欄近く机——と言つても階下から借りて來た將棋盤——を据ゑ錄て仕事を續けた。直ぐ眼の前に擴つてゐる碧瑠璃色の海から視線をずつと水平線の果てまで移すと、瞳孔に青ガラスを嵌めたやうに全世界が青の一色に彩られる。強い眞夏の陽に反映する漁船の帆が風に飜へる毎に明暗を作りながら沖合に滑べつて行く。碧い寶石を溶かしたやうに澄んだ大空には白い千切雲の亂れ飛ぶのが見える。眼の下の漁家の屋根に無數の蜻蛉が亂れ飛んでゐる。縮緬波の上を三人の漁夫が赤黑く焦げ上つた全身を陽に晒らしながら、同じい姿勢で根氣よく櫓を繰つて入江に近づいて來る。船の滑つた痕に一條の水尾が長く銀蛇のやうに延つてゐる。此光景を眺めてゐた哲郎は自づと晴やかな心持になつて行くのを感じた。

「千鶴子濱へ行かう」彼はその時褥の上に雜誌を讀んでゐる妻を誘つた。妻は珍らしく賛成した。哲郎はペンを投げ出して妻と共に濱に出た。彼は經木の海水帽を眞深に被つた。妻は白い麻張のパラソルに陽を避けた。強烈な太陽の中に白砂や、葭や、濱に刎ね廻てゐる避暑客の白い海水帽や、地上の一切のものは強い光りを放つた。兩脇に浮袋を附けた海水服姿の小女の群は快活に遠淺を泳ぎ廻つてゐる。渚に近づくに從つて高く捲き返して來る浪を飛び越へ、飛び越へしてし

ゐるやうな青年や、砂の上に足を投げ出して餘念もなく海の方を眺め入つてゐる婦人や、凡ては全く地上の生活の苦みから離れて、悠久な大自然の中に溶け入つてゐるもの丶やうに見えた。此光景に接して千鶴子の心も自づと、未來と云ふものを限りなく美しく、幸福なもの丶やうに想像してゐた處女時代のやうな朗かな氣持に返つたのであつた。それで彼女は東京にゐる三人の弟に珍らしい貝殼を拾つて送りたいと云つた。で哲郎は小一時間の裡に妻の爲に二升近くも珍奇な形をした貝殼を拾ひ集めた。それから二人は青島に行つた。此島の樹木は大方常磐木であつた。別けても島全土に發生してゐるビロー樹の密林の中へ分け入ると、陽光は其大型の葉に遮ぎられて殆ど暑熱を忘れらるゝ程であつた。其處を出て二人は東海岸に廻つた。強い風の爲に吹き倒されたまゝになつてゐるビロー樹の幹に腰を卸ろした。其處は海水浴場の邊から、防風林續きに遠くM灣の一角迄水蒸氣を透して眺められるやうな位置にあつた。碧い穩かな波の中に海水浴場の赤い旗が風に飜つて其邊には、赤銅色の裸體姿が入れ亂れてゐた。哲郎は此時、フト故鄕の姉の子供の事を思ひ出した。山國に生れた子供達は此珍らしい贈物をどんなに喜ぶだらうと思つた。で彼は

「千鶴子、僕も此貝を鄕里(くに)の子供に送つてやらうと思ふよ」と妻に向つて言つたのであつた。

「それが好いわ。私が送つて上げても可いでしよ」から言つて妻は未だ逢はない姉の一家を懷しむやうに言つた。

「あゝそうして呉れ、そしてお前は僕の姉さんと仲良しになつて呉れ、あの人は僕を愛して居て呉れた。誰よりも僕を愛してゐて呉れた。それだのに僕はあの人を裏切つたのだ。それは意識的では無かつたにしても、結果から見ると矢張り僕があの人の愛を裏切つたのだ…」知識といふものが僕を禍した。是はお母さんに對する最も大きな不幸の一つだと思ふよ……せめてお前丈けでも慰めて上げて呉れ。」哲郎はから言つて別れた切の手紙を送らないやうな姉の姿を思ひ浮べた

「あなたが村へお發ちになる時、喜んで贊成なすつて？お止めなすつたでせう」妻は訊いた。

「いやあの人は何も言はなかつた。たゞ體の事だけくどく注意した。そして着物や、枕のことまで心配して呉れた、つまり僕のことは止めても無駄だと思つてゐたのだ」

「此日千鶴子は珍らしく善良な良人を其處に見た。そして又彼女自身も從順な妻であつた。

家に歸ると妻は哲郎の姉の子供の爲に行李の中から大形のメリンスの帶を取り出して、小さな袖なしを作り始めた。

哲郎は沁みじみと妻の手許を眺めた。そして自分の妻が村の住民の妻でないことを分明に感じた。

(八)

哲郎夫妻は、別けて千鶴子は近くの漁師の家とも親しくなつた。中には風呂が沸くと眞先に哲郎を呼びに來るやうな老人もあつた。毎朝の食膳に上る生魚も殆ど買ふ必要のないほど、漁夫の細君たちが、爭つて哲郎夫妻の爲に持ち運んだ……。とは言へ彼等の好意には珍奇なものを愛でる一種の群衆心理の現れとも見られるものがあつた。此頃になつて哲郎は殆どひつきりなしに妻の狂的の發作に脅やかされるやうになつた。妻がもし階下にゐて、束の間姿を見せないやうなことがあつたら、彼は足音を忍ばせて段梯子の所まで行つて階下を覗くのであつた。かうした時、妻は階下の主婦や、近所の人達と話込むか、勝手に行つてお炊事の用意をしてゐるのであつたけれど……。かうした場合の彼に取つて海は最も大きな脅威であつた。哲郎は幾度か愛するものの肉體が、奔馬の立て髮のやうに荒狂ふ怒濤に弄ばれてゐる光景を頭の中に描いたのであつた。そして又彼女の病的の發作と言ふのが今迄女性といふものを遠くに置いて眺めて來たやうな哲郎にとつて全く未知の世界であつだ。その眩恐ろしい風雨の雨戸を打つ音をきゝ乍ら夫妻は夕飯を喰つた。そして其後で極めて根柢のないことで口論を始めた。そして此口論は遂に妻の不思議な發作にまで導かれた。「母さま、母

様、私を連れて行つて頂戴。まあ信ちやん（彼女の弟）迎へに來たの、嬉しい本當に嬉しいわ」……彼女は親しいものゝ影像を眼前に見るかの如くかう口走り乍ら哲郎の胸に顔を當てゝ泣くのであつた。そして彼女は全身の力を兩腕に込めて「あなた何處かへ行ちやあいや」など云ひ乍ら哲郎に抱きつくのであつた。彼は殆ど困じ果てゝ彼女の意識を取り戻す爲めに、しつかりと體を抱いて耳近くで彼女の名を呼んだり、手の甲の邊りをつめつたりする……。彼女の顔にはぐつと血が上つて、うすく見開いてゐる目は恐しく充血してゐる。妻は哲郎の顔を眤つと見詰めてゐたが突然「恐わい……」と叫んで彼をつきのけた。そして彼女は階下へかけ下りた。哲郎は呆然とした。後を追はうとする勇氣も失つた。第一階下の主婦に對して度々かうした場面を見られたくないと思つた。彼は落ちつかない心の狀態で彼女を待つた。五分經ち十分經つた。約二十分を經過した。殆ど堪え切れなくつて彼が立ち上らうとした時、彼女はビショ濡れになつて二階に上つて來た。此時彼女は既に平常に復つてゐた。

「お前は何處を歩いて來た。馬鹿だね……」かう言つて哲郎は哀れな妻の爲に新しい着物を取り揃へてやつた。

「さつき此處に恐いものが居てよ……そして呼んでも〳〵あなたがぐん〳〵私を置いて遠くへ行つて了ふんですもの、酷いわ……お母さんが來はしなくつて……可笑しいわね……」と彼女は不審氣に室の中を眺め廻した。

「僕は何處へも行きはしない……お前が一人で階下へ下りて行つたじやあないか……」かう言つて哲郎が如何んなに否定しても彼女の疑惑は容易に解けないのであつた。さうだ妻は、かうした半意識の狀態になつて、幾度其近親の何人かが自分を迎へに來た光景を眼前に描いたことだらう……彼女は如何なる瞬間でも上京して母親の傍に住む事を望んでゐるのだ……哲郎はかう思ふと人類愛を標榜してゐるやうな自分の仕事と、自分の現在してゐることゝの間に大き　矛盾のあるのを感じない譯には行かなかつた。其夜褥に就いた時妻は良人の耳に囁いた。とう〳〵今日も〇〇が無かつたの

よ……と。それは八月の最終の日であつた。

（九）

九月に入ると、港には避暑客の姿もめつきり減つた。青島のビロー樹を描きに來てゐた青年畫家の群も言ひ合せたやうに歸つて行つた。園村や牧が去つた後の哲郎は病む者の枕頭でともすればつき落される寂寥の底から、振ひ立ち振ひ立ちして、澁り勝ちな仕事の筆を續けた。月の初めから雨の日が幾日か續いた。一切の物が腐れ朽ちて行くやうな季節である。海の面は恐ろしく荒れて濁つた怒濤の中に怪獸のやうな巨大な流木の弄ばれる光景の物凄さ、海濱の防波林の凄じい風の唸りをきゝ戸障子を開けて置かれないほどの猛雨が四五日續いたら、漁夫の家の簞笥の中は大方空になり、果ては寢道具までも擔ぎ出さねばならないのだ。宛ら大自然と取組合ひのやうな漁夫の生活ほど眞劍なものがあらうか、そして又彼等のたとへ無意識にもせよ、或ものに對する信頼の根強さ、字義通りの板一枚下は地獄の生活も彼等に取つて些の不安をも伴はないのである。誰れか彼等の恙なき船路を祈る其妻子の木像の前に跪き敬虔なる樣を見て嚴肅な念に打たれないものがあらう。海邊の秋はかうして雨毎に深くなつて行くのである。潮の音が枕に付いて眠れない夜なぞ欄近くの枯れ朽ちた南瓜の蔓の下で鳴く。物悲しい秋虫の鳴音に凝つと耳を傾けてゐる妻は、

「あゝ虫が鳴いてゐる」と思ひ出したように、又樂しい處女時代の追憶に耽けると言ふやうに言ふのであつた。

「淋しいかい」こんな時に哲郎はにつこりと微笑みながら訊く、

「いゝえ、寂しかないわ、寂しいもんですか、一寸東京の家のことを思つたの……」

「さう」哲郎は嘘を言つてゐるな、と思ひ乍ら、

「そんなら可いけれど、然し寂しい方が本當なんだ……人間が生きてゐることはね……尤も其寂しさは對境とか智識とかいふものによつて慰さめられる寂さとは違ふが……千鶴子……僕は寂しいんだ……別けても此頃は無精に寂しいんだ……」折郎が何物に換へても此をいちらしいと思ふのはかうした瞬間である。

「あなたが寂しいなんておつしちやつやあ駄目よ……」

「千鶴子僕の求むる人は強い人でも完全な人でもない、本當の人生の姿の寂しさを知つてゐる人だ……そんな人が村に一人だつてゐるだらうか……」折郎はかういつて深い溜息を吐くのであつた。

此頃になつて千鶴子の姙娠の徴候は、經驗のない折郎の目にもそれ〳〵首肯けるやうになつた。第一彼女は不眠症になり、神經がともすれば異常に昂奮すること。第二食物が全然變つて來たこと、第三、月々見るべきものを見ないこと、そして此妻の容態を最初に疑問を持つたのは階下の主婦であつた。

「先生、お祝ひしなされ、奥さんがお目出度でさ」とか又は

「奥さんがお可愛さうだ、お母さんの處へお返しなされよ」など主婦は折郎を捉へては言ひ〳〵した。

（十）

或日折郎は妻と次のやうな會話を交へた。

男「毎日お前は幸福かい」

女「…………」

男「恐らく幸福ではないだらう……僕も幸福ではない……」

女「…………」

男「何故幸福になれないか、お前は考へたことがあるかい」

女「他人のお金でこんな生活をしてゐるからよ……私きつと、東京へさへ出たら元氣になれてよ、そしたら私以前のやうに學校へでも、會社へでも勤めてよ、あなたのおつしやる通りに散歩にも出てよ……」

男「違ふよ、幸福になれないのは、お前と僕との性質だ……境遇とか、外界の事情とかで人間の幸福は亂されるものではない、第一お前が苦勞性だからさ……。」

女「だけど私如何して此頃こんな氣になつたんでせう……みんなあなたと一緒になつてからよ……」

男「そうだ罪は確かに僕にある、なだらかな道を樂しさうに手をつなぎ合つて行くことがお前の幸福の凡てなんだ……かう言ふことがお前を侮辱することにはならない……暗い恐ろしい深淵のみを探らうとする僕の道づれとしてお前は餘りにもかけ離れてゐる。本當に今日まで僕が手を取つて引いて來た道は何と言ふ危かしい道だつたらう……さあ千鶴子お前は疲かれたらう……僕の胸にお休み……かう言つてかき抱く僕の胸の血は、黑づんだ懷疑に固つてゐるのだ、抱擁の瞬間でもお前か曾つて手を取り合つた戀人との甘い接吻の味を追想してはゐないかしらと、熱愛の反側に燒くやうな嫉妬と、それに伴ふ憎惡とがつきまとつてゐるのだ。あゝそれにしてもお前は何時になつたら明るい花のやうにほゝ笑む日が來るだらう。そして僕の暗い闇を行くやうな心を明るみへ導いて與れる日が……。然し僕はもう倦き〱した。此はち切れるやうなパッションを持つた若い男がお前の枕許で明るい光りも浴びずに每日〱じめ〱した、引き入られるやうな日を送つてゐることは、だからね、此頃恐ろしく捲き返してゐる海など見てゐると樓に恐ろしい誘惑を受けるのだ……千鶴子お前は泣いてゐるね。淋しいの」

女「エヽ淋しいわ、貴方がそんな顔をしてゐらつしやつちや私なほ淋しくなるのよ、ごしようですからそんなお顔をなさらないで下さい。」

男「…………」

女「…………」

男「おゝ風が寒い……障子を閉めてくれ……」

女「海が大變荒て來てよ……」

（十一）

或日の午後哲郎は濱を歩いてゐた。彼は立ち止つては昵と砂の上に眼を落した。潮色の甲を持つた蟹は砂を踏む彼の足音に驚いて深く砂の中に隠れた。さまざまな貝や海藻の類が波のあぶくの消へて行く跡に殘されるのであつた。打ちよせては遠退いて行く潮の跡は鏡面のやうに美しくみがき上げられて、晴れた大空、流れる千切雲の影まで映すのであつた。波に洗はれた岩層には、無數のかきや、名も知らない小貝がしがみついて貝喰つてゐる、そして又大洋の中には無盡藏の生物が棲息してゐることをも思はせられた。海は、何といふ多くの神秘を藏してゐることであらう。この時哲郎は今更らのやうに、驚異の瞳を瞠つたのである。濱は一頃からみると、著しくさびれた。多くの避暑客のために作られたやうな旅館の裏の涼み床も今は忘れられたやうに捨てられてゐた。何處の二階を見ても華奢な都會らしい服裝をした婦人の姿などは一つも見出せなかつた。華やかな短い武將の生涯のやうな避暑地の光景は、哲郎の心をいたくいたましめたのであつた。彼は初めて此海岸に千鶴子を迎へに來た時の希望にもえてゐた自分と、自分のこめた新しい

生活をも打壊さうと考へてゐるやうな現在の自分との心の變化を振返つて見て慄然として顫へ戰かずにはゐられなかつた。かつては唯一の心の宮として辿りつかうとしたやうな彼女ではなかつた。自分は既に愛すると言へ、妻といふ名の許に、幾度か、脾弱な妻に暴力をも加へたではないか……。然も習慣といふものは何と云ふ恐ろしいものであらう。自分は結婚する前に想像するとすら不可能だつた愛するものに對する暴力が、かう迄で容易に行はれ得るとは……最初……哲郎は一寸思ひ出すやうな表情をした。恰度其時彼は何時かの夜牧と千鶴子と三人で腰を下ろした沙山の上に來た。彼は沙の上に倒れるやうに、足を投げ出した。さうだ……最初……あの青年畫家の歸つた日……唯だ僅かに買物に出た彼女が少し用足しが手間取れて途中で偶然に此處を引き上げやうとするあの男に逢つた、に過ぎないのかも知れないのだ……それをあゝ自分は何といふ嫉妬深い人間だらう、とう〳〵自分は彼女を打つた。まるで彼女があの青年畫家と示し合せて外出したかの如く邪推して、併も其時に、自分はそれから來る自責と、彼女に對する憐憫の情が一杯に胸の裡に溢れて來るのを覺えたものだ……それだのに此頃の自分は……暴力に或種の快感の伴ふのを否定することは出來ない。併も自分が彼女に加へる暴力は何と言ふ根柢の薄弱なことだらう……二度目に……さうだ僕が彼女を打つたのは……實に自分の氣紛れから……もし僕がひよつと死ぬやうなこと あつたら……お前は如何する……此んな質問を持ち出したことに原因してゐるのだ……彼女は言下に私だつて死にますわ……と答へたのだ……彼女は果して自分の後を追ふことが可能だらうか……成るほどたゞ一つの場合だけはその可能を認めることが能きる……自分の死から受けた急激な打撃によつて彼女が殆んど沒理性の感情の頂點にある場合、彼女がもし自殺を決行したとしたら……だがしかし、自分の死床に多くの人が集つて來る、皆は彼女に氣を落させまいとする……彼女は緊張した狀態にあつて數日間を過ごす。斯うして時の流れが自分に對する愛着と記憶とを薄いものとする。一年經ち、二年經ち、そして其間に多くの異性に接す

る、周圍の人も彼女に再婚を勸める……そして又彼女の性的な惱みは……さうだ自分はある時から思つたのだ。それで「いや信じられない」と言つたのであつた。と彼女は「え、子供が生れたら私一緒に死ねないわ、でも小供が可愛想なんですもの……」彼女はかう答へたのであつた。それで自分は「ではお前は子供に對する愛着が僕より深いといふのだね」と詰るやうにいつたのであつた。「がまあそれは可い！ 只一ツ僕とお前との創造である第二の生命を誰れに犯させることができよう……だから此小さい生命の爲にお前が生きながらへようといふことは僕も肯定する。だが千鶴子考へてごらん。若い女性が自分及び自分の愛する者との少くとも人、二人の肉體の糧を得て生きるといふことが、そんなに容易なことだらうか、なる程僕はお前の言ふやうにお前の禁慾生活の可能を認めるとしても、此一つの事實だけは肯定する譯には行かない。」自分の言ひ終るか、終らないかの裡に、「あなたは私を侮辱してゐるわ」彼女はかう言つて立ち上つたのであつた。此頃、絶へず彼女に脅やかされてゐる自分は、彼女は是をきつかけに、自分から去つて東京へ歸るのだ……と思ふと自分の手は自づと彼女の襟に觸れた。「何處へ行くのだ」かう云つて引き戻さうとした時、彼女は、「エ、何處へでも私の勝手です」かう云つて自分の手を振り切らうとしたのだ。自分は矢庭に躍りかゝつて彼女の頬をしたゝか打つたのだつた。それから……哲郎は此處まで思ひ續けて、耐えられないやに頭を押へた。此頃の俺の頭は如何かしてゐるのかも知れない、自分では少しも氣付かずにゐるが、きつと冷靜な第三者の眼から見たら變になつてゐるに違ひない……。それが此頃では如何だ、ある一つのさゝいな事件……さうだ、それは一日の裡に一度位は必らず經驗するのだ……が二人の感情をへんにそぐのはないものにする。そして、さうした小さないきさつの後に自分は彼女を何時も經驗する感情の最高潮に達した瞬間に於て抱擁しないではゐられない……全くそれから享ける快感が今では殆ど自分に取つて、阿片中毒者のそれにも似た病的なものになつてゐるのだ。善良な、そして哀れな妻は自分の嘲罵や憤怒が、かうした享樂

感の伴ふものだとは知らないのだ。そして又自分の怒りや、嘲笑の原因としては餘りに其事件の小さなものであることを知つてゐる妻は、さうした事件を、「僕達はお互に解放されよう」とか「お前は僕から去つて呉れ」とかいふ最後の問題にまで持つて行かうとする自分を、彼女に對する愛の動搖に起因する彼女から離れる爲めの下心ある策略でもあるかの如く邪推するのだ……だが自分はそんなことは顧みようとはしないで、先づ自分の感情を其頂點にまで引き上げることにせき立つ、此んな時、自分は「東京へ歸れ……結婚生活がこんなにまで惱み多いものだとは思はなかつた。」自分は騒々しく罵る、彼女は立ち上つて着物を着換へようとする……とう／＼此處まで來た……もう一歩だ……、自分は自分の心の舌をペロりと出す。だがいよ／＼彼女の體が一歩外へ出ようとする時、自分の體は……其瞬間に衝動的に彼女の傍に近よるのだ……自分の左の手が彼女の襟首に觸れたかと思ふと、次の瞬間に右の袖から鋭い刄ものの上を滑るかのやうな小氣味の可い觸覺が全神經に傳はる……そして次の瞬間には…………

晋郎は立ち上つた。彼は此時ひどく謙讓な心持になつてゐた。妻が傍にゐたら彼女の足許に跪きたい衝動をさへ感じた。自分と彼女とは、此廣大無邊な宇宙の間にあつて併も幾十億の人間の裡から只二人寂しいつきることのない旅路の道伴れとして選ばれたのではないか……たとへ過去の彼女の心象の前に映つては消へて行つた多くの男性の影があつたとしても、今は既に最後のものまでも自分の前に投げ出してゐるやうな彼女の信頼をどうして疑ぐることが出來よう。併も妻の腹には既に自分の第二の生命さへ宿つてゐるのではないか……おゝ哀れな妻、自分の寂しい道づれ……、自分が父となる……彼は此の考へをはつきりと、自分の上に持つて來て考へることは能きなかつたが、漠然と、もし其頭の格好や顏立やが自分に似た嬰兒が妻の手に抱かれてゐるとしたら……かう思ふと、何か奇蹟にでも打ちつかつたやうな心持がするのであつた。彼の足は自然と家の方に向つた。

（十二）

哲郎は或日の日記にこんなことを記した。

俺は果してM氏のやつてゐる此の仕事に全的に傾倒し、最后迄でも村に殘つて苦鬪する勇氣があるだらうか。自分は時折り恁う自分に反省の目を向ける。吾々人類が永遠に平和で、兄弟のやうに相睦み合ふ生活……果してさうした世界の建設を自分は信じてゐるだらうか。殘忍と、奸惡と、呪咀と、猜疑と、暗鬪自分があの村へ移つてから自ら愛の宣傳者と名告る人々の間に於てすら、餘りに多く見せつけられたこの執拗な人間性を如何すれば可いと言ふのだ……、さうだ、第一自分自身のうちにともすればのさばらうとする此の不良な性質を……自分がよく千鶴子から東京に移り住む事をせがまるゝ度に No と云ふ強い否定を與へ得ないのは何故だ……自分は千鶴子の言葉に誘惑を受けないと言い切る事が出來るかどうか……自分は東京の郊外に瀟洒な邸宅を構へて放肆な文人の生活を心に描いては居ないか、自分は村に移つて來る時、果して此の仕事の爲めに全生涯を捧げる決心を持つてゐたかどうか、人類的な此の仕事の事を考へる前に自分は自分の藝術のことを考へてはゐなかつたか、たとへば文壇的な野心といふやうなことを、僞善者よ、お前は愛の村の建設を否定してゐるではないか。それだのに、その主權者にも等しいM氏から愛する者の療養の費用を貰いでは貰はなかつたか、さうだ心の底に東京に移り住む事を望んでゐる。それを自分は何故に決行しないのだ、都會の生活に對する恐怖か、村に對する愛着か……、さうだ自分は其何れをも否定することを止めやう……がさうした外面的の事情よりもつと複雑な、脫れる事の出來ない桎梏が自分の全生涯の自由を拘束し、あの村の土に縛りつけやうとしてゐるではないか、新村に對する斷ち切る事の出來ない情實と、M氏から惠まれた多額の金は既に情實の衣となつて自分の身を幾

頭にも似やうとしてゐるではないか。丁度、自分の目の前に廻轉してゐる蠅取器の蜜についた蠅のやうに、甘い液汁に酔つて、漸う陶酔から醒めた時——身は脱れる事のできない網の中に飛び廻つてゐる事を發見する、藻掻く——足掻く、然し凡ては自分に取つて不可抗力である。

(十三)

哲郎は一頃あれほど乘氣になつてゐた仕事も、此頃では捨てたやうに顧みやうともしなかつた。彼は毎日のやうに考へ込んでゐる人であつた。村へ歸へるか、東京へ出るか……其何づれかを撰ばなければならない。と言つて決して妻が全快したと云ふのではなかつた。彼はもう一日でも、此恐ろしい發作のある妻と二人切りで此海岸に生活することは彼の弱い性格としては、耐えがたいことであつた。それほど哲郎に取つて、此海岸の生活は悲惨な心の記錄であつた。其結果として、哲郎は此月の十五日の村の休日までに片付くやうに此處を引き拂ひたいと國村の許まで書き送つた。突然歸つて家がないやうな場合は自分は城に住み、妻は國村の家に暫く置いて貰ひたいと言ふことをも附け足した。二月近く親しんだ此土地の人とも別れるのだ……と思ふと、哲郎夫妻は妙に愛着を覺えるのであつた。別けても近所の特別な厚意を示して呉れたやうな漁夫の細君達には強く別離が惜まれたのであつた。階下の家にはいろ〳〵な小道具を、隣家にはコンロのやうなものを殘して行くことにした。立つ日は朝早く起きてお詩司を作つて近所に配つて行くのだといつて妻も俄に元氣を取り戻した。近所の漁夫たちもひどく別れを惜んだ。

「先生何時でも來されよ……待つて居ますでな……」から言つて階下の主婦は泪を流して再び此處に來ることを哲郎夫妻に誓はせた。哲郎は今後十年の間に必ず國にあるGと言ふ有名な寺院に參詣させることを約束した。主婦は其處で六

年前に死んだ良人や子供に逢へるのだといふ硬い信仰を持つてゐた。折郎は其信仰を鈍く思つた。折郎は妻が立たうと思つてゐる十二日は非常に荒れた。深夜凄じい猛雨が襲來して、雷鳴は恐しく轟き渡つた。人を集める警鐘は黎明まで寂しい漁師街の上に響いた。眠りに陥ちようとする折郎は妻のため幾度か揺り醒された。妻は黎明まで一睡もしなかつた。朝になつて雨は止んだが風は依然として收まらなかつた。眠らずに過した妻の反動は明らかに來た。妻は全身に非常な惡感を覺えると言つた。額に觸れて見た折郎の手に熱は可成高いやうに思はれた。折郎は兎に角、醫師を呼ぶことにした。彼は戶外に出た。入江には黃濁色の潮水が物凄く湛えてゐた。もやつてある幾艘かの漁船は船舷まで水に浸つてユラ〳〵としてゐた。魚市場の前の處はもう二尺ほどで水が溢れようとしてゐる。漁夫や、女房達や、子供は岸に群つて騷ぎ立つてゐた。漁船が三艘押し流されたなど語り合つてゐた。折郎は醫師を訪ねて妻の容態を說明し、直に來て吳れるやうに依賴した。醫師は快よく承諾した。折郎が家に歸つた時、妻が階段を下りて來るのに逢つた。そして彼女が鍋を持つてゐるのに彼は少からず面喰つた。醫師が來た、妻を一通り診察した。

「眠れない故でせう。それから何か考へるのはよくありません……」と言つた。

「姙娠の徵候はありませんか」此時折郎は非常な努力を持つて訊いたのであつた。

「其疑ひもありますが乳首に熱を持つてゐませんから、或は月經不順から來てゐるのかもしれません」と醫師は答へた。

千鶴子は此時「長い汽車旅は如何でせう」と訊ねた。醫師は差し支へないと答へた、「下劑と鎭靜劑とを上げますから」かういつて醫師は歸つて行つた。折郎は村へ立つ日を一日延すことにした。其日の午后濱に出てゐた千鶴子が「早く、早く、難船たのよ!」かう言つて二階に瞥見をしてゐた折郎を手招きした。で彼は濱に出た。漁夫や漁夫の細君が大勢濱に立つて、沖の一點に瞳を凝らしてゐた。防波堤の上にも長く人垣を作つてゐた、中には竿の先きに手拭をつけてそれを

高く上げて目標にしてゐるものもあつた。海には巨きな濤が吹き返してゐた。折郎は立つて沖を見た。青島から遥か西方に當つた沖合に一艘の漁船が波の上に高く打ち上げられたと思ふと、瞬く間に波の影に船體を深く沒し去りつゝあるのが認められた。

「船の方が動かない！　駄目かも知れない！」傍にゐた一人の漁夫が不安さうに折郎を顧みて言つた。

「助けに行く譯には行かないんですか！」

「いやどうして、助けに行つたら共死だ。」漁夫は首を振つた。妻はもう色を失つてゐた。

「何處の方ですか、細君や子供もあるんでせうね」と折郎は訊いた。漁夫は船には確か三人乘つてゐる筈だと答へた。そして其一人は彼等夫妻の借りてゐる家の東隣りの一人息子だと答へた。其家は折郎が時折風呂を貰ひに行つたことのある家で、家には確か七十近い老人と中氣で足の利かない老婆と六月のお腹を抱へてゐる十九になる妻と、三つになる男の子とが住る筈であつた。其息子は去年聯隊から歸つたやうな青年であつた。折郎は其一家の爲に青年の助かる事を祈つたのであつた。波は容易に靜らなかつた。折郎は二階に引き返した。妻は怯びえるやうに彼の後に從つた。家に歸つて見ると階下の主婦も濱へ出てゐて留守であつた。二階へ上ると彼等の留守に電報が來てゐた。折郎は一寸驚いて封を切つた。イヘナシカヘルナイサイフミと言ふ電文であつた。彼は落膽した。妻は「どうしたんでせうね」と不審さうに言つた。折郎は岡村が打電したものだらうと思つた。とにかく手紙を待つことにした。

船はとう〳〵助からなかつた。

「東でも老寄が氣の毒でな……一人息子を海に取られて了つた……先生……子供丈は漁に出したうない……」かう言つて階下の主婦は其晩泣きながら折郎夫妻に語つたのであつた。待ちあぐんでゐた村からの手紙はそれから二日目の朝、

哲郎の許へ屆いた。そしてそれは岡村でなしに意外にもM氏の手紙であつた。哲郎が村へ歸ることを獨斷で定めたのを不服らしい激した文面であつた。廿日前に歸ると皆に迷惑をかけることになると書いてあつた。哲郎は不快な感情なしに此手紙を讀み終ることは能きなかつた。

「何と言ふ抱擁力のないM氏だらう」と彼は妻に言つた。たとへ家がないにしても、狹い家に割り込んで住む迄も住民の一人が病氣が全快して歸るのであつたら喜んで迎へるのが自然だと思つた。こんなことに肚を立てるのは餘りに滑稽だと思つた。哲郎は貞子夫人の意志が其影に動いてゐるのは否定出來ないと思つた。貞子夫人を始め村の者が自分達の歸るのを喜ばないのであつたら村に歸るのは止めやうと思つた。かう思ふと哲郎はひどく腹立を覺えて來た。M氏は貞子夫人の生活の全部を肯定してゐる。そして哲郎自身は貞子夫人に微塵の尊敬をも持つことは能きないのであつた。西岡や宮津や、多く彼の先きに行つた友の取つた態度も此處から出發してゐる。哲郎は人類愛を眞向から振り翳してゐるM氏が一人の妻を教化し得ぬ處に何物か教へられる物があるのではないかと思つた。

「千鶴子……僕は村へ歸るのは止めやう」と此時沈み込んでゐる妻を顧みて言つた。

「ほんとうなの！」彼女は笑つて半信半疑で言つた。

「あゝ本當だ……岡村には濟まないが……どうせ村へ歸つた所でそう長いことではない……」哲郎は眞面目な調子で言つた。妻は俄に勇み立つた。哲郎は先づ於利に旅費を作らなければならなかつた。それで彼は東京にあるOといふ知己と岡の方の親しいTといふ人に宛てゝ無心の手紙を書いた。いよ〱村に歸らないことに定めてみると哲郎は寂寥の底に沈んだ……少年時代から變らない友情を持ちあつてゐる岡村、善良な無神論者の牧……哲郎は此愛する二人の友を失ふことには堪らないと思つた。そして又多くの友に村を去ることに就いて手紙を書き送つて見ると、自分の過去を破壊

する爲に打ち下ろした第一の槌の反響が何處まで及んで行くかを眺めてゐるような不氣味な心持ちがするのであつた。

午后折郎が二階で讀書をしてゐると隣家の葬式が通つた。顚覆した船と、漁夫の着てゐた仕事着が一枚、青島の南端の岩角に漂着したといふのであつた。隣りの家では朝から大工が來てカンナの音をさせてゐた。其傍に立つてゐる寂しい老人の姿が折郎の目に深く殘つてゐた。階下の人の注いで雨戸を閉めて置いたので折郎夫妻は戸の隙間から表を覗いて見た。赤い長旗に故人の姓を記したのが先頭に立つて、其後に僧が續き、四人の背中に擔がれた白木の輿は中央にあつた。輿は祠のやうな格好をしたもので漂着したといふ着物を其上に被ぶせてあつた。髮に白い布を戴せた女が十人ほどと、近所の會葬者の群とが午后の漁師町を靜かに練つて行つた。折郎は妻に命じて幾何かの金を隣家へ屆けさせた。

（十四）

折郎は朝、眠りから醒めた時ひどく齒痛を覺えた。其故か彼は昨夜一晩中種々な夢を見續けて來た。殆ど記憶にないやうな人の顏を夢の中で見た。狂死した從姉の良人のKといふ人にも逢つた。遠い國の兄夫婦にも逢つた。不思議にもそれが皆金に關連した夢だ。矢張り自分に金のことが氣に掛つてゐるのだと思つた。金が果して出來るだらうかといふ不安が募つて來た。Oがもし旅に先きであつたら……。それから又貧乏なTは金を如何う工面しても出來ない場合を想像することが出來る。かう思ふと折郎はひどく危なかしくなつて來た。彼はもう一人の友に電報で金を賴まうと思つた。彼け齒痛を堪らえて局へ行つた。局で彼宛のはがきを一枚渡した。それは果して關村からであつた。彼の寂しさに同情して早く歸る日を待つ、併し皆の云ふ廿五日にした方が可いと云ふやうたことを懇切な筆で書いてあつた。折郎はこのはがきを讀んで誰れも味方のない村に踏み止つてゐる關村の姿がはつきりと想ひ返された。關村け何時も變らない愛を自分

の上に持つてゐるのだ……それだのに自分は、今、彼を裏切つて金策をめぐらしてゐる……園村は自分が今裏切らうとしてゐることなど少しも知らずに信じ切つて自分の歸る日を待つてゐるのだ、まるで旅に病む愛兒の歸宅を待つ慈母の心を持つて待ち望んでゐるのだ。……彼はかう思ふと自分の心を深く愧ぢずにゐられなかつた。彼はとう〳〵Kに打電する勇氣を失つた。といつて彼は決して此咄嗟の間に村を去る事を止めたのではない……彼は左手に此厚い友情を盛つた友の手紙を持つて、右の手で全然此友情を裏切る電文を記すことは餘りに恐ろしい冒瀆であることを感じたからであつた。道々哲郎は自分の心の恐しく動亂した狀態にあることを感じた。彼は家に歸ると階下にゐた妻を二階に呼んだ。

「千鶴子これをごらん！」彼はかう言つて其手紙を指し示した。「園村は、僕達の歸るのをこんなに待つてゐるのだ……僕たちの寂しさにも同情してゐる……あの人も寂しいのだね」

　彼は妻の答へを待つやうに言つた。

「ほんとね」妻は引入れられたやうにはがきを幾度かよみ返してゐる。

「ねえ千鶴子もう一度僕たちは村へ歸らう。どうして園村の期待を裏切ることができよう」彼はかう言つて妻を視た。彼女の顏には明らかに失望の色が浮んだ……。

「でもお母さんの處へも言つて上げたのだし……今更困るわ！」

「通知を出した處へは僕が書く。OやT君にも言つてやらないと惡いからね」

「どうしても村へ歸る？」彼女は氣の無ささうに言つた。

「さうして呉れ、園村に全く濟まないから……園村に良い話相手でも出來るまで……」かういつて哲郎は村へ歸つて若し彼女に取つて不幸であるやうな場合は直ぐ村を去るといふ條件の下に澁々ながら妻に承諾させたのであつた。その

日の夕方東京の親戚のOから廿圓、通信為替で送金して來た。そして彼が村へ移る時不賛成を唱へたやうな其人の手紙には、田園の讃美は都會にて活動のフイルムで見る位が眞の讃美であるといふやうな不快な文字が記してあつた。哲郎はひどく不快を感じた、金はもとより必要のない狀態にあつたので妻に命じて直に返送させた。「此仕事がたとへ形の上に於て失敗に終つて、あらゆる世の中の人の嘲笑の的となるやうな事があつても、此仕事の精神は人類の絕滅しない限りは生きて働くのだ……それで可いのだ！　人が一つの仕事を試みやうとする時、其結果のみに心を煩はすな、其結果の如何を思つて躊躇するほど怯懦であつてならない。たゞ誠實ならば可い、さう言ふ戰士こそ、人生の野に於ける得難き勇士ではないか。勝つて歸るも可い、負けて歸るも可い、自分は其何づれをも讃へ、何づれにも疲れた魂を潤す可く一碗の淸水を備へるであらう。」彼は、日記を展げて其日こんなことを書き付けた。

(十五)

哲郎夫妻が海岸を立つたのは、園村が去つて恰度一ケ月目の日であつた。近所の人々の中には、酸いものを要求する千鶴子の爲に青い蜜柑の果を、葉の附いたまゝ捥つて來て與れるやうな老婆や、生烏賊の干したのや、鰺の干物を荷の中へ加へさせるやうな主婦もあつた。言ひ合はせたやうに彼等は入江の邊まで送つて來た。通りの店やの女將さんの中には襷を外して表に出て來るやうな人もあつた。

(十六)

哲郎夫妻は其朝九時の汽車で折生迫驛から追懷の深い青島の海岸を捨てた。

何んといふ物凄い四邊の光景だ。岩疊な岩窟の中には警護の若者の持つ松明の赤い焰から立ち昇る油煙がもや〳〵と一杯に群り罩めてゐる。光りの通はない岩窟の隅々には、魔女や、妖精や、毒蛇の眼だけがぎら〳〵と輝き、其間から底氣味の惡い笑聲と、囁きとが聞えて來る。さて中央には高い四角な大理石の柱が立ち、其てつぺんに泰然として胡座を搔き、其光る眼をぎろ〳〵と動かして、物慾しげに四邊の光景を眺め廻してゐる一人の男がゐる。彼は何を探し求めてゐるのだらう…其下に是れは又何んと言ふ恐ろしい顏の男だ。兩鬢から廣い下膊にかけて生へ伸びた針金のやうな荒い毛が、其背恰の逞しい體格によく調和して、山男といふ感じを起させる。彼の手に光つてゐるものは何んだ、劍だ……おゝ恐ろしい劍だ。全體自分は何の爲にこんな處へ迷ひ込んで來たのだ……此處は何處だ、青島の東端に在る岩窟のやうでもある。が如何うしてそんなことがあり得よう、自分はもう廿日餘りも以前にあの海岸から村へ移つて來たのだ。今迄物凄い四邊の光景に氣を取られて怯え切つて居た彼が吾に返つた時、隣に立つてゐる一人の男が言つた。

「見ろあの女が君を見て笑つてゐるぜ、ほら彼の男に何か囁いてゐる。今度はきつと君の番だぜ」言はるゝまゝに彼は顏を上げて視た。其處には、おゝあの女が……是は又如何うした事だ……あの女は、貞子夫人は、千鶴子と共に此處に移つて來た日、途中の高城からM氏と共に確に東京へ向けて發つたのだ……それだのに、おゝあの女が、又しても氣薄味の惡い笑を浮かせて……あの高い石柱の上の男と何事かを示し合つてゐる。と其處へ左の方から靜に警護の若者に引き立てられて歩んで來る若い女がある〇瞳を凝らして見ると、あゝ……彼女だ……千鶴子だ、私の女、戀人……妻……だ、どうか其女だけは助けてくれ、私　妻だ……併もお腹に子供さへある……弱い女だ……おゝ神よ、彼がかう呼ばうとすると舌端が硬ばつて聲が出ない。彼女の傍に駈け寄らうとすると體は一歩も動ない……あゝ劍が、劍が……悲鳴が……彼女の聲が……おゝ其時哲郎はぽつかりと眼を開いた。鮮かな朝の光は恐の蚊帳をすべつて雑然とした彼の枕下にまで

流れた。夢だ、何んといふ不快な惨たらしい夢を見たものだらう、かう獨り言つて哲郎は褥の中から神經的に視線を其處へらに投げた。彼の眼には自づと取散らされた千鶴子の普段着や、帶締や、皿や、茶碗や、さまざまなものが映つた。さうだ、今日は最後の日なのだ。村を立たなければならないのだ。あれから……漸うまだ廿日餘りにしきやならない。だが……かうなることが當然の經路でもあり、又自分であの朝、青島の海岸を立つ時、全然かうなる日を心に期してゐなかつたといふのではない。だが何といふ早く其日が來たものだらう……最後の日が……。さうだ彼の日、二月振りで青島の海岸から懐しい城へ歸つたあの日、F旅館で東京に向けて發たうとするM氏夫妻と別れてあの濱、並木道まで來た時、自分達を迎へに來て吳れた岡村と牧と、さうだあの中に若し快活な角田の姿が見出せなかつたとしたら……こんなに早く城を立つやうな結果にはならなかつたのだ。角田は全く愉快な、魅力に富んだ青年だつた。彼は自分が村に移つて來る途中S市で會つた時、長く伸してゐたやうな頭髪をすつかり短かく刈り込んで子供のやうに可愛い眼をくるくるさせて其時自分の手を取つたのだつた。

「おゝ淺香君……歸つたね……」

「君が來てゐたの、少しも知らなかつた……」哲郎はかう言つて彼の手を強く握り返して、

「さう、さう君に紹介するのを忘れてゐた。千鶴子」かう言つて其時哲郎は彼に妻を引合せたのだつた。

「あゝそうか、お祝ひをいふのを忘れてゐた、僕角田です」彼は快活に笑ひながら妻に會釋した。

角田……おゝ何といふ可愛い奴だ……男の自分でさへ彼に接してゐると何んだか自づと心持ちが拓けて行くやうな氣がするのだ……そして又彼奴は畫にかけては、圖拔けた才能を持つてゐるのだ、將來は可成有名な畫伯だ……自分の此憂鬱で、氣短で、併も氣違ひ染みた性質に比べて何んといふ違ひだ……かう思ふと自分は、彼に對してある恐怖と、危

險とを感ずるやうになつた。それで自分は妻が彼に對して如何な態度を示すかを絶へず警戒の念をさへ抱くようになつた。

「君がどん〳〵出來る、もう此方へ來て六號の人物と、十號の風景とを仕上げた。」角田は歩きながらこんなことを言つた。それにしても、もう何時だらう……と此時折郎は追想から返つた。さうだ、俺は今日正午頃までに彼女の待つてゐるF旅館へすつかり荷物を整理して持つて行かなければならないのだ……だがそれ迄には角田も、牧も、園村も來て呉れる筈だ……人間といふ奴は何んといふ奇妙なものだらう。農具置場を共儘使つた此土人の住家みたいな掘立小屋も愈々去るとなれば相當に愛着の伴ふものだ……彼はかう思つて頭を巡らして見た。隅の方に實に不調和な金文字入りの洋綴りの書が十二三冊亂雜に竝べられてある、中央にダヸンチの描いた天使の畫額が掲えられてある。紫々青竹で止めた蓆の上に張り廻した白い蓆に堤灯が一つ吊るされてゐる。これは深夜折郎夫妻が丘一つ隔つた共同住宅や、園村の家に出かける時に用ひたものだ……木目模の額が二面、其外に寢具、竹行李が一つ、僅か一ケ月に充たない住み家ではあるが彼等夫妻に取つて、切實な追憶の伴ふ此小さな王國は何一つ他人の踏察を許さない此地上に於ける彼等の唯一の特物なのだ……竹で編んだ天井を見ろ、其處には園村の愛が微笑んでゐるではないか。四壁の蓆莚の影には牧の善良な笑顔が覗いてゐる。土間の隅から漂つて來る黴臭ひ土の香も今は懐しいものゝ一つだ……あの晩……初めて此小屋に住むやうになつたあの晩……月の美しい夜だつけ……さうだ今でもはつきり思ひ出す……折郎はかう獨り言つて其晩の印象をもう一度眼の前に描かうとするやうに眼を閉じた。園村や牧が自分達の「新しい生活を祝福する」からといつて僅かの小使ひの内から幾何か宛つを醵金して呉れて、其金で峠の茶屋から黴臭い酒あんや、黒砂糖を買ひ集めて來て、牧の發案で三本の竹を編んだものに繩をつるして、それに大きな鍋をかけたのだつた。水はＨ少年が麥の水路から幾度か汲んで來た。笹

や、榾の火は鍋の下で赤く燃えた。甘いものが唯一つの慰めであるやうな連中の、しる粉の啜り方は實際、文字通りの鯨飲だ。其うちに囲坐が作つた指はトランプを始めたのだつた。さうだ、あの時僕の隣に千鶴子、其次に角田、三輪、牧、岡村それが全く不用意のうちに作られた順序ではあつたが、あれから後の自分の心は全く平靜を失つてしまつた。千鶴子と、角田との、どんな微細な擧動でも見逃すまいとする。視線は絶へず敏捷に二人の上に働いた。全體此小屋は急場の思ひつきで併も、牧や、岡村や、角田のやうな素人が自分達のために、造してくれて、辛じて人が住みうるやうになつたのだから、不完全な根太……といつても天井と同じい青竹を編んだものゝ上に古疊を敷いたものだつたから、彼女の體は、ともすれば角田の方へ滑る、それを彼女が意識してするのではないことは解り切つてゐるのだ。それだのに殆ど心の平衡を失つてゐる自分の注意力は病的にまで近くなつて來る。恰度、其時千鶴子の右足の親指は角田の左の足の指に觸れたのだ。あの瞬間嫉妬に燃えた自分の眼光は、露骨に妻の上に注がれた。野獣のやうなその眼光に振るへ上つた千鶴子は、直に居ずまいを直すのだつた、がものゝ五分も經つたら彼女の體は再び角田に向つて滑りよるのだ。かうなると、僕の心はトランプにもお汁粉にも、牧達の上げる高い笑聲にも其場の一切のものに興味を失つて了ふのだ。十時近く皆は歸つて行つた。僕はどんなに制しても、制し切れないのは底知れない嫉妬から來る不滿と、苛立ちと、怒りだ。自づと「僕の前で餘りみつともないシーンを見せて與れるな」彼女を苦しめるとは知りながらこんな皮肉が口を衝いて出る。

「また初つた、あなたはもう私に幾度そんなことで氣不味い思ひをさせるやうなことをしないつてお誓ひなすつたの、全體私が何をしたつておつしやるの！」かういふ彼女をぐつと睨みつけて、

「白ばつくれるな」賤しい笑ひの口許に湧き上るのを意識しながら言ひつゞける。

「大分樂しそうだつたぢやあないか、だが角田だから可いが、牧のやうな探偵家は處女でない女に假を觸れられると非常に侮蔑を感ずるかも知れないよ！」「なあんなたはよくそんたことが言へるのね、あの蟲がどんなに滑べるかつてことを自分で坐つて見て下すつたらどう……」かうした會話の後に、とう〳〵自分の感情は爆發した。自分の最初の一擧が、彼女の右の頰に注がれたと思つた瞬間、彼女の精神は既にあの海岸の住居で幾度か脅やかされたやうた錯亂狀態にあつたのだ。喚き、泣き、母親の名を連呼して惡魔の追擊から逃れようとして懸命にもがく、自分は傷ましい彼女の發作を、恐ろしい火焰の燃え擴つて行くのを眺めるやうな、おど〳〵しさで眺める。あの時自分は、此まゝ彼女の精神が平靜に復するやうなことがなく、眞物の精神病者になり了せたとしたら、自分は一生骸のやうな彼女の守をして過ごされなければならないのだ――何といふ恐ろしいことだ……。かう思つて飛びついて抱きかゝへようとする自分の手からするりと逃れた彼女は急拵ひのシーツのカーテンを拔けて月の庭に出た。可成り夜は更けてゐた。靑白い月光の中に立ち昇る河霧は巨人の帶のやうに深い鉛紫のベールを被いで眠つてゐる重疊たる山山の中腹を流れてゐる。小丸河の滿流に圍まれた丘の上の深夜、更けてゆく夜空に反響する阿鳴の外、一切のものは深い神秘と沈默との裡に眠つてゐく。彼女の後を追つて小屋を轉がり出た自分の眼が甘諸畑を突切つて水源地の方面へ走つて行く彼女の姿がぼんやりと映つた。幾度か甘諸の蔓に足を取られて、漸う自分は彼女に追ひついたのだつた。そして引きづるやうにして此小屋の中へ連れ戻した時……共時こそ自分は再びかうした場面を繰返すまいと心に誓つたのだ……それから數日間を、自分は每日のやうに多くの住民と共に畑に出たり、燃料を集めたりして過ごしたのだ。朝は、さうだ南國とは言へ十月の朝は手足も凍り果てゐるほど冷氣が加つた。褥を離れると直に勞働服に着換へて自分は彼女と共に丘一つ越へた共同住宅へ出かけたのだつた。裏の水路で顏を洗つて食堂へ行きづくと、何時も快活な角田や、岡村の顏が共處にあつた。まるで陰府のやうな此小屋から

明るい世界に出た彼女が俄に輝やかしい表情に燃るのも寧ろ自然ではないか、元氣を取り戻した彼女はお針や、洗濯物に取りかゝる前に圖書室に備へ付けてあるオルガンの前に腰を下ろしたものだ。それから午餐後の小一時間は庭のテニスコートに運動好きの角田や、牧や、SやKやが集つて來る。女學生時代に級のチャンピオンを以つて許されてゐたやうな彼女は一とたまりもなく誘惑されるのだ。此んな時圖書室の机に凭れて讀書に耽てゐる自分が、ガラス窓越しに彼女の飛び歩いてゐる樂し氣な樣子を眺めるやうなことがあつたら！　煮えくり返るやうな心の動亂を押し隱して「馬鹿つ、體のことを考へて見るが可い」と窓口から怒鳴りつけるのだつた。彼女は蒼白としてラケットを投げ出して悄然と引上げる、それにしてもあの最後の事件を自分が惹き起すやうなことがなかつたら、たとへ村の空氣が彼女に取つて耐え難いものであつたとしても、かう迄早く最後の日が來るのではなかつた。さうだあの日、自分が岡村と水源地から小丸川の上流へかけての栗林を晝飯後の二三時間を歩き廻つて、二人の勞働服の前後のポケットに栗の實を溢れるほど詰め込んで共同住宅へ引き上げた時、彼女の姿がもし午前と同じい圖書室に見え出されたとしたら……。あの時彼女は圖書室の次の室にゐたのだ……。二三日前から××村の展覽會に出品する靜物に取り掛つてゐる角田の畫室と圖書室とに挾まれた室にゐたのだ。其處で彼女は針仕事をしてゐた。たゞそれ丈けの事實に對して自分の異嫉的な想像は輪に輪をかけて擴がつて行く。何んの爲に彼女が、彼の隣室に仕事場を替へる必要があらう。果して彼女が其夜泣き乍ら自分に辯解したやうに圖書室を掃除した爲めだらうか、或はそれがほんとうかも知れない。それが事實でないと如何うして言ひ得よう。だが懐疑深い自分の心は其處に何等かの疑惑を挿まないではゐられないのだ……戀するものゝみが能く感じうる牽引力に依つて、彼の隣室に移つて行つたのだ……と。そして若し彼女が如何に爭ひ難き證據を示して此事實を否定した處で、自分の享けた感じの萬分の一をも消滅させることは不可能なのだ。そして又自分は何んといふ馬鹿

氣た兒戯にも類したことを思ひ付いたものだ……あの時自分の頭の構造は確に狂つてゐたに違ひない。其狂つた頭にヒョツクリ浮んだのがKの顏だ。あの物好きな、ドラマチックな名文家のK、自分はあの時から思ひ乍ら坂を上り始めた時、折よく刈込んだ秣の籠を背負つて、向ふから下つて來る彼に出會したのだ……それで自分は思ひ切つてあのことをKに頼んだのだつた。Kは「よし、かういふ條件の下に引受けよう。僕の名譽の爲に、此事に僕が關與したといふことを、永久に君が絶對の秘密を守るといふ。」あの日夜に入ると強い風が出た。加之雨さへ加つて丘の上の一軒家は今にも吹き倒されさうな狀態だつた。一日の仕事を終へて自分が妻と共にこの小屋へ歸つた時、「千鶴子、服のボタンが取れた。付けて與れ」何氣なくかう云つて突き出した自分の手から勞働服を彼女は從順に受け取つた。哀れな妻よ、お前は瞬間後にお前が其ボタンを附ける爲に取り出す針箱の中にどんな芝居が仕組まれてゐるか、少しも知らずにゐるのだ。心の裡にかうつぶやきながら彼女の一擧手、一投足に注意深い視線を放げる。此時、手許に引き寄せた針箱の中から、案の條彼女は一通の手紙を發見した。「誰れだらう」かう輕い驚愕を見せて封書の文字を見た。「今だ」自分は心に叫んで態と氣付かないやうな態度を裝ひ乍ら彼女の表情にそれとなく注意する。「誰れだらう」もう一度彼女は獨り言つて封を切つた。二三行讀み下したと思ふと、「馬鹿にしてゐるわ」彼女は憤然として立ち上つた。そして彼女は其手紙を引掴むやうにして外へ出ようとした。「何處へ行くんだ」自分は矢庭に飛びついて彼女を引捉へた。

「放して下さい……私、園村さんに言つて來るの村の、住民の中にこんな失敬な奴がゐるとしたら、園村さんに話して村を出て貰ふわ、ええ失敬だわ、他人の妻に對して此んな手紙を送るなんて」かう言ひ乍ら彼女は自分の捉へた手を振り切るやうにして横しぶきの雨の中に飛び出した。

「おい馬鹿」かう怒鳴り乍ら續いて飛び出した自分が彼女の後を漸う追ひつめたのは、水路へ突切る高粱畑の前であつ

た。

「悪かつた……僕が書いたんだ、千鶴子」から憐みを乞ふもの丶如に言つて、漏ら小屋の中に濡れ雫になつてゐる彼女を連れ戻した、だつた。

「え丶嘘です、あなたの字とは違ひますわ」彼女は言下に自分の言葉を否定したのだつた、だがそれと同時に、誰者が竹田でなく自分の奸策になる、何人かの書いたものだといふことを感知したのは邪慳だ。あの晩彼女は恐ろしく發熱した。夜の更くる迄與感を訴へた。「夜が明けたら東京へ歸して下さい」「是以上私を苦しめないで下さい」から言つて彼女は執拗に自分を苦しめた。近くに人家のない丘の上の一軒家で、併も此恐ろしい風雨の眞夜中、自分は如何とも施す可き術を知らなかつた。風雨は益々強く荒れ狂ふ。雨戸のない小窓の扉は時折吹き捲くられて雨の飛沫は褥の上に迄吹きつけるのだ。暫時して彼女は輕い鼾の音を立てた。熱の高い彼女の傍に横になつた自分が睡りに陥ちて、凡そ一二時間を經過したと思はれる頃だつた。窓の外にパサリと物の落ちる音に睡りを醒まされた。時計がないので時間としたことは判らなかつたが、既に十二時を過ぎてゐるやうに思はれた。自分は耳を澄した。確かに窓の外に人の氣勢がするのだ。其時自分は闇の中に黒いものの突立つてゐるのを認めた。

自分はガバと刎ね起きて、扉を捲つた。外は暗い。風雨は依然として荒れ狂つてゐる。

「何方」自分は誰何した。

「僕だ……多分君が窓を此ま丶にして寢てゐるだらうと思つて見に來た。第一千鶴さんの體に直接冷氣を當てるとよくない」関村はから言つて抱いて來た幾枚かの莚を窓の外に張り廻して呉れたのだつた。

「有りがたう、こんたに雨の降るのに」自分は恐縮してかういつたのだつた。

「千鶴子」から自分は彼女をも呼び起して岡村の厚意を謝さうと思つた。

「いや、眠つてゐるのを起さない方が可い」寝卷の上にマントを綴つた岡村はかういつて窓から小屋の中を覗いた。

「先刻千鶴子が少し熱が出て」ぎくりつとした自分はかう何氣なく言つた。

「大切にしたまい……お休み」やがて岡村の足音は雨の中に消えた。あれから二日程、引續きいて彼女の熱は高度に上つたのだ。と折郎は思ひ續けた。だが誰が彼女の發熱があの夜、自分の惹き起した事件に原因してゐると思ふものがあらう。岡村や、牧や、角田は全く自分のことのやうに心配して呉れた。不完全な掘立小屋なので弱い體と濕氣に享けたのだ、と誰も彼もが思つた。彼女は「再び生きてあの山を越へることは能きない」といつて泣いた。彼女の熱の漸っ低下したのを見て、岡村や牧に勸められるまゝに此處から三里山路を越へた高城にあるA病院へ出かけたのは……さうだ一昨日のことだ。勿論其時、あれが自分と彼女とが城に住む最後の時に成らうとは思ひ設けないことであつた。渡船場まで皆は送つて呉れた。彼女と二人であの山路を登ち上り乍ら、自分はどんなに、もう暫らく彼女に村に止まるやうに説き勸めたらう。然し遂ひに彼女は肯んじなかつた。醫師は肋膜の痕と、心臓とが幾分惡いと言つた。勿論、姙娠の徴候をも認めると言つた。村の定宿になつてゐるF旅館の二階で一先づ休むことにした。如何しても東京へ歸り度いと言ふ彼女を二階に殘して、自分があの旅宿を出る時、彼女は自分を見まいと努めるかの如に枕の上に兩手を組いた。自分は階下へ下りて宿の主婦に彼女が病氣であること、彼女を一人殘して自分は村へ歸らなければならないことを告げて、北處を立つた。自分の體が村に近づくことを意識するに從つて、自分の心に重苦しい悲しみの底に沈潜して行つた。腹の底に力の拔けたもののやうに、小さな石の露出にも躓いた。漠然と東京の土を踏むことの不安、村を去る悲しみ、とは言へ村に牧と、岡村とが居ないとしたら、恐らく自分は一日と雖ども、止まるやうなことはないであらう。又東京の土を

悩むことにも多少の不安が伴ふとしても、さうしたことを思ひ煩ふ餘裕がどうしてあらう。何んのために、今に至つて斯くまで思ひ惑はなければならないのだ、自分には永遠に變ることのない愛情を投げ切つてゐる妻が、生命の泉が、心の宿がある……それだのに僅か二人の友より持たない村にかうまで愛着を覺えると言ふのは一體是れはどうしたことだ、然う思ひ乍ら自分はとう／＼あの村の一眸の裡に集る坂の中腹に來た。光りの前に立つ罪人のやうに自分はどうしても眞正面に村を見下ろすことは能きなかつた。共同住宅の庭を視た。白い勞働服を着た誰れかの姿が認められた。牧かしらと思つた。河に臨んだ岡村の家を視た、自分の體はあの時、岡村の家を横から見得るやうな位置にまで運ばれてゐた。自分の視線が岡村の家に走つた時、其家の窓の所に立つてゐる三四人の姿が認められた。牧と、侑田と、三輪とそして岡村とだ……侑田がいち早く自分を認めた。帽子を高く振つた。自分もそれに應じた。何故か力が抜けて義務的な振り方をした。皆が待つてゐるのだと思ふと自分は目の中に熱いものが溢れて來るのを感じた。本村の女將さん達が道下の田に刈穫に就つた稻を刈つてゐた。自分は帽子を眞深に被つた。次の瞬間に昂奮が羞恥に勝つた。自分は泣き乍ら丘陵の家の前の小徑をまるで跳躍けるように走り下つた。丁度其時だつた。……自分の體が船付場の砂の上に立つた時だ、淺碧に澄んだ流れに例の淺黄色のブク／＼した勞働服に灰色がかつた帽子を被つた岡村が水を掻きながら船を自分の方へ滑らして來るのを見た。次の瞬間、自分の體は打ちのめされたやうに船つなぎの石につつぷしになつてゐたのだ。自分は泣いた。とは言へそれは悲しみでもなく又喜び、感謝、其何れでもなく、それは感情の頂點に於てのみ經驗しうる、不思議な恍惚狀態の一ツであつた。極めて自然に溢れ出る涙は刻々自分の靈魂を潤ほして行くのを感じた。

「如何したの……淺香君……」其時岡村は岸に船をつけて自分の乘り込むのを待つてゐた。自分は船に乘り移つた。そして船尾に腰を下ろした。

「如何したの、千鶴さんが偉い惡いかな！」から岡村は氣遣はしげに訊いた。岡村は再び水を搔き初めた。船は彼岸についた。岡村は突出した岩の間に桿を突つ込んで船の流れないやうにした。

「案じて待つてゐた……千鶴さんが惡いの」岡村は自分の答へを促すやうに言つた。

「淳さん……それよりもつと恐ろしいことになつたんです。……淳さんと僕とが別れる時に……」自分は漸うこれだけ言ふことが出來た。

「如何したつて云ふの！」岡村はかう言つて、自分の泣きじやくるのと、殆ど呼吸を合せるやうにフウ／＼と首肯くのだつた。

「淳さん……今、僕は何も言へたくありません……どうぞ聞かないで下さい、さうすることが可いことか惡いことか知りませんが……僕は村を出ることに決心したんです……醫師は千鶴子の體は心臟が少し惡いだけで、外に別に惡いとは言はなかつた……」と自分は言つた。

「それで何時立つことにするの……兎に角牧君とも相談して見よう」岡村は言つた。

「たゞ僕の悲しいのは、どんなに親しいもの同志でも、遠くに離れてゐれば自然と距離が出來る……それが僕には耐へられないんです」

「それはさうだ、だが君も一人の時とは違ふ……何時までも一緒に生きて行く譯には行かない。僕にした處で今までの惰性と、まあどんな仕事にも必要なのは椽の下の力持ちだ……僕はその覺悟で行ける時まで行つて見ようといふ氣持で止まつてゐる、とにかく僕の家へ行かう」岡村はかう言つて先きに立つて船を捨てた。それから、岡村の家で遲くまで牧や、角田や、三輪にも集つて貰つて、語り合つたのだ……そして斐々まで四人が送つて呉れると言ふこと、場合によ

つては驛前の旅館で最後の一夜を送らうといふこと……。

自分が園村の家を辭したのは夜も餘程更けてからであつた。共同住宅の前で牧や角田と別れ、獨り小屋へ引き返した自分は、暗闇の中でよう〳〵探がし出したランプに灯を燈して、それから褥をのべて、其中でもぐつたのだ。遲くまで叢の中で鳴く蟲の音が耳に付いた。いろんな小蟲が灯を慕つて飛んで來ては燒けて落ちた。村は恰度此ランプの灯のやうなものだと自分は其時沁々思つたのであつた。

長い追想から返つた時、太陽は餘程高く昇つて居た。彼は褥を蹴つて立ち上つて、それから顏を洗ふ爲に小屋を出た。水路へ通ずる小路の草の上には霜が白く光つてゐた。哲郎が水路から引き返して來た時、すつかり旅仕度の調つた角田と、三輪とが坂を上つて來るのに逢つた。

「早いな、今日は草鞋穿きかい……」哲郎がほゝ笑み乍ら言つた。

「荷物はどの位あるの、五人だから五つに分け給へ！」と角田が言つた。何時もなら本村の馬子に頼むのを、皆が分擔して妻驛まで運ばうと言ふのは、成可く費用を省いて乏しい哲郎夫妻の旅費に加へやうと云ふ皆の心遣ひからであつた。

二人は哲郎の後に從いて小屋の中に入つた。彼は先づ着物や、洋服のやうなものを行李の中に收めた。書籍は大きな袋に、寢具は二つに分けて毛布に、かうしてそれ〳〵纏めてみると小屋の中は變にガランとして物寂しい感じを起させる。牧と、園村が其處へ集つて來た。何づれも一筋づつ麻繩を手にしてゐた。

「淺香君は荷が少ないから樂だ！」と牧が言つた。

「僕のやうな旅人は是れでも荷が多すぎる」と哲郎が笑顏で答へた。

「淺香君は未だ飯を食はないだらう、お晝の握飯があるから……」かういつて園村は風呂敷包を取出した。

「では一つよばれようか、村の握りめしゝ食ひ納めだ……」哲郎はかういつて風呂敷の中から取り出して握むすびを嚙り初めた。

「淺香君のゐた後を僕等の書齋にしようか」此時、角田が岡村を顧みた。五人は荷物を背負つた。哲郎は戶外へ出る時もう一度小屋の中を眺め廻した。牧の作つて與れた手製りの机だけが其處に殘つてゐた。

渡船場へ出る前に哲郎は共同住宅へ寄つて多くの住民達に別離を告げた。そして夕伸子や、糸洋子の長く住つてゐた馬小屋の二階にも……。

共同住宅の前の花園にはコスモスの花が朝の風に搖れてゐた。「城」は今が萩の盛りであつた。岡村の細君も子供を連れて同じに郷里の方から旅を續けて來た青年を送る爲めに渡船場まで重い體を運んだ。棹は三輪が持つた。船は水の上を滑つた。五人は船を捨てた。哲郎は顏馴染になつてゐる峠の茶屋の老爺の許にも寄つて名殘りを惜んだ。此時、哲郎は岡村との一年近く續いて來た溫かい交友の日を思ひ返して見た。そして今別れようとする最後の日に至つて倚親しい友の前に曝け出すことの能きないやうな傷しい自分の心の内部の光影を限りなく淺ましいものに思つた。

「淳さん……僕は今あなたを裏切らうとしてゐる。本當に僕は、あなたの前で鞭打たれても、足蹴にされても足りない人間だ……それだのにあなたは、何といふ底知れない愛を示して與れるのです。だがもう暫く待つて下さい。何もかも明瞭になる時が來るんです、そして又角田君も……」彼はかう心の裡に言ひながら艪りを打つた。峠にかゝるに從つて岡村ゝ牧も快活な角田迄沈默に陷ちて行つた。時折り三輪の輕い反語や節崩れの小唄が交らなかつたなら恐らく四人の口は永久に綻びる時が來ないやうにさへ思へた。哲郎は坂の頂上に來た時、振り返つて「城」の丘を見下ろした。朝の陽は共同住宅のガラス窓に砕けた。椽に立つて誰かゞ手を振つてゐる。丘の上の掘立小屋は青い甘藷畑の中に草の生へた

屋根だけが指摘された。此時哲郎の頭に、彼と同じいやうに「城」の地を選び據り、そして此丘の上で生活し、又彼と同じいやうに此山道を登つて行つたまゝ歸らなくなつた、西岡や、村上や、宮津や、仙子や、懐しい多くの友の姿が分明と浮んで來た。と其時今朝見たあの凄惨な夢の場面が何んの連絡もなく彼の頭を掠めた。

白い雲は朝霧に包まれた遠い山の上に流れつゝあつた。（終）



青い作業服

上司小剣

一

浴室へ逃げ込んだ春田は、手の焼けるやうな熱い湯で手拭を絞つて、顔から頸筋から兩腕と、だん／＼に拭いて、其の手拭を冷水で揉み出すと、白い洗面器が、忽ち底の見えなくなるほどに曇つてしまつた。

これが皆自分の皮膚から滲み出した膏汗だと思ふと、其の汚ない水にも醇酒に増した貴さがあると感じられた。彼れは試みに洗面器へ指を浸して、爪先きに附いた露を舐めてみた。其の露は鹽ツぱい變な味がした。

ほんとに自分はどうかしてゐると、馬鹿々々しい心になつて、春田はぢやアと洗面器の汚水をコンクリートの流し場に棄てた。其の水が流れ落ちようとして、下水の入口の鐵管にごぼ／＼と吸ひ込まれる時、春田はまた自分の毛穴から滲み出したものゝ行方に、名殘り惜しさを感じた。膏汗を膏汗として、いつまでも、青い作業服に包まれた自分の皮膚に附けてゐてやればよかつた。空しく洗ひ去り、流し棄てたのは可哀さ

うであつたと、今日に限つてそんなことを考へる自分の心が、自分にも解らなかつた。

　水道の栓を捩ぢて、白い洗面器へまた清水をいつぱい張つたが、濁らない水には親しみがなかつた。今一度、顔から頸筋から両腕まで、磨くやうにして擦つた手拭を、洗面器の水で洗つたけれど、前ほど水が汚れないで、ありありと自分の顔が其の底に映つた。水は丁度鏡の代用にふさはしいほどの曇りを帯びたのであつた。

　久々で見る自分の顔だといふやうな気がした。中央銀行の一機關夫となつて、地下室の一部を勤め先きとすることになつてから、其の一隅に在る浴室ばかりが、自分の安樂境である。あの浴槽もこの洗面器にも、自分はもう可なりの親しみをもつてゐるのであるが、洗面器が斯くも鮮かに自分の顔を寫してくれることを今まで知らなかつた。この銀行へ初目見えの日亡き愛人濱江の父親は、其の背廣を貸して、彼の爲めに新生活の首途を飾つてくれた。其の朝、ダブダブの洋服を着た姿を、郊外の森の中の家の手洗ひバケツに寫さうとしたのであつたが、こんなにハツキリとは行かなかつた。さう思つて、春川はいつまでも、白い洗面器の底に沈んでゐる自分の面(おもて)に見入つてゐた。

　青い服を着るやうになつてから、自分の顔はめつきりと黒くなつたやうな気がする。この地下室に控へてゐると、一階二階の各室から電話がかゝつて來ては、這ひ出すやうに石階を上つて、電氣機械の故障を直すのが自分の役目で、この大きな石の館(やかた)を一歩も外へ出ることはない。深川とかに附屬の倉庫があつて、其處へも行かなければならぬことがあるやうに、監督からは言ひ聞かされてゐるが、まだそんなところへ行く用事も起らない。毎日々々大きな石の館の内部を駆け廻つて、或る時は天井裏へ潜り込みもするけれど、日の目を見に蒼空の下へ出ることは滅多にない。朝に六時に森の中の家を出て、夕は五時に終るが、六時七時、殊によると八時九時を過ぎてから歸ることもある。電池の詰めかへをやる時なんか、十時にもなる。――兎に角太陽が自分の頭の上にあつたことは滅多にない。それでゐて、何故またか

う顏が黑くなつたか。この黑さは、愛人蘭江がまだ見ないで死んだ黑さである。

森田はいつまでも洗面器の水鏡に見惚れてゐた。さうして亡き蘭江が鏡を好んで、始終顏を寫してゐたことをも、ぼんやりと考へてゐた。

北島へ、今しがた森田に守衛の娘の婿になれと勸めた監督が、忙しさうにやつて來た。

二

『君ツ、森田君、此處に居つたのか。隨分方々探したよ。君ツ此處は就業中に來るところでないよ。』と監督は高聲で言つたが、しかし別段怒つてゐる樣子も見えなかつた。

『君ツ、守衛室の電鈴の工合がわるいさうだ。君に來てなほしてくれと言ふんだ。』と、監督は先刻の縁談の續きを語るやうに、薄い髭の口元をびく／＼と動かして微笑みながら言つた。

『今度は電鈴ですか。』と、森田も可笑しさをこらへつゝ言つた。

『さうだ。今度は電鈴だよ。』と、監督は噴き出してしまつた。

『電燈だつて、點かないといふから、行つて調べてみたら、故障がないんですもの。守衛の爺さん、球を少し弛めといて、どうも點かないなんて言つてるんですからね。』と、森田は少し拗ねてみたいやうな氣持ちで言つて、笑ひたくなるのを嚙み殺してゐた。

『だけど、さう言つて來たんだもの。まア一寸行つて見てやつてくれたまへ。』と、監督は矢張りニヤ／＼笑つてゐた。

『相木君に賴んで下さるといゝんですがね。』と、森田は今一人の電氣係りの機關夫に　この役目を讓らうとしたが、監

督は忽ち両手を振つて、

『相木君にさう言つたツて、あの男は何もかも知つてるから、逃げて行きやしないよ。どうしてもこれは外でなけれやならないんだ。君はあの爺さんに惚れられたんだから、これも一種の幸福だよ。』と、監督は笑つてばかりゐた。さうして、『早く行つてやつてくれたまへ。』と言ひ棄てゝ、燃えてゐるボイラーの前から、流るゝ汗を拭き〳〵電話室の脇を掠めて、鐵板の上をサツさと、自分の室へ歸つてしまつた。

森田はぼんやりとして、暫らく突ツ立つてゐたが、漸く決心して、鐵板の上から花崗石の上へ、それから石段へかゝつて、地下室を一散に出た。分析室と染料室との間を通つて、コック室の側を抜けると、漸くにして、懐かしい外空が夏の太陽を浮べて、頭の上にあつた。

さく〳〵と土を踏むのも、鐵板やコンクリートの上ばかりを歩かせられてゐる足には、例によつて心地のよいことであつた。

辿り着いた守衛室には、守衛の爺さんが、堅い椅子に凭れて、灰のない煙草盆を前に、コクリ〳〵と居眠りをしてゐた。森田は暫らく其の前に立つて、むゝむさい爺さんの顔を見てゐた。

『電鈴（ベル）がわるいんですか。』

聲が低かつたので、これでは爺さんの居眠りを醒ますに足りなかつた。通りかゝつた警備人夫と經師屋とが、不審さうな顔をして、守衛と森田とを等分に見て行つた。

『電鈴（ベル）がわるいんですか。』

稍聲を大きくしてから言ふと、爺さんはハツと、晩酌の夢からでも醒めたらしい樣子で、きよろきよろと、あたりを

見廻はしてから、漸く春田を見た。

『鳴りませんか、これが。』と言つて、春田は踏み込むやうに守衛室の敷居を跨ぐと、直ぐ電鈴に手をかけた。

『あゝ鳴りませんさうでのう。』と、爺さんは、口元に垂れかゝつた涎を、割り合ひに汚れてゐない手巾で拭いて、澄んだ眼を瞬くしながら言つた。

有り合はした電池を外して、ぢかに接觸させるとよく鳴るから、電鈴其のものに故障のないことは分つた。春田は狭いところで汗みづくになつて、いろ／＼調べた上、丁度爺さんの背後の上部で、八角時計に押さへられたやうになつたところの線が切れてゐるのを發見した。それは小刀か何かで巧みに被覆を裂いて、内部の銅線を切斷し、うまく元の通りに被覆を縛ふたものらしかつた。其處をちやんと繋いで、外した八角時計を掛けた春田は、胡散くさゝうに爺さんを見て『なほりましたよ。』と、早や口で言つた。

『どうも有りがたう。』と、爺さんは眩しさうにしながらも、春田の一擧一動から眼を離さなかつた。

三

其の日は今一ケ所、宿直室の電鈴を直して、もう歸つてもいゝとなつたのは、七時を過ぎてゐた。春田は直ぐ浴室に飛び込んで、青い作業服を脱ぎ棄て、紺飛白の單衣も黒メリンスの兵兒帯も縮みの襯衣もメリヤスの猿股も一緒にくる／＼と丸めつゝ自分の奴隷生活の皮を剝いたのを、其處へつくねたといふ氣持ちで、心地よく湯槽の中に浸つた。

この地下室に働くやうになつてから、春田は唯一つ、自分の身に取つては、生涯出來ない贅澤と思つてゐたことが、毎日出來るやうになつたのに、寧ろ驚き且つ呆れてゐる。それはこの風呂の湯のことで、間斷なく燃えてゐるボイラー

の火に、大釜の湯は沸騰を休止したことがない。栓を捩れば熱湯が、欲するがまゝに噴出する。他の栓を捩れば、冷水が瀧のやうに落ちて來る。それを加減して、好きな湯に浴することの愉快さ。……こんな、磨き上げた鬼の巖窟ともいふべき地下室に、かうした愉快があらうとは思ひ設けなかつた。

初めの日に、『君、湯へ入つて歸りたまへ、此處ぢや湯錢がいらないよ。』と、監督に言はれて、森田はまご〳〵しながら、就任第一日の汗を、この湯槽で洗ひ流したのであつた。

『君ッ、そんな古い湯は棄てッちまひたまへ。年寄りぢやないから、新湯は毒ぢやないよ。』と、同僚の相木に言はれて監督一人が入つたばかりの湯を、惜し氣もなく棄てゝしまひ、一人毎に湯を新らしくして入ることを覺えたのであつた。

『……いかさま、湯の辭儀は水とやら、……お先きへまゐる。』と、餘り上手でない一口淨瑠璃を唸りながら、相木は其の時、自分のもののやうな安易な樣子でこの湯槽に浸つてゐた。

森田もさういふ調子で行きたいと思ひながら、まだどうもお客に來てゐるやうな固い心になつて、誰れも見てゐないところで、臆病に遠慮をする。今入つた湯も先刻監督が汗を落して行つた湯で、まだ汚れてはゐない。底の見え透く清らかさに、つい棄てるのが惜しくなつて、溫いのが好きの自分には、丁度上加減なのを幸ひ、頸まで浸して、頭を浮べたやうにしてゐるところへ、もう歸つたとばかり思つてゐた同僚相木が、色艶のわるい眞ッ裸體で、大手を振つてやつて來た。

『君は宿直室の電鈴か。僕は塗料室の電鈴で今まで引ッかゝつちやつた。厭やになつちやうな。』

さう言つて、相木は靜かに其の營養不良の肉體を、贅澤な湯槽に浸した。頸まで沈めてゐた森田は、頸から口へと、

だん／＼湯のメートルの上つて來るのに面白さを感じて、相木の瘦せた身體の容積を　自分の眼で測つてやらうといふ好奇心から、鼻まで湯の來るのを辛抱してゐたけれど、相木がちやぶ／＼と泳ぐやうに兩手を動かすので、湯の波が頭を越しさうになるのに僻易して、スックと湯の中に立つた。

『君も瘦せてるね。……體格檢査までして採用するんだが　あんまりいゝ身體の者は此處へ來ないよ。』と、相木は長い脇毛を湯に浮べて、乳のところまで浸しながら、言つた。さうして、『何んだか溫いね、また監督のお古ぢやないかね。』と、頻りに兩手で湯を搔き廻はした。

『いゝえ、スッカリ取りかへたんです。溫けれや熱くしませうか。』と言つて、春田は熱湯の栓を捩らうとしたが、相木は營養不良の小體を縮めつゝ、隅の方へ寄つて、『廢したまへ君、入つたなりでそんなことをすると、火傷するから。』と手を振つて止めた。

四

『監督のお古……と言や君、君は守衞の兒島爺さんからお聟さんの口がかゝつてるさうだね。』と、相木は口を尖らせて笑ひを包みながら言つた。

『いゝえ、別に口がかゝつてるといふ譯でもないんですが、監督から冗談半分にそんな話がありました。しかし僕は駄目です。』と、春田は俯向いて、泡沫を包んだ手拭を、湯の中でぶつ／＼潰しながら言つた。

『兒島爺さんとこのおかうちやんは、君、體格美人だぜ。君があすこのお聟さんになつたら、コントラストが面白いだらう。兒島爺さんは　非常に君を讃めてるさうだから、君、行つてやりたまへ。おかうちやんも君ならきつと氣に入る

だらう。』と、相木は煽動てるやうに言つた。

『いゝえ、僕は駄目です。結婚なんか一生しないんです。』と、泰田は深い決心を眉宇の間に見せて言つた。

『なアに君、結婚といふほど大袈裟なことぢやないよ。氣に入らなけれや、出て來るまでさ。タカだつて、月々百五十圓からも稼ぐ大擬緒だもの、別に養つてもらふのが目的で男に身をまかせるんぢやないんだ、こゝんとこは世間並みのお嬢さんと譯けが違ふぜ。自分にちやんと實力があつての話だから、氣に入らない時の離別話も、早くかたが附いていゝんだ。これからの夫婦は君、これでなければいけないね。簞笥一本持ち込んで來て、籍を入れたが最後、裁判をしなければ暇を出せないといふおさんどん兼子守りには困るからね。』と、相木は獨りで喋舌つた。

『監督はあの守衛の爺さんと、餘ほど懇意なんですかね。』と、泰田は先刻相木が、監督のお古云々と口を滑らしたのが何んだか妙に氣になつたので、試みにかう問ふてみた。

『それや君、此處だけの話だが、監督は君、一しきりあのおかうちやんとわけがあつたんだよ。』と、相木は聲を潜めて言つた。

『監督はまだ獨身なんですか。』と、少し覗き込むやうにして問ふた泰田は、何故自分がこんなことでかう氣を揉むのかと思つて、可笑しくもなつた。

『なアに、子供が四人もあつて、總領は銀行で尖ツ張り鑛山の機關夫をしてるぢやないか。……おかうちやんはまア監督の妾と言つた風だツたんだね。總裁の妾とでもいふんならいゝが、機關夫の妾ぢやね、おかうちやんも可哀さうだよ。それで手切れ話になつたんだらう。』と、相木は何もかも知り悉してゐるやうに、湯氣に濡れた大きな顏を綻かして言つた。

『監督が其のおかう……ちやんといふ人のことを二度ばだと言つてましたが、それぢや自分のことですね。』と、春田は感心して言つた。
『いや、それは別だらう。』と相木は事もなげに言つたが、突然何か思ひ出したやうにして、
『君ツ、監督が湯に入つてるとこを見たかね。』と、様子ありげに問ひかけた。
『いゝえ。』と、春田は少し面くらツて、眼の玉をくり〳〵動かした。
『これだぜ君。』と、相木は何かを捧げるやうにして、兩手を耳の邊まで擧げて見せた。
『何んです。それは。……』と、春田は怪訝な顏の相をくづすことが出來なかつた。
『湯に入ると爪が柔かになると言つて、指先きを濡らさないやうにするんだよ。監督は。……あれでなか〳〵藝人だからね。』と、相木は勿體らしく言つたが、春田には、矢張り何んのことだか分らなかつた。
『三味線を習つてるんだよ。監督は。……此處で湯に入つて、歸つて晩飯を食つて直ぐ稽古に出かけるんだらう。爪が柔かくなると三味線が彈けないんださうだ。』と、相木はいよ〳〵勿體を附けて言つた。

五

春田は相木と連れ立つて、銀行の門を出た。
『君ツ、兒島の爺さんは居なかつたね。』と、相木は地の中に沈みかけてゐるやうな、大きい石造の館を振りかへりつゝ言つた。
『さうでしたね。』と、言ひながら春田は、矢張り守衛室の中を覗き込みながら出て來た自分を、おぞましく思つた。

『あの爺さんはね、出勤簿へ認めを捺す手付きで、これは見込みのある若い者だとか、さうでないとかいふことが分るんださうだよ。君は其の手付きがいゝんだらう。それであの爺さんに見込まれたんだね。』と、相木は春田の痩せた肩を叩いた。

白煉瓦造りの七階の大きな百貨商店の横まで出て來た時、相木は突然歩みを止めて、まじ〱と春田の顔を見ながら、

『君ツ、忘れて來たね、名札を裏がへしにして來るのを。……明日まで黒い方が出てるぜ。いゝだらう。』と、早や口に言つて、額の汗を拭いた。

『あゝ、さうでしたね。……』と言つたが、春田は元來さういふことの人一倍、氣になる性分であつたから、『僕が行つて裏がへして來ますよ。あなたのも一緒に。』と言ふなり、後戻りをした。

『兒島の爺さんに見られると、信用を落すからね。』と、相木は冷かしたが、『おや君、頼むよ。』と言ひ棄てゝ、一人でさツさと行つてしまつた。

春田は汗を拭き〱また銀行の通用門へ取つて返し、脇門から入つて、汗を拭き〱守衛室に駈け付けると、先刻は居なかつた兒島の爺さんが、制服の釦を外して、打ちくつろぎつゝ、鉈豆の煙管で臭い煙管を吸つてゐるところであつた。

『名札を裏がへすのを忘れましたんで……』と言つて、春田は、この銀行の機關夫の中では一番白いと思はるゝ腕を伸ばしつゝ、自分の名札と相木の名札を表がへして、黒い字を白い字にした。

『御キントウなことで。……』と、兒島爺さんは、何處の方言とも知れぬ言葉で言つて、にツこりと機嫌よく笑つた。

さうして、『電鈴(ベル)は君、よく鳴りますよ。』と、お世辭を言つた。いつも苦蟲嚙みつぶしたやうにしてゐるあの皺くちやの口から、急にこんな甘い言葉が出るやうになつたのに、春川は笑ひたくなるのを耐へて、『左樣なら。』と言ふと、兒島爺さんも『左樣なら。』と言つた。門の方へ二三間來かゝつて、どうも氣になるので、春川は徐と背後を振りかへつたが、爺さんは守衛室の軒下に置いてある鉢植ゑの朝顔に水をやつてゐた。

監督の三味線と言ひ、守衛の爺さんの朝顔と言ひ、どうも柄にない餘裕のある生活をしてゐるものだ。さて〳〵風流なことだと、頻りに感心して、春田は退屈するほど乘らなければならぬ電車で、郊外の森の中の家へ歸つて來た。」

亡き愛人藤江の父親は、机に凭れて欠伸をしてゐたが、胡麻鹽頭を振り向けると、

『銀行の午飯(ひる)のお菜(さい)は何んだつたね。』と毎日訊くことを眞ッ先きに訊いた。長い日も漸く暮れて、全くの夜になつてゐた。春田はこれから米を磨いで、夕飯の仕度をしなければならないのである。

『昨日は南瓜(たうなす)に油揚(あぶらげ)の煮たのだッたね、一昨日はトンカツだつたらう。今日は煮魚(にざかな)ぐらゐかね。』と、父親は春田よりも却つて、銀行のお菜をよく覺えてゐた。

――長篇『東京』第二部『勞働篇』の第一篇――

中央公論大賣捌所

- 東京市神田區表神保町　東京堂
- 同　神田區裏神保町　上田屋
- 同　京橋區銀座三丁目　東海堂
- 同　京橋區元數寄屋町　北隆館
- 同　日本橋區本石町　至盛堂
- 同　本郷區本富士町　誠春堂
- 大阪市北區梅田町　盛文館
- 同　北區東梅田町　立盛堂
- 京都市七條停車場前　共盛社
- 同　四條西洞院　前田大誠社
- 名古屋市富澤町　中京堂
- 朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

◎定價　金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數＼國別	內國	外國	
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢	以上郵稅共
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一 誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一 替振貯金口座は東京三十四番なり

一 郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず

一 [illegible]金爲替　小切手の取扱は一切謝絶す

一 集金郵便　御希望の方は拂込金額の外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

- 一金一圓迄　金六錢
- 一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
- 一金拾圓迄　金八錢

一 中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一 受領證請求は必ず返信料を要す

大正十年七月三十日印刷納本
大正十年八月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區本郷三丁目六番地　中央公論社
電話 小石川一四四
電信略號 コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.70; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-c ass mail matter.



御旅行と三越

御旅行の御用意は三越へ、お出でに限ります

御旅行の際にも日常お使ひ慣れの三越の品を御携帯遊ばされれば、興味多いお旅行が、一層興味を増します

御旅行先きて、お不自由の品がありましたら三越へ、三越の通信販賣部は、すぐにお届け致します

◆◆八月定休日◆十日◆二十五日◆一日は棚卸で休業◆◆

東京

三越呉服店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す